327
711

大德隆學校紀

32
71

大正四年三月

大隆學校沿革記

廣島高等師範學校

校寄贈本

大正
4. 5. 11
寄贈

序

衣を千仞の岡に振ひ、纓を萬里の流に濯ふ。男兒須らく豁然として大局を看破するの明あるべし。苟もよく大局に通ず。公正の見隨て出で、犧牲の念隨て生ぜむ。言ふ勿れ教育は常套机上の事業なりと。次代の國民の性格を陶冶し、將來の國家の建設に貢献する、當に活眼を開いて大勢を洞察し、思を潛めて其の責任を遂行すべき、亦言を俟たざる也。昨夏、本校英語部生徒、大陸修學旅行の企あり。二三他の學部よりも參加するありて、茲に旅行團の成立を見、金子教授之が統率の任に當り、一行踴躍して旅程に上る。過ぐる所、南は上海・南京に亘り、北は滿洲・朝鮮に及び、踏雲蹴波、二旬を越えて乃ち還る。餘勇勃々として面に溢れ、一人の落伍者なく、又一人の病者なし。後之を其の談に聽き、又其の文に徵するに、胸臆を擴充し、心眼を廓開し、活

動すべき國民として、將た又重任に膺るべき教育者としての自覺は、此の旅行によりて一層の固きを致したるもの、如し。是れ大に悅びを同じうせざるべからざる也。是に於て乎、各部より提出せる見聞報告等を集めて之を鉛槧に附し、本校記念の一として、永く保存せしむと云爾。

大正四年正月

幣原坦識す

例言

一、大正三年夏、我が廣島高等師範學校英語部生徒、大陸修學旅行の壯擧を企て、他學部の生徒二三之に加はりて旅行隊を組織し、七月十九日、廣島出發、上海・南京・滿洲・朝鮮の天地を突破すること三千哩、八月八日、日獨の事漸く急を告げんとするに當りて無事歸校す。本冊子は實に之が紀念の爲めに編纂せしめたるものなり。

一、本冊子收むる所九篇、引率教官の所感を除き、他は悉く生徒の筆に成れるものなり。其の諸報告並に記事は隊員各自の分擔せる事務の一般と、見聞せる實況の大略とを學校に報告したるものにして、時に記事論旨の一貫を缺くの憾ありと雖も、隊員各自が能く其の責に任じ、一致協力以て此の大陸旅行を遂行したるの跡を窺ふに足る。旅行日誌二篇重複の感ありと雖も、其の文體着想の相違は優に之を償ふて餘りあるものと信ずるが故に敢て之を掲載せしむ。

一、本冊子に三十餘枚の寫眞、繪はがきを挿入せしめたるは其の記事の足らざるを補はんが爲めなり。

一、本冊子の印刷に當りては、生徒の報告を基礎として、編輯其の他一切生徒をして其の事に當らしめたるが故に、其の行文體裁共に粗笨を免れず、讀者幸に之を諒せよ。

一、我校生徒の旅行に際し、大陸至る所に盛なる歡迎と指導とを辱ふせり、茲に記して深く感謝の意を表す。

附言

本冊子附錄二篇を載す。一は本校校長が大正三年秋十月。嘗て旅行隊の經由見學したる南滿の地に出張し、親しく其の教育狀態を視察したる結果に成れるものにして、東西古今の殖民地教育の實際を批判し、進んで我が南滿洲の現況を叙し、其の將來に言及せるものにして、實に戰捷國民の一日を忽にす可からざる大問題を解決したるものなり。而して我校生徒の大陸修學旅行を許可したるもの亦此の意に外ならず。依て之を卷末に附せしむ。

一は即ち昨秋、我校教育研究會の主催になりし、殖民地教育展覽會の概況を錄したるものにして、其の包含する所、臺灣・朝鮮・滿洲・樺太は元より、遠く北米南洋に及ぶ。今之を此の卷尾に載せしめるまた故なきに非ざるなり。

大正四年三月

廣島高等師範學校

目次

口繪

一、南京なる明孝陵に於ける騾背の一行。
二、一行の經由せる海陸路圖並に道程表。

挿繪

一、大陸各地の名所舊跡繪はがき並に學校寫眞三十七葉。

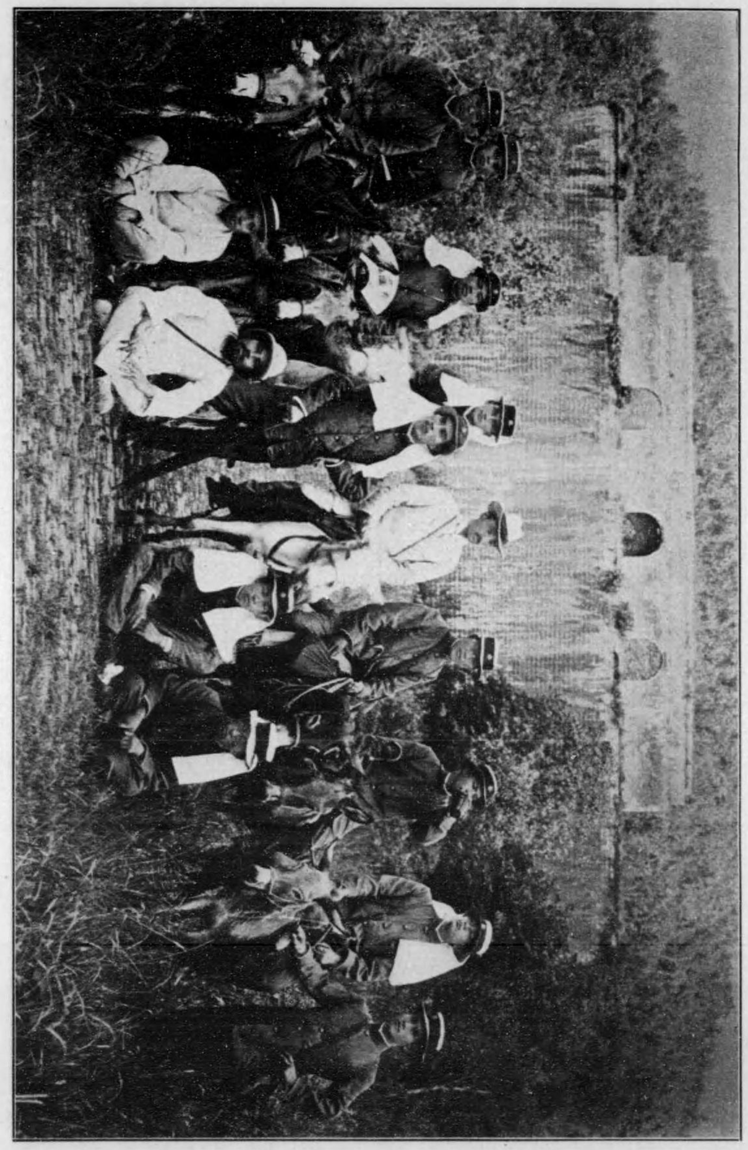
記事

第一　所感……引率教官　金子健二……（一）
第二　庶務部報告……（一一）
第三　旅行日誌　其の壹……（三六）
等四　旅行日誌　其の貳……（五七）

第五　教育狀況一般……（一四一）
第六　大連中央試驗所參觀記……（一七一）
第七　通信部報告……（一八一）
第八　衞生部報告……（一八二）
第九　會計部報告……（一九〇）

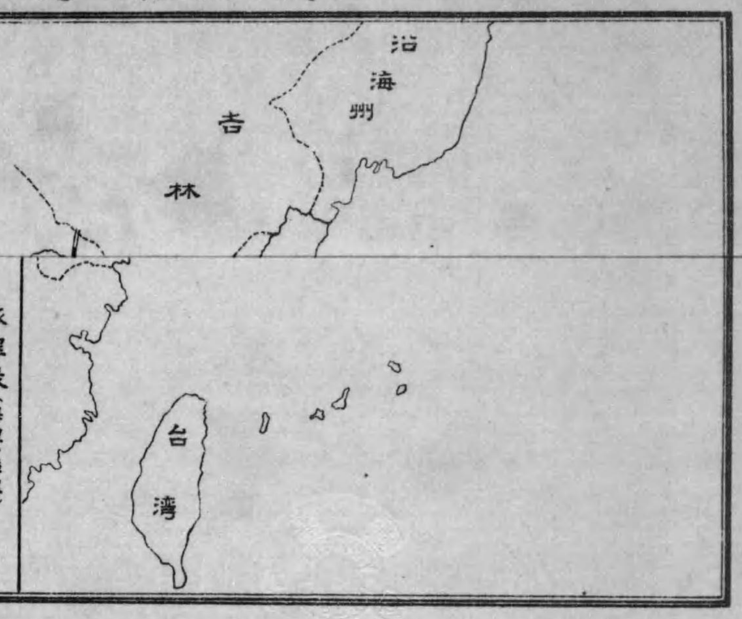
附錄

一、殖民地教育と南滿洲……校長　幣原坦……（二〇七）
二、殖民地教育展覽會概況……（二一六）



行一るけ於に陵孝明京南

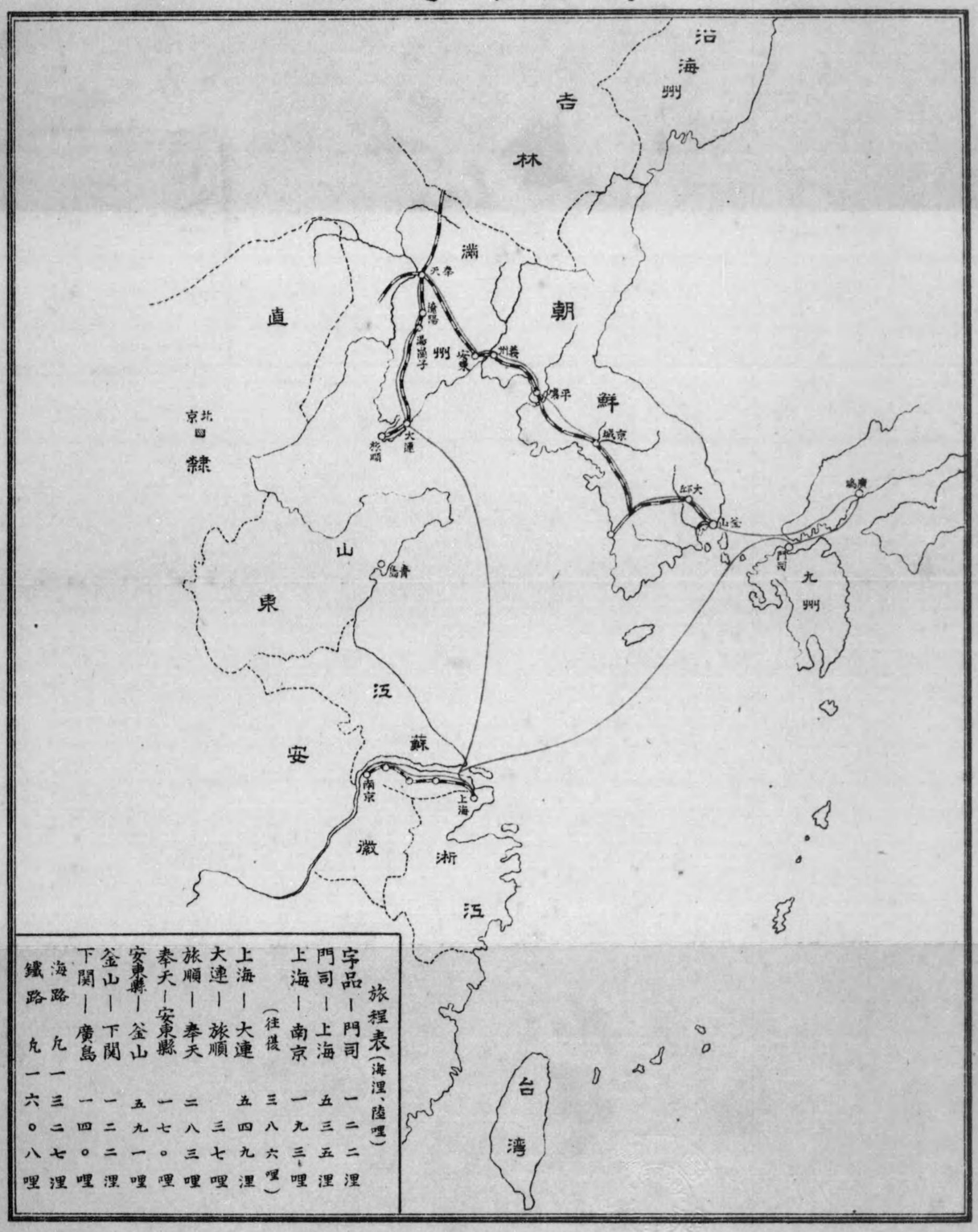
一行の経路と道程表



旅程表（海浬、陸哩）

宇品―門司	一二二浬
門司―上海	五三五浬
上海―南京	一九三哩
（往復	三八六哩）
上海―大連	五四九浬
大連―旅順	三七哩
旅順―奉天	二八三哩
奉天―安東縣	一七〇哩
安東縣―釜山	五九一哩
釜山―下関	一二二浬
下関―廣島	一四〇哩
海路	九一三二七浬
鐵路	九一六〇八哩

一行の経路と道程表



旅程表（海浬、陸哩）

宇品	門司	一二二浬
門司	上海	五三五浬
上海	南京	一九三哩
上海	大連	五四九浬（往復三八六哩）
大連	旅順	三七哩
旅順	奉天	二八三哩
奉天	安東縣	一七〇哩
安東縣	釜山	五九一哩
釜山	下関	一二二浬
下関	廣島	一四〇哩
海路	九	一三二七浬
鐵路	九	一六〇八哩

大陸修學旅行記

第一　所感

金子　健二

我が廣島高等師範學校が滿韓修學旅行を行たのは決して今回が最初ではない既に明治三十九年には大規模の旅行をなし其の際研究し得たる各學部の成蹟は浩瀚なる紀念錄となりて上梓せられて居ると言ふ有樣である其後予が本校に職を奉じて以來職員生徒の大團體が彼地に觀察に出掛けた事がなほ一回あつたかと記憶して居る、然れば今回我等が行た旅行は一面から見れば先輩諸氏の既に踏破したる足跡を辿たに過ぎぬ所であるが之が道程についた動機や視察の內容や感受した事象の內面的意義や環境に投じたる個人の批評的態度等に至ては前者と大に異なれる點が多からふと思ふ、即ち此の旅行の背面には英語學部と言ふ一小部分特に其の中の最上級の一部の有志の生徒が高潔なる教育的趣味にかられて種々の困難なる事情を力排して之が斷行を敢てしたと言ふ事や他學部の二三の生徒が殆ど自發的に此の一行に加つたと言ふ事や特に注意すべきは觀察の目的地がバタ臭き英語に關係なき支那朝鮮の所謂純東洋趣味の

根源地であつた事などは過去に於ける本校の滿韓視察團の其れと比して同一に論ずべきものではなからうと思ふ隨て我等一行が此の旅行に由て各自の胸底に横はれる軟き蠟板に刻まれたる印象は先行者のものと自ら異れるものあるは論ずる迄もない、既に異なれる感銘を齎し來りたりとすれば之を實際の鑄型に投じて教育界に新らしき美術品を貢献すべき一大任務が各自の双肩に荷はせられて居るわけである而して此の重大なる職責を無事に且つ有効的に遂行し得ると否とは實に此の一行に加つた生徒諸子の將來の活動に俟つより外に無い。

抑々吾人教育に身を委ねつゝある者が支那とか滿洲とか朝鮮とか言ふ名を耳にする毎に言ひ知れぬ興味を起す問題は所謂植民地教育と言ふ事柄である、併し植民教育なるものは元來眞面目に考へて見れば內地に安定の地位を得て人の子を教育する仕事とは大に其の趣を異にし例へば其の地の事情に適應する臨機應變の策をとつて頗る融通のつく自由のきく教育法を採るとか或は常に內地との精神的聯結を計て兩者の間に統一のあるやうにするとか言ふ實行上の工夫が不斷に必要であると同時に自個の肉體上の犧牲をも覺悟して居なくてはならぬ故に植民教育は言ふ事容易にして行ふ事至難な業である、我等一行は今回の旅行に由て痛切に感じた印象は劈頭第一に此の問題であつた、植民教育はかくあるべきものなりとの概念を豫め腦裏に包んで彼地に臨みたる我等は實際を觀るに及んで脆くも批判の墨繩は手許亂れて之を用ふるによしなく「植民地の教育を如何にすべきか」と言ふ問題を今更の樣に適切に感じたのである、かくして我等の問題を解決せんと欲して自ら實際の境地に入りながら却て問題を與へられて居たのである、按ずるに實際を見ずして植民教育を論ぜんとする者は大半我等と其の軌を一にするのであらう教育は字義の解釋では無い、實行の學問である、特に植民教育に於て最も其の然るを見る。

殖民教育其のものが既に實行に於て至難である事は我等一行の親しく彼地に於て見聞して來たところであるが飜て之が實際の衝に當て居る人々の苦心を思ふときは轉々憧憬の念に耐へざるものがある、試に明治三十九年に本校修學旅行の大團體が發表したる『滿韓修學旅行紀念錄』を一讀したる後我等一行のものしたる此の紀念錄を通覽して兩者を比較したらんには如何に彼地に於ける教育機關が最近五六ヶ年間に一大發展をなしたるかを推察する事か出來やう、而して此の發展膨脹の歷史が主として其の衝に當た彼地在住の教育者若くは先覺者の努力奮勵に負ふ所が多大であつた事を思へば吾人は實に國家のために感謝せざるを得ぬわけである、見よ卅九年當時にありては修羅場のなごり鮮かにして彼處の丘是所の畑には血痕淋漓たる破衣弊靴の横はりし旅順大連の地は今や商業の中心となり教育の首腦を司れる一大平和の都と化したではないか僅か七年の昔にありては枯骨は到る所に横り彈丸の破片途ゆく人の心をおのゝかした遼陽の地は今や白塔に平和の色をたゝへて小學兒童の歡喜の巷となつて居るではないか、更に轉して朝鮮は如何と見れば總べてのもの悉く內地と異なれるところなく特に教育上の設備に於ては萬事整頓して內地の學校よりは優るとも決して劣れる點が無いとも言ひ度い位である、若し數年の後を期して是等の機關が內容充實したらんには實蹟の著るしきものあるは蓋し想像に難からざることであらふ是等の事を思へば我等は彼地の當事者に深く感謝しなくてはならぬ。

我等が此の旅行に費したる日子は三週間にして宇品を出でゝ門司に到り是所より海を越て上海に渡り更に滬車の便をかりて南京を視察し再び上海の地を踏で海路大連に移り旅順を訪づれ遼陽奉天を見たる後朝鮮に入りて平壤京城釜山等を巡覽し是所に旅行の終りを告げたのである、而して此の間毎日起りたる出來事や行動の大樣は此の記念錄に生徒の日記を掲げて其の一般を紹介し教育的視察の報告や會計衞生等に至る迄細大もらす所なく生徒の筆によつて之を錄する事としてあるから予はこゝで管々しき事を述べぬつもりである、たゞ極めて概括的に所感を書いてみやうと思ふ。

予は此の旅行を三つに分解せんと欲するものである、曰く上海を中心としたるもの、曰く南京附近、曰く南滿朝鮮地方、即ち此の三者である。上海に於て最も吾人の感興を喚び起した問題は此地が東西人種の生活上の混戰地であると言ふ事である即ち生活其れ自身のために鬪ひつゝある異人種が互にあらん限りの勢力を注いで最後の勝利者たらん事を期して居る、實に見るからに痛快な活動の舞臺である、因習の楯も歴史の保護もこゝでは何等の効力も無い、政府の命令も官憲の威嚴も此の地に臨では殆んど存在の意味を失て居る、たゞ賴むところは强き自我の力である、緊張したる主我の力である、二頭曳きの黑塗の馬車に乘て芳ばしい葉卷の煙を後に殘して行く赭顏肥大の紳士から下は汗ににじんだ短い胴衣を羽織て蓬と亂れた頭髪を風に颯らせながら繪にかいた地獄の赤鬼のやうに腕車の轅をつかんで大道を疾驅して居る支那人に至る迄一として生存慾を表現して居らぬものは無い、自分は上海に存在して居る總てのものは生活慾の具體化されたものだと評して過言であるまいと信ずる、隨てかゝる地に於て行はる

る教育は他と趣きを異にして居らなくてはならぬ、否其の趣きを異にするのが當然である、獨逸政府の經營にかゝれる醫工科學校や我が日本の東亞同文書院等は何れも此の要求に應じたものである、とは言ひ我等は日本人發展のためを思ふときはもつと此の要求に的確に應じたる一大教育機關の設立を望まざるを得ぬのである、上海は言ふ迄もなく滿洲とは異なり地味豐かにして交通頗る便、農產物饒多にして商業も盛で且つ工業にも適せる地である即ちたゞに物產の集散地なるのみならず產出地である、故に上海の將來は實に有望である、是等の事に想到するときはたゞ一の東亞同文書院を以て滿足する事が出來ぬやうな氣がする、出來得べくんば個人なり政府なりの補助を仰いで實業的教育機關の新設を實現したいものである、獨逸人の經營せる醫工科學校を見て吾人はうたゝ此の感を起さざるを得なかつたのである、あのやうな大きな設備の學校が何時邦人の手によつて彼地に設けらるゝであらうか、若しかゝる新設の教育機關が容易に實現し得ざるものとせば少なくとも東亞同文書院に一層の有形的補助を與へて之れが存在の意味を確實にしたいものである、同校教授大村文學士は予が同窓の友にして多年此地にある者親しく支那の內情に通じ今や得難き支那通を以て邦人に仰がるゝ學者である、予は同氏に就いて東亞同文書院なるものゝ使命の大なるを知り只管之が發展を冀ふて止まぬものである。次で日本小學校を見るに現校長井上潤氏が赴任以來熱心に諸船の改善を行はれた結果今や大に面目を一新し兒童も既に千名に垂として居る盛況であるから近き將來に於ては必す上海教育界に重きをなすものと斷言することが出來る。

次に南京を見るにこゝは教育的意味を離れて歴史美と自然美とが融合したる所謂美的意識を最も熱烈に攪き起したる天地である、我等は教育者としての領域を蟬脱して時の子空間の子としての我にたち戻て美の光りを仰いだのは是所である空想の天地に馳せたのも是所である、慾氣の無い世間離れのした涙にむせんだのも是所である、所謂無聲の詩人にたちかへつたのも是所である、醇乎たる主觀の樂境に入て醍醐の妙味を掬したのも是所である、あゝ實に南京の天地は予をして終生忘るゝ事能はざる美しき或物を獲得せしめたのである、悠々として流るゝ大江の流れは支那四千年の歴史を載せて舊都の東をうね、つて居る、秦の始皇が寶玉を埋めて天子の氣を壓したと言はるゝ紫金山は雲霄を衝いて千古の秀色をたたへて居る、北極閣の古い塔は所謂「江雨霏霏江草齊、六朝如夢鳥空啼、無情最是臺城柳、依舊煙籠十里隄」と吟した韋莊の句を偲ばしめる、其の他鷄鳴寺の晩鐘と言ひ莫愁湖のどんよりしたロマンティックの波の光りと言ひ、秦淮の流と言ひ、吳王孫權の故城と傳へらるゝ石頭城と言ひ一として歴史的聯想を惹き起さゞるはない就中予の興趣をゆるがしたものは明故宮と孝陵とであつた、一度は亞細亞の天地を震動させた明朝の故宮の跡ともあらふものがかく迄荒敗したかと思へば榮枯盛衰のはかなき事を歎せざるを得ぬ、況や最近の革命亂のために附近一帯の地は見るかげもなく荒らされて彼の宏莊華美を以て支那人の誇りとしたる朝陽門の如きは殆んど痕形もとゞめぬほどに破壞され其他重なる建物は悉くこぼたれて瓦石累々到る所に山積し宛然大地震のあとを見るが如くである、或る旅行者は之を評してローマ滅亡の跡に比すべしと言たそうであるが自分も此の評の適切なるを信ずるものである、蓋し美しき山水の懷に圍繞せらるゝ金陵の都がかく迄でも荒みたるを見ては何人か無量の感に打たれさるものがあらうぞ、ゝは言ひ南京の都を一歩出づれば昔ながらの太平の氣が廣寞たる山野に横溢して居る、支那の詩におなじみになつて居る楊柳は注文通り細雨に煙て居る、從者を引連れた丸顔の支那美人が驢馬に跨りながら鈴音かろく山麓の徑路をぬうて行くのも見へる、水牛が呑氣そうに溪流につかつて居るのも見へるこうした風に南京附近一帯の田舍は昔ながらの支那の俤をとりとめて居る、詩や繪畫の材料になつた支那の風物は依然として平和の色をほのみせて居る、人間も上海あたりのものとは全然別ものである、のんびりした上品なところが未だに失せぬやうである、かくして南京は支那趣味の雅なるもの醇なるものを予が腦漿に深く〳〵印してくれた。

最後に南滿朝鮮の教育に就いて所感を述べんに先づ南滿洲の教育經營は三つに分つ事が出來ると思ふ一に曰く支那人經營のもの、二に曰く關東都督府直轄のもの、三に曰く南滿鐵道會社及び民國經營のもの卽ち之である、以上の中第一種は殆んど論するに足らず第二と第三は實際上滿州の教育を支配して居る重なる機關である、勿論此の二者の間には互に長短あるは免れがたき事實であるが概して言へば前者は政府の事業として經營せるものなれば萬事秩序的にして一定の形式理想に準ぜしめんとする傾向を有し言はゞ縱に發達して居るやうである、之に反して後者は一大會社の一事業として行れて居るのであるから平民的で自由がきいて其の發展の方向は言はゞ横に延びて居るやうである、特に後者が不斷に改善を企て近頃頻りに實業的教育設備に工夫をこらしつゝあるは正しく時運の要求に應したるものと言はな

くてはならぬ、吾人は此の會社の經營せる二三の學校を見て其の設備の完全なると教育者優遇のよろしきを得たるとに甚く感動されたものである、之を以て內地のものに比すれば遙に優て居ると言はなくてはならぬ、將來南滿洲に於ける教育上の成蹟は刮目して見るべきものがあらうと思ふ、然れども之に吾人の研究資料として腦裏に刻まれし事は滿州に於ける以上三つの教育機關を統一せる完全なる一大研究機關の缺如せると一は植民地に永住せんとする氣分をもつと確實に子弟の間に皷吹して貰い度い事である、勿論是等の事は吾人の論する迄もなく彼地の教育者に由て既に唱へられ且は實行の端緒にすらついて居るとの事ではあるが苟も南滿洲が日本人にとりて永久の植民地である以上は一日も早く之が完全なる實行の成蹟を見度いと思ふのはたゞに吾人のみではあるまいと思ふ。更に轉して朝鮮の教育を見るに總へては內地のものと大差なしと言つてよからうたゞ朝鮮人を教ふる爲に設けた普通學校及び高等普通學校の制度は內地に於て見る事が出來ぬものである、公立普通學校は四年で卒業し得る組織で教科目は內地の小學校とほゞ同しだが朝鮮語が之に加つて居るだけが異た點である、但し日本語の時間は割合に多い、普通學校を卒業した者は高等普通學校へ入學する事が出來る、高等普通學校は朝鮮の男子に高等普通教育を授くる所で修業年限は四ヶ年である、總て官立であつて朝鮮總督府の管轄である、高等普通學校の中に師範科又は教員速成科を置き普通學校の教員たるべき者に必要な教育を施して居る但し師範科に入學する事を得る者は高等普通學校を卒業したる者とし修業年限は一年である、又教員速成科に入學する事を得る者は年齡十六歲以上にして高等普通學校第二學年の課程を修了したる者又は之と同等以上の學力を有する者とし修業年限は一年以內と定めてある、學科目は高等普通學校は內地の中學とほぼ同一であるが只朝鮮語が加はり兵式體操が削除せられ師範科には教育を加へ英語は隨意科としてある點は內地のものと異て居る、教員速成科も同樣である、平壤と京城の高等普通學校は規模頗る大きく萬事行きとゞいて居る、平壤では田中校長が主として農業教育に重きを置き生徒に此の方面の智識と趣味とを授けて居らるゝのは宜しきを得た方法かと思ふた。次に朝鮮の女子を教育する機關としては女子高等普通學校及び之に附屬せる技藝科なるものがある、高等普通學料の本科は修業年限三ヶ年にして內地の女學校とほゞ同一の科目を課して居る但し朝鮮語の加つて居るだけが相違して居る、技藝科は修業年限三ヶ年にして目下のところ入學資格は殆ど規定なき有樣である、即ち十二三歲の少女も二十歲以上の既婚女子も同一の教室で同一の事を教はつて居ると言ふ有樣である、教科目は修身、國語、朝鮮語及び漢文算術家事裁縫及び手藝にして其の中修身、國語、裁縫手藝のみは隨意科となつて居る、以上の外朝鮮人を教ふる爲に設けた專門學校としては商業學校などもある、是等は何れも朝鮮總督府直轄であつて所謂官學である、更に朝鮮在住の日本人を教育する機關を見るに小學校も女學校も中學校も內地のものと全然同一である、たゞ官臭を帶びて居る事だけが異なつて居る位のものである、小學校の設備などは滿鐵經營の方が遙に大規模である。偖朝鮮の教育を極めて概括的に通覽するに吾人は朝鮮人は言ふ迄もなく朝鮮在住の日本人の子弟にもつと實業的教育を授くる設備がしてほしいやうである、下は極めて平易なる實業的速成科から上は高等程度の實業學校のやうなもの迄完全に設けて貰ひ度いやうな氣がす

る、今後高等普通學校や中學校を卒業した者が內地の青年と同く高等の學校に入らんとする希望を起す者が續々多くなつたら之に應ずるために總督府は如何なる處置をとるであらうか、內地と同じやうな高等程度の教育機關を設くるは植民地の教育としては策の得たるものとも思はれぬ植民地は農業とか實業とか言ふ生活本位の教育を以て根本としなくてはならぬ、特に朝鮮の如き物產多き土地にありては常に此の精神を以て教育の本位とすべきものかと信ずる、海には無盡藏の富を包み、山には無限の寶を隱して居る此の新領土は新らしき開拓者を要求して居るではないか、而して是等の富源に優秀なる人材を送るは實に目下の急事ではあるまいか、吾人內地にあるものが高等教育の弊にとらはれたるは心ある者の既に認むるところである、吾人は之を再び新らしき領土に移すの愚を演じてはならぬ。要之南滿洲の教育も朝鮮の教育も今や着々として完全の域に進み既に或るものゝ如きは內地の教育に比して一頭地をぬかんとするに至て居る、吾人は親しく是等を見るに及んで其の局に當れる人々の勞苦を思ひうたゝ感歎の情に耐へざるものがあつた、然れども翻て植民教育なるものゝ本義にたちかへつて靜思默想するときは吾人の未だ解決し得ざる幾多の疑問は眼前に横はつて居るやうである、なほ研究に研究を重ねなくてはならぬ活問題が行く所にころがつて居るやうである、植民教育の前途はなほ遼遠である。

我等一行が奉天より引かへして朝鮮に足を踏み入れし時日獨問題の急なる事を知り釜山に着いていよいよ危期に逼た事を確實に知た、我等は上海、南滿州、朝鮮等に於て植民教育の實際について學び得たる貧弱なる智識を以て日獨問題破綻後の結果換言すれば青島に於ける植民教育の我が國人の掌中に歸する事を豫想して種々の假說問題を解決しやうと試みた、爾來月を閱する事五ヶ月青島は完全に我が責任範圍となり且つ我等一行の豫想しなかつた多くの南洋諸島すら我が國人の開拓をまつ樣になつて來た、我等三週間の旅行はこてに於て一層の意味を加ふる事となつたではないか、我等は植民教育の重大にして急務なる事を實際に學んで來た、植民教育に從事すべき者は屢々西洋に見るが如き社會の落武者では駄目である、樂隱居をなし或は蓄財をなさんとする不眞面目な動機にかられて新領土の育英事業に出掛くる者ばかりでは成蹟のあがるわけが無い、吾人は是等の例が佛蘭西にある事を知た、西班牙にもあつた事を學んだ現代の日本は決してかゝる例を學んではならぬ、英國植民地のやうに人格の高い、比較的少壯な教育家が眞摯なる態度を以て獻身的に此の事に當らなくてはならぬ。少壯教育家の爲すべき責務は前途に山の如く積て居る。

予は不肖の身を以て此の旅行團の引率者として生徒諸子と起臥を共にした緣故から此の書にかゝる粗笨な感想錄を揭ぐることゝなつた、自分なから恥かしいやうな氣がする、たゞ後の思出のために書いたものだと思てもらひ度い。

序ながら旅行中到る所で多大の便宜を與て貰た彼地の公私の人々に對しては深く厚意を謝して置く。

第二　庶務部報告

一　英語部外國旅行成立過程

大正元年度に於ける英語部壹學年貳拾名は時の敎官杉森敎授より外國旅行の有効なること、而して在校時を以て最も便利とする旨を聽取するに及び意大に動く。

此の時先生は其の第一歩として蓄金の必要なるを說かれ且つ諸君の三年になる時は種々の方面に、費用を要する事なれば、假令旅行せずとも、其の金の費途に窮する如きことなかるべく、今より毎月圓餘の金を貯ふる必ずしも困難ならざるべしと述べられたり、

即ち大正元年十二月より貯金を始む。目的地に關しては未だ定案なし。

大正二年一月時の校長北條先生を校長室に訪ふて此の企畫あるを告げ、且つ其の便宜を與へられん事を請願せり。校長も其の意の存する所を諒とせられ、『學校として及ぶ限は助力すべし。先づ金を蓄へよ頃日某氏の報ずる所に依れば、近く南洋觀光團なるもの某會社の主催によりて成立せんとす。若しさる機會あらば之に乘ずるも亦妙ならずや』と。

此の前後に於て東洋汽船、大坂商船、日本郵船の諸會社に交渉する所あり。南淸乃上海、香港に至る行程並に旅費、北米シヤトル、若くはハワイに至る行程及渡航費に關して略々其の要を得たれば大正二年正月中旬、宇品大石旅館にクラス會を開催し、校長の意向並びに已に得たる各種の材料を提供して衆議にはかる。

北米の地は旅程二ヶ月を要して夏季休暇には完結すること覺束なかるべく、且彼の地に至るも、バンクーバー、シヤトルの如き新開地、ハワイの如き日本人多き地は見學するも左程の利益なかるべしとは校長はじめ諸先生の意見なれば取らざることゝなしぬ。

上海、香港の地は先例もあり且つ旅程、旅費共に大ならず、吾行の取る所となりしは寧ろ自然の成行と稱すべきか。此の時二案あり、一は上海の地を以て旅行の終點となし、香港に到るの日數を滯在せば香港に到りて直ちに歸るに比して得る所或は大なるものあらん。上海の地にはホテルあり、劇場あり、且つ各國商人の來住するもの萬餘、何を苦んで香港に到らんやと。他は香港行を主張するものにして、香港には香港の特色あり、純英國式の市街を觀るを得ん。上海などの及ばざる所あるべし。且つ兩者を併せ見るを得ば、其の旅費の增加以上の効果あるべしと。審議の結果、殆んど全會一致を以て香港案に賛成することゝなり、クラスの主義方針は茲に樹立せられ、以後の英語敎室は爲めに活氣の漲るものあるを見る。英語を以て生徒間に會話をなすの風は當時を以て其の隆盛の極となすべきか。かくて蓄金は滯なく繼續せられたるなり。

然るに五月に入りて校長榮轉の事あり。續いて杉森敎授の去らるゝあり。加ふに二學期に入りては、學校經費の節減の發表せられ、全校生徒の意氣消沈す。我クラスも亦然らざるを得ず。同年冬十一月を以て一先づ蓄金を打切り、徐ろに形勢を觀傍するの止むなきに至りぬ。

此の時各自金拾圓を蓄積す。爾來、旅行の議再びクラス會に登らず。然るに偶然の機會よりして旅行

熱再燃することゝなりぬ。

大正參年春二月杉森教授突如として來校せられ、一日其の旅舍を訪れて先生の變らざる溫情に接するを得たり。此の日大に雪降り我校健兒の一部は宮島さしてマラソン競爭に出で立つ。積雪尺に達す。先生の室は溫かなりき。飾りなく、隔てなき先生と笑談する事二時間、談たま〳〵旅行の事に及ぶ。

其の後の經過を報告し、賴む樹陰に雨漏りし感ありと訴ふるや、先生激勵して曰く、志を立てゝ已に此に到る。何ぞ夫れ怯なるや、何を苦んで之を廢せんとするか。旅費亦憂ふる勿れと。

歸りてクラス會に報告し、重ねて學校に謀る所ありき。

新校長を初め諸先生には元より其の主意に於て不贊成はなかりき。此の時赤木庶務課長の非常なる御厚意により一條の光明は我等の前途を祝福せり。全クラス再び力を得て大正三年四月よりして、最後の蓄金にとりかゝりぬ。かくて七月末日には、一個人金貳拾圓を得たり。

事將に成らんとして、六月八日外務省は、香港のペスト猖獗を報じ來れり。然らば上海にして歸るべきか旅行廢すべきか。議論百出決すべくもあらず。折しも一案出づ。上海よりして海路南滿に渡り朝鮮を經由し以て新領土の教育並に社會狀態を視察すべし。旅費また大差なかるべしと。議漸く決し、案を具して學校に謀り準備を急ぐ。

されど貳拾貳名なりし我一行は、一人去り二人去り十五名を殘せり。然るに諸情諸病交々襲ふて三名を失ひ、事愈々決するに及んで餘す所九名。此の時旅行の不成立をさへ耳にすることありき。數年の努力、級是一朝にして水泡たらむとするか。一行の意心誠に憐むべかりしなり。

されど學校は遂に我等を捨つることなかりき。

二　旅行日程

七月二日

英語部生徒修學旅行の目的を以て支那共和國、南滿州及朝鮮に旅行するの件、學校の內許を得て校長室に打合會を催し、赤木、長屋、金子諸先生出席せらる。引率教官は金子先生に內定す。

七月六日

一般生徒中より有志者の旅行加入を許可する旨發表せらる。其の結果他部より應募せる者三名。

旅行隊の人名並びに其の分擔及び其の日程豫定表を定むること次の如し。

英語部三年

水谷秀雄、加藤直三、河口博、米林秀秋、德山慶三郎、福英一、末包留三郎、畑中宰之輔、松竹清

國漢部三年

磯野清

數物化學部二年

元津千尋、黒田光次

事務分掌

庶務部　水谷、加藤

記錄並通信部　河口、福、磯野

衞生部　德山、米林、末包

會計部　畑中、松竹、元津、黒田

七月十六日

文部大臣より旅行許可せらる。

庶務課に出頭最後の打合せをなす。

七月十七日

午前七時より寮務課に於て體格檢査あり。終りて校醫より旅行中の衞生につき聽く事二時間。

德山君身體に故障ありて旅行中止を命ぜらる。一行甚だ之を遺憾とす。

午前十一時、第二會議室に於て校長並に長屋教授より此の行を盛んにせんが爲にとて懇篤なる訓示と注意とを賜る。

＊　＊　＊　＊　＊

日程豫定表(A)

發着日	發着時	發着驛名
7月 19日	午後10時	廣島驛發車
〃 20日	午前5時56分	下ノ關着
〃 〃	正午	門司發
〃 22日	午後	上海着泊
〃 23日	上海滯在	
〃 24日	上海滯在	
〃 25日	午前	上海發(船又ハ汽車)
〃 〃	午後	南京着泊
〃 26日	午後	南京發(夜行列車)
〃 27日	午前	上海着
〃 〃	午後	上海發(海路)
〃 29日	午後	大連着泊
〃 30日	午後	大連發
〃 〃	午後	旅順着泊
〃 31日	旅順滯在	
8月 1日	午前	旅順發
〃 〃	午後	遼陽着泊
〃 2日	午後	遼陽發
〃 〃	午後	奉天着泊
〃 3日	午後	奉天發
〃 4日	午前	平壤着泊
〃 5日	午前	平壤發
〃 〃	午後	京城着泊
〃 6日	午後	京城發
〃 7日	午前	釜山着
〃 〃	午後	釜山發
〃 8日	午前	下關着
〃 8日	午後	廣島着

以上行程三週間二十一日

日定豫定表 (B)

見物地	見物並視察箇所
下關(半日)	市内見物隨意
上海(三泊)	美租界　英租界　法租界　領事領　東亞同文書院　上海小學校　上海女學校　基督青年會　日本倶樂部　上海縣城　新公園競馬場　支那劇　西洋劇及び三泊中一日は西洋旅館に投宿すること
南京(一泊)	市内見所舊跡　途中都合により蘇州見物
大連(一泊)	民政署　大連小學校　公園　滿鐵本社　大連女學校　露西亞街等
旅順(二泊)	工科學堂　中學校　小學校　軍港及び附近戰跡等
遼陽(一泊)	師範學堂　文廟　連華寺　遼陽招魂社　關帝廟等　白塔及び附近の古跡戰場
奉天(一泊)	北陵　奉天宮城　文溯閣　堇寺及び諸種の學校等
平壤(一泊)	牡丹臺　乙密臺　玄武門　箕子廟
京城(一泊)	朝鮮總督府　景福宮　德壽宮　昌德宮　中學校　女學校　高等普通學校等
釜山(半日)	中學校　女學校　商業學校等

以　上

七月十九日　日曜日　快晴

午前八時本校玄關前に於て一行紀念撮影をなす。

午後二時宇品大石に集合、同三時大阪商船會社船天龍川丸に依て門司に向ふ。此の日炎熱甚だしきに拘はらず、長屋、赤木、深田、堀、塚原諸先生の御見送を辱うし、一行の意氣天を衝く。

船宮島に着するや、同地滯在の水泳部諸君並に諸先生の盛なる迎送を受け、一行の英氣增し加る。

夕陽深く沈んで一行甲板を降らす。船を打つ波は我行の前途を壽くものゝ如し。

七月廿日　月曜日　快晴

午前七時、門司着、古賀文旅館に少憩す。

正午日本郵船株式會社船伊豫丸に便乘して上海に向ふ。海靜かにして船は是れ洋中の樂土の感あり。

七月廿一日　火曜日　快晴

一行は三等客なれども特に交渉して二等の甲板に出づるを許さる。船中、南洋移民あり、支那留學生あり、アントワープ行きの輕業小僧あり。別世界中に別世界あり、頗る興味ある活社會の研究をなすを得たり。(旅行記參照)

七月廿二日　水曜日　快晴

正午、船、上海に着す。旅館東和洋行のボーイ既に在り、導かれて宿舍に赴く。先生と我等二名は直ちに力車を驅りて日本領事館に有吉總領事を訪ひしもあらず。內山書記生に面談。上海に關する大

略の概念を得たり。同君の紹介により此の夜此の處に、上海マーキュリー主筆佐原氏より一場の講話を聽くことゝなせり。辭して日本人倶樂部に總領事を尋ね得たり。一行の安着を報じて去る。

午後自由行動を取る。何れも家郷への通信に忙し。稍々ありて先輩にして今の上海日本居留民團立小學校長なる井上淵君來訪せらる。同君は既に一行の今朝着すべきを知り棧橋に出迎へんと考へ居りしに電話不通にて宿舍との通信自由ならず、遂に此の失體を演ず、惡しからず了承ありたしと我等一行を遇せらるゝこと極めて厚し。一行の安着を祝し長途の勞を慰せんが爲にして、サイダー、菓物を贈與せらるゝこと夥し。バナナを味ふて我身の南下せるを思ふ。

井上君、金子先生と共に鼎座明日の日程順路を定む。

今宵領事館の講話終りて上海市街の夜景を見る。

七月廿三日　木曜日　快晴

午前中、井上君の案内により、佛人小學校、支那人市場、東亞同文書院、日本小學校、新公園、六三園等を巡歴視察す。東亞同文書院にて金子先生の同窓なりし大村教授に紹介せらる。同教授は同文書院にあること九年、支那通を以て聞ゆる人。湯茶の饗に預る。之れより同教授も共に案内の勞を取られ途中承ること多し。日本小學校に於ても茶湯の饗あり。一行の渴すること甚だしければなり。

午後、井上君と、東和洋行のボーイとに導かれて獨逸醫工學校、支那の大學なる復旦公學、佛人の經營せる天主堂並に天文臺を觀る。午後見物せし所は多く郊外の建築物にして、並木路の綠陰を走る汽車と電車とは大陸的にして熱帶的なる趣を納得せしむ。

此夜宿舍のボーイに導かれて上海繁榮の中心點に遊ぶ。

七月廿四日　金曜日　快晴

午前、數層煉瓦造りの三菱公司を經て支那街即ち上海縣城内に入る。一行茶館に憩ふて渴を醫し、且つ支那趣味の幾分を解するを得たり。更に電車を飛ばして、純支那式公園なる張園と愚園に趣く、途中競馬場を過ぐ。歸途、十二層の樓外樓に登りて上海を下瞰す。壯觀、奇觀云ふばかりなし。

午後、自由行動を取る。或は書を送るもの、午睡を貪るもの、公園に遊ぶもの、支那街に行くもあり、皆上海の地に馴れたればなり。

夜も隨意外出を許す。されど言語通ぜざれば遠く遊ばず、此の間に於て本部は停車場其他の交渉を重ねて翌日の南京行に備ふ。

井上君、大村氏共に來りて快談せらる。

七月廿五日　土曜日　晴

午前七時三十五分發、快車に投じて南京に走る。井上君の見送を辱ふす。車は一直線上を西走す。此の沃野と此の長江とは蓋し無盡の富を藏すと稱すべきか。

午後三時下關着、下關は上海南京列車の終點にして、南京城外にあり、領事館員榮氏は逢來館のボーイ一名を從へて此の驛に一行を出迎へらる。直ちに城内列車によりて領事館に入る。領事館には才

賀書記生ありて一行を待つや久しかりきと。階下の應接室に導かれ、やゝありて樓上に出で立ち南京城内外を俯望して革命の昔を語らる。

此の一館こそ帝國をして九鼎大呂より重からしめたるもの、張勳今何れにありや。此の時饗せられたる冷水は一行の今猶忘るゝ能はざる所なり。館を辭して宿舍に向ふ。途中明朝時の天文臺たりし北極閣、又は隣りせる雞鳴寺、降りて南京大學、師範學堂を經て、逢來の宿舍に入る。

榮氏は溫厚の人、よく一行の爲に東道の勞を惜み給はず。晩餐を共にして、翌日の日程を議す。此の夜は一行、宿のボーイを先にして秦淮河に遊ぶ。舟河に滿ち、人は舟に滿ち、弦歌の聲は水に泛で清し。

七月廿六日　日曜日　快晴

早朝馬車を驅つて、明の故宮を吊ひ、馬背に跨りて孝陵に趣く。忠臣方孝儒は其の名を血跡に留むるも皇宮は荒れて、雜草茂る。明の太祖を葬れる孝陵は規模の大、人を呑む。清祖曾て此の地を過ぎ此の人を吊ふて詩あり。然るに今や遊子また清朝を吊ふ。嗚呼。一行は同伴せしめたる寫眞師をして撮影せしむ(口繪)馬上の主人はこれ日東帝國の精華。歸途貢院を過ぐ。明清の考試場即ち登龍門となす。青春の血を徒らに此の屋に涸渴せしめたる無名の君子そも幾許ぞ。秦淮河を渡つて宿に入る。昨夜の美觀は失せて、濁水に浮ぶ亞鉛葺の小舟あるのみ。

午後孔子を祀る朝天宮、美妓に其の名を留めたる莫愁湖、弘法大師の遊學せりと傳ふ清凉寺など歷訪す。清凉山よりは下瞰して揚子江の大を知るべく、對岸、獨逸の經營になれる津浦鐵道起點の大停車場を望見すべし。南京市街の店頭に掲げたる仁丹の廣告板に蜂巢樣の小孔あるは革命の慘禍を語るものと云ふ。亡び行く南京と榮え行く上海とは同じく支那の地とも思はれず。

此の日朝、宿を出でし馬の晝に至つて動かずなりたるは、暑さの程を偲ばる。

午後八時宿を出で十一時下關發、夜行にて上海に歸る。汽車動き始めて雨降る。幸なる哉我か一行。

南京領事館の榮氏は終始行を共にしくれられたるのみならず、南京を發するに當りて與へられたる好意は、我行の長く忘るゝ能はざる所なるべし。同君は九月東京に來る途中、或は我學校に立寄るべしと云ふ。來らば談ぜん。

七月廿七日　日曜日　曇雨定らず

午前七時上海に歸着す。雨やゝ降る。一先づ東和洋行に入り、裝を新にして、上海第一のホテル、アスター、ハウスに朝餉の支度す。東和洋行に晝食を喫して、滿鐵定期汽船榊丸に便乘す。午後三時出帆すべかりし船は暴風の爲めにとて、石炭の積込に忙し。四時半漸く出發す。此の間、井上君、大村氏は一行を見送りて棧橋にあり。井上君が一行滯上海中に與へられたる便宜と親切とは永く特筆大書すべきものとす。時には寢食をさへ共にせられたることあり。大連に向ふに當りて、更にシャロン數打を贈らる。一行爲に露命を繋ぐことを得たり。再生の思ありと云ふべし。榊丸には大連方面より上海に來りし觀光團の共に乘船するありて賑し。中に旅順女學校長あり。一行に紹介せらる。來らば

案内しやらんと語られしも其の事無りしは殘多し。

七月廿八日　火曜日　晴

上海天文臺主の豫言は美事に適中して暴風は我船をも見舞ぬ。此の日目醒めたる時は既に醉ひてありしなりけり。斷食四回、終日太陽を見ず。船室の一隅に呻吟したればなり。

七月廿九日　水曜日　快晴

狂ひに狂ひし海上も今日は靜かにて、昨日の嵐は知らぬ顔なり。午前十一時といふに大連の港に入る。一行船を降らざるに、杉森先生の急使は一封を齎し來りぬ。明朝一番列車にて旅順に來れと云ふなり。棧橋には先輩牧田利作君(南滿會社大連工業學校在勤)及民政署よりの山口氏ありて、我行を迎へらる。導れて直ちに旅館なる盤城ホテルに入る。稍々ありて先輩岡田轍平君、山田權三郎君來つて一行の勞を犒はる。

休憩すること三時間、直ちに大連市街見物、諸學校官衙の視察にと出で立つ。是れ最初の日程によれば今明日は大連にありて明日の最終列車にて旅順に向ふべきなりしが、臨時變更するの餘儀なきに至りたればなり。一日半に見るべきものを半日に見る。四回斷食せる疲勞の體を提げて活動せる一行は其の元氣稱すべきものなり。

大連大和ホテル(八月一日開館するまでに竣成し居たり)を隈なく案内せられ、滿鐵本社を訪ふ。優遇至らざるなし。大連民政署を左に見て、第三小學校に至る。西公園を通過して公學堂に出づ。中央試驗所は岡田君の技師たる所、以て滿洲の富源開發に資するところなりと云ふ。工業學校は今し新築成りて外觀の壯麗なる內外地人を驚倒せしむるも、內容の如何は將來の發達に待つ所多し。

遼陽に一泊すべかりし一行は滿鐵の勸めによりて湯崗子の溫泉に長途の勞を醫することゝなしぬ。此夜先輩諸君より一行に對し盛なる歡迎の意を物質的に表示せらる。翌朝此の地を辭してまた歸らざる一行は遂に、山口氏に案内せられて電氣遊園に遊ぶ。

七月三十日　木曜日　快晴

午前六時大連發、旅順に向ふ。諸先輩に送られて發足す。岡田君は旅順まで同車せられぬ。旅順驛には杉森先生、永野先生は書記を從へ、工科學堂の生徒總代數名、陸軍の將校一名と共に一行の爲に馬車を用意せらる。此日同所にありし杉森先生御令息も吾等と行を共にせられたるは一行の共に感謝する所なり。吾等と同列車に某聯隊の將校一團ありて、旅順に實地見學すと、杉森先生は聯隊に交渉の結果その將校等と共に實戰談、並びに實地講話を我等に聞かしめんとの好意に出でたるなり。

一行二頭立の馬車により、先頭には書記を從へて杉森先生あり。旅順の中央に位する白玉山に登る山頂は納骨祠と忠魂碑とあり、數萬の英靈を吊ふて紀念館に至る。館長可兒鶴二氏の御好意によりて在りし昔を偲ぶことを得たり。且、茶湯を得て晝飯を喫す。辨當は杉森先生の用意になり、工科學堂の炊事より出でたりと。

將校連の來り會するを待ちて松樹山砲臺、二龍山、望臺、東鷄冠山北砲臺等を巡覽して將校の說明

を聞く。

此夜一行に對し工科學堂の病室に宛てられたる一室を貸與せらる。此夜自由行動を許す。金子教授は此夜杉森先生宅に寄泊せられたれば始めて一行と分る。

七月三十一日　金曜日　快晴

八時出發、二〇三高地に向ふ。陸軍將校の來るを待つ間に一行紀念撮影をなす。爾靈山頂氣清し。杉森先生と語ること二時間餘。將校來る。山高しとにはあらざれど慘悽の氣漲る。山を降りて學校に歸る。

晝食を終つて直ちに學長の室に案内せられ、白仁長官より一場の講話あり。終つて永野先生の案内にて學舍内を參觀す。それより一行分れて二となる。一方の二人は水師營に、他は學堂のボートを浮べて港口に向ふ。閉塞船は今や影もなきぞあはれなる。

五時より一行大和ホテルに於ける杉森、永野兩先生のチィーに招待せらる。夕食後更に杉森先生を官舍に訪問す。

九時より學堂生徒の催になる盛大なる歡迎會に列し一場の挨拶を交換して談話笑聲沸くが如し。學堂に於ては時しも試驗前自修日なりしに拘らず、一行を遇することかくも篤く更に情の切なるものあるは内地人の大に反省せざるべからざる所、されど杉森、永野兩教授の在任せらるゝ與つて力なしと云ふべけんや。

此夜は金子先生も共に寢臺の人となる。學堂の校舍は露人の遺物なれど我等の宿りたるは邦人の建築にかゝるものとはいさゝか物足らぬ心地す。

八月一日　土曜日　快晴

午前六時學堂出發、杉森先生宅に御挨拶して停車場に向ふ。杉森先生、永野先生、其他の學堂教授學生總代の鄭重なる御見送に感謝して湯崗子に向ふ。遼陽小學校長鈴木重憲氏は大連滯在中の處一行の爲に臭水子驛に待ち合せられ、車中滿洲の教育狀態を承りつゝ長途の汽車に倦むこともなし。

午後五時半、湯崗子着、旅館清林の主人僕を從へて出迎ふ。鈴木氏は之れ遼陽行きの最終列車なれば之にて失敬すとて、車中に再會を期して別る。

此夜、湯池に面する一廣間の稍々寒さを覺ゆる所に茶話會を開く。旅行中最初の催とす。一行の元氣回復すること夥し。

八月二日　日曜日　快晴

九時半、旅館出發。十時半遼陽着。驛には鈴木氏並に遼陽公學堂長諸石氏の御出迎を辱ふし、小學校に休憩、湯茶の饗を受く。至るところに湯茶云々と書けるは一行渴する甚しく、之を得て蘇生の思あればなり。滿洲談を承ること少時、出で、公學堂を參觀し、折柄、苦力の晝飯時に會して高粱飯を味ふ事を得たり。

白塔を仰いでその昔を偲ぶ。之れ遼陽砲擊の目標なりしと聞けばなり。小學校に於て晝食の饗に接

す。學校内を巡覽して小憩。

午後は支那城内を經て、角面堡の砲壘趾に至る。首山堡は前方に見えて當時の苦戦を語る。歸路渴することと甚だしく諸石氏の案内にて滿人のまくわ瓜を番する小屋に行きて瓜を食ふ。旅行にも支那にも慣れたりと思はる。出でて孔子の神位を祀れるを拜し、師範學堂を參觀す。何れの學校も授業なきは遺憾なり。

午後六時半遼陽驛に諸氏と名殘を惜む。八時奉天着、驛には梅森慶之進氏（豫科生梅森君の嚴父小學校在勤）小川權三郎氏（附中山口俊彦氏の友人）等あり。大星ホテルに投ず。夜既に遲ければ明日の日程を定めて直ちに休息。

八月三日　月曜日　快晴

午前八時出發、奉天北陵に向ふ。旅程二里餘、徒歩す。途中ペスト流行當時に新造せられたる墓地を過ぐ、快からず。

北陵は清朝の始祖を祀る地、宏壯なる墳塋は明の孝陵と共に徒らに其の盛時を追想せしむるのみなるはあはれなり。此處には今尚番兵を附し、許可なくして入るを禁ず。梅森氏既に許可證を得て一行の爲めに謀られしは大に感謝する所なり。正門側に踞してパンを食ふ。暑中辨當の腐敗を恐れたればなり。歸路水筒の水の缺乏と炎熱とは一行をして殆ど立つ能はざらしむ。洋傘の用意なかりし梅森氏の如き滿洲に慣れたる方にして尚倒れんばかりなりしと云はる。急ぎ茶館に蘇生せんことを求む。鐵道馬車によりて宮城に入る。清朝の始め政を執りし處とす。

鳳凰閣上に至るや、驟雨沛然として至る。即ち午睡すること一時間餘。晴れて域外に出づれば街路河をなし、魚軌に躍る。馬車にて小學校に入る。一覽の後寄宿舍に導かれて梅森氏より盛なる饗應を受く。小川氏また來訪せらる。

午後八時、諸氏に送られて朝鮮に入る。大連に上陸してより、安東縣に至るまで、一枚の團隊切符にて事足り、而も八割引なりときく時、學校にも滿鐵にも感謝せざるを得ず。車中熟睡するを得たり廣軌鐵道なるが上に我等は二等なればなり。

八月四日　火曜日　快晴　午後は驟雨時々至る。

午前六時安東縣に下車す。此處にて二時間の餘裕ありと思ひしは愚。朝鮮と滿洲とは一時間の差あり、朝鮮の方早く夜明くればなりと始めて知る。然るに此の驛よりは朝鮮經由内地行きの連絡切符を發賣せず止むなく、新義州驛まで買ふ。然るに新義州には此の列車停ること十分餘。十二名の割引切符を買ふべくもあらず、止むなく驛の切符賣を同車せしめて發足す。漸く豫定の時刻を嚴守することを得たり。更に此に鐵道院の割引證の不備を發見することを得たり。即ち同證の但書に朝鮮は五割、内地は二割引と規定しあるも之は朝鮮内地連絡切符を購入する時のみ有効にして、朝鮮内のみの切符を求むる時は無効なりと云ふ。而も該文面にはさる意味は認めず。甚だ不都合なりと云ふべし。故に當局に知照して該割引證は朝鮮内のみにて無効なりとか、然らざれば内地、朝鮮連絡の時のみ有效と

かの一句を附加せしむるは我行の義務なりと感ず。現に一行中には之が爲に一枚の割引證を無効ならしめたるもあり。彼の地の驛長と雖も法は如何ともすべからず。そは割引證の不備なりと云ふ。

午後一時、平壤着、平壤高等普通學校長田中玄黃氏、公立高等女學校長上野直記氏、平壤女子普通學校長安藤文郎氏、高等普通學校教諭長谷川龜四郎氏等の御迎を拜辭して一先づ旅館松岡に入る。晝飯を喫して長谷川、安藤兩氏並に高等普通學校內教員速成科の生徒四名に案內せられて、日淸の古跡七星門、乙密臺、牡丹臺、玄武門を吊ひ、箕子の廟に詣で更に浮碧樓、煉光亭、大同門を歷覽して宿に歸る。

此の夜、高等普通學校長並に長谷川、安藤教諭來訪せられ茶菓、繪はがき等の贈與を辱ふす。

八月五日　水曜日　朝鮮梅雨の故に天氣定らず。

午前八時雨を衝きて、公立高等小學校長、高等女學校、及び米國人經營の大、中、小學の建築、公立女子普通學校、女子技藝學校、高等普通學校を參觀し、高等普通學校にて宿より差し廻しの辨當を喫し、茶菓、果物等の饗を受けつゝ田中校長の朝鮮學制一般を拜聽す。

午後一時半、前記諸先生、生徒諸君の見送りを受けて京城に向ふ。

午後七時半、南大門驛に着するや、同窓の先輩たる、竹田喜久雄、小菅昌三、正井芳樹、伊藤文治の諸君並に朝鮮總督府視學官太田秀穗氏を始め其他多數諸賢の出迎を受けて、原金旅館に投宿。

此夜、同窓諸君より茶菓の饗を受け、先輩活動の有樣や、朝鮮の內情等聞くこと多し。同窓先輩のかくさぬ赤き言葉に溫情掬すべきもの見えて嬉し。

八月六日　木曜日　快晴

午前八時出發、商品陳列館に朝鮮の產業を知り、總督府病院を過ぎて博物館に至る。館は木曜日は開かざる定めなるに特に一行の爲に示さる。昌德宮秘苑に連る。館は諸般の珍品を藏する多く、皇室の御物をも陳列せり。之より直ちに秘苑の拜觀を許さる。前記の四先輩は案內の勞を取らる。高等普通學校にて晝食。學校參觀もこの時爲す。

景福宮は草のみ繁く、御門の一つは今や斧鉞加はる。京城中學校に入りて茶菓の饗を受く。何くれとなく注意下されたる先輩に感謝し、母校を思ふ同窓の爲めに勵まさるゝこと深厚。出でゝ德壽宮裏を經、韓國政府時代の各國公使館などに昔を偲びつゝ南山に登る。龍山、京城一望の裡にあり。朝鮮の獨立門は之れ一場の夢。宿に歸りて夕餉の支度をなし急ぎ南大門驛に向ふ。

午後七時半、南大門發、諸先輩に別を告げて釜山に向ふ。

八月七日　金曜日　快晴

午前五時草梁着、友人、藤田明君、鳥山佐一君あり。先輩岩崎繁雄君、宮原秀雄君、釜山中學校長廣田直三郎氏、並びに商業學校長の諸氏既にあり。釜山普通學校長大森理八郎氏は釜山鎭まで出迎へられたるなど歡迎至らざるなし。

一行車を共にして釜山に入る。旅館岡本に入りて朝飯を喫し、同窓先輩と旅行の略狀を談りて快語

數刻八時再び汽車にて草梁に向ふ。中學校を訪ふ。校長廣田氏は朝鮮通を以て聞ゆる人。一行の爲に朝鮮の地勢、産物の概況を報じて曰く、諸君が行を終らんとするにあたり聊かたりともその觀念結合の上に利するあらば幸なりと。創立日未だ淺けれど施設大に見るべきものあり。

普通學校に於て少甚諸成績品を見る。商業學校に至りて生徒の實地方面の如何ばかり活躍し居るかを知り得たるも不幸、鮮人の成功するもの少きは憂ふべし。出でゝ直に商品陳列館に案内せらる。既に釜山の街にあるなり。

最後に釜山港を眼下に見る小丘に登る。洛東の流れは黄泥を運んで海の砂洲かと怪む。宿に入りて先輩友人より茶菓の饗應を受くること甚だ厚し。

午後は宿舍にありて歸國の準備に忙し。夜の船を待つ。

午後九時、兩先輩、兩友に送られて連絡船高麗丸に乘る。埠頭漸く暗うして月は玄海より登る。互に振る白布も見えずなれば聲も聞えず、唯波を蹴る船足のみ轟く。かくばかり靜かなる玄海の灘はまた見る能はざるべし。黄海の波に恐れし一行は海とし云へば怖れんとするぞあはれなれ。

有りし事共語り暮す玄海の上は月冴えて氣寒し。今宵は先生も三等の船室にあり。名殘と思へば寢るに忍びず。

八月八日　火曜日　快晴

午前八時下關着、十時の汽車を待つ。此の間春帆樓に日清の昔を讀まんとするものあり。復旦大學門側に立てる黄金の衣着たる李公と眼下に銃創を留めたる李公とを相比照する時思半に過ぐるものあり。

午後六時一行無事廣島着。長屋、堀、小日向、松平、新見、野上、守内諸先生の御迎を辱うす。

驛前諸先生を送り、一行はその長途の旅行に無事なりしを祝し解散す。

以上略記せるが如く、大なる失態と錯誤となく、略其の豫定を遂行するを得、而も一行十二名一人の落伍者をも出さざりしは我等の最も愉快に感ずる所なり。左に豫定と實行との齟齬せる二三の要點を記して以て後の人の參考に供せんか。

(一)十九日午後十時廣島驛を出發せん豫定なりしも、(a)汽車に依れば一行十二名にしして團體として割引の恩典に浴することを得ず。故に費用の點よりして汽船を便とすること、汽船は二割引。(b)夜行列車に依る時は車中混雜して熟睡し得ざるの憾あること。(c)靜なる内海を航行して大洋に出づるの準備たらしめんこと。以上の如き理由により出發數日前に變更する事となせり。

(二)上海滯在中西洋劇を觀んものと豫定し居たるも、暑氣甚しくして開演するものなく。止むを得ずして中止す。西洋ホテルに一泊する都合なりしに、其の志を果たさざりしは一行の尤も遺憾とする所なり宿泊料は一人一泊六弗(四圓八十錢)にて豫定額と大差なかりしに。如何なる行き違にや、遙に高價なる如く、電話にて解答ありし爲め中止したるに、實地ホテルに就きて質したるに前記の如しと知られたり、されど此の時一行は將に南京に向はんとする前夜なりしかば、二十七日南京より上海に歸りたる日

の朝を期しアスター、ハウスホテルに於ける朝餉の卓に向ふて一擧兩腹を醫したり。

(三)上海より南京までは、往か、復か、一度は汽船によつて洋々たる長江を上らんか、將た下らん意氣込なりしも船足遲くして豫定の時間に南京に到るを得ずと、されば船によるが爲めに南京の滯在を短縮するに忍びず、遂に往復共に汽車路を取ることとなり終ぬ、更に途中蘇州の水と鐘とを樂んかとも思ひ居たるに上海、南京間の汽車は往復回數甚少く、一車を降りんか、遂に蘇州に泊せざるべからざるに至らん、一行の風流兒、豈夫れ夜半の鐘聲を聞くを欲せざらんや。されど旅程限りあるを如何せん、車中の支那人と筆談以て蘇州は美人の產を以て顯ると知る、憾を蘇州城外に殘して、直路南京に走りぬ。支那汽車の發着時間の不正確なる南京より上海への終列車を取らんとして一行の狼狽したる今にして思へば寧ろ滑稽なる程なりき。されど心すべき事にこそ。

(四)大運にて滿一日間滯在せん筈なりしも杉森教授よりの招電によりて臨時變更したるは上記の如し

(五)滿洲の汽車より朝鮮のに移らんとせし際に起りたる割引券問題は上述の如し。

其の他豫定表中の見學箇所にして實地踏査の結果、其の價値なしと思はるゝもの、既に廢校の運命に會したるもの、衰へたるもの、隆となりたるもの等、又は新しく設けられたる建築設備等のありて、彼の地に諸先輩、諸官衙のありて我等を指導さるゝなかりせば、我行はその所期又は既得の利益の半をも收得すること能はざりしなるべしと思はる。上海に於ける井上君の如き、自ら一行の爲めに同地滯在中の、旅程細案を作成して一行の到着を待たれたるが如き、其の他各地に於て諸先輩の同樣に與へられたる便宜と指導とは實に我行をして此の大業をなさしめたる最大因たらずんばあらず。

今此の稿を終るに當り篤く是等の先輩諸賢に感謝する所以なり。

第三　旅行日誌（其の壹）

（一）旅と我等

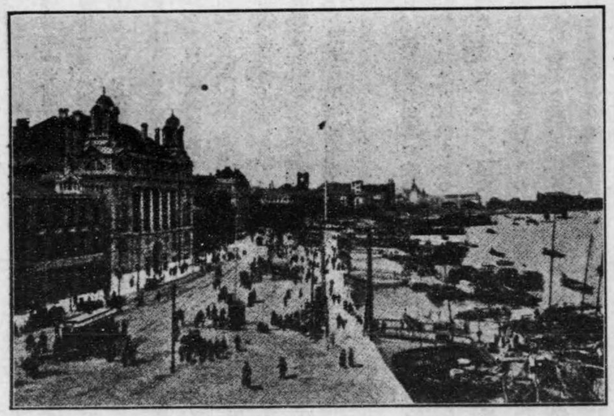
先の皇太后宮の御百日祭の午後宇品をたつた我船はまもなく門司に着く、乘合の人々の顏も白み渡つて、そこには今日の暑さを象徴する薄靄がかゝつてゐる、はや遠近の灯は消え初めて、自分達の心は遙かなる遠白波の影に跳るのである。さらは友垣、暫くではあるけれど別れと云へば淋しさも湧くと云つた君の言葉は、今私の胸にしみ〴〵と味ひとめられた、遣瀨ない心持が水の樣に止めどなく流れて、聽て別離の悲哀に泣くことであらう、さは云へ一行十二名强き心して互に顧みることを知る、私達は心ゆくばかりこの行を樂まんとするのである。

私は昨春暇を乞ふて雪の出雲路を放浪し、久しく相見えなかつた父母の國を訪れた事を思ひ起す、雪は脛を沒して卍巴とふりまさつたけれども、この廣野の果に存する一個の目的地は、自分をあへぐ雪の道にはげましたのであつた、私が無事故鄕の人となつた時の老いたる人達の悅びは今更申すまでもなかつたが、かなり浮世の荒波にもまれた私の心迄が、何となくめいる樣で、私はたわひもなく泣きくずれたのであつた、げにや私が父母の國を訪れたのは十幾年振であつたのである、私の生れたところは山間僻陬の小都會で一物の見るものなく、一日の遊ぶところないのであるけれどもこゝに呱々の聲をあげ、亡き父のましますところであると云ふ單なる事實が、私を無限に引附ける力となつて十幾年來幾度私の夢に入つた事であらう、あゝなつかしい私の心を引くマグネットよ。

たゞに十年振に故鄕を訪るゝ事と云はず、郊外一歩の地に出たならば、自然は至るところに我々を待つて、大自然の懷を慕ふ者の幸を敎へるのである、假の宿りの夜雨に會ふては殊に故山の事なども忍ばれ、折柄杜鵑の聲でもきくことがあつたならば、さすらふ我になくほとゝぎすと千萬無量の思ひを起して、この夕不如歸をきゝ樣々の思ひに耽り候、この思ひ文せではあられず候と、旅のたよりを誌めるのもよからうし、なぎさに横はれる船のよこべりによりかゝつて兩手を頰に押しあてゝ、古往今來を思ふもよい、慷慨の性ある人ならば、野に出でゝ田園將に荒れんとする樣を見て爲政者をのゝしり、靜つて育英の業の及ばざるを悲しむもよい、一杖一笠、江を渡り浦をすぎ、氣候風物の變遷に親しむ、若き人々の意氣の上らざる今日の如きはない時に當つて、出でゝ美しい萬物の活動に共鳴して大自然のリズムに合した働きをしなくてはならぬ、運命は急轉するさらでだに去り易き青春である、昨日の雷は今日の花、今日の花は七日すぎての葉櫻である、我等の奥底に横はる永遠に若からんとする心のために、若きにふさはしい思ひと行ひとは旅によりてのみ得られは、よしや語學研究と云ふ當初の使命は果されないにしても、見聞をひろめ、世情に通じ、以て後日の資となすことが出來よう、港に横はる伊豫丸六千噸、紅海や地中海に船腹を洗ふ船である、黑い煙と共に出船を告げる洞盤（ドラ）の音がきこえる、宇品での諸先生や兄弟諸君の暑い中での見送りと、富山の病院の病床に呻吟しつゝある山田君の健康を祈るとの電報とに深く感謝の意を表する、そして宮島の高濱に海水浴をしてゐるはらからよ、宮島停船の一時間はまたとない好印象を私達に與へたのであつた。

（二）支那海の風浪

碧藍の盤に白玉まろび行く海はいさをに死すべきところ――筑紫潟黃昏の中を島がくれ行く出船入船の影も見えなくなつてからは、天地頓に靜寂の氣を增して、關門の汀に早くから輝く灯さへ見えずなつた、未來の海から蒼い波と共に出てくる太陽はかくて幾千年、現在に遺入り、又直ちに過去の深淵に紫色に輝いて落ちて行く『あはれわが行く先、赤道直下の國、はて知らぬ異域の島』とバイロンが勇しい門出の日、それとこれとは異るけれども、



上海の海岸通

本土の青山が見えずなりそめては、恐くは遊子海外に遊ばんとするのを悲しんだ人も多いであらう、此時誰人があつて別れのたで琴でも奏して呉れるならば、たとへそれは素人の拙い曲であらうとも、若き旅人が黃昏の告別の辭に、ゐならぶ人も泣かす事であらう、あなたなる落ち行く日の方に太陽と故國とに今別れようとすると、太陽は幾時間の後に上つてくるけれども、故鄕よ、おん身とは暫しま見えないのである、さらば波間にかくれ行く故國の濱、かれはかく口吟みつゝ東の方を眺めました、僅か二十幾日の短い旅であつてこの思ひであるのに、その昔遣唐の學徒が生命の危險、風波の難、それにも增して五年十年の旅寢の憂さを忍び、果ては客土に鬼となることをさへ甘んじた篤學心は、今の若い人々に無限の敎訓であるなどゝ思ひ耽つたのであつた。

明くれば二十一日、沖の島、壹岐、對島は既に早く過ぎ去つて、見ゆるものは誰水と空、聞えるものは唯水を斷る推進機の響のみである、繁くまたゝいてゐた星影が次第に雲間にかくれてからは、そよと頬をかすめた風も荒々しく、神秘漂渺たる天地は、漸く風伯の怒りにふれたのである、げにや雄を天下に競ふ英國幾千の艨艢も逆卷く波に對しては むなしき敗者であると歌つた海の詩人の情懷はさることながら、海に死し、浪を枕とする日本男子の襟度はこれにすぎないとしてゐる、飜つて傍なる水夫を顧み尋ねると、これしきの風や波は支那海にあり勝なことで、この位の風がなくては、暑氣に堪えられないと聞いては、潮の香に世の春を知り、流れ薬に天下の秋を知る、水夫の生活の豪膽なるに驚いたのであつた、船は次第に南の方支那海に進む、待ち設けられた 程の暴風雨もなく、沖つ白波は南支那の方に向ふ。

船はよく語るスコットランド 人もゐれば、數十名の歸省の支那留學生もゐて、早くもとつ國に交つて、なれぬ異國の風物をたづね、さてはまた スコットランドの夏や如何にと尋ねて、詩り頻に玄神洲の秋の神秘を答へなぞして、語るに 充分の機會を持つたのであつたアントワープの輕業興行師のところに 行くと云ふ十二歳許りの四童子は、殊に快活に 語り且つ戯れた、南熱帶の地、わけてシンガポール地方に渡つて運命の開拓を試みようとする 夫妻の顔には常に希望の光明が輝いてゐた、これ等出でゝ運命を開かんとする人々の中には或は中學を出たばかりの青年もゐれば、浮世の敗殘者と見られる 老夫妻もあつた、けれど一樣にゴムの林のあけ暮れをなつかしむ人であることに於て 變りはなかつた、千態萬樣なる人々の中に交つては殊に遠くもわれは 來つるかなと思はれて、飛ぶ來る水沫に衣のぬれるのも忘れて、三更迄も甲板に佇んだのであつた。

東の國に生れたる男子等が、一度はこの際涯なくひろがり行く玄海灘や支那海の風浪に對して、上古以來三千歳、遠くは神功皇后の三韓征伐から、近くは沖の島の大海戰などゝ、我祖先の 光輝ある活躍の跡に接することは、一面國民精神の養成に力あることであり、かつは將來の國民を敎ゆるに意義ある事と 信ぜられたのであつた。

(二) 上　海

二十二日國土は去つて 見えずなり、船は支那海に漂ひました、黄濁を流す揚子江の白波は 早くから見えそめました、この美しき光景にこの豐かなる綠の香に美しき國に、暴虐の手を以て 萬物を傷はんとする支那人は 住んでゐるのである、大河に浮べる吳淞の町の前には百千の吳船越艘が 帆柱を並べてゐる、潮江五時間雲耶山耶と見紛ふた陸影は 次第にその姿を明にして、河幅幾十浬の大河は果てしもなく廣がつてゐます、見渡す限り兩岸は 一面の平野で小高い丘もなく殆ど 水面と平行した畑が廣がつてゐる、崇明島を過ぎ、伊豫丸は 豫定の正午に碇を郵船會社波止場沖に投じました、すはと云ふ間もなく小船に乘つた苦力が 荷物を持たせよと切望するのです、東亞の唯一の强大國である 日本の後援を却けて無智傲慢にもこれを悅ばぬ、所詮彼が亡ぶべき國であると思はれた賤が伏屋も、宮殿も共に穢はしい この國の人は楊子江の濁水にいたまされて人とも 思はれぬその身姿、浴せず梳らず、亡國の民はかくこそあるのである、崇嵩嘆美の自然の中に 生れたる憐れなる奴隷よ、かゝるいぶせき人のために その麗光を惜み給はなかつた神こそ慈愛の限りでないか、零時三十分ランチは 我々を稅關前の埠頭に運んだ、たちまち見る車馬の列をなして 往來してゐる樣、十層にも餘る洋風の建築が軒を連ねてゐる有樣は 實に世界の市場の最たる者、世界的都市の名にそむかぬと 思はれた、自動車と壯雅なる馬車の客は皆洋人で、その間を支那人の人力車が 幾百となく客を爭ふ、それが動もすれば 客に乘車を强ゐて、赤帽巨人の巡査からなぐりとばされる、この巨人こそ英人が 印度から輸入したインド人で、六尺に餘る風貌とて 支那人もこれには閉口する風であつた。

高壯な我領事館と 郵船會社支店の建物とがこの間に交つて僅に氣も吐いてゐる、かくて 我々は一先かの憂國の志士金玉均が殺されたのを以て聞える東亞洋行と云ふ ホテルに入つた、日本人經營の第一の旅館で三階造りの高壯な 建物二棟から出來てゐる、支那人や西洋人の紳士も來り泊するのである、夜は井上日本人小學校長の案内て海岸通や公園に遊び、領事館で 上海マーキュリ紙の主筆である佐原氏から、英語の必要、この地方に 行はれてゐる英語等について一場の講話を聞いた、氏は外遊 十五年殊に英語に造詣の深い人とて、趣味と敎訓を得ること 大であつた、あはれかゝる未知の人々の間に交つては 優しさの一節なる故國の人々のなつかしまれて、この夜こま〳〵と國の母と妹とに 手紙をかきました、殊に洋人の殊の外なる活動振りを見ては 慷慨の思ひも切に湧き來つて、まんじりともせずに旅の第一夜を 明かしました、黄ろい黄浦江が旅館の前を流れてゐて 日中は隨分の暑氣であるにも 拘らず、夜は冷たい風が間斷なく 窓から吹き込みました。

ほの〳〵とあけ行く朝、ホテルの三階の窓によつて 市街を眺めると無數の支那人が往來してゐる、四分の三迄は 裸體で、股引樣のものを腰につけてゐるばかりである、一輪の荷車を 日本人等と反對に、荷物を前にして 進み、路傍には温い粥樣のものや、瓜を賣る女、小供達が堵をなしてゐる、何事も呑氣千萬に『ヘヤー』の懸聲勇しく走つてゐた車夫もその客も、たちまち俥を止めて 汚ない茶粥をすゝり、二人共木影に眠つて 仕舞ふ、道路の完備、建築物の高壯は日本の都市の比でないにも 拘らず、果てしなく愚鈍にして汚はしい支那人は 矢張日本人の比でないのである、この獨立自主の人にあらね、逸居の惰の國、家危くして 兵なく、羊飼は已

の腕を以て羊を守らねばならぬ、遠かれ早かれ屬國の苦楚をなめなければならぬかと思はれた、この怠惰なる國民の間を、英獨佛米の四國の人々の經營は着々歩を狀めて、上海の市街は全くこれ等四國の人の勢力範圍にあるのだ、私達は導かれて日本人の多く住む北四川路を訪れた、凡そ一萬に餘る邦人居留民は數に於て居留民の最たるものであると聞いたが、その事業はまた振はざるの最たるもので、雜貨店や理髮店を營む者が多い、却つて說くかの伊豫丸の船中で支那の一留學生が『御國は何にも高價ですが女だけは安價い』と云つた恥かしい言葉は、この地にも遺憾なく實現せられてゐるそうで笑を賣り、またこれを買ふ女を客とは日本人が一番多いとの案內者の物語には支那人を放肆呼ばはりも出來ないと思つた。日本人倶樂部は三十萬弗の市債で建てたので屋上運動場から、芝居などの出來る娛樂室も出來てる程の立派な煙瓦造りの家屋で、餘り廣いので限なく見る事が出來なかつた。

（三）上海の外人敎育

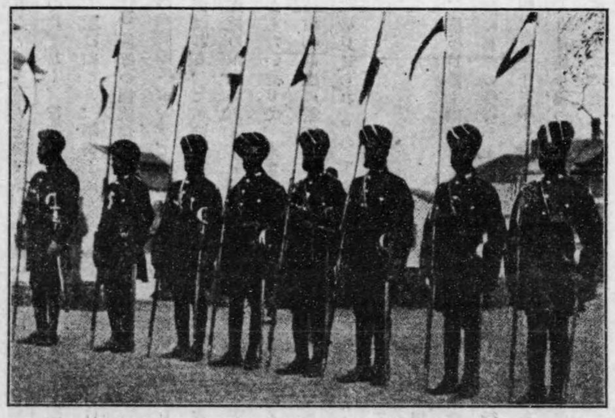
上海の敎育はこの市街の文化に比して遙に見劣りがする、日本人小學校は廣高師出身の井上君が校長で、二組の幼稚科と十三學級の尋常高等の生徒から成り、それを二十名許りの敎師が親切に敎授してゐるのであるが、多くの兒童は上海で生れた者が多い事と日本の概念に乏しく『山紫に水明かなり』と云ふ一句を敎えるにも山を見た事なく、濟んだ綠の河流に接した事のない彼等兒童にこれを充分了解せしめる事は困難であるので、完全なる日本人、そして今日の淺間しい上海居留民國の狀態を脫して歐米人と肩を並べる時代の邦人を造ることに全力を盡してゐるとの同校長の物語であつた、敎室や敎具等の設備は內地の小學校以上に立派なものであるが、兒童の增加が劇甚なので隣地をトして校舍を新築してゐる、然し一度こゝを去つて英米人の設立してゐるパブリックスクールを參觀すると、その金に飽かした校舍や、芝生を美しく植えた運動等は到底日本人の學校と比べものにならぬ程である、その傍には新公園が共同租界の手によつて出來てゐて兒童の遊戯生長するによい、新公園は將に廣島練兵場の二倍にも達するであらう、行屆いた手入、よく茂つた高い木立こそないが、こゝに遊戯散步する人々の公德心のよく發達してゐることもうなづかれる、電車で東亞同文書院を尋ねたが、質素なる建物の中に東亞の天地を開拓すべき健兒等は起臥してゐるのである、國旗の飜るところ國民活動の跡は古今につきぬけれどもそれがよく終始して、所謂永世に亘つたものゝないのは遺憾であるこの間に立つて同文書院の健兒が深く決するところあるのは賴母しい次第である、この學校は既に二十星霜が間幾多の人材を養成し來り、隣邦との友誼に少からぬ貢獻をしてゐるのであるが、昨年不幸かの機器局の亂の時兵火にかゝつて多年經營の跡を燒失し、今は黑獅克路の一角に、三階煉瓦造の假校舍が設けられてある。

こゝを去つて郊外電車に乘り行く〳〵佛人や獨人の閑雅廣壯な住宅を眺めながら獨乙醫工學堂を訪れたが暑中休暇だと云つて門前拂を食つた、數萬坪の校舍は石造又は煉瓦造で、支那人を限り入學を許すものでその設備等は我同文書院の比でなく、彼等が極東殊に支那の經營には如何に高價な犧牲をも厭はぬこと、學術上に最も細心な秘密主義を抱いてること、これ等彼等の偏狹なる心事に我々は萬感を湧かしたのであつた。校內の庭園にポンプで撒水してゐるのを見てもその大仕掛なことが偲ばれる、この邊は全く郊外の一區劃をなしてゐて廣島から新庄迄位の距離であるが五間幅のアスハルトを敷いた道路は終點もわからない許りで、大きな電燈は至るところに道路を照し、熱帶性の植物は盛に繁茂して天に沖する許り、その木蔭れに洋人の家屋が、散見せられるのである。

（四）四通八達の上海

何處ともなき放浪の身であるけれども、旅の日數も陷られてあることであれば心急がれるのであつた、既に馬車の往復が上海の名物である如く、自動車の數も亦日本全國の自動車を集めてもこの町にあるのに及ばないのである、更に人は幾錢を拂つて車上の人となり思ふところに行く事が出來る、更に電車に至つてはそれこそ四通八達で郊外遠くまでその便があつて、一日の收入が三千弗に達すると云ふ程である、私達は電車の便を借つて六三花園に向つた、これは在留一日本人の經營してゐるもので、一小公園をなし花樹水禽から、一木一草に至るまで悉く母國のものを集め、廣い芝生には鹿などを放ち、故國の風物さながらなるものがある園主はこゝに料亭を開いてゐるのであるが邦人のこの方面に捨てる金がこの人の家だけでも月數萬圓に上るとの事である、以て盛況想ひ見るべしである、我々は車を轉じて徐家滙の觀象臺を訪ねて臺長の親切な說明を聞いたが、實にこゝは東洋觀象の中心で南洋から日本、滿洲、支那各地二百餘ケ所から日々氣象通信を受けて、氣象圖を作り、天氣豫報をなし、又上海に時間を報ずるの任をなしてゐる所である、臺長佛人ルイフロック氏は日本氣象上に貢獻する件を以てゞあらう、日本皇帝から勳四等を貰つてゐる、この建物に隣つて天主敎會堂がある、宏壯にして閑寂なこと上海中比のない程であつて、西の國のかのウエストミンスター寺院などもかくあらうかと思はれた、歸途南津大學や支那人の專門學校、支那元勳李鴻章の銅像のある復旦公學等を見物した、夜は例のパブリックガーデンに行つて涼を取つたが黃浦江と蘇州河の合する所、三角形をなしてゐて左岸に我領事館や獨米の領事館、アスターハウスホテル等市內屈指の建樂を望み、下流に輻輳する船舶を展望し得る地位にあつて萬斛の涼味と相待つて、涼を取る在留外人が山の如くベンチによつてゐる、支那人は一切こゝに入る事を禁ぜられ、邦人は女子小兒の外は洋服か袴をつけなくては這入れ

ない、支那人が己の物に入ることの出來なくなつた憐れさも勿論であるが、かゝる一種の條件を附して近年漸く入ることを許さるに至つた邦人の道德心についても、母國の心ある人の一考を促すに足る問題であると思はれた、園の西面は黃浦灘通路で英領事館に列んで正金銀行支店がある、その兌換紙幣は支那の紙幣などよりも信用が遙にあつて、廣く用ひられてゐるとの事である、バンド通りは實に上海目拔きの場所で、有名な大北電報社等もこの附近にあるバンド路に限らないが上海の道路は悉くコンクリート等で敷き詰められて市街掃除夫は到るところに散見され、撒水車は幾十臺となく終日撒水の任についてるから市街の淸潔なことは申す迄もなく、車道と人道とがよく分たれて自働車馬車は自由に走つてゐる、この間に不潔な委をして苦力が右往左往し、立並んだ並樹の陰には夜無宿支那人數百名が裸體のまゝ倒れて眠つてゐる等大都市の光景は物凄いばかりである。



上海に於ける代表的日本商人は矢張三井洋行と三菱であらう、前者は四馬路に後者は廣東路に各廣大な建築を持つてゐる、三菱は最近の建築で十八萬弗を投じたと云ふ專ら石炭の賣買をしてゐる、この外邦人の最も活躍してゐるのは某紡績會社支店で三千の職工を使用し隨分大規模にやつてゐるそうであるが、遂に見るの機會を得なかつた、三井洋行の至らね隈もない商賣振りは實に我國の誇りであるが上海でも常に商權を支配してゐるのである。

（五）舊支那街

上海は支那の一部であつて支那の主權の下になく、眞に支那市街の妙味を味はんとなれば舊城內に足を向けなければならぬ、舊城內には湖心亭と云ふ茶館があつて雲集する茶客は終日卓に向つてゐる、自分達はこゝに初めて所謂支那式喫茶の風韻を味つた、附近は象牙細工屋や陶器屋が軒を連ねて、淺草の廣小路の形をなしてゐる、茶樓の樓上樓下に充ちた客はこゝに居を定めて彷徨と或はそこに理髮屋等を招いて頭を剃らしてゐる、池の傍には小鳥市があり、怪しげな興行物が客を呼んでゐる、純粹な支那趣味が十二分に味はれる、中央に池があるがその水はあく迄も濁つて茶亭景物が害はされることは非常なものである、大馬路を西に進むと競馬場がある、上海名物の一つで黃金を投じて勝を爭ふ外人等が此處に集ると云ふ、夫を進むと靜安寺路に張園と云ふのがある張氏の舊莊のあつたところで折柄廣告博覽會の開かれた後なので日本人の茶店等も開かれてあつた、また近く日本奇術師の天勝が來ると廣告されてあつた、更に歩を進めると愚園がある上海名所の一つで茶を點じ酒を售つてゐる、不生產的な遊冶郎を造るところである、たゞその奇岩怪石、建築の珍なる、一として かの南畵を思はしめないものはない、この邊一帶は全く郊外の居住地をなしてゐて、正午頃には會社や官衙歸りの自働車が引きも切らぬ、樓外樓と云ふ高臺に登つて全市を眺めると、煉瓦造石造の家屋の櫛比してゐる樣な無比の壯觀である、西洋人の活動は限りなく、長崎を去る僅かに數百浬のこの地に於て既に日本人の活躍の影は見えなくなり、二千五百年の歷史も、無比の國體も誇るところがない、この地方にゐる歐米人が純粹な商人として、閑雅風流の心得はなくとも、その思ふ儘に市街を經營して利益を收めてゐること、あくまでも大國民的に莫大な金額を惜しげもなく投じて、道路の完成にまれ、娛樂機關の完備にまれ、小金が出來ると直ちに樂隱居を極め込む日本人の比でないことは我々の願るに足ることであると思はれる、パブリックガーデンで語つた我友に一英人が日本は山と河とは美しいけれども財政上には實に憐れなものだと云つたと云ふ言葉にに涙を押へざるを得ない、閑人あり來つて日本の歷史をとき國體をとくものがあらうとも それはこの地には何等の痛音でない、過去の事實に一種の誇を有する事の良否は兎に角としてそれに執着して他に何物もない國民は畢竟亡國の運命に際會するに至るものではあるまいか、大陸の一角に來て世界の形勢を僅かにでも窺ふものはたちまちにしてこの感があるに相違ない。

上海に溯江の不便があるけれども將來益々發展の餘地を有してゐると思はれる、心ある人々に見せたいものである、支那人の住宅は總て濃厚で異樣なる殆ど堪えられない臭氣がある、風景を以て誇る所などとても文晁の南畵等に見る樣な我々日本人の趣味に深く合するものは少ない、女子の纏足も七分三分で歩行困難な女は稀である、辮髮の男も十人に一人位で、隨つて日本人との區別がない。

小學校の一時間を魂まで跳らした武人戰士の物語は新らしく羨はるべき國人に何等の力を持たぬかとも思はれる、寧ろ小閑を利用して海外一歩の地に來つて榮枯盛衰の跡や白人の活動振りを見せたいものである、支那はその昔榮えた東洋の墓場で、某の社も寺も淺季の世となれば香たく人も空しく、懷疑と死の憐れなる子

の信仰は蘆の上に作られたる四十がらの巣である、槿花一朝の榮を持ちたるが故に再び榮ゆと思ふ勿れ、くちたる墓は榮枯盛衰を說いて汝が幾千度の教室倫理にも優るものがあるではないか、國民の覺醒を敎えた外に上海の景物も名所も我等に全く無意味であつた、あゝ遠大の計、白人の跋扈、自分達はこれを說いて耳をかす人のない事を悲しみ、而して我が筆の力なきを悲しむ、繰り返して云ふ大國民の資格なき人々よ、來つて日本を第三者の地位に置いて見るがよい、伊集院前公使が利權の獲得が出來なかつた事もこゝに來て無理からぬ事と思はれる、蝸牛殼上の爭に餘念なき人々よ、汝の前途は衰亡のみである、かくて東亞洋行の三階の一室で慷慨の談論に夜は更けた、明日は南京に向ふのである。

（六）南京懐古

張勳や可海鳴が幾度となく往來した滬寧鐵路は廣軌百九十哩で上海南京間を八時間半で走る、飽く迄も一筋道をなしてゐて橋梁も隧道もない、萬目見渡す限りの平野で農作物が實によく出來てゐる、貴國反覆期、文物整然、實業隆盛、我等同文同種之民不堪慶幅之至、と覺束ない漢文を隣席の支那人に示すと、敵國自革命克復後、官商學界皆是紛々、交無頭緒、各界無有進歩之式、經濟困難、餉稅地稅加增、現在敵國民不聊生、鄙人向業洋貨、生意聊糊口而已等と語つた、洋貨販賣業者にしては誠に氣慨のある男でよく語つて、この種の會話は車中至るところに交はされた、與君重逢再見耳と云つて別れた、線路に沿ふて蘇州が見える、寒山寺もこの地から近いと聞いたが時間がないので直ちに南京に向つた、四十餘帝三百秋、史上の事實湧くが如く豐かなるこの地は、實に我が洛陽南都の如く、初めて見る千尺許りの鐘山は春日山の形をなし一樹木もない、市街を取卷いた城壁は幅十間もある頑丈なものでそれも幾度の兵火に夏草茂く、强者共の夢の跡に廢墟の跡は傷心の種である、地卽帝王宅、山爲龍虎盤と云ふ南京はその外觀に於て美なるものがあるけれども城中の光景は慘たるものである、紫金山、獅子山共に砲臺があつて革命戰の時に市街を經て楊子江の軍艦と砲火を交へた ところである滬寧線の終點下關は第一次の革命戰に全く破壞せられて見る影もない、附近に勸業博覽會場跡がある十四萬坪に餘ると云ふ、今公園の豫定地となつてゐる、日本領事館は鼓樓附近の高地にあつて、二棟の洋館は宏壯なもので、張勳部下の兵の謝罪した廣場が前にある、領事館で色々の革命戰爭の物語をきゝ、手厚い接待を受けて、北極閣に登つた、雞鳴山上雞鳴寺に隣つて元の時代の觀象臺が殘つて居る、南京を一望の中に見る地位にあるから、內亂の場合直ちに一方の軍に占領せられるのは人の知るところである、雞鳴寺で茶を喫すると、怪しげな鳥の聲が聞える、齊の武帝が琅琊城に行幸した時に この邊で雞鳴を聞いたと云ふ故事を追想せしめる、この邊一帶の高地は冷風寒いばかりで日中百度の暑氣を忘れる、實來館と云ふに宿る、邦人唯一の旅館で日本人 倶樂部がある、居留民の數凡そ百七十雜貨店等を營んでゐるのを見ても こんな淋しい地に僅かな利益に甘んじて、不潔な支那人と共に居る人々の心持がわからなかつた、住めば都と思はれるのか、それとも雄飛の資力と意氣とがなくつて、平然としてゐるのであらうか、夜車を連ねて秦淮に遊ぶ、秦の始皇帝が豪奢のために掘つた運河に 船を浮べ 美女を侍らした ところで、今でも夜遊の船が上下して 管絃の音が盛てある、幅十間にも足りない 運河に幾十の船が浮んで、美女を積んだ船が右往し左往して 觥々相摩し、不夜の景を呈してゐる、巧にあやつる船、亡國の響ある美女が歌と鼓弓のひゞきは 南京でなければ見られぬ景色である、船では茶を喫し、歌を吟ずる外に、唄々の物語に 夜も更けよう、然も割に高尙な遊びである事、秦王の遺風の 傳はるのであらうか。

宿の下男の劉さんは よく日本語が話せる、で皆の者は劉さんと領事館巡査とに 案內せられ、四輛の馬車で南京の舊跡を探つた、亡んだ跡はかくもなり果つる者かと思はれる程何れもいたくしい程に荒れはてゝ一將功成つて萬骨枯る、その將軍の勳功さへも尋ぬるに 由ないばかりである、滿洲屋敷と云ふは靖難の役忠臣方孝儒の血蹟碑のあるところを 中心とした 舊明朝の宮殿の 跡で前門、五龍門などゝ昔の豪奢を語る建築が多い、鐘山の麓に孝陵と云ふがある、明の太祖の陵のあるところであらゆるものゝ破壞せるが中にこれのみは 立派に保存せられて太祖の功業を永く語つてゐる、こゝで驢馬を雇ふて 鐘山に登つた、そよと吹く朝風に鈴の音も勇しく、馬は坦々たる芝生の丘をのぼる、我々は 去つて孔子廟に詣でる、萬世の師表至聖孔子を初め 復聖顏下以下先賢先儒を祭る、所謂後學の輩が來つて 常に隨喜の涙を流した跡であるが、誠に支那第一の人が感化の偉大なるは云ふに及ばぬ事である、支那の唯一の誇であつて 又東洋の譽である、莫愁湖と云ふは明太祖が常に來つて その湖畔に碁を鬪はしたところで當時第一の美女がゐたとも傳へられ今猶その像を藏してゐる湖には 一面に蓮花を植ゑ、周圍凡そ五里もあると云ふ 滿目の大觀頗る面白いものがある 更に車を走せて 清涼山に登る、城內第一の高地で遙に楊子江を望み、風景甚だ佳である、山に廣慧禪寺があり、我が 空海の勉學の跡だと云ふ、この山には 砲臺もあつて要害の地をなしてゐる、夜十一時再び汽車に投じて 上海に歸り、當地第一の旅館アスターハウスで朝食を取つて 正午大連に向はんとす、夜來初めて雨降り、風冷く秋風の思ひがした、反て說くかのフランス人の天文臺を訪ねた時談會々自分達が 大連に向ふ頃の氣象の事に及んで、臺長はその頃恰も大風の中心が 上海大連間にあるだらうと豫期されたが今日の空模樣では何となく今日の航海があんじられる樣である自分達の旅行中最も奇異の思ひをなしたものは支那の婦人の地位である、彼等の數は男子に比して遙かに 少ない樣であるが、それに

伴ふて婦人が一種の裝飾物として取扱はれてゐるのを見るのである、彼等の内には何處にもその例に洩れない新らしい女を氣取つた、當世風のものがないではないが、多く屋内にかくれ住んで汽車等に乘つても婦人の乘客を見ることは極めて稀である、而してこの地方第一の名物は例の茶館で、夙朝晩夜茶樓に客を見さる事なく、水煙等を喫しつゝ靜かに日を過す、これは下層の民にも見るところである自分達はかくてこの地方の旅を終へて新領土に向はんとするのであるが、九十度から百二十度の間を往來する然も變化の多い大陸の氣候と、なれぬ旅路の食物などに、少なからぬ疲勞を感じ、ためにまづしい通信は一層形をなさなかつた、そして記すべき多くの事、例へば南京の盛んな教育や、晝夜の着劍の兵士によつて警戒される市街の有樣、夜九時後は城外に出ることも許さぬと云ふ物々しい馮國璋の取締ぶりなど多くを略したのである。

（七）船中の四十時

上海觀象臺長の豫報は的中して一昨日入港すべき筈の船は未だ沖合を漂ふてゐるとの事であつた、歐亞連絡の任に當るべき義勇艦神丸はにはかに非常準備の石炭と水とを積んで午後二時出港が遲れて四時に漸く上海を解纜した、昨日まで平穩極りなかつた長江の流れも今日は濁流一入凄さを加へ、それに白波が立つて、崇明島を去つてからは天地全く暗黑これより四十時が間は昏睡の狀態に陷つて全く食はず、嘗て經驗せざる苦しみをしたのであつた。

今日科學萬能の叫びは既に亡んで科學も實在の一部分の性質を研究するものであると云ふ考が次第に廣がりつゝあるのであるが、顧みて氣象學上の進歩は幾何人知の發達となつたか知らないけれども、人命を救ひ、財寶を救ふに貢獻するところのあるのは事實屢證明せられてゐるところである、善美をつくした船は全く歐人の乘船を目的としてゐるもので、一等船客凡そ百名（内四十名は邦人觀光團）は歐米人が大部分である、二等船客僅かに四名三等に至つては十名許りで船の性質も知れる、三十幾時間が經過した時に一人の乘客が語る樣――私は大分の生れですけれど、あの方の人のする事の少さいのにはあきれて仕舞ふ、あの人達は國内同士の喧嘩で、大分の築港などゝ云つたところが吳淞の二十年計畫の突堤に比較したら、少さなものでさあ、一體日本人の仕事はやり方を誤つてる、とゝ四十年前の政府のやり方がも少ししつかりしてゐたらね、佛關西を御覽なさい、法租界などゝ獨專居留地を持つて稅金まであげてるではありませんか、海軍のコンミッション問題なんてそれよりも寰政府から澤山の金を貰つて邦人の發展を阻碍する方が餘程罪惡ではありませんか、第一次革命の時でも官革兩軍が機關銃をバチ〳〵打つてゐましたさ、けれども砲なんかは四十八時間すればどうしても一寸力がにぶる、その時には矢張人の力でなくては駄目だ、で某國人百十六名から成つてる拔刀隊がこの時出て來て將に突貫をやらうとした時に官軍の苦情が出て某國の領事がやつて來てこつそりとこの拔刀隊を退却さした時なざあ實際殘念で、支那人はいくら助力してやつても有難がる人間ではないんですから、あんな機會を捕へてしつかり利權を擴張しなけりや駄目ですよ、長江沿岸なんかまるで英國のものゝ樣ではありませんか、事なかれ主義の○○領事なんか到底御話になりませんなあ、でもこの種の活動はまだ〳〵止みますまい、現にこの二十八日からも少さくはあるがある掠奪の樣なことが廣東地方に行はれて、その中には百八十名程の某國人が居りますよ、實際香港や上海の外字新聞が寰政府の基礎漸く成らんとするとき地方の暴民を使役して亂をする某强國のやり方は憎みても餘りある等云つてゐますが、どれだけ遠慮したら彼等の御氣に召すのか、亞細亞のモンロー主義でも唱へなくては駄目ですね、――

上海のパレースホテル

話は轉じて非現世的な日本の宗教が邦人の活躍を阻止する最大原因であると罵倒し、切齒悲憤意氣當るべからざるものがあつた、彼や金時計金指環した好箇の紳士であつてこの言あり、海外に出でゝ目的を阻止せられたる所謂支那ゴロ輩の憤慨は察するに餘ある者があると思ふ、あゝ至るところの天地で演ぜられつゝある國權擴張の悲劇こそは積り積りして最後の一大活劇となることであらう、思ふてこゝに至れば支那海風波の上の船中、一刻も意を安くする事の出來ぬものがある、波の音切にして船の上下動に最早客も我も語るの勇なく聞くの勇なく、かくして四十時間の痛苦は漸くにして過ぎんとするのであつた。

（八）東洋の馬耳塞

敢てマルセイユの豪奢な流行を模倣せよと云ふのではないけれどもわが新殖民地の一角に位して歐亞交通の中心點をなす大連が、マルセイユ港の閑雅と壯麗とにあやかつて、彼が地中海の明

喉である如く、東亞商業の中軸であらんことは、國人の望んで止まぬとことろであらう、事實大連の餘裕ある市街は何處となくマルセイユの面影を備へてゐるとの事である、榊丸が上海大連の連絡の要職を承つて、多大の損失を顧みない事なども要するに大連を東洋の馬港たらしめんがための當路者の苦心に外ならないのである。

邦人の經營が歐米人のそれに比して非常の見劣りがするのは國情の然らしむるところとして止むを得ない事であるが、旅に出て十日、久しく異國の言語と景物に接してゐた自分達がこの地に初めて日本語中心の市街を見出したことはなづかしくも亦悦ばしい限りであつた、滿鐵經營のやまとホテル前の大廣場を中心として光線放射の形をなしてゐる街路には、露人の殘した電車も通じてゐれば二頭立の馬車も見られる、ロシヤ式の建築がその兩側に散在して見るからに立派な町である、やまとホテルは工費百萬圓を投じて建てた東洋第一のホテルで來る八月一日から新築の家に移轉開業すると云ふ、試みにエレベーターに乘つて三階の露臺から望むと大連の町が一望の中にある、あらゆる文明の器具を利用したこのホテルまでが國際關係の上から澤山の缺損を見越して建てられてゐるのである、滿鐵の本社を訪れて重役の久保地方局長から滿鐵の經營方針や沿道の教育行政の方針等について談話を聞き、參考になる刷物等を戴いた、日華兩國人の經營になつてる公學堂と云ふは專ら支那學生を養成する學校で在校生が三百人許り教師は多く日本人で、日本語を主として教授してゐる、この日は恰も休暇の第一日だつたのでまだ寄宿舍に居殘つた生徒たちを集めて唱歌を聞かせられて隣邦の學生が可憐にも君が代を初めいろ〳〵と日支の歌を高唱してゐる樣は內地では見られぬ光景であつた、この學校の校長はかつて臺灣の教員にたづさはり、轉じてこの地に來り、かくて既に久しく母國の土を踏まぬと云ふ熱誠と氣慨とに富む老齡の教育家で學生も非常に敬服してゐると云ふ、職員は悉く生徒と起臥を共にし、軒を連ねて住み專心教育に從事してゐるとの事である、生徒は二十五歳位から十二三歳までの男女で遠くは蒙古からも來てゐる者がある、

いはぎホテルと云ふのに宿ると折柄來連中の東京相撲の梅ヶ谷が泊つてゐるので宿は大騒ぎである、數多い滿鐵の經營事物の中で中央試驗所と云ふのは滿鐵が多數の多數の學者を聘して滿州工業の革命のために種々なる研究をさせてゐるところである、大豆柞蠶、石炭などは滿州の主要物產であるが、これ等が如何に利用され、また利用されんとしつゝあるかは試驗所を訪ねる者の驚くところである、虎公園の近くに第三小學校があつてこゝに日本の小兒を食つたと云ふ名物の虎の遺骸がある、夜景氣公園に遊んで園內の活動寫眞館迄が滿鐵の經營であると云ふのにおいた、凡そ大連以北鐵道附屬地の至るところの悉くが滿鐵の經營で一木一草の微に至る迄滿鐵の手を經ないものはないと聞いては、その總裁の權威の程も窺はれる、滿鐵要路の人々の行動が一波萬波となつて內地に傳へらた朝野の問題となることも親しくこの地を尋ねるものゝ首肯し得るところであらう、滿鐵の經營方針の如何によつては關東州の發展の盛衰ともなり、國民的活動の消長ともなるものがあるからである、滿鐵と都督府と各地の領事とが三頭政治をなして少なからず滿洲經營の發展を阻碍したこともあるそうであるが、今日では圓滿なる關係の下に一致して銳意國運發展のために盡してゐると云ふ、邦家のため慶賀の至りに堪えぬことである、この地方に於ける內地人は福岡縣人を最たるものとして長崎、廣島の人々も多いとの事である、わが廣島縣人が嘗つては中村是公總裁を縣人會長に仰いで、隨分と幅をきかしたものであつたそうであるが今は見る影もない、廣島高師出身の人々が大連その他の地に活動しつゝある事は嬉しい事の一つであつた。

滿山彝水、かのいたましい歷史を殘してから既に二十年の歲月である、タイムの流れと、忘却の苔とに流血の跡は昔ながらでないけれども、忘るべからざる一事は再度の戰役に幾十萬の精靈を失ひ、國力の殆どを盡した地である事である、方今中外多事の時に當つて、此處に先人活躍の跡を偲ばんとする我々の旅が徒事ならざるは明かである、あゝ空は昔のまゝに靑く、巖は昔のごとくけはしく、夏來れば高粱は昔のまゝに繁るけれども空しくなつた人々の跡は今弔ふに由ないのである。

(九) 旅順の戰跡

凡そ數多い近代の輕浮安價なる感激の中に、大將乃木夫妻の決心程われ等に深く切なる感激を與へたものはあるまい、顧みるに明治三十七年の春五月下旬に南山附近の激戰の果に南北二軍に半斷された敵の一團を旅順に包圍した乃木軍の武者振こそ、千古に花を咲く日本撫子の譽である、松樹山、二龍山、望臺、東鷄冠山陣笠山、爾靈山何れも忠と勇とに燃ゆる我が同胞最後の地たらざるはない、自分達が今日聖代の恩澤、これ等陣歿の戰士等の尊き犧牲によつて、かつて露人が砲や彈藥の運搬のために開いた三間幅の砲臺道を二頭立の馬車を馳つて山巔に急ぐと云ふのは、思へば惠深くも、亦濟まぬことであつた、常のわれ〳〵であるなればあえぎつゝでも山道を登つて、せめて彼の人々困苦の跡を察したいものであつたが、折柄來順中であつた鐵嶺守備の五十聯隊の將校團と共同動作をするために、かつは滯在の日數の短かいために、かくは心ならずも車をかりたのであつた、人も知る白玉山頭の表忠碑は、長く旅順の海陸に護國の鬼となつた將卒を萬世に記念せんとして我が國の官民が設け立てたものである、標高六百二十五尺、こゝに詣る者は塔上に登つて四方を瞰下し、同胞流血の跡を吊ふことが出來る、一望の中にある旅順の山や港灣迄が手にとる樣で流石に無比の要害の地である事を首肯かせる、表忠塔の傍に

納骨堂があつて、長く國の鎭めと仰がれてある、壹過ぐる頃記念官を訪れて、敵味方の別ちなく勇しい戰の跡を語る武器の數々を見た、記念館は元露人の將校集會所であつたのであるが、天井に落ちた彈痕は我が軍の發射したものだと聞いて一入記念の意義を深からしめるのであつた、この日は鴻業萬古に隱れなき明治大帝の御三年祭の日であるので、國旗が軒毎に飜つてゐるが中に、支那町の家々にも殘りなく旭日旗が揭揚せられて新附の民が忠誠を現して、早くも同胞化しつゝある事は、南船北馬、珍らしいものを數限りなく見巡る我々に殊の外なる思ひを湧かせて、大國民と云ふ類の感が殊に深く味はれた、かくて夕靄の次第に深くこの由緒深い古戰場の町を垂れ込める頃、白玉の嶮と、黃金の淵との間に起臥して、大陸雄飛の技術家を造る旅順工科學堂寄宿舍の客となつた。旅順の二日はわれ〳〵にいとも多大の感銘を與へるものがあつた、至るところの山水草木がこれ悉く忠と剛との外に何物もない我國古武士の表現である乃木將軍輩下の强者の戰つた跡であると云ふ念慮が基をなして溫厚玉の如き東鄕元帥の麾下の勇士が幾多の精靈と彈とを送つた地であることなどが連想されるからである、われ〳〵の欽仰おく能はざる將軍が三人ある、大將乃木兒玉と東鄕元帥がこれである、乃木、東鄕兩將軍の効績が旅順と共に長く忘られぬことは別として兒玉大將の偉勳が割に帷幕の中に隱れて人に知られぬ事は慨多い次第であるが、知る人ぞ知る我軍の畫策が殆んど大將の打算から出たものである事を思はゞ亦長く後世の模範である、兒玉大將は一面沈着剛毅の質あること大將乃木の如く、溫健着實多く現るゝを好まざる風は東鄕元帥に似たものがある、臺灣の治績と共に長く後昆に敎を殘す人と云ふべきであると思ふ。

今の東宮が親しく乃木大將の下に敎を受けさせられた事、今また東鄕總裁の御指導を受けさせ給ふことを恐察し奉るものは、次の世代の帝王が彌が上に君德の深かるべきも想倒して益々君國の前途の希望と光榮に滿つることを祝さぬ者はあるまい。

爾靈山は大將乃木が二〇三高地に與へられたる名稱である、實に海拔二百三突、旅順連峰中の最高山で黃勃二海を望むことの出來る第一の要嶮である、力戰幾ヶ月死傷彼我共に萬をつくし、乃木軍の精銳を最も多く失つた處である、友安旅團の勇戰の跡や、前面小高地海鼠山に二兒を國のために殺して足れりとしなかつた乃木大將の一子保典少尉の墳墓の地、記者が面語の緣あるところから、且は旅順方面唯一の將官の陣歿者である點からなつかしまれる山本信行少將の戰死の跡など、それに旅順聯隊副官の某中尉と、二〇三高地占領戰に加はつて中隊全滅の中に唯一人生き殘つたその時の特務曹長、今の鐵嶺聯隊の某中尉の物語とに躍る胸、沈む思ひに萬感をたぎらせたのであつた、かつて乃木夫人が親しく詣でられた忠魂碑の前で記念の撮影をして山を下つた、實に當時バルチック艦隊の來航が接近して、總司令部から八月十日迄に旅順を攻め取る樣にとの命令が一下してからの苦心焦慮、然も防備は意外に嚴であつて肉彈また肉彈不充分な攻擊力を以て惡戰苦鬪した我が軍の武勇、今にして思ふも猶悚然たらざるを得ない、敵味方の間に傳へ殘された多くの物語の中に敵ながら賞すべきはコンドラチエンコ將軍の勇猛と部下に對する慈愛で、戰線數里に亘る旅順の山々を一日必ず一度は巡視して部下の士卒を激勵した、されば部下の者も亦深く彼に悅服してゐたと云ふ、この一將軍が東鷄冠山に部下の將卒を勵しつゝあつた際我が流彈に當つて倒れてからは露軍の士氣頓に衰へ、遂に降を軍門に乞ふに至つたのだと云ふ、東西所はかはるけれども、いづれ變ちぬは國につくす武士の勇しい最後の物語である、

七月三十一日の午後一行は旅順工科學堂の學長室で民政長官であり且つ學堂長である白仁武氏から一席の講話を聞き、次で校內も隈なく參觀した、本館はロシアの海兵團の跡で旅順最大の建造物でこれが今の事務室、普通學敎室になつてゐる、各專門の敎室はこれに隣つて設けられてあるが隨分宏壯なもので內地の高等工業の比較にならぬ許りである、寄宿舍の餘裕ある事羨しい程であつた、殘り少ない時間を割いて一隊は水師營に馬車を驅つて乃木ステッセル兩將軍會見の跡を偲び、一隊はボートに乘つて港口に廣瀨中佐等の閉塞隊の跡を見に出かけた、旅順の灣は餘り廣からぬ、殊に陸上から流す土砂のために今灣內は見る影もなく淺くなつて軍艦の碇泊し得るのは港口附近に數隻を列べ得るのみである、警備艦の明石が唯一隻淋しく見られる外、陸上にも海上にも何等防備の設備がない、閉塞船を沈めた灣口は二十間許りの實に狹いところで海深は相當にあるけれども巧に沈めたならば一隻の船で閉塞し得るかと思はれる、廣瀨中佐の報國丸は餘りに深く港內に突入してゐるし、その他の船も多く充分に目的を達しなかつた風である、實際老鐵、黃金の二砲臺を兩岸に擁してゐれば、無事にこの間を突擊する事は難いであらう、然も忠勇な我が海軍が幾度もこれを企てゝやまなかつた大膽さは驚くの外はない、午後五時から旅順やまとホテルで廣島高師に緣故の深い杉森、永野の二敎授から招待を受けて懇談に時を過し、次で自分は工科學堂在學の廣島縣人諸君に誘はれて支那旅亭で支那料理の馳走になり、淡い月光を踏んで廣島のことなど語り、公園に涼を取り、九時頃から校友會委員諸君と光風閣と云ふに會して歡迎を受けて校友會の話などに時を移した、旅順は今日軍港としての設備がないだけに淋れるばかりで、露人の殘した宏壯な建築物にして風雨の破るゝがまゝに任してあるもの、雜草の茂つた空地などが多い、大連が滿鐵王國の首都として益々榮えんとするに對し、旅順は僅かに都督府直轄の地としてその保護を受けて命脈を保つてゐる、將來敎育事業でも盛んにするのでなければこの地の衰微はいよ〳〵甚

しい事であらう、清の肅親王が都督に保護せられて、靜かに風雲をながめてゐる、淋れ行く町と淋しい人、よい對照である。

（十）湯　崗　子

滿鐵の好意で遼陽泊の豫定を變更して、一驛手前の湯崗子で汽車を降りた、滿鐵の二等は內地の三等に連絡してゐて三等と云ふのは多く支那人の乘るものである、列車には馬賊の警戒に任ずるために數名の守備兵がゐる等內地の汽車と趣を異にするものがある、大連、奉天間は複軌複線で一日五回の客車の外は總べて貨物車で、內地の八噸積の貨車に對して四十噸積の貨車二十臺位の石炭列車が絕え間なく南下してゐる、これが冬になると大豆の輸送で倍加する、實際滿鐵の大きな費用は始どこの石炭と大豆輸送で出て來るのである、湯崗子は熊岳城と共に滿洲唯一の溫泉場でロシア人の時代から發見經營されたものである、自分達が宿についた時は既に黃昏の頃であつたが、大陸を吹く風も身に沁む樣に寒く、浴衣一枚では堪へられぬばかりであつた、摩天嶺、千山などが遠くに聳えて荒涼たる滿洲にこんな所があるかと思はれる、湧き出る溫泉は量も多く、萬病によいので、集り來る浴客數多いと云ふ、この日も十名許りの外人も來てゐたし、溫泉の外何もないこの地もかなり賑かであつた、千山は馬賊の根據地のあるところだそうで、時々遼陽附近に出沒して良民を苦めると云ふ、高粱が高く茂る頃には一度跡を晦したならば、亦捕へる事が出來ないと云ふ有樣である、溫泉は矢張滿鐵の保護を受けてゐるから設備の完全なことなど、滿洲に來り遊ぶものゝ一度は寄るべきところである、遼陽には數十分で行くことが出來る。

李鴻章の紀念像

われ〳〵の疲れた身體は、この一夜の入湯に醫せられて、夏知らずの勝地に幾日も〳〵ゐたい思ひがするのであつた。

因みに、この溫泉こそは八月十三日の早朝、馬賊の一隊が來襲し、豫め電話線を切斷して主人を脅迫し、五千圓ばかりの金品を掠奪したところである、今にして思ふと、この馬賊はかの千山あたりから來たものであらう、慘虐道を知らぬ馬賊の憎むべきは勿論であるが、それが取締を充分にすることの出來ない支那警察の不甲斐なさは憐んで餘りがあるのである。

（十一）遼　陽

白塔と云ふ五百尺もある塔を中心とした白塔公園附近一帶が日本の租借地なのであるが、この白塔は幾千年前のものらしく、周圍七十尺もある塔の內容が何であるか、構造が如何であるか、それすら不明らぬと云ふ滿洲第一の塔である、周圍は一面に佛像を刻んである例によつて滿鐵設立の小學校、公學堂などが近傍にある、私達は日本町から一里許りもある玉皇廟と云ふ高粱畑の中にある、ロシアの防禦陣地の跡まで行つて、遼陽小學校長から當時の戰爭談を聞かされた、遙の彼方には首山堡と云ふ小高い丘も見えてゐて第五師團の苦戰の跡であると聞えてゐる、この畑中の露人の防禦陣地と略同一の廣さの陣地が遼陽城の周圍數箇所にあつて、これは露人が戰爭前早くから買ひ取つて壕など掘つてゐたものであつたそうで、戰爭の結果當然日本の手に移る筈であつたのが、ちつとも知られなくつて その儘の支那人が畑として仕舞つてゐたのを近頃さる村人の喧嘩から一方のものがこの事を日本に申し出たので、この陣地の一箇だけは日本の手に歸したとの事である、私共の行つたところも殆ど支那人に蠶食されて僅に中央少し許りの地を餘すのみだつたが、これも來年になれば全部高粱が植えられるだらうとの話であつた、この邊一帶皆伏屍縱橫の跡などである、遼陽の町では孔子廟や遼陽縣師範學校を觀た、遼陽に露人が三人商人だと云つて居住してゐるそうであるが、この三人が常に人が變る事から見ると商人でもないらしいのであるが、その一人が日本人が租借地と支那の領分との境に石で境界線を建てたのを見て笑つて云ふ樣、日本が弱い國であればとにかく、强國である限りは木で境界標を建てゝ、その木が朽れば一歩を進めて新らしいのを建てる樣にしなくてはと云つたそうである、スラブ人の侵略思想を以て日本人の人心を忖度したものと云ふべもである、遼陽古戰場の物語と共に珍しい戰友道の話などを小學校長から聞かされて奉天に向つて立つたのが午後六時であつた。

（十二）奉天一夕話

奉天は愛親覺羅氏發祥の地であればこゝを訪るゝものゝ何人をも近頃のロマンスである清朝の末路を思はぬ者はない、げにや二百年の社稷が一度累卵の危きに陷つては萬里の長堤が相次いで決する如く、ひとたまりもなく崩潰して、昨日萬乘の尊きも今日は訪る人もないばかりに淺間しい境遇となり果てゝ、あれだけの大國を以て一人の鄭成功のない事を思ふ者は一國を治むる者風教のゆるかせにすべからざるを想到するのである、二百年の宗社の跡が僅かに奉天の一角に面影を殘して骨肉相別れ、肅親王は旅順に

慶親王は青島にと東西思ふがまゝなるわび住居は亦自然の數であらう、許されて奉天舊王宮を拜觀したが飛龍閣、翔鳳閣を左右に控へ、崇政殿、鳳凰閣、清寧宮の三宮殿が前後に並んでゐる、崇政、鳳凰の二宮は政を見るところで、清寧宮は寢殿である、黄や赤の瓦は美々しいが規模の少さい事、此處で四百餘州の政治が見られるものであらうかと思はれる許りで、一樹一石の布置もなく、寢殿と云ふも溫突造りの狹い建物に過がない、三千の美姫が居たかと思はれる女官の部屋は九尺二間の長屋建である、されば太宗文光帝が夙に奉天の王城の地でないのを見て執政の始め四城を定めんには都を北京に改むるの要があるとしたのである、鳳凰閣で雨に會ふて一時間餘をこゝで雨宿りをした、猥に人の入るを許さぬこの宮も、荒廢の風を免かれる事が出來なくてか、塵深く會心の歌もなき鳳凰閣の雨宿りであつた、守衛の男はよく語つて京都大學の内藤湖南博士の事などを尋ねてゐた、博士は年一度凡そ三十日位をこの地で過されるとの事であつた、雨上りを待つて奉天城内の町を見物した、南京などよりも比較的に清潔であるが、道路の泥濘には閉口して早速馬車鐵道の厄介になつた、ての馬車鐵道は大倉組と支那人との共同事業で新市街――日本人町の停車場から城内に通ずるものである、夜大星ホテルに入つた。

停車場に着くものは先づ前面の宏壯な建築に驚く、殊にそれがわれ〳〵の場合の樣に夜であつたならば輝く燈影に全く洋風の市街に入つた心地がする、然しそれは停車場前の一少部で、間口六十間に餘る三層の煉瓦造りの建築はこれ滿鐵が新市街の入口を飾るためと、他の必要のためとに設けて今邦人に賃貸しをしてゐるものである、この建築は一箇聯隊以上の兵を宿營さすことの出來るもので、滿鐵が奉天に力を注いてゐる所以も知られる、滿洲最大の都會であれば、汽車の昇降客も多く奉天驛一日の收入が二萬圓にものぼると云ふ、奉天名所の隨一である清の北陵に至るのにはこの所から凡そ一里半も高粱の間を縫はねばならぬ、北陵は清の高祖太祖を埋めた所で、地域の大、風景の妙、滿洲に見ることは出來ぬ、陵域は悉く幾百年の松を以てうずまり、朱殿碧樓が奥深いところにある、その陵域の入口に下馬標がある、漢蒙滿藏の四國語で刻んであるのを見ても、清朝の盛んなりし樣が想像される戰線幾千里に亘つた奉天戰の一部がこの北陵附近で行はれたそうで、こゝでも某聯隊の臨地講話があつたので趣味深い戰爭談を聞くことが出來た、林間の涼しい所で四方山の話に耽つてこゝを辭した、奉天の在留邦人が一萬人、教育の施設以外諸般の事が着々と進行して、帝國北邊の守りの遺憾なきを見て直ちに意を安ふする事は出來ぬ、北强國の戰備をさ〳〵怠りなきを思ふては國の守りの高價なるに驚くのである、滿洲の人士が朝鮮の二箇師團增設を既定の事實として、有事の日兵を奉天に集中すれば大局は定るとしてゐるのは治に居て亂を忘れず、二國間の兵力の均整が愈兩國の和親を益進する近代の國際關係から割出したものと云ふべきである、民力の休養と軍備の擴張と兩々相待つた積極的消極の政策を遂行するストリピンがあるなければ帝國の前途は氣遣しい次第である、幸に一代の大宰相大隈伯の出づるあつて這般の政策の宜しきを得るものがあつたなれば國民の光福此上ない事である。

（十三）牡丹臺より

鐵路三百哩、私達は夢の中に朝鮮半島に這入つてゐるのでした長い旅路のとり〳〵に飽いて、鄕愁の念が漸く切なる時、今一度私達のゆるんだ心を引緊めて上下三千年長い歴史的關係のあるこの半島を見よやと云ふ念慮は湧き出たのである。

新義州で新らしく切符を買つて佐藤將軍によつて殊に廣島の人に緣の深い平壤に着いたのは午後の一時であつた、鴨綠江の水はその名に似ず黄濁の色が深かつた、朝鮮は今や雨季に入つてゐるのである鴨綠江は今や日本で最長の河となつてゐて、石狩、信濃よりも三四十里長いと云ふ、雨のはれろのを待つて平壤の古戰場を訪れた、乙密臺、牡丹臺、玄武門などゝ今は二十年二昔前の事であるが戰跡保存の道が講ぜられてあるから、この附近に至ればそゞろに當時を追懐するのである、實に我帝國が世界の舞臺に出る最初のカーテンを開いたところで、萬感の催し來るものがある牡丹臺の北方はまた日露の役最初の斥候衝突のあつたところであると聞いた、牡丹臺は箕子陵の附近にあつて成程要害の地をなしてゐる、箕子陵は箕子朝鮮の開祖の陵のあるところ、松繁り眺望に富む、附近に浮碧樓の勝地がある、大同江に臨んでゐる小樓である、大同の流れ夜々つきず練光亭と云ふは我が征韓の昔小西行長の一將が平壤名物の妓生と共に身を投げたところで、つきせぬ浮名を大同江の流れにながしてゐる、秋來れば年々祭が催されて妓生等が參詣すると云ふ、今は妓生の神なのである、平壤は朝鮮第二の都會であるから教育も盛んで、耶蘇教徒なども澤山入り込んで大學までも設けてゐる、これ等外人の教育が新附の民の愛國思想を毒しなければ幸である、政府の建てた學校に高等普通と女子高等普通の二校があつて高等普通教育を授けてゐる、普通學校なる名稱は實に幣原博士が朝鮮在職中に初めて附せられた名稱である、平壤高等普通學校長から教育の沿革や學制談をきゝ同校生徒と會談した、彼等はよく語つて内地人と同じ樣に國語を語つた女子高等普通の方の生徒でもそうであるが生徒は既婚者が多い、これは未婚者をいやしむと云ふこの國の風から來てゐるので止むを得ぬ事であるが、早婚が矯められて十二三歳で結婚するものはなくなつたと云ふ。

（十四）倭城臺にて

旅もはや終結に近づかうとしてゐる、明日は釜山を解纜して故鄕の土を踏むことが出來る、思へば南船北馬二十日、長途の旅行に減氣もしなかつた事は誠に幸福の極みである。

五日夜京城倭城臺下の原金ホテルに行李を下して限なく市内を見物し、舊王國の主都を知ることが出來た、總督府の施設は露人の基礎をなして置いた滿洲の施設に比較して遙に規摸の少なるものあるは止むを得ぬとして、半島の經營が内地新聞の攻擊などの間に着々進捗しつゝあるのはうれしかつた、自分は妄に悲憤慷慨することは兎に角、爲政者の經營を盡く謳歌しない事は新聞紙の任務として重要なる事であると思つた、何となれば非難攻擊の間に進歩があるからである、内地人が澤山入込まなかつた頃は雷鳴を聞く事が殆どなかつたと云ふ、それが今や盛んに聞かれ氣候が非常に内地化したと云ふ、云はゞ人力が天然までも支配したのは山に樹を栽え、溝を作つた事などによるのであらうか、これと共に鮮人が次第に内地化する、倭城臺の麓に總督府があつて京城全市を瞰してゐる、朝鮮産業の進歩が如何に夥しいかは總督府の物品陳列所を見たものゝ驚くところであり、舊李王家の勞力の盛んであつた事は慶福宮、昌德宮などを見ればわかる、德壽宮の一部には立派な博物館が設けられてあり慶福宮の一部は司政十年記念の博覽會場とならんとしつゝある、許しを得て秘園迄も見たが、その景幽邃で老樹の間巧に亭や水を配置し閑雅で世を知らぬ趣がある、南山に登つて全市を見ると市が次第に南の方龍山に膨脹しつゝあるのがわかる、鮮人二十萬、邦人五萬この地に住んで邦人の市街は大厦高樓軒をならべ眞に首都の趣がある、十年二十年の後の朝鮮を見て今日を顧る者は益々この新附の同胞の幸福を思ふに違ひない、一世の政治家伊藤公が馬車を走らして南大門下を往來した頃はそれでも未だ鄙びた不潔な都邑であつたに違ひない、鷄林十三道の山河今盡く治つて半島開發の重任は益々重きを加へ行くのである。

（十五）釜山埠頭

釜山埠頭に立つて釜山の今昔を忍ぶことも感慨の深いことである、明治九年以來の開港場として由緒の深い地なのである、七日午前七時卒業生の人に迎へられてこの地に入り、釜山中學校長から趣味ある朝鮮の地理談を聞いた、これで朝鮮の總括をすませたわけである同校長は文學士陸軍中尉であるが朝鮮有數の地理通で總督府の命を受け間斷なく旅行をしてゐる由である、同氏作製の地圖が最新最密のものである由である、釜山港は天然の良港で、夙に邦人の來り訪るものゝ多い由、この地唯一の公園たる龍東山には舊幕時代邦人の建立した金刀比羅神社がある、同山を師る松はわが對州侯の植えたものである、二萬の同胞と三萬の新附の民が住んでゐる、中學、高等女學校、鮮人のために商業學校もある、

日將にのぼらんとし釜山埠頭の夕は遊子に多大の感興を催さすのである、大陸を去らんとして殊に帝國の位置なども思ひ浮んで私達は新羅丸に乘込んだのであつた。教育者の任務が今更の樣にわが胸をつく。

第四　旅行日誌（其の貳）

七月十九日

解纜　午後宇品大石回漕店の涼しい風の吹き入る二階には、革鞄、手提、水筒、異樣の日覆のついた麥稈帽子等が混然と積み重ねられた。甲斐甲斐しい旅裝の十二名の一行と、見送り下さつた長屋、赤木、深田、堀、塚原の諸先生、及び寄宿舍に殘れる朋友とで餘す椅子も無い。到る處で話柄はいつも目的地の南清に馳せる。百二十度の苦熱、無警察の上海、烈しい波浪など物恐ろしい感と、水天髣髴たる玄海の船の旅、驪背にきく寒山寺の晩鐘などの湧き立つ想ひとは、初めて異國の天に向ふ人の心に、脚下に、碎ける波の樣に、寄せては返しかへしてはまた打ち寄せる。

六百噸の天龍川丸は長い汽笛と共に纜を解いた。上甲板に雄々しく立たれた金子先生と、十一名の旅行隊は、夢中に帽を振つた。

上海の南京道路

『まだ振ッてる樣だ振れ振れ』

と双眼鏡に見入つて居た玉さんが叫ぶと、又一しきり帽子を振る。そして長く引き延べられた愛着の羈も千年斧斤の跡をとめぬ向宇品の樟の老樹に絶ちきられた。かくて快よい瀨戸内の航海は始まる。

推進機の輕い顫動は張りのある喜をそゝり、舳に碎ける白波は俗塵に汚れた耳を洗ふ。長風いつも甲板に流れて、呑氣な話柄に鳥を迎へ鳥を送りて、何時の間にか赤い鳥居が水に寫る宮島についた。大坂商船の新造棧橋には、我が水泳部の人々が迎へて呉れた。今日の七哩の遠泳に眞黒く焦げた顏と、眞白い浴衣とは、美しい對照を示した。

一時間の碇泊の後纜を解く。二三の友は船が大元の社を過ぐる迄も手拭を振つて呉れた。矢張り凡ての悲は別離から生れ凡ての喜は會合から始まると染々感じた。一週棧橋の上にも手巾が靡り帽が舞ふた。人を見送るにも見送られるにも船は趣が多いと思ふ。

間海水と親むだ名殘の宮島の影が、刻々夕靄にかすれゆく時、遠征の人の心は無限の悲愁と寂寥とに蔽はれた。

岸國の淋しい港に、長い汽笛を吹いて船が進むだ時に、一日照りつけた眞夏の太陽は、最後の光を、靜かな內海の波と、眞白い白帆と、そして甲板に立つ吾々の顏とに拋げて凡てのものを眞赤く染め出すのであつた。

『中國の山は不思議な格好だね』

とさも發見でもした樣な顏でKさんはそつと私の肩をたゝく。たつた今落ちた許りの夕陽の名殘は、又蘇るのか。夕映美しう湧き立つ西の空を眞赤く染めて、其の末に大きな刷毛でぼかした樣な橙色の北の空に續いて、中國山脈の頂が不規則な鋸の齒の樣に、濃藍に黑く刻み立つて居る。

『あの島は四五年前までは大きうがんしたがの軍艦の大砲の的になるのであんなに小さくなりました』

と襯衣一つになつたボーイさんが指す彼方には指の先きに隱れる樣な小島が浮むで居る。姫子島と優しい本名をきかされて何だかいたいけな氣持になつた。

沖合の仄暗い間から、軍艦平戸が、この小さい犧牲な苛責んとてか、白波を蹴たてゝ進み來る。

久賀の邊では天に聲なく、海に聲なく、唯太白ばかりが長く光を海に拋げて流星の光芒一ッ又二ッ、長く空に尾を曳いては夢の樣に消えてゆく。

上甲板の人の影に隱れて仕舞つた、定めし船室の靜かな眠についてしまつたのであらう。只眞白い裕衣で、夕闇にほんのりと染め出された我々十一名の姿のみが可笑う動くばかり、螺鈿の樣な空に大きな星が先路を導く。艙の退から「雲耶山耶」の詩が綏う流れるといつの間にやら高音低音のコーラスとなる。謠曲が出る、唱歌が出る、そして快よい旅の第一夜は刻々に更けてゆくのである。

三等の船室に、流るゝ汗を拭ひつゝ「住めば都だ」と痩我慢を張つて雜魚寢に横はつた。重い機關の顫動と『七一六〇』などと荷物を數へる船員の聲とが、夢の上の苦しい夢にぼんやりした刺繍をする許りであつた。

七月二十日

門司へ

『門司に着きますから洗面して下さい』

と昨夜菓子を賣りつけた氣のよいボーイさんに呼び起された、內海の一夜は名殘なく明けて、舷に碎ける水の音が夢の跡を洗ひさる、水平線からこみあげた練絹の樣な雲が水と空とを暈して居る邊には艷をすり消した朱盆の樣な朝日が浮ぶ。コバルトに染つた九州の山々が刻々に金色の光を帶びて軸の燈臺の窓硝子に金色の光を反照する。夢の樣に白帆が過ぎる。汽笛が響く。早朝の激流は愈々急となつて右手を遙かに關の町が見え初める。

午前七時門司大坂商船波止場に上陸して古賀文旅館に朝食をすませ、稅關の門を入る、何となく嬉しい經驗でした。鞄の上に白墨で怪しい印をつけられた。「何だ馬鹿〳〵しい」と互に顏見合せて微笑する。十時半郵船會社から特に遣せられたランチに乘り移へて關門海峽に中央に山の樣に碇泊して居る伊豫丸に乘り移る。あの軸には印度洋の巨浪を破るのであらう、あの檣にはアフリカの熱風が吹きつけるのであらう。私は此時船に對する莊嚴の念を起さずには居られなかつたのである。

伊豫丸の乘客

又も三等室の仄暗い何となく船の臭氣の烈しく立ち迷ふ室に入る。『又地獄か』とこぼせば『三等の內で此處が一番よい所です』と新嘉坡にゴム栽培にゆくと云ふ五十男が云ふのを聞いて愚痴もこぼされなかつた。船客の姿が先づ目につく。舳は一等室で、腕を組むだ若夫婦が甲板上に散歩して居る西洋人が見える。艙には二等室の籐椅子がならべられて、讀書に耽つて居る法學士も居る。獨逸に留學する人だと云ふ。そして其の中央部の高い帆柱の下に蠢いて出るのが三等船客である。香港や上海で下りると云ふ支那の留學生の一行が居る。一旗あげずに死すとも歸らぬと誓ツて故郷を出た新嘉坡ゆきの青年が居る。アントワープにゆくと云ふ十四五位の四人連の男の兒が居る。きけば輕業師だと云ふ。是等色々な人の色々な想と希望と運命とを乘せて六千噸の歐洲通ひの伊豫丸は風も波も知らない樣に輕く錨を卷いた。私等は特別に船長の待遇によつて二等の上甲板に上ることを許された。

嚴流島が吸ひつけられる樣に近寄り、彥島が反撥せられる樣に遠のいて關門の色は推進機の一廻轉毎に藍色に變りゆく。九州の海邊には白い砂と青い松原が見え、中國の赤禿山の影は消えて蔚然と茂た小島が送つては迎へる。同じ時に關門を出帆した大連通ひの臺中丸が殘した白波の跡をつけて進むでゆく。もう鳥も通はぬ玄海に出たらしい。長い迂曲のはてしもない波が、沖合から押し寄せて舳に碎けて白い泡が殘る。オゾンに富むだ海氣は灰色の汚穢ない甲板上の日覆を羽ばたかせて潮の香を船底の三等室までも吹き込むで來る。

落陽の玄海

船長の好意で二等甲板に上る事を許されたが、同じ要求を支那留學生に拒絕した權衡上是非共洋服着用とのことには少なからぬ不便を感じた。それで昨夜の樣に白い裕衣一枚で夕風に微吟の快を擅にすることは出來なかつた。それにしても萬里の長風が頭上を吹過ぎてゆく三等甲板の蒸暑さには絕えきれずにともすれば二等甲板に出でゝ海洋の美を心ゆくまでも眺め入る。

船尾から長く引いた糸の尖から知れる計速器の針が百十を指した頃に赤い太洋の夕陽はまたも落ちやうとする。北水平線上の薄

藍に、冲の島が見え南の方に小呂島が綠に見える。藍と綠とを飛び越したセピアの樣な色に西の方に横はるのが壹岐島で、夕陽が又蘇生する樣な眞赤な夕映に岸の絶壁、それに押し寄する白波等が三稜鏡附の望遠鏡に映り來る（此れは四の宮先生から宮島で借り受けたもの）對州は切れ切れた波上に浮むで夫れ以外には眼を遮るものはない。海の面から簇り上つた灰色の雲の裡に人知れず大墾の臨終の樣に莊嚴に大洋の陽は沈むでゆく。水面に近づくと波も雲も一色に爛れて我身迄でもその内に入るかと疑はれた。かくして船上の第二日は暮れたのである。

對州を過ぎてから暗い大洋の内には伊豫丸の黑い影が長く空に消えてゆく外に空と水ばかりである。

面白う語る支那留學生

東京に留學して居る支邦留學生は案外面白く話す。剩々故郷に近寄る喜はその眉宇にも足取り も伺はれる。會話も自ら活きて來る。

御互に書生同志徒然なるまゝに、高い欄干によつて語る、全部で二十名許り　農科の二年と云ふのもある。一高の生徒もある。基督教の學校に入學して人と云ふ人もある。何れも晴な今年の新柄裕衣を肩に動かして居る。意氣に葉卷を吹いて居る所は、如何に見ても、反物を背中に擔いで商ひに來る支那人と同人種とは受けとれなかつたのである。若い同志には若い話が持ち上る。

『奥樣への御土產は何ですか？』

と夕闇の空に只白い洗濯物が靡る下で粹なMさんが尋ねると、

『ただこの心ばかり』

と微笑して胸のあたりを輕く打つ、かくて楊子江を上つて長沙の都に向ひ、白い手を延べて待つ若い妻の所に歸る青年の夢は、波に荒れても風は吹いても永久に穩であらう。晴やかであらう。

——船底に横はりて稿——

七月二十一日

『明日の朝は濟州島が見えますよ』

と、只一日の航海で泡沫の飛び散る舳で靜かに語つて懇意になつた船員からきかされたので、我帝國の最後の影を拜まうと少々早く甲板に出た。

大洋の曙色

藍と言はむよりはセピアの色の水は無限の深遠と偉大な威力とを示し舳に碎ける波は白泡をなして流れてゆき、果しもない大海の内に只一筋の迹を止めるばかり。もう濟州島を過ぎてから數十哩を就して居るのであつた。

今朝も亦水平線は夢霧として紅の色が漲ると思ふと、いつかは三竿の上にあがつて居た。つひに壯大な大洋の旭の影を見る事が出來ないのであつた。

昨日見た豪中丸の影も見ねねば白帆はもとより鷗の影さへも見えない。此所に迷ふ鳥は狂氣でとぶのでなければ小さい翼には餘りに廣すぎるのである。只黑い海と白い波が行方に無限に擴がりゆくばかりで、泡交りの海風は長へに吹いてカラモもカリスもいつの間にか萎れ果てる。

人を威嚇する樣な機關の響と舷をかむ白波の音とは次第〳〵に雲間に流れゆき、はき出す煤煙と相抱いで無限、無限。確かに一時間拾數哩位で航して居るとは知りながら西も東も南も北も一點の眼を遮るものとて無い大海の内ではいつまでも全じ所に止つて居る樣で、六三一九噸の大船も只一粟の樣に只波に戲弄せられて、今更の樣に自然の大威力と果かない人の力とを感じた。

白が西に傾く頃から帆綱に唸る音が物凄ふ甲板上は水面から二丈幾尺とあるに泡の樣な波が飛び越す。一等の甲板上には若い英國人の夫婦が例の樣に腕を組むで散歩を初めた。

『荒れ出したら毛唐はいつもあんなにして歩くのです』

と例のボーイさんが笑つて語る。二等船客で船暈に苦しむ婦人の看護をして居る人の影が見えた、三等船室の穴の樣な處でも朝から一回も甲板の涼しい風にあたらない人もある。私等の二階（三尺許り上無論立つことは出來ない樣に窮屈である）に居た新嘉坡ゆきの婦人は終日ハンモックから起きなかつた。只元氣なのは馬來人の洋妾（ラシヤメン）で異樣な模樣を織つた腰卷一つになつた唇の黑い馬來人と流暢な馬來語で語る。そして少しも恥る所もない振舞なのには嫌な氣持になつた、多分馬來の酋長でもあるらしい西國の女は南洋を慕ふ。一島の女王となつて榮華を盡して居るものもあると云ふ。矢張りこんな女性だらうとしげしげと見守ると世界を股にかける氣象はその眼元にもよまれる。

支那街の喫茶店

戀しい船影

夕陽落ちた後初めて水平線上に黑煙の立ち昇るを見た。然しそれが何國の船とも見つからずにまた水平線に隱れた。今日一日只眼に入つたものはこ

ればかりであつた。夕餐の鐘はなつたが今日船中で洋食を食ふ事になつて居たのがボーイの間違でそれも出來ず、止むなく大多數の團員は夕食をしなかつた。夕餐後は一等室の方では面白い洋琴の音色が響く、そして月なき空に物凄ふ流星が飛ぶ、泡沫に洋服を濕しながらに二丈餘りも立ち碎ける白波を心ゆくばかり覗いた。

船中の湯漕に入つて一搖毎に湯がこぼれるのを心から見るときに涼しげな聲が死した樣な船室から洩れる。觀世流の謠『蟬丸』らしい私等は遂に釣り込まれて人の騷の靜まる頃まで事務室で唸るをきかされた。矢張り此聲は龍動の埠頭でも同じやうに響くだらう。

――七月卅日楊子江を上る時稿――

七月廿二日

昨夜の嵐は全く風きた、夢ともなく現ともない境にぼんやりとしてと空氣枕から頭を擡げる勇氣もない時に、

『船が見える、帆掛船が見える』

と中甲板からけたたましくGさんが叫ぶ終日一隻の帆影をも見出さなかつた水の旅人には此上もない嬉しい福音である。オゾーンに富むだ海氣を腹の底まで吸ひ込むではペンキ臭い船室の毒氣を洗つた樣な氣持で、快く小手をかざす。彼方波の間にはちら〳〵と小舟が波に漾ふを見た。たよりない小舟でこんな沖合に出て居る大膽さに舌を卷いた。然しそのなつかしい帆影よりも驚いたのは、

黃い海水の色

であつた。昨夜眠る時にGさんと甲板の上から覗いた水は電燈の光に眞黑であつたが今朝はもう薄濁つて居た。黃海の門に入つたのであらう。小船には赤色の帆が掛けられ銅色に染た漁夫が、澁色のはだに形ばかりの腰卷樣のものを經ふて、長い櫓を押して居る。其の船の型が恰度『元寇』の繪卷物に見るその儘で忘れがたい印象を、新しい支那と云ふ觀念の門に際つて鮮かに刻みつけた。

今年高工を卒業して故郷に歸ると云ふ長沙生れの丈の高い支那の留學生は甲板に飛び上つて嬉然と指す。

『あすこが浙江省、此方が崇明島です』

指す彼方は雲耶山耶の境に蘇枋色の一線が見える。夏草の堤であらう。其前に一列に長く延いた漁船が、双眼鏡のレンズから浮き上つて來る。

『あれは楊子江名產の子魚をとる船ですよ』

と態々「子魚」と手帳の端に書いて呉れた。我等が船は既に世界の大河揚子江の河口を上つて居るのである。然しそれが河と知るまでには容易でなかつた。

海の樣な楊子江

河口十四浬の大河を、干潮になれば五尺の借ボートさへ動きを失ふ太田川を見なれた人々如何にして河と信じられやうか。兩岸は望遠鏡裏にかすかに色を見する許りである。河水は今朝驚いた時よりも一層に濃厚な赤水で、私には支那の大地を洗ひ盡す洪水が出るのではないかと疑はれた。

例の戎克（支那式の船）はコルクの栓の樣に吸ひつけられては直ちに振り放たれる。生ぬるい大陸の風は生溫い人の汗を吸ひ出す恰度密閉された室の國にでも入る樣な氣がして額となく腕となくにじみ出て來る。初めて一千里の長江、揚子江に入つた樣な氣持がするのであつた。

パイロット

今迄全速力で進行して居る本船が急に機關の響が止つたと思ふと水先案內の小蒸汽がつく。白服の西洋人が繩梯子から上つて來た。

又船が進み出す、今迄競爭する樣に並行して來た郵便會社の山城丸が急に遲れて本船の跡を踏みつゝ上り來る、二時間許り航江の後に船は

黃浦江

に入る。川幅が急に狹くなると共に兩岸の景色は手にとる樣に見えそめた。岸には靑い高粱が風に靡いて、黑い牛が長閑な景色に草を食んで居る。靑虫の周圍に集つた蟻の樣に戎克が寄り合つて澁色の支那水夫が忙しさうに立ち働いて居る所には、沈沒した汽船の帆柱が見える。甲板を掃除して居た水夫にきくと數週間前に英國汽船と衝突して沈むだ北勢丸の引上げをして居るのである。

『毛唐は口錢でやつてのけるからね此度も北勢丸は上海の裁判所で負けて沈沒損となつた』

と日本人が外國に於ける活動を眼前に見せつけられて、其の腑甲斐なさを拳を固めて慨嘆せずには居られなかつた。

織るが樣な船舶

米國の軍艦が流る樣にゆき違ふ。英國旗を揭げた一萬噸近い山の樣な赤塗の船が四邊を威壓して降る。「昌圖」――號」とか金文字に舷に書き拔いた支那の汽船が上る。小さいランチが其の間を巧に横ぎる。

兩岸には急に赤煉瓦や黑煉瓦の家が現はれ初めた。見渡す限り目を遮るものとでもない、平野の內に黑い煤煙が立ちこめて居る西都樣準府だと氣がついて楊子江を入るときに一時間遲らした私の時計が、十二時を少し廻つた時に、船は日本郵船會社の大きな建築の前に錨を投げた。暫時して又推進機の響をきくと船は方向を變へて少し動いた樣たが出發の用意をして居た私にはそれを解することが出來なかつた。二度目に投錨した處は

上海埠頭

有名な

稅關波止場

であつた。

陸から磯い支那の商人が例の戎克で漕きつける。色褪せた淺黃の服を挨拶までに肩から掛けて、大きな頭陀袋に、煙草や、藥類、小間物類、さては名物の瓜類などを押し込むで、異樣な聲で甲板

に上つく來ては底氣味の惡い笑をして押しつける、間もなく私等は人波に押されて稅關波止場に上陸して（小蒸汽船で）喧しい苦力の聲。それは何等の意味の不明な聲が耳を聾する。何も意味の解らないこんな多くの聲をきいた事のない私には他國、海を越えて來た外國、と云ふ感が一層深くなつた。

巨人

波止場の正面には出發前校長から承ツた巨人を見た。六尺二三寸位は確かにある大男が、黑光りする皮膚と、顏の下半は眞黑い鬚頭には赤や白や藍やの布即ちヅボンを可笑しな恰好に卷いて長い劍と、そして手頃の棍棒とを提げて辻々に仁王立に立つて居る。これは英國租界に用ひた印度人の巡査で、印度でも體格偉大なものを選ぶとのことであるが、確かに上海の飾である。大國の氣分を第一に見せつけられる。私等がカストムハウスの前で荷物を運ばせるために俥を呼むだ。護謨輪の俥の棍棒握つてスワと云へば應と答へて駈けつける準備をして居る車夫の四五人が殆同時に駈つけた。爭が始まる。巨人の巡査は此時役に立つ。恐ろしい形相で鐵の樣な腕を振り上げて何とも言はずになぐりつけた。

亡國の印度人が、老大未だ眠醒めない支那人をなぐりつけて居る。それを笑つて自働車の上から、ローマ時代の鬪牛の技でも見て居る樣にゆき過ぎる西洋人を見ては侮辱された東洋人、そして私等も其一人であると思へば、思はず慷慨の拳を握るのであつた。

一行の宿に當てられた東亞洋行から迎ひに來た白服の店員に導かれて英租界に入る。

屈辱された支那

と云ふ感が何よりも先に心を刻る、我等が導かれてゆく處には支那式家屋を一軒も見受くることの出來ないのには痛ましい感がした。

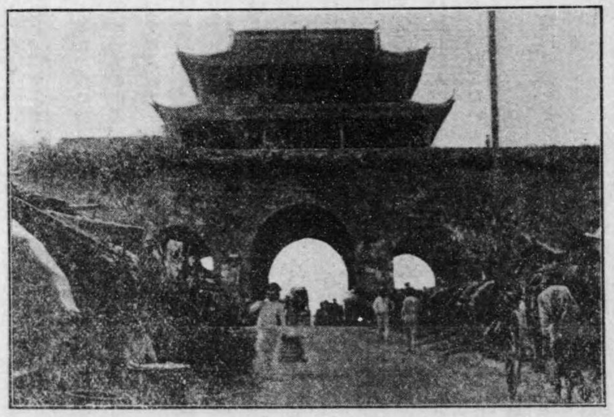
石を鋪きつめた大道には電車が二臺接續して走る。前のものは頭等次は「大衆可座」と書いた二等車である。頭等には軟かい席が綺麗に作られて廣い其の内には鼻の高い傲慢氣に見ゆる西洋人が見える、二等車には粗末な板の腰掛がある、内にはズボンだけつけて上は余くの素裸の支那人と其間には日本人らしい姿も見受けた。一等室と二等室との間には車掌でなければ開ける事の出來ない鍵がある。異臭のある支那人とは絶對に席を同じうしない爲めであると。

其の兩側は人道となつて矢張り石で鋪きつめてある。十數層と聳え立つた煉瓦造の家、それは活動寫眞と、油繪とより外に見た事のない田舍者には目眩せざるを得なかつた。腰から上には赤膚を出して居る支那車屋は「ヱーハ〳〵」と呼び駈けてゆく。後から塵と人と俥とを駈けたてゝ物凄く唸りゆく自働車の上で新聞讀みつゝゆくのが西洋人である。

又廣い上海で最も風通しのよい景色のすぐれた公園は外國人の公園となつて例ひ大總統でも決して門戸に立つて居る例の印度人が入ることを許さないと云ふ事である。そして哀れにも橋の上にヵタ〳〵と集て涼を納れて居る支那人を見ると悲しい亡國の繪を見る樣で屈辱せられた國民の無氣慨に就て慷慨せざるを得なかつた。

東亞洋行は鐵馬路にあつて往にし韓國内亂の折に亡命した「金玉均」が此處の二階で哀れな最後を遂げた處で日本人として思出多い由緒のある旅館である。今は大坂の人の經營になつて居る。三層樓上から覗く上海の街は實に異臭むら〳〵と立ち上る汚ない支那人の群である。

夕食後日本領事館で英字新聞記者から支那の英語に就ての一時間の講演をきいて後我校の卒業生で目下日本小學校長なる井手氏に導かれて上海の夜景を見た。



南京城門鼓樓

川を前に控へたゼネラル公園には支那人の片影も認める事が出來ない。吹き來る夕風に洩れ來る音樂堂の曲にきゝとれて楓の下に休ふのは西洋人若くば日本人で、多く並べられた腰掛には空脚は一脚もない。パレースホテルは嚴然と聳えて上海の門口に凡てのものゝ目を奪つて屹立して居る。

最も繁華な英租界を通りてかへる眞晝は百二十度とは云へど夜は涼しくいつも涼風窓から吹き入れて來る。美しい氣分になつて窓から眺やかな上海を見下して認める。

——二十三日東亞洋行にて——

八月二十三日

「大衆可座」と書いた黃色の三等列車に遽しく乘つたのは柏楊樹の並木に汗を搾る夏蟬の聲喧しい八時であつた。

第一に外人經營の公學校を參觀した。煉瓦造りの巍然たる校舍はこれが小學校かと眼を驚かす許り。然し恰も休暇中で授業の參觀は出來なかつた。

次に日本人倶樂部に案内された、瀟洒な日本室が此の煉瓦造の中にも準備せられてあるのはうれしかつた。内には劇場もある客間もある、一寸した下宿も出來れば各種の娯樂室、扨は圖書館等も完備して居

る、上海に於ける日本人の發源地の樣な感があつた。

東亞同文書院

の玄關に立ち止つた時には淺黄の服はもう眞黑く汗ににじんで居た。大村先生より說明をきいて校內を參觀した。以前の校舍は堅牢なものであつたと云ふことであるが、革命の後に破壞せられて其の內に多年研究せられた多くの書籍等は皆烏有に歸してそれだけの研究を今から行ふにはまだ數年を要するとのことである。現今のものは假校舍で、甚だ不完全なものであるが、對支那問題の上に非常に重大な問題があつて、現に良結果を保つゝある。內地には其の名も高い此校かゝる類廢に歸して居るかと思ふと實に慨はしかつた。生徒は皆此休暇を利用して支那內地旅行中で一人の影をも見る事が出來なかつた。近い內に新校舍が出來るとのこと故屹度嚴然たるものとなるであらう、又是非とも出來て欲しい。校舍の裏庭に廣い空地があつて草深く生えて居る。此れが巧く買へたら實に絕好の敷地との事であるが然し數人の所有に屬して賣買の議調はず、利に敏い支那人は容易に手放さないとの事で徒らに草のみが生えて居るのである。

大浦先生は炎暑にも係はらず、これから案內の勞をとつて下さつた。

日本小學校校長井上淵氏は我等の先輩であるが昨夜以來萬事御心配くださつたが今日はその御經營の

日本小學校

に案內せられた。校舍は黑煉瓦で築きあげられた宏大なもので十六學級六百餘名を收容し教科書といひ教科目と言ひ全く內地同樣の教科をとられるとのこと、その爲め世界の居留民團よりの補助の教育費は受ける事が出來ないと慨嘆せられた。現今でも狹隘を感ずるのに每年壹百名宛增加する所其の隣地を一千坪買ひとつて新校舍を建てる計劃である。玄關前には東伏見宮殿下、及び東鄉、乃木、兩將軍の御手裁の月桂冠や紅葉などがある。學級の設備なども極めて新式であつて內地にも見ることの出來ない樣なものもある。幼稚園等も附屬して居る、完備した小學校である。

公園把子路行の電車の終點にあるのが

新公園

で幾萬坪とも知れない革の樣な芝生が無限に擴がつて、鬱蒼たる樹木はない、其の間には庭球コート、フットボール場、競馬場、義勇兵の射的場等の設けがある、支那風の亭が處々に見えて眞ッ黑い印度巡査がノロ〳〵といかにも退屈さうに歩いて居る。僅かに森をなした柏楊樹やすずかけなどの森には鵲が飛び交つて眞紅の夾竹桃の花影からは鶯の好音も洩れて來る。此邊は道路だけが上海工部局の經營になる租借地で一歩踏み出せば支那人の所有地で、そして辻每に立つて居る巡査の服もカーキー服に參尺許りの握大の棍棒を脇挾むで凉しい木影を選むで佇立して居る。

大豆や木綿が培はれた滬端を歩いて日本人の私人の經營になる六三園に入る、芝生から亭から全く日本式であつて一本の森でも櫻でも皆日本から移植したもので

『上海居留民の半分位の收入は此の家一軒で持つて居ります』

と井上氏にきいては料理屋方面にはいかに日本人が發展して居るかと思ひ知られて、餘り喜しい樣な氣持にもなれなかつた。

南方郊外

午後は宿から新たに一名の案內者を賴むで南方に向つた。午前に引きかへて非常に凉しくなつた。法租界の薔薇と茂つた柏楊樹の氣持よい並木の墜道の裡を一直線に電車を走らすときに、青葉に囁いた千斛の凉味を齎した風が吹き入つて蘇る樣な氣持がする。

南方の郊外は多く支那人の富豪や、歐洲人の住宅となつて、綠野は果しもなく擴がつて其間に點々と小高く盛られた塚が高い雄萱を載いて形ばかりの石垣で墻をして居る。これは支那人の墳墓で、彼等は十歲以下の者には死骸を其儘に郊外に捨て、成人は一定の柩に納めて先づ方位を選むで其地に柩を据ゑる、其の方位に當つた處は如何なる事があつても其の塚となることを拒むことは出來ない。もとより堅固な柩でないから雨と風とに腐ち果てて、果ては意地汚ない野良犬に頭蓋骨や手足等を喰ひ出されて居るのが往々見受けられる。それを平氣で其の側で高粱の手入をして居る。

電車を降て野末に城の樣に巍然と峙つた、醫學、工學、

獨逸專門學校

に日本領事館の紹介狀を提げて參觀にゆつた。新築竣功して一部分支那の生徒を收容して居る。其の校舍や寄宿舍の壯大で午前中に見た同文書院を思ひ出して肩身が狹くなる、これからは大手を振つて上海の大道を濶步出來ない樣な氣がしてならない。同文書院の成績の一年每にあがるを見て更に一歩を進めて、支那の青年を教育し、醫學及理學の方面の實權を獨占しやうとする遠大な獨逸人の企業には轉た驚嘆の目を瞠らざるを得なかつた。然し校舍と教育とは何等の關係もあるまい、金錢の樣な意氣でやる教育であつたならば例ひ茅屋でも英雄を教養する事は出來る。然し一度其の紹介狀を渡して參觀を乞ふたに彼等は校長不在につきとて言を左右に托して校舍內は無論墻內を見る事さへも許さなかつたのは其の狹量に憤慨せざるを得なかつた。髮までも獨逸式に刈つた支那人の青年が二階の窓から嘲弄の笑をなげる。

臥輩する樣に速いそして上下に烈しく搖れる法界電車の終點迄乘つて場末の辻の喫茶樓に淺黄のズボンに上衣をとつてこの暑い眞晝を熱い茶に汗を搾つて呑氣な風で呑氣な語をかうして晩まで語り暮す支那人の蠢動を見ては眠れる獅子と云ふ老國の氣分を充分に味ふことが出來るのであつた。

並木の果を南から北へ歩くと「交通部實業專門學校」が見える、

支那式の庭や橋の間に赤煉瓦の軒が見える。橋の欄干によつた白髪の便々たる腹を抱へた支那人に上海天文臺の所在をきくと可笑しげな手眞似で不知と答へる。ふと見下す泥溝の内に黑いものがバタ〳〵と音立ててるものがある、素足に蛇でも踏むだやうなゾツとして見ると、四五匹の水牛が凡ての人の街の塵と埃とを溶いて流した眞ッ黑い泥の中でさも氣持よさうに其の大きな耳朶と角とで水の面をひた〳〵と打つて首だけを出して居る。あの汚ない支那家屋に群て蠅と蚊との中で平氣に人生を樂しんで居る支那人の使ふ其の水牛はそれと同じ樣に悠長だと考へた。

『水牛になつて見たいな』

とKさんが、眞直に拋げつける痛いやうな大陸の太陽の光に喘ぎながら手巾をしぼる。

赤い何の木かの落葉が風に舞ふ淋しい街に、復旦公學（フータンカレッヂ）がある、純支那式の鴟尾高く天に聳えて居る瓦屋根が庭樹の上に屹立して居る。夫れを背景として高く四邊を睥睨して居るのは此の校の設立者で前代の日本——世界の列强の間に新米として顏出した日本——の歷史の上に忘れ難い深い印象を刻むだ李鴻章の像なのである。

『上半身は純金ですよ』

と案内者に注意されて打ち仰ぐと、其の偉大な顏の邊から點々と薄黑くなつて居る。鍍金らしい。凡ての支那の眞相が此の偉人の像の半身に刻みつけられて居る樣であつた。

法租界の馬騎の安南人の巡査に『天文臺はどちらです』と流暢な英語でK先生が尋ねられると「カブリ」を振つて乘り去つた。位置を知らないのでなくて言葉を知らぬらしい。輕快な案内者は、道傍に小さい小屋をたててそこで一家族例の名物の眞桑瓜を喰つて居る乞食の家の前に立つて道を聞く。實は乞食でなくて田舍からの破産者が一家族こんな處に引き越して假小屋生活をして居るのであると。

偶然に迷ひ迷ひて宏大な寺院（基督敎）の前に出た。大陸の赤い夕陽がその天に聳ゆる尖頂に落ちて黑い陰を角を地に劃した處に小さい門がある。これが佛人經營の東洋第一の天文臺であつた。

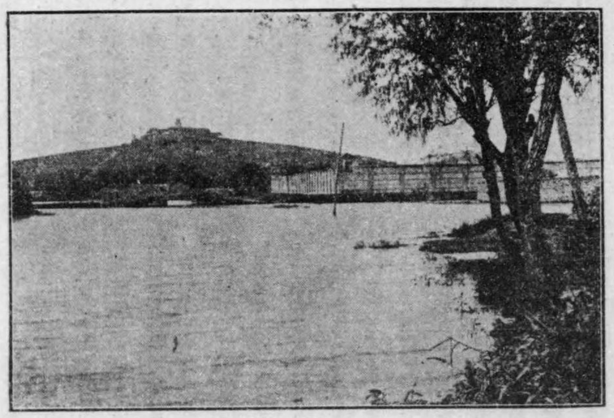
黑い「ガウン」を着流した胡麻鹽鬚の笑顏のよい天文臺長は、望遠鏡を動かしたり、氣壓圖を指したりして、明快な英語で、懇に說明して呉れた。廣い天井の高い室の四壁は天文に關するあらゆる機械と書籍とを並べ、その間に椅子を据えて居ながらにして東洋各方面、北は西比利亞、南は印度に至る迄百ケ所の氣壓を知つて日々掉す人に至重の豫言を與へると思ふと氣壓計の鍼の刻みも、高く聳へた塔の影も、神秘の光に包まれた樣な氣がする。

『この低氣壓が此方面に進めば貴君方の大連通の船は大暴風雨ですよ』

と子供でもおどす樣に老顏に笑を湛へて天氣圖の長崎の一角をさされた。御互に一寸顏見合せた。荒い黃海の波は誰にも心にかゝるらしい。

直ぐ側の舊敎寺院に入つた。もう日は全く落ちて何千人をか入れることが出來る大敎會堂の中は仄暗くて、高い天井の緻密な彫刻が、只ぼんやりと舞ひ上る糸遊の樣に眼に映つて、遙か向ふ幾多の空席の彼方に煜然と蠟燭の光が照つて說敎壇の後に著しく金色の十字架が光る。どこから來たのか黑い上衣の牧師が私等の後から出でゝ洗禮の水を額に塗つて、莊重な足取りでスッと夕闇に消えた。廣いガランとした會堂は又音無くなつた。幾多の會堂にも入つたが私は此の會堂で初めて莊嚴を感じた。この席についた刹那少くともその刹那だけは汚ない浮世の塵から浮むことが出來ると染々と感じた。

尖塔の影に大小幾多となく釣つた會堂の鐘が夕の祈禱に善男善女を呼び集める樣に面白く、寂たる郊外の靜かな空氣を振はせて流れた。黃昏の闇を縫ふて此處の小路や彼方の小徑から白い服の西洋人や、支那人が此の庭に集つて來る。



北極及監獄

私等が大波に揉まるる小舟の動搖する法界電軍も十三區乘り切つて「當」と書いた質屋の看板や「兌換赤金」と書いた兩替屋の看板、さては異臭を放つ豚の片股を幾つとなくぶら下げた料理屋など電の樣に送り迎へて下車。疲れた足を引きずつて東亞洋行の煉瓦の門に群つた支那俥屋を追ひ除けて室に入つたのは、もう並木の下陰で「ジャシャノンシャシャノン（謝々焉）」と呼ぶ乞食の子供の顏も見えない頃であつた。一區一錢の電車は誠に重寶だと思つた。

晩餐後日本服の案内者に導かれて日本街の道を歩く。晝間少しも其の影を認めなかつた、貳萬（居留外人の内にて最も多數）の同胞はこの小さい町に溢れて居る、參日間の上海見物に、まだ馬車に乘つた日本人、自働車を驅る我國人を見ずに、今夜の街に多くの同胞を見出したと

きにはもどかしさが先に立つた。然し一日中淺黄服の支那人や天狗の樣な氣障な鼻の西洋人ばかり見た眼に、輕い浴衣の長袖ヒラヒラと他國などとは夢にもしらぬげになつかしい小學唱歌を歌つて居る兒童を見ては何となくなつかしくうれしかつた。

平年でも耐へられない樣な上海市街、今年は四十年目の暑さとて室内でも百五度に上る。戸棚の上に置いた西洋蠟燭がとけて流れて居るのを見ては慄然とした。中に廊下を切つた三階の室に私等は四人一緒に寢た。室の戸は青い布で張つたもので途中にだけ一部分置いたある戸であるので隣室を通つた涼しい風は氣持よく上海の夢を結ばせる。

――二十三日夜窓の外に喧しい支那車夫の叫びを きゝつゝ白い夜具の上に腹這ひて認む――

七月二十四日

今日は白い詰襟の服に輕快な麥稈帽を被られた井上氏を先頭に、例の輕快な氣の利く案内者を通譯として上海城内を見た。自働車や馬車が眩い樣にかけ通る街の角に三菱の會社を見た。一週間前に轉宅したものだとかきいたが、全く西洋建築でこれならば其の道の西洋人の店と後れもとらない事が出來るかと何となく嬉しかつた、留守居の店員は一々各室を案内してそして說明して呉れた。

『何分日本人の設計ですから矢張り日本の臭味を放れません』

と云ふ。こんな大建築も日本人が造るのかと田舍者には一寸驚かされる。黑い煉瓦造の城壁が僅かに大路にその跡を留めて居る處から城内となつて、何よりも先に一種の嘔吐を催す樣な臭氣が鼻を襲ふて來る。支那人を初めて見る人の話でも感ずる樣ないやな感がむら〳〵と起つて前に進む足も緩むだ。純支那式の町は町幅が三間に過ぎない、軒と軒とが殆んど接する樣でそこには色々の奇妙な看板が揭げられて、足元には不規則な自然石を鋪き疊むで居る其の上を流れるやうに汚ない支那人が通る。

象牙細工や、昆崙の山の寶石細工、青磁、白磁、さては彫刻、織物等の商店が連つて美しい夜店を見る樣である。恰度迷宮を引き廻さるる樣に汚ない支那人と肩を擦るまいと掛念して通り行くと、とある辻に佛教の支那寺院がある。本尊樣は阿彌陀佛らしい日本で見るよりも少し威嚴のかち過ぎた其の御顏は眞黑く煤げて居る。金色に光る十三佛は四邊に居並び給ふ前に紫の香の煙がゆるく立ち上る。その前に白髮交りの老媼と其の孫娘の奇麗に髮を組むで垂げた二人が側目もふらずに祈念して居る一叩頭しては立拜する、是れで初めて三拜九拜の意がと明なつた、それから私は寺院の前にゆくと例の三叩頭九拜をやるので笑の種となつた。

城内で有名な茶樓に上つた、話にきいた茶樓と、下から覗いた茶樓と、そして實際上つた茶樓とは全く違つて居た。廣い階段を上ると階上一面に正四角形の唐草の彫むだ支那机が幾脚となく並べられ、白髮の老翁から紅顏の少年までが、持つに持れぬ位熱い茶を啜つて居る。そして何か笑ひつゝ興しつゝ談して居る。そして恰度蜂の唸りの樣な低い高い喧音が、あたりへ波を打つて擴がる呑氣な連中は、その間で無闇焉で、嗅煙を出して眠つて居る者もある。そろ〳〵バリカンを取り出して搔髮を初める者も居る。この一樓の上で商業上の取引きも出來れば、色の媒介さへやるとの事である。三層樓から眺めると青い萍が生え塞つた池には、棟の影が黑く影を落して居る。茶を飯むでは南瓜や、西瓜の種の、鹽煮を嚙つて終日眠つたり笑つたりして遊むで居る悠長な國民を見ると可笑しくなつた。

純支那式ときいた好奇心にかられて遙々尋ねて來た張園（チヤンエン）は案外つまらないものだつた。「勸業博覽會」と入口に大きな廣告はあるが内へ入ると何でもない小間物店や飲食店ばかりで博覽會の名の大きいのに呆れた。

然しこれから十町許り並木道を歩くと愚園（グーエン）につく。十錢の觀覽料は餘りに惜くもなかつた。門を入ると反を打たせた苔蒸した瓦の屋根が棟の青い老樹の葉影に聳えて居る。門を入ると玉を飾た支那机がある。それに寄つて流るゝ汗を拭うて風を送るに日本舶來の扇では調和しないのを感じた。羽扇綸巾かうした具合に座つたら、恰度三國史に出る孔明の樣な氣持になれるだらうと、獨り微笑むと、それとなく紫の題字が眼に入る。『怪石四隅危亭一角、平橋六曲淺水篙』ふと氣附けば池水淺く萍青く塞り空から雪のやうに何の木の花かゞこぼれる、岸には怪石奇岩が面白く並べられてある。金閣寺や銀閣寺のやうに自然の景をとり入れる樣な大膽な事が無い代りに、一目の前には日本人の眼からは濃厚少くとも夏向きでない樣な小細工な美を萃めて居る。階上に古色蒼然たる篇額がある「我盧我愛種竹栽花」とあるので案内者にきくと此園は近頃迄は一個人の有であつたとの事、私人の有としては立派なものであると感嘆する。

歸途電車に飛び乘ると恰も正午の事とて上海市中の會社から午餐にかいる西洋人が多い。或は白い上衣をきて肥馬の手綱を執る小娘に迎へられる者もある、自働車で妻君に迎へられる者もある私等が電車の僅か二三區乘り切る間に二十四の自働車の塵煤をあびた。

眺望で有名な樓外樓と云ふ、上海全市を只一目に見渡す府樓に入る。昇降器も備へてある。樓上は廣くて私等の見た内で尤も大きな茶店で數百の机が並べられて居る。此處は高い建築の多い上海でも最も高いものゝ一つで全市は一眺の中に萃る。

其の内に「哈々亭」と云ふのがある。四凸色々の鏡をかけて内に立つの姿を長くしたり、短かくしたり、平たくしたり、細くしたりする。私等が西洋街に入つたり、支那町に入つたり、日本街を通つたりする時の氣持の其の儘に寫すやうである。

支那劇

夜、上海第一の劇場「大舞臺」を見る。支那人の通譯を頼むで案内させると眼前に擴げられた新式の劇場にはもう「胡蝶盃」と云ふ舊劇が初まつて居た。

劇場は二千餘名を容れるに足る。東京の帝國劇場と同型で弧形に並べられた椅子で、階上にも同式の特等席がある。入場料等も着席してから後から取りに來て、それと共に等を賣りつける。背景は皆新式の强い線で描いた幕で甚だ幼稚で餘程想像を逞うしなければ油が乘らない。又約束となつた記號が多い。拂子の樣な鞭の樣な白毛のものを振ツて現はれる。これを舞臺面で嚴かに待臣に手渡しする。これは乘馬の武士が下馬したものを意味して居る又日本の舊劇ならば、「野崎村」の段等は船と籠とで兩花道から別れゆく處に、抑へ難い美し味があるが、支那劇では、船等は用ゐないで、只櫂を操る眞似をする許り、河を渡るでも足附ばかりに藝味を含ませようとして居る。

劇は七時頃から始つたと云ふ。私等が十一時頃まで見たが大團圓ではなかつた。其間には全く「幕なし」で、一分の休みもなく踊り續ける。もとより、背景がなく幕を上から下すばかりで出來るから、廻し舞臺やそんな面倒がない爲でもあらうが、見て居る人さへも勞れ果てる、況や花形俳優等は其間殆小止みもなく舞臺で活動して居るから勞れ果てるに違いない。一泣きの藝が終ると俳優は平氣で後を向いて「黑頭巾」が持つて來る茶を啜り手巾で汗を拭ふ。見慣れない私等にはそんな仕樣が如何にも悠長で、深刻でない綜な氣がして藝全體を破壞する樣に思はれる。從つて觀客の態度でも、日本の樣に感極つて手巾に涙ふきあへぬなどと云ふ事はなく、水を打つた樣な靜寂などは到底求むる事が出來ない。何時も隣人と語つて居る。批評して居る。だから劇場内は何となき一種厭やな動搖めきが聞へる、この動搖めきと地舞臺の音樂、それは太鼓がある、鼓がある、笙、鐘、簫、などが何の調和もなさずに只躁々しい音をたてるから、慣れない人々は餘程の覺悟がなければ、長く見る事は出來ない。俳優は此等の騷音を超越した高い音で歌はねばならない。

彼劇には會話等は至つて少く、多くは詩か歌かであるので、常に交る交る高い音が頭の底を刺しつける樣に響く。私は通譯が時々挾むで與れる說明と、劇の成行で、大抵その劇の筋書を悟る事が出來た。その意味はよし不可解でも藝それ自身に興が湧くものである事を知つた。尤もこの一座は北京から新下りの千兩役者だと案内者が言ふ。私は劇の筋道よりも過去の支那。今より豪かつた支那を見る氣持がした。金銀燦として鏤めた服は、三國史時代の服其儘で石帶や、王冠、さては膝を越ゆる如き長い鬚、此ならば白髮三千丈と云へるだらうと思はれる。かうして一幕毎に劇の進行以外に新しい印象を刻みつけるので、時の過ぐるのも知らなかつた。

私等の前には絶えず茶をつぎに來る。茶と云へ、只單に番茶であるが、只熱いばかりが賞すべき所で、四五升も容れる位の銅瓶から煮えかへる白湯をつぐ、汗の流れる劇場の内では、熱い茶は非常に美味である。

茶と共に運び來るのが「手巾（カーチン）」である。手巾は洋手拭を熱湯に入れるか、或は蒸氣でむしたもので、手のつけられない位である。それで流れる汗を拭ふと非常に涼しくなるのである。こんな關係からかしらないが此の熱國の人で手巾（ヘンカチ）をもつ人が少い樣である。

煙草の煙も劇場の彼方此方から立ち昇るのを見受ける事が出來る。然し大抵「水煙」が多い。Mさんが汽車の中で手帳の上で筆談を試みると、『貴國用紙烟恰如我國用水煙』と書く。餘程廣く用ゐられるらしい。町々の店頭に立つとをかしな形をした筒を上に向けて、呑氣さうに水煙を喫してゐる支那人を見ることが多い。

支那の明時代の墓

耳を聾する樣な囃が一層高くなると、域扉を示した幕が上げられて兩軍對陣勇ましく、今にも大戰が始まりさうで興は湧いて來るが、然し十二時迄に堅く閉門するときいた私等の旅館故に十一時頃、後に心を引れつゝ、人通りの少くなつた四馬路（シマロ）を辿りつゝ路地に何も敷かずに快げに眠ツて居る支那車夫の呑氣なみじめな姿を見ながして歸る。――南京行のがためく汽車の中にて稿――

七月二十五日

恐ろしい夢

東亞洋行の一夜は暑い晩でした。窓際の柏揚樹の弱い葉を動かす風さへもない、熱い空氣が自働車の唸りに吹き下げられる樣に窓から流れ込む。やつと二時頃に眠りにつくと間もない、恐ろしい夢で眼を覺ました。恰度上海の四馬路の辻で誰だかよく顏の知れない老人を案内して居ると、急に「アスタアバウス」の方から飛むで來た自働車が、あはやと思ふ間もなくその老人を轢き去つた、眞黑い顏の印度巡査が來て群る

人を追ひ拂つて居る。老人は鮮血に塗れて煉瓦鋪の大路の眞中に横て居る。私は夢から覺めて見ると廊下の電燈ばかりが薄くさしこむて、昨夜の暑さに寢癖のよいGさんも大の字に眠つて居る。塵の都上海もまだ眠から覺めぬらしい。

大膽な長崎女

『南京行きの御用意で御座います』

とソット、スウッチを押した人の影を見ると三階の受持女中で長崎縣生れといふ。言葉の端々になつかしい九州辯が出て嬉しい十六七才の女である。何にもたよりない上海に只一人來て何の苦もなく働いて居る。私等はそれに僅か數百里の海を越えて來て、如何にも天外萬里の異域にでも來た思をして居るのが耻かしい樣な氣がした。實際日本人は却つて女の方が海外發展をする。滿州なども内地へ入り込む前驅はいつでも滿州髷に結ひかへた日本婦人だときく。それがよし可なるにせよ不可なるにせよ、今少し天下を股にかける底の男子――人間到處有青山的の青年を要することは現今の世界に特に必要である。生ぬるい上水それは例の濁りに濁つた揚子江の水を漉した水で洗面したが、頭蓋を油紙で包むだ樣に不快な氣分であつた。

パンと牛乳との朝食も此度の旅行では此れが最後かと思ふと、朝から爆風器が回轉する東亜洋行が懇しくなつた。

食へない支那車夫

正七時に十四臺の護謨輪の車は威勢よく東亜洋行から出た。然し日本の車夫の樣に列を正して堂々と曳きゆく樣な事はない。乘ると同時に梶棒をとり上げて眞一文字に驅け出す、どの道をどんなに行くも勝手である。只に目的の停車場までゆけばよいと云ふ有樣。私の乘つたのは屈强な三十男で、もう辮髪などは切り去つた頭だけは西洋式となつて居るが、上衣は「すつぽり」と脱いで梶棒に掛けて、一町許り先に出たKさんの車を拔かうと、ひた走りに走る。眞赤な眉が辻を一廻りする時に、朝夕に「テカリ」と光つた。玉のやうな汗が流れて居るのである。車夫相互は丸で敵である。一分でも一秒でも先を爭ふ。恰度英租界の電車がベルの音高く走つて來る。其の前を勢こむで驅けぬけたのには車上の私は冷りとした。丸で命がけである。御かげでKさんの車を一町ばかり拔いた。上海の樣な處に居たらこんなに神經過敏になるのも止むを得まいと思はれた。

『今は各自に拂つて下さい、五錢宛でよろしいです』

といなせな案内者は注意して曳れたので、會計の畑中から割りあてられたトッコツ(銅貨)五枚を汗の出る樣に握つて居た私は南京行の停車場に達すると同時に、手渡さうとする。もとより言葉は皆目解らない。只無闇に啞の樣にして押しつけると、中々聽かない。此處が例の鐵拳政略だと考へて汗の出る程握りつめた銅貨を叩きつける樣に胸の過に押しつけた權幕に、岩丈な三十男も少し避易したと見えて可笑な顏をして默つて受けた。六錢與へるもの、七錢で濟むもの八錢强請せられた者。同じ家から同じ停車場にまで、同じ道を乘つても、千差萬別、生馬の目をぬくのは單に御江戸許りでないと思つた。

上海發

午前七時半。滬寧鐵道は上海を發した。時間表には快車と書いてある最急行列車で、山も野も飛ぶ樣に走る。内地の足をのばせば直ぐ他人にさはる狹軌に比べると、四呎八吋の廣軌鐵道は座るにも氣持がよい。

唯亭驛

で下車した時は、最早繁華な上海の高層樓も見えず、咽ぶ樣な煤煙も此處には及ばなかつた。只眼も及ばない揚子江岸の大平野は、一暗綠色の水稻と淺綠色の菱が浮むだ沼地ばかりである。

『八九月頃が收穫の好期だ』

と隣席の支那人が筆答して曳れたので稍疑つて見たが、如何にも白い穗波がそよいで居るのも見受くる事が出來た。其間を定規で引いた樣な二直線の線路が長く引いて、其の末は一點に合して居る。二直線が一點に合するのを眼で見たのは初であつた。

支那平野

腹の邊に白い羽がある「支那鳥」はスッスッと沼の面をかすめて飛ぶ。堀水には一面に菱が浮いて、岸の近くには蒲が生ひ茂つて穗が出てゐる。二三人の農夫が日本と同じ樣な水上器でしきりに水をくみ上げて居るのが見える。一つの山さへも見る事が出來ない。稻の海は何百里となく連つてもう末は空と接して居る。ただ處々に殘された林地は例の墓地らしい。蔚然と繁つて黑い影と作つて居るのは皆楊で非常に巨大なるものもある。白鷺が長閑に水鏡して居るあたりにまだ愛らしい辮髪を垂した子供が、その赤い水の中で面白さうに水泳をしてゐるのが見える。

廣軌鐵道で然も快車の八時間には隨分走つたらしい。東からさして居た日光は西から入る樣になつた。風は同じ樣に南から北に吹いて、車内には扇粧の風も入らないが、一度窓から頸を出せば帽を吹き飛ばされさうに吹いて居る。茶と手巾とを御きまり的にさしつけるのは、昨夜の劇場と同じ樣である。窓の外では食物を賣る人の聲もする。然し常に學生の歸省をいとゞそゝる呼子の「麥酒、正宗、サイダー」の樣に溫味を持つた音樂的の聲でない。鈴舌と支郡人なら罵るかもしれない樣な、ときれ〳〵になつた蠻聲には振りむきたくもなかつた。

賣子の肩から擔いたもの、饅頭樣のもので大地から舞ひ上る熱氣と共に油濃い嘔氣を催す樣な臭氣を放つ。私は窓の外を見出すさへも退儀になつた。

蘇州城外

それでも蘇州城の灰色の城壁が長く左方に蛇の樣に横つてその下を驢背に跨つて

呑氣さうに青い煙をたてて傘（茶褐の避紙）をさして青草が茂みの内へ消えて行くのを見ては美しい詩中の人であるのを覺えた。

寒山寺

蘇州を思へば寒山寺を偲ぶ。一篇の詩も偉大なものだと思ひながら隣座の支那紳士に筆談を交せば、

『自關門至寒山寺伍十里之遙』

と書いて呉れた、それでは夜半鐘聲至客船ことも出來まいと怪しむ。右手に初めて山らしい山を見た。其頂に白い塔が青い空に聲えて居た。『虚墟塔』と教へて呉れた。汽車は動き出した。暑さに耐へかねて芭蕉實を劈いたり、氷砂糖を嚙たりして八時間を嚙みつぶして、午後三時半といふに、

下關驛

については云ひながら今少しく大きな停車場と思つて居た眼には誠に淋しい小驛である。然し其の間になつかしい日本人の姿を見た。

旅館、賓來館からの店員と、領事館から出迎へ下さつた巡査榮氏であつた。

下關から「無量菴」までの白切符は此地では決して一等を意味しない。三等である。然し四等のある國では三等はそんなに卑しいものではない。長い城壁の内部を汽車は走る。王蜀黍の花が風に靡く。塞内の荒畠に塵の深い瓦屋根の倒れ殘ッてたのが見える。南京の荒廢を私はこの一屋が示した樣に不思議に深い〳〵印象を與へた。

獅子山砲臺

左には「獅子山」砲臺が高く聳えて、中華國々旗、白地に赤、崩黄の三線を引いた旗は天風に革命の韻を傳へて居る。第一革命の折に南軍は此山を奪うて南京城に砲火をあびせたから、さすが兩軍の勝敗の別れる紫金山の砲臺も爲めに陷落したとの事である。今は靜かに眠つた獅子の樣に一時靜まつた南京城、恰度只今噴火が止つた刹那の息火山の樣な全市を嘲笑を以て見下して居る。

無量菴の停車場から汚ない驢馬が塵に眞白になつた楊の並木に疲れはてて熟と渴とに喘いで居る邊を行くと、南京城内の中央高地に高く日章旗がひらめく。巍然と峙ッた赤煉瓦の建築、これが吾々の父と頼むで來た日本領事館であつた。

日本領事館

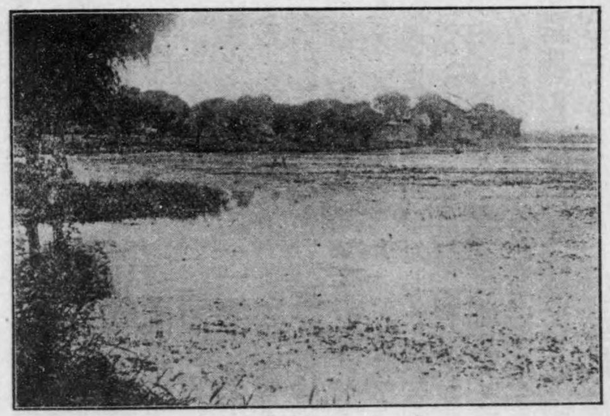
毛氈を敷きつめた應接間に導かれた代理領事古賀氏は歡迎歡待至らざるなく樓上に導きて一々指摘して説明の勞をとられる。

すぐ前面は雜草離々たる荒蕪の地で、此處が嘗て第一革命の砲に張動が謝罪した日本人にとりては血の湧きたつ樣な思出ある土地なのである。

『其の時は大混雜でした。あの家には居留民を收容して居るのでしやう。其時に領事は此臺に立たれ我々館員一同も此處に整列して、一聯隊の兵が「捧げ銃」をして、三回の「君が代」の軍樂を奏する謝罪をうけられました。その時には實に愉快でした。然し其の兵士が、當時盛であつた蹇語の通りに叛亂したら御覽の通りこんな薄弱な壁ですもの、屹度陷落したに違ひありませぬ。その時に長江には軍艦は居りましたが陸戰隊が來るまでには、屹度陷落したに違ひありませぬ、で其の時には皆覺悟して居りましたよ』

と笑を含むで語られる。前に聳える高樓は家根には草生ひ、砲火に碎けた跡か何も修理せずに殘つて居る。此れは昔の鼓樓のあつた處で、今の領事館が鐘樓の跡で、「建築」の昔より夜毎に金陵の天地に時を報じて幾多文人墨客の錦腸を洗ふたのであらうが。今は只徒らに李白の所謂「金陵空壯觀」で其の壯觀とも見る事を得ずに空しく黄昏の空に悲しい驢馬の嘶聲をきく許りで夜毎に通行人を誰何する厄介な門となり果てたのである。

此から眺むれば金陵は只一眸の内に萃まつて彼の英雄蜂の如く起つて、三分の計孔明の手になりし、三國時代から歴史の帝都となり幾多の帝王の盛衰と賢人烈士の跡とを只一色の荒亡の色に裏むで吾等につきぬ感興を催させる。



南京の沿革

南京は春秋戰國時代に既に史に見え、越王勾踐の呉を亡すや、此處に城壁を築いて楚を謀つた。今南門外長千里の越城は其の遺趾である。楚越を亡ぼすや城壘を毀ち金を埋めて王氣を壓した。此れ金陵の名の出づる所である。

秦に至りて秣陵と呼び、呉の孫權に至つて建業とよび、遂に都を定めた。唐の時に至つては紅昏の都となり、明の初代に應天府と唱へて舊制に基いて大規模の建築を試み、外門（今の外廓）十六、内門（今の南京城内）九、其の周圍九十清里となつた。成祖が燕京に移つてから南京と稱するに至つた。

私は私が久しく憧れの星となつて居た南京城の中央に立つて居るのであるに氣付いた時に數千年の興亡の跡があり〳〵と胸に映

る。此の一塊の土にも英雄の靴に踏まれたのであらう、此の一草にも薄倖の佳人の涙を落した所であらう、見上ぐれば鐘阜、落星雞籠などの諸山が蜿蜒として天然の城廓をなして内には秦維の流れが綾く迂つて一金糸を縫ふて居る。

南京は夢の都である、懐古に生き空想に蘇るので、一度眼を開けば廃墟、眼もあてられぬ廃都である。上海の赤い飛び立つ様な赤煉瓦の色と活氣の立ち昇る様な柏楊樹の濃綠に比べると、凡てを廃滅に引き入れる様な灰色の支那式の家、百二十度の暑さに耐へかねて啼いで居る柳の蔭綠、自働車の物恐ろしい唸りの代りに驢馬の物悲しい叫がある。そして從らに榮華の昔を偲ばせる九十清里の城塞のみが果しもなく連つて九つの門が嚴然と立つ。ぼんやりと霞の内に消え殘る様な「朝陽門」は其の名に負はで革命軍の砲彈に粉碎せられて哀れな殘骸を遠望鏡裏に運び來るのである。

雞鳴埭

雞鳴埭は日本領事館の直ぐ向ひに聳えて居る、革の様な青い芝生が人も通はないのか美しく小徑を飾つて居る、Mさんと私は何も云はずにだら〳〵坂を上つて行く、雞鳴埭とはゆかしい名である。あの華美をつくした齊の武帝が彝跡の靡嚴かに露ふみしだき「瑯琊城」に行幸ある時に此邊に來ればいつも曉告ぐる雞鳴をきいた、それから誰云ふともなく「雞鳴埭」と云ふに至つたと『美しい名である、齊の武帝は此の山の名にによつて永久に生命がある』などいつとはなしに思はは昔にとんだ時にしたるゝ様な汗を拭ふて一陣の涼風が日射病除けの長い日覆の翼に音たてた。

北極閣

ふと見あぐる門には「北極閣」の天額が幾百年の霜と風とに晒されながらも、まばゆく金色に光つて居る。

もう穏に出た薄が遙か一株の綠に引く大江を渡つて來る越國の風に物哀れに搖いで居る荒山の此の「雞鳴埭」に破壞の神の手にとり忘れられたやうに立つて居る「北極閣」は金陵を偲ぶにも南京を双眸に萃むるにも最も適した處である。

元の至正元年此上に觀象臺を建てゝ以來明となつても政變を他所に見て欽天臺と稱して益々完備された。今も尙ほ窓の破れた所から覗くと机がある、觀象器らしいものもある。黑い服をきた老人が机に凭れて居る、あの上海の天文臺で、天に聳ゆる様な高塔の下で氣象圖を案じて居る黑服の佛人とを思つた時に、私には此の北極閣に一層忘れがたい感がする。「高聳天宮」等の龍跳る様な金額が惜氣もなく窓の破れに荒々しく打ちつけてある。革命の役に紫禁山から打ち下した砲彈に破壞された屋根には赤い塊が無慚に現はれて、もはや野罌粟(ノダン)が生ひ出でゝ白い實を飛ばせて居る。

紅蓮匂ふ元武湖

南京城外は長江の平野が渺茫と廣がつて居る、すぐ足下には元武湖が廣げられて居る、湖は周圍四十清里ときいたが盆地の様に見える、赤い靄がかゝつて水面とも見えない、望遠鏡に瞳を凝らすと一面の紅蓮の花である。

『今日頃が滿開で御座います』

と案内者に言はれて異國の空で脫俗の花の盛りに會ふた歡は矢張り脫俗の歡であつた。蔚然と繁つた中島には池中の漁業を生活として一村落が出來て居るとの事、吳の寶鼎二年に掘つたもので池中に黑龍現はれた故に元武湖と稱するに至つたとか、昔は後湖とか北湖とか稱したのである。

もう日は落ちかゝつた。道と云ふ道もない雞鳴埭の裾野を歩むと草も生えない土饅頭が所々に築かれてある、これは革命軍の死者を埋めた處であると思ひなしか腥い風が衣を拂ふ。

臺城

梁の武帝の遺跡臺城に上る。其絕壁の上に建てかけられた『臺陽樓』で茶を啜る、此處の水は南京で第一の清水だと云ふ、山河幾千里の旅客には湯を啓すべくからもありたい。傳して谷底を眺むれば四邊寂として聲のない幽林の間に黃裏の鳥がとぶ。林からすッと去つては白絹を劈く様な聲で又眼の前をかすめてゆく。案内者は『黃鸝です』

と何の氣なしに答へた。然し私には忘れられぬ、九重の宮門楊柳の間に飛むで春曙に一趣をまし、隋者の竹の窓に鳴いて其の友となつた黃鸝である。そして天外千里の客にゆかしい調で啼いて吳れた。靜かな世界である。「一目見太古、衆香聞上古」の竹の枝に彫つた額が丁度今の私を見すかした様に薄い香の烟の間に紫に映じて居る。

黃昏日本の田舍町を歩く様な氣分で埃に白い榻によつて夕食後の涼をして居る羽扇の支那人の前に注意を引かれて通る。どこからかきゝなれた喇叭の曲がきこえる。轟く様な地響がすると思ふとすぐ挾い路を出て支那兵の一隊が來た。カーキー服、軍帽、星章全く日本人其のまゝである、日本式を採用したらしい。然しどこか大陸的にノロ〳〵と歩いて居る。

南京の宿

南京全市でたゞ一軒ある日本旅館寶來館に宿る此家は目下二百名許りの居住民の倶樂部となつて玉突も出來れば柔道も出來る。私等を案内して下さつた榮氏は此地の支那巡査に柔道を敎へてあつた。

夕食後見に行くと大兵肥滿の支那人が小柄な榮氏に毬の様に拋げられて居る。それを一々手をとつて流暢な支那語で其の古式の技を敎へてあるのを見た。『今晩は』と片詞交りの日本語で團扇を與へる、支那人は人のよい男であつた。

實際南京の夕は暑かつた風は全く死して何かの會社の烟筒の烟が薄暗い空に眞直に立ち昇る、盡は減多に百度を超えないが夜は減多に百度を下らないさうである。上水は無論掘つても淵井ばかりの南京では入浴にも丁度「燕の水浴」の様に、遠い所から人夫が擔つて來た水で浴する。耐へられない苦痛である。殊に例の本場

南京米に油濃い支那料理には追がの勇士も顔色がなかつた。

秦淮の清遊

新月淋しく故城の上にかゝつた頃十二臺の腕車を驅つて此町の名所と唱へられた秦淮を見た。電燈や孤光燈が人の世の暗を奪ひ自働車の物恐ろしい響が行人を威嚇する上海の町から、壞れた城壁の下に小さい街燈を吊つて悲しげな驢馬の鈴が扉外に響く南京に來た私等は二十世紀から急に四五世紀前の世に拉し去られた樣な氣がした。

蕭然とかけゆく車上の人は、輕い大縞の裕衣に日本流に團扇を持つて居る眞黑に日にやけて居る日本人、穢ない家の内で例の樣に甜瓜を喰ひながら飛むで出て見る小供もある。辻々に銃劍をつけ裝彈して警固して居る南京巡査は目を丸くして瞠る。上海では足袋をはかねば五十錢の罰金を徵され、袴をはかねば公園に入れられないのであるが、南京は全く別天地「矢張日本風に限る」と陽氣になる。

秦淮は彼の秦始皇嘗て東巡した際に、望氣者の言を信じて王氣を洩導する爲めに、大山を鑿り長龍を斷ち民力を盡して掘つた運河である、秦淮の畫舫はどうしても詩をよむ人、美しい支那を見むと思ふ人の一度は行くべき所である。

私等は一隻の遊船を傭うた。所謂畫舫である館船である、船には花洋燈が美しう吊してある、廻した朱の勾欄の近くには美しう彫刻した支那机と支那の椅とが並べられて寢るに一貫張の机もあれば横はるに籐の安樂椅子もある。船はゆる〳〵中流に辷り出した。

軸と艪とに二人の水夫が長い水棹で底をつくと搖々と洋燈に垂るした玉飾がふれて鏘然と韻をなす、川中は二町にも足るまい然し電燈などと云ふ汚らはしい西鬱の光は此の水に影を映すことがない仄暗い水の面には只船から洩れる光がチラ〳〵と長くなり短かくなり蛇の樣に這ふいつも〳〵笑顏の劉さん(案内者)は運ばれた茶を甘さうに一口啜つては一口語り出す、同じ形の遊船が舷と舷とを磨する樣に軸と軸とを結むだ樣に下る。

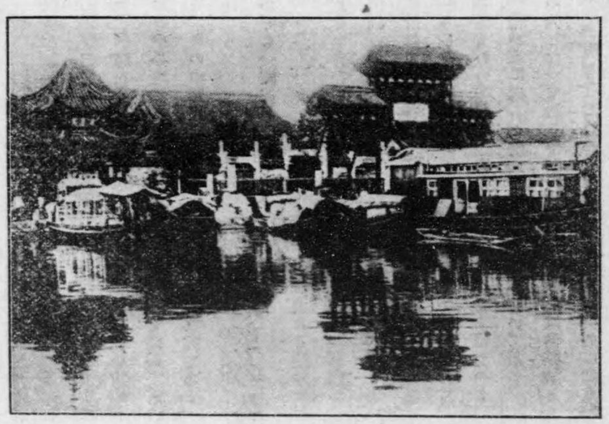
『それそれが歌妓を送る船よ』

と指す方には少し灯影を細めた影には、芳紀二八の歌妓が懶げた體を榻に椅せて胡弓樣の樂器の調を合せて低う歌つて居る、細い音色がしめやかに水を渡つて、振りかへる彼方には白い頰と紅の唇とは船の障子に遮られて細い韻と朧氣な影とが綫く下流に消えてゆく。何處からか盛な絃の響が振ひ來る。それに合せて高い清み切つた歌が人の心に溶けこむ樣に響く。「後庭花」でも歌つてるのであらうが詞を解せない私には只高音のオルガンでもきいて居る樣に恍然となる。と思ふと山の樣な遊船が搖ぎ來る、明るい室には、四五人の歌女が色々な樂器を奏でゝ若い女が歌つて、何れ遊冶郎であらう、机をかこんでは羽扇も輕く杯が飛むで居る、こんな船が一つ過ぎ二つ流れて橋の下に消えてゆく、最後になると私等の乘つた船はこんな遊船に圍繞せられた。管絃の曲は湧き、歌唱の韻は流れ、縺れ〳〵て天宮にまで至るのであらう。私は朱欄によつて杜牧の絶句を口ずさんだ。

烟籠寒水月籠砂　夜泊秦淮近酒家
商女不知亡國恨　隔江猶唱後庭花

杜牧は冬の秦淮に悲哀を感じた私は夏の秦淮になつかしみを覺える。物皆が灰色で物皆が衰亡の聲である、死の都、南京に私は昔ながらに生きて居る榮華を秦淮に見出でゝ枯野の末に一本の紅花を摘みとつたやうにうれしかつた。只杜牧は冬の秦淮に千古の絶吟を止めたが私は夏の秦淮に棹して一句も得ない事を恥とする、と船は何物にか觸れたのであらう、いやに一搖れすると床にかゝつた古雅な軸が思ひ出でだやうに動く。

六朝風景還如今
九曲溪光獨如昔



夫子廟

恰度これが私の心を歌つたのだと獨りほゝ笑むだ。眞昼よりも熱い南京の背を市民はかうして歌つたり花洋燈の下で賭博をやつて過すのである。カーキー服の巡査は只形式ばかりで何にもこれには手は出さないとの事である、私は不圖黑い水の影の間から出て來る人の姿を見て驚いた「謝々馬(シャン〳〵)」の哀れな聲を出す、

『あれは乞食ですよ』

と劉さんは云ふ、蓬髪蓬鬢の老人が大きな盥に乘つて金を乞うて廻つて居る。

きつい男

歸途私の乘つた俥は大の男であつたが草鞋をぬぐために二三町も遲れたと思ふと一角廻つた、一人取り殘された俊寛の樣な思で手まねで「急げ」とやると赤黑い背から玉の樣な汗が出ると人通漸次少くなる町を驀然進むと青い柳がサラ〳〵と私の顏をなでる、新月が鎌の樣に枝にかゝつて居る。その男中々かける、一角廻るときに一人ぬけ二人ぬき賓來館にかへるのは第一番とな

る、支那人は此處でも同職は丸で敵の樣だと感じた。

——南京より上海に歸る汽車中にて稿——

七月二十六日

南京見物

幾多盛衰興亡の跡である南京城を今日一日に見つくさんと寶來館の前に曳きつけられた五臺の馬車に乘りこむだ。昨夜通つた路を縫ふ樣に轔々の響に勇ましく南京を壓する。南京は革命の中心地淋しい枯落の町の間にも潑剌たる革命の氣は漲つて居る、あの中華民國の旗を白眼で瞰むで案内者の劉さんは言ふ。

『袁世凱は豪いから生存中には或は靜かでも一度彼が死むだら、第三革命は起らずには居るまい』

と私等が言葉で解して居るよりも深い意味を含むで居るらしい。支那の官憲は銳意革命抑壓に力めて拔劍裝彈の巡査の委は辻毎に見受けられる。今朝警視廳から寶來館に訪ねて來て吾々一行の身元を取り調べたさうだ。革命に關係でもあるのではないかと疑つたらしい。長い壁に添ふて石を疊むだ路地を行つて居る。南京には不但合な煉瓦壁と疑つて居ると不意に轅が左に廻ると宏大な洋館の前に出る、これが南京市民の注意の的となつて居る中華民國の總督府である。例の護衛兵が嚴重である。何だか敵陣に立てられた孤城の樣な思がする。

南京の街

夜見た南京の街は死の樣な淋しい町であつた。眞晝に見た南京の街は塵と泥濘と汚ないがた馬車と、嘔氣を催す樣な臭氣とであつた。然し私等の乘つた馬車の臺には塵こそ積て居るが、日本の乘合馬車の樣でなくて非常に乘心地がよい。馴染の馭者は「エーイ」と異樣な聲で馬を驅つて長い皮鞭が空に舞ふと いつか南京の街々過ぎて、西瓜や玉蜀黍を路傍で鬻いで居る西華門を入ると、一面に廣げられたのが明の都城である、

南京の舊都城

明の洪武二年に工を起して六年に竣工した都城だけあつて、其の廣漠たる廢地には幾多の歴史を織りこむで居るのである。今入つて來た西華門から東華門に至る間には、金殿朱閣が甍を並べて參内百官の轅を並べて居たのであらうが、今は破壞された石壁が兀然と立つて、其の堆くなつた煉瓦の下から苔蒸した高麗犬の石像が半ば埋もれて、金箔のついた柱の破片などが散亂して居る。其間からは荒々しい雜草が我世の樣に生れ出でて、紫禁山嵐に心なく靡いて居る。

故宮は紫禁城とも云ふ。南門は午門と稱して、門上に五鳳樓があり、樓内には文華武英の二殿を設けて居たと云ふが、今は見る影もなく只午門に連つた五大石橋が纔に殘て居る。東橋は武官、西橋は文官、中央は天子と制を定めて、其下の金火河はもう水涸れて葭が生ひ茂つて居る。

中橋を渡れば墓忠詞の址がある、其の内に只半ば砲彈に碎かれた八角甃がある、これが碩學一世の師表となり忠烈世人をして今狀敬慕止まざらしむる方孝儒の血蹟亭である。太祖に用ひられ惠帝の殿監となりて誠忠を擺でたるも時利あらず、あはれ成祖登極の詔を草すべく强いられて悲慟筆を地に投じたが爲め、無慚刑場の露と消えて一族門弟八百名或は流され或は刑された、然し誠忠は永久に空しくなる事はない、神宗の即位と共に文忠と諡して此の表忠碑を建てられた、廣い故宮の内、壞られながらも殘つて居るのは只此の一字許りである。悲歌の志士は幾度か此の祠前に涙を濺いだのであらう、旅硯の落首も其の古びた机にゆかしう殘つて居る。然し此儘に打ちあてたらもう數年と殘ることはあるまいと貴い遺跡が滅ぶる事がいかにも痛ましく感ぜられた。

東安門を出でゝ樓上の朝陽門を見る、革命の役に紫禁山から放つた砲彈に破られて哀れに柱のみが殘つて居る。支那の城塞と云ふものに初めて私等は立つたのである、四頭の馬車を横に並べて通ふ事が出來て 押し寄する敵に備ふる爲めに銃眼が 作られてある。脚下には蓮花か紅に燃えて、今し方旅客を運んだ驢馬が門の陰に休らつて居る。

此處で有るだけの驢馬八頭を駈つて 八人が乘つて小徑を歩ませ明の孝陵に向うた。私とMさんとは 馬車に乘つて廣い野原を次第上りに孝陵に向ふと素裸の支那の子供の乞食が「多謝々々」と叫びつゞけて追つて來る、馭者は振り上げた鞭策の末を 子供の前に鳴すか根氣よく逐ひ來る。

鐘山麓の孝陵

南京郊外に高く聳立して居るのは鐘山で赤兀の上に青い老松々綴つて居る、其麓に城郭の樣に甎壽を築き立ててあるのが明の太祖の孝陵である。長く引かれた 裾野は荒れ果てて其の間に尨大な象や駱駝や巨人や牛やの石像が 兀として立ッて居る、此處にも照りつける百度の日光を石像の影に座つて 旅客の合力を求めて居る乞食が居る、支那は至る處で 乞食に圍繞せられる國である。

孝陵は獨龍阜にある 舊靈谷寺墓に作られたもので馬皇后と合葬し懿文太子を左に祀つてある、四方曠野には あの南朝七十寺の過半があつた所らしい。

下馬碑の邊に馬車を待たせて 孝陵の内に入ると前面には日本の神社の拜殿か本殿樣の大建物の跡を見る。如何に 往昔の莊麗であつたかを見るに足る。然し長髪賊の亂に空しく灰燼となつて今では只茫々たる叢に秋萩が 音なく散つて何ものかを低く小蟲が騁いて居る。驢馬の一隊は此れに 立ち寄らずに谷奥の寺に詣でたとの事に私等三人は又徒歩で甎壽の下を傳つて 荒野を亘り谷川を渡つて尋ね入つた。

呑氣に野を耕つて居た 淺黄の服の隱者に路を手眞似で尋ねると

手眞似で答へる、柘榴の實が青く鈴なりになつた草葺の家から大きな支那犬が恐ろしく吠え立てる。水がだん〳〵潤れてもう響もわからなくなつた邊に石門を築いた寺がある。本尊加來の顔は何處も同じ樣に慈悲に滿つて其の前には白衣の道者が大きな瓢を割いた丸柄杓で岩間の雫を汲みとつて閼伽の棚に供へて會釋して茶をすゝめる。靜かな境である何れ由緒もある寺であろうがきくに由なく又廣い野原を辿る。

孝陵の前には黃い瓦や古器物を賣つて居る店がある梧桐の下葉で御土產にと紙に包めば何れも十錢が單位である外國人との商買はこんなものだと思はれる。孝陵を背景にして驢馬に跨つて紀念の撮影をした。もう正午にも間はないので感慨深い孝陵を後にして驢馬で歸る。

驢馬上の人影

蘇州以來幾度か驢馬を見た、幾度か驢馬の啼聲に旅愁をそゝられたが此處に初めて驢背の人となる。溫順なものである。背に置かれた赤毛布の鞍に長く垂れた鐙、私等が乘ると仰れさうになるのを馭者は例の「エーハ」の掛聲で長い鞭で逐ふと元氣づいて石や川を小まめに飛び越して走る。Gさんのは弱つて歩まない、それも其の筈、溝など飛び越すときにはその長い足が土地にふれる洋傘をさすと、南京城壁に眞黑く大なき乘者と小さい馬とが寫る宛然ポンチでもあるかの樣な私の姿に一人微笑むだ。

貢院

歸路狹い暗い町に大げさな門を築いた支那街に堂々と馬車を乘り入れて貢院にゆく。「起鳳」の額面は物古りて掛ッて居る、幾世の高官大儒も皆この起鳳の額に胸を躍らせ嬉しい情、悲しい想思ひ思ひに忘れがたい追憶を此の一面に殘して去つたのであらう。

門内は日本の約五町歩を越えて其間に隙間もなく號術が立て並べられて其の數二萬六百十二間の多きに至る。漸く一人を容れ得る位の室で、内には土壁が嚴重に、棚だけがある。天地玄黃の文字で各棟を區別して、各室にも嚴重に番號が附してある。これは明代の高等文官試驗場で、科考に合格したものゝ更に受ける試驗場で、これに合格すれば愈々擧人となり進士と進みて、榮達の門は此の小さい一室から開けて行くので、試驗の時には此の方三尺高さ六尺の室に一週間幽閉して決して外出をゆるさずに筆硯のみを與へて試驗に應ぜしむるのである。私等が登つた樓は試驗官の見張りの場所で、當時の大儒が此に座して雲の樣に集つて來る天下の秀才の希望の標的となつたのであらう、實に「五十若進士」と云はれた當時の狀がまさ〳〵と思ひ出でられる。

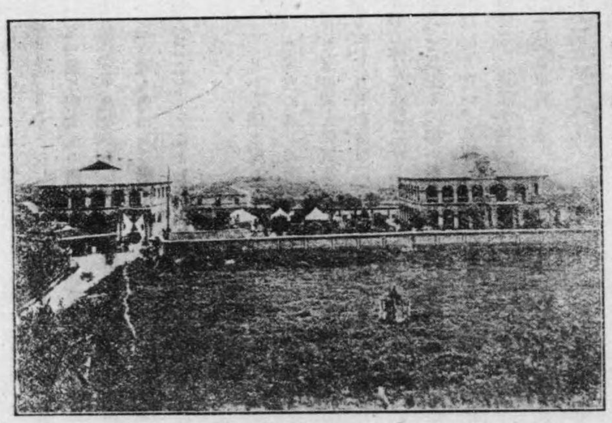
孔子廟詣で

午後は更に馬を代へて南京城内「孔子廟」に詣でた。その門は金聲門と云つて現今巡査の詰所となつて拔劍の巡査が護衛して居る。世界の大聖の廟が徒らに忌はしい巡査の詰所となつて居るのは餘り快い氣分にもなれなかつた。此地は明の太祖この壇上に於て卽位の式を擧げられた所とて、歷代尊崇された所、然し世變と共に今は詣でる人もないらしい、只物凄い迄に葵や野菊等が所得顏に蔓つて居る。

石階を登ると宏壯な孔子廟に至る。

帽をとつて入れば死の樣な寂寞である、然し凡ての物を超越した樣に中央には「亞聖先師孔子之位」と紫金色に光つて、其の左右には曾子、顏子、孟子子思子の四位、これに次で、由子、閔子、宰子、冉子、端木子、巖孫子、仲子、朱子、卜子、有子の靈位が整然と祀られて楣間には「萬世師表」の額を中央にし「生民未有」「與天地參」などと孔聖の德を頌した額が仄暗い天井に光つて居る。

たとひ世は革り時は遷りても、支那四百餘州はをろか、大八洲の隅々までも其の敎に生きて居る幾多の後學があるのに、何故こんなに頹廢に終らせるのであらうか、初めて我幾年の間幾百回となく讀むだ夫子その靈位の前に立つた私は未だ凡ての神社、凡ての佛閣の前に頓づいた時に經驗しなかつた嚴な敬虔の情にうたれて、二千年前の先聖の靈と交感する樣な氣がした。ふと氣がつくとはや一行は居なくなつて「萬世師表」の蔭から靈の樣な蝙蝠が羽音もなく柔かく私の頭上を舞うた。



南京大日本帝國領事館の全景

更に石階を登ると後に一軒の家がある。内には昌聖王伯夏公、裕聖王新文公、肇聖王木舍文公、詒聖王防叔公、啓聖王叔梁公の靈位、其の兩側には曾氏、孟皮、孟孫氏、孔氏、顏氏などの位が神々しく並べられてある。

此の左右に建てられた二棟は四千年來の大儒の靈位を祀つた所で、朱子、柳宗元等のは下位にあつて紫色新しいのを見た。

莫愁湖の紅蓮

馬車の込み入つた狹い水西門を出づると莫愁湖が眼前に擴げられる。五清里の周ある小さい湖で、池中に紅蓮もえて幽香脚下より湧き上る、南京第一の絶勝の地と云ふ。凡によつて居る紳士も多く見受けた。梁の時

雲光法師によりて 雨寶花を降らしたと云ふ勝地、「雨花臺」から吹き下す涼風は去るに忍びない位なのである。

此湖は明の太祖が、中山王徐達との圍碁に賭して達の有に歸したと云ふ。今も尙勝碁樓の名の下に昔を偶ばせる。月ある夜は湖になく蛙の聲に碁を圍むだ 面影もうかぶ。又一說に明太祖の寵姬盧莫愁の住居とも傳へて居る。私には三千の宮女を色なからしめる莫愁がこの池波に影を映したと思ふと、池の蓮も色添ふる樣に思はれる、末にかけられた莫愁の畫像に見入つて歸することも忘れはてた。

清涼山上長江を望む

此から轅を旋して城内に返り、門扇に妙な句を書いて赤紙をペタ〳〵と貼りつけた家の間を幾廻りかして、楚竹の叢を越ゆると、高く聳つて居るのが有名な清涼山である。半ば枯れかけた芝生に 靴を辷らせながら洋傘を杖に登る、二三町も登ると 薄濁ッた長江が山の間から光つて見える。抑へがたい額に汗の出るのも忘れて登れば、山上には 何もない、只苔蒸した 斷碑が淋しげに立つて居る許りで、望遠鏡裏に 長江は手にとる樣、何處の國のものかわからないが、碇泊して居る軍艦も見える、俗塵を交へない天風は捧る樣になつた襯衣の間に吹き入る。

此地こそ實に清涼寺の地で四百八十寺は 擧となく谷となく麓を並べ、鐘聲擧にひゞき香煙谷をこめて、揚昊 以來南京隨一の靈場として名僧知識も輩出し、吾々の祖師空海上人も此地にて修業せし處と思へば此地も何となく因緣深い地の樣に思はれる。

今殘つて居る清涼寺は中腹にあつて、門を入れば 樓上には結跏趺座した一禪僧が香の烟の立ち迷ふ 暗い室でくぐもり勝ちに鐘をついて居る。十坪位の狹い 寺の庭に床几を運むで、南京で有名な清泉から汲むだ玉の樣な水で 湯を醫した。彼僧がとり出す神圖をかしな手振で振れば上々吉、「四百八十寺過眼成墟常嵐影江光猶有天然好畫圖」と燃つた額を立ち寄つて覗き込む。

迷ひ兒

南京は思出深い地である、僅か二日の遊覽が私には長い旅の樣に思はれる。午後十一時に出る汽車に乘るために九時に實來館を出た。案内者を放れた私等に恰度杖をとられた盲人の樣に一町と歩かない内に不思議な路地に迷ひこむだ、街燈が一つもない支那街は地獄の樣な恐しさがある。薄い光の下には 人影は見ゆるが尋ねるにも詞が通じない、遂に實來館に引きかへして 俥を引つて走らせると路にまた迷兒になつたGさんとKさんが 闇の内から聲かける。とやかくして居る内に腕車を儆つて 來たのは榮氏で、實際地獄で佛、遂に一人曳に百幾十斤の大の男が 二人乘りこむだ、車夫は曳々聲で駈け出した、そして何か闇の間に明るく見えた 建物の前になると一聲かけて勵まされた、と思ふと昨日下車した 小さい停車場についた、知らない處とは云ひながらほんとに 目と鼻との 間であつたのが をかしい。後できけばあんなに急がせたのは 支那官憲に見つからないため、見つかつたが最後、革命に關係でもある 樣に思はれて面倒になるからと、榮氏は笑はれた。

不自由は外國の常とは云ひながら 汽車の札一枚もかへない、榮さんは急に劉さんに門鑑をとりにやつて 下關驛まで來て吳れた、若し來て 吳れなかつ たらとても 汽車の札もかへ なかつたでしやう。上海で用ひた金は此地では もう通用しない、それと云つて兩替屋もない、出發の時間は 切迫する、遂に改札口で、一圓に就て四五錢宛の割引をして 切符を買ふ事が出來た。

私等が乘つた 最急行列車は 大陸の闇を眞直に かけぬけて 東に走る。「チャイニイバゾア」と底拔けした聲で 茶賣りの聲が時々眼をさますのが癪に障つた。——大連通ひの汽車の内にて稿——

七月二十七日

上海へ

蘇州で夜汽車の窓は白むだ。「蘇州は支那第一の美人の產地です」と劉さんの言葉を思ひ出して見ると、支那内地長江と同じ色に濁つた池や河の間に玉の樣な水が流れて居る。午前七時に 上海の停車場に着いた時には長い旅でも終へて故鄕にでも歸つた思かしたのであつた。

西洋料理の初見參

英語科生徒主催の旅行だけに是非とも一度は西洋旅館の空氣も吸つて 置かねばならぬと云ふので上海第一の旅館「アスタアハウス」に朝食にゆく。汽船や 汽車の内で 汚れた「カラ」や「カウス」を新しくし鬚を剃つたり、着替の洋服を出したりする。苦熱に搾り出された汗にしみて 居た白服を脫きすて、折目も際やかな服で先頭に立たれた金子先生の後に ついて何だか嬉しい氣持になつた。

凡てのものが田舍出の 私等には 好奇心をそそら ないものはない。「四馬路」の辻に四邊を壓して 巍然と建てられた七層樓を見上げた時、これに入るかと 思ふと暫く躊躇さるゝ樣である。階段を上る、帽子を受けとる「此方へ」と給仕人が案内して吳れた 食堂は目もあやに裝り立てられた、食卓は 幾十となく並むで此處彼處には紳士や淑女が陣どつて 色の黃い淺黃の服を着た異樣の一群に不思議さうな目を 拋げるのである、獻立表が配られる。廣島の西洋料理屋で「オムレツ」や「チッケン」に「ナイフ」の使ひ方を練習した連中も名からして解らない。何でも先生に注意するのが 第一と先生七分に料理三分に眺め入る。白い「エプロン」の支那人の給仕は、『矢張日本人は軍隊式だ食事にまで規律正しい』と感心した 樣に瞠るのが可笑しよりは 恥かしくて冷汗が流れる。心配料大枚一ダラを拋げ出してホット一息ついて外へ出た。

後できくと氣早の連中は前に出した 咖啡を「ソース」と感ちがへて打つかけて意外の失敗をやつたと一つ話になる。

上海出發

今日は上海を出立せねばならぬと思ふと泥河の内にころむで居る支那船も甜瓜を食ツて大道に素裸で平氣の支那車夫も何となくのこり惜い樣な思がする。ふと氣附くと並木のポプラの葉が物凄い音をして唸ッて居る。どうも黄海の波が案せられると皆不安な顏。突然爆發した樣な一陣の風が過ぎた、と思ふと品よく被つたMさんの麥稈帽が空に舞ひ上つて泥川の内にヒラ〳〵と落ちた、さあ大變ときまり惡さうに頭をかいて居ると、其處に立つて居た四十格好の一支那婦人が裳の裾端折つて折から干潟になつた泥の内に脛まで沒して拾ひ上げて呉れた。服裝こそ汚ないが矢張仁義は生命があると皆々感嘆する、豈はからんや五錢の謝金に。これでは足らぬと手を振たのには二度吃驚。

上海の天文臺長の豫言は不思議な程適中した、來る時には鏡の樣であつた吳淞江も濁つた波頭が泡立ち碎けて波止場に横づけになつた私等の乘るべき榊丸の三千噸の巨體がブラ〳〵と動いて居る。

午後二時出帆の榊丸は三時になつても出帆しない。本朝五時に入港すべき大連の連絡船神戸丸は波濤の爲め機關を損じて大洋に漂流して居るとの無線電信。もう飲むべき船暈の藥もなくなつたので不安な顏で甲板に立つた。

漂流する積りかいつまでも〳〵石炭を積みこむ。遂に三時半と云ふに上海棧橋を推進器の音も勇ましう岸を放れた。岸からは見送りの人が帽を振る。甲板の上からも手巾を飜す、親しい友を送るのもあらう、最愛の妻に見送らるる若い人もあらう。北歐の天地に歸心矢の如き人もあらう、此等の凡ての思を遠慮もなく引き劈いて船は東に向ふ。私等が振る帽に應じて吳れるのは白い服の井上氏と淺色の服の大村氏であつた。

けたゝましい聲が岸に起つた、爆聲が吻凄くなる、此れは此の一等船室の殆全部を占めた南滿鐵道主催の上海觀光團を送るための支那名物の爆竹であつた。

榊丸は南滿鐵道會社が善美を盡して西比利亞鐵道に向ふ旅客を吸收する爲めに造つた三千六百餘噸の最新式の汽船であつて三等の船室でも設備完全して非常に乘心地よい船である、伊豫丸の豚小屋的の船室を思ふと實に有難い。

暴風の浪路

河に從つて船は流れてゆく。吳淞江の内さへも濁流船艙を洗ふて甲板の上に立てば殆呼吸を塞づる程の烈風が吹く。

上海波止場が漸次薄らいで、崇明島が水平線上に打ち曇つて見えそめた、これからが外海である、山の樣な波にもまれて三日のうき寢の夢を結ばねばならぬと思ふと、暮れゆく長江の落日も見る勇氣はなかつた。十一名は思ひ合せた樣に同じ處に集つて、旅嚢や水筒等雜然と轉つて居る所に泡立つサイダーを互に乾杯して

航海の平安を祈つた。

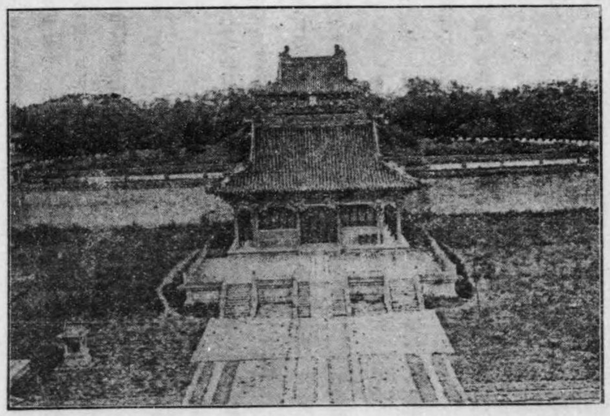
日は暮れて月無い空には青白い星が輝いて、惡魔の樣に吼える荒波は二丈以上もある上甲板に立ち上つて雨の樣に飛沫をそゝぎ、帆綱に唸る風の音は男らしい海員の生活の誇の樣に震ふのである。

船には決して醉はないと自信した私は元氣なGさんと「ヨイソラ」と平氣な調子で甲板を歩いた、然し大地震の時に避難でもする樣に一波毎にゆら〳〵と仆れようとするのを助け合つて長い甲板の上を歩いた。

『散歩ならよろしいです』

と船員に許されて一等室の長い高い甲板を傳うてありく。一人の影も見る事が出來ない、只頑丈に框を入れられた電燈が朧に其の邊に散亂した安樂椅子に照つて、時々白い服のボーイが靴音を盜む樣にして過ぐる外にけすべくもない寂寥である。

何となく不快の氣が胸からの腹から頭と漸次にこみ上げて、もうとても歩く事が出來なかつた、辛うじて欄干によつて階段を下りたが二度この階段を昇る事は出來なかつた。



奉天北陵正殿

廣い三等船室には私等の外には支那の商人の夫婦が居た、その側に大きな行李で城壁を築いて居る日本の寶石商人が居たが、何れも船暈の苦しい表情が眉宇に動く。

船の中央で最も動搖の少ない處に仆れる樣に轉げこむで、そして空氣枕を力にして柱にとりついた。

上海埠頭の城の樣に浮むだ榊丸も今は木葉の樣に怒濤に翻弄せられる、波頭に乘つた船が奈落の底に落ちた時程やるせない氣になる事はない、重い苦しい病に罹つた經驗をもたない私には此れが殆ど死の苦痛斷末魔の惱みではあるまいかと思はれる。

乘り込むだ時に買ひこむだサイダの幾ダースは繩もとかれずに空しく光つて居る、芭蕉實や苹果は籠にもられてあるが、誰一人として手をかける人もない。側の支那人の婦人が突然苦しい聲でボーイを呼

むだ。嘔吐の聲が惡鬼にさいなまされる亡者の悲鳴の樣に靜かな室に流れると、我等の誰彼も今迄の元氣もどこにか弱い哀れな人となつた。もう其の瞬間は私には何も考ふる事も出來ない、何物もきく事が出來ない、何物を感ずる事も出來ない、只この苦痛な一刹が一秒が、少しでも早く過ぎよと云ふ心ばかり、三十分毎に艙の方から響く鐘を數へて只枕を抱いて汗ばかりになつて横はる。

七月二十八日

船暈の一日

七月廿八日と云ふ一日は私等の多くは人間としての生活をもたなかつた。瀕死の病人と言ふよりはむしろ死者としての一日であらう。

顏の四角などこか間のぬけた樣な支那人のボーイが、

『御飯はいかゞ』

と重苦しい日本語で尋ねたが私はそれが不要だと答ふる事も出來ない、向きかへりもせず力ない手を振つた。

然し一行にも豪傑は居た、且さんは其の並べられた十一人の食膳の前で平氣で飯を食つた。それが午餐であつたさうだ。

今日一日、一滴の水も一塊のパンも一房のバナナも口に入れず昨夜ねついた其の儘の床で起きもやらずに廿四時間の一日が私には苦しい一年の樣に思はれた。

七月廿九日

回想す山東の一角

晝とも夜とも生とか死とも別ちない一日は過ぎて、『右舷の小さい船窓からほのかに私の生をだんだんと引き返すものがある、私は蹣跚たる足を踏みしめて甲板に上つた、冷たいオゾンに富むだ海氣は二日寢續けた青白い顏をなでゝ蘇生させる、例の寶石商人は甲板に出て拭つた樣な蒼天の落ちる彼方に薄く雲の樣に棚引いた彼方を指す。

『あれが山東省の一角ですよ』

と幾度となく黃海を渡つてこんな暴風雨にも經驗のある彼は昨日の事も忘れた樣で、その山東の影も何の興味もない樣に指した。

山東の一角、其處にはカイゼルの威風輝いて獨逸の國旗は山も河をも靡かして居るのであらう、そして私等が渡つて居る此海、黃海は去にし日清の役に幾多の忠魂を葬むつた處であると思へば、その澄み渡つた大海の一波一浪にも同胞の叫びをきく思がする。

急がしげに通りかゝつた例の四角な顏のボーイは笑ひながら言ひすてゝゆく、

『えゝ、珍らしい暴風雨でしたよ、乘客の内に御飯をあがつた御方は只三人でしたよ』

と云はれて、酔つたのは自分等ばかりでなかつたと思ふと何だか味方でも得た樣にうれしい。

風は大分風いで餘勢にたつ白波も今は快よい航海の花となつた、一行も追ひ追ひと起き上つて、波の靜まるのと大地が近づくのとで元氣づく、片隅からは謠曲の聲が湧く「俊寛」である、こんな大海の眞只中で謠ふのは「俊寛」が一番よい。波の音に合せて唸るには「俊寛」に越したものはないとしみ〴〵感ずる。

薄靄の中から現はれ出る樣に遼東の野が近づいた。上海で見たやうな渺茫たる綠の線の平野ではない、赤土の山が兀として立つて、松かしら黑く斑を染め出して居る。

大連に着く

十一時我々の運命と苦痛とを乘せて大海を渡つて來た榊丸は長い汽笛を遼東の野にふるはせて大連波止場に入つた。高く聳えた港口の尖塔も長い突堤も皆露人の經營によるものだとの事、廣い深い港、後には山を負た然も遼東唯一の不凍港ときいた。大連、そして我南滿經營の中心となつて居る大連が意外に淋しかつたのは心細い感がした。棧橋には上海觀光團を迎ふるために來た幾多の日本人が長く連つて居るのを見て初めて國へ歸つた樣な氣持になつて頓に元氣附くのであつた。

昨日船の上からうつた無線電信はあの嵐にもかゝはらず旅館についたのであらう、恩師杉森先生からの手紙を甲板上で受取る。

民政廳から吾々の爲めに御出迎下さつた△△氏と吾等の先輩○○氏とに導かれて「岩城ホテル」に入つた。

かなり大きな旅館である。門前には折から乘りこむだ東京角力の定宿となつて「梅ケ谷」の名前が麗々しく掲げられてある。

門前には矢張り上海で見た樣な俥の蹴出しに居眠つて居る支那人のものよりに呑氣さうに見える。

大和ホテル

午後一時、まだ大地がフラ〳〵と動く樣な氣もするが、うれしく拾四臺の俥を威勢よく走らせて大和ホテルの玄關につく。

南滿鐵道の經營に屬して乘客を本鐵道に吸收するために設けた旅館で一百十三の客間は何れも美をつくしたもので、正面には宏壯な玄關がある。内には最新式の凡てのものを用ひ、娯樂場としては劇場がある、頭上には音樂隊の席が設けられてある。建築費實に壹百萬圓とは驚かれるが八月一日開店後收支償ふやは疑問としても日本領土の門戸にこの巍然たる旅館を見るのは遙かに肩身の廣い感がした。

大連市の下瞰

二百五十尺の階上に登つて見渡せば大連市街は掌上に指す樣である。この旅館を中央にして大道四出し、並木は黑く其の間に二線を引いて居る。私等の前に廣げられた大廣場を基本として放射狀につくられた街道は非常に目新しく思はれた。所謂Central systemで彼の露國大藏大臣ウィッテ氏の獻策によつて東清鐵道會

社重役ケルベッチ技師によつて完成せられたもので、東西一里南北二十五町の整然たる街、露國式に支那式を加味した家屋は上海でも南京でも見らない趣がある。遙か北方には今渡つて來た大連棧橋が黑く突出して、其の邊に一際高く見えるのが露西亞町で、一種異樣の色彩を大連の街に與へて居る。南方赤兀の山から長く引かれた裾野にも整然たる街路が造られて、遙かの高地に日本式の神社の甍を見た。

二三日後から開店すると云ふので店員や掛員は忙しげである、その間を客用リフト（昇降器）に乘ツて波頭に乘つた船が沈む樣な氣で六層樓の上から下つた。

大連第三尋常校

滿鐵本社の大門から入つて地方局長久保氏から萬事の便宜をうけて最新式に建てられた大連第三尋常小學校を視察した。

非常に堅固に出來た校舍で、內地の小學校に比べて實に美望に耐へない、二十一學級一千七百の兒童を收容して居るが、それでも尙不足を感じて第四小學校の設置準備中ときく、年一年と增加する邦人の勢力を目擊して愉快に耐へなかつた。玄關を出ようとすると、右側に血の通つてるやうな巨虎の剝製が見えるこれが日露戰爭の初期に新聞紙上を賑はした大連西公園の大虎で、日本の少女を食ツたとか食はなかつたとか云はれたものである。設備は非常に完備して居るが、勞働は苦力のすべきものであると云つて忌避する傾向があるのが一番困ると語られた。

公學堂參觀

公學堂を參觀した。福井縣人淺井氏の元氣な經營振りは少なからず若い私等の心を鞭つた、明治三十八年此地に來られて支那の兒童七八人を收容して教育された當時の寫眞等を見ると、公學堂も未だ實に微々たるものであつた樣である、然も今は四百六十名の生徒を收容して着々其の歩を進め、本校を卒業して工科學堂等に入學したものは成績優等であると。公學堂は純粹な支那人教育で生徒は八才から十五六才位迄の普通科は日本內地の小學校に準じ、十五六才より廿四五才迄を速成科として日常普通の教育を施して居る、圖畫や習字等の成績品を見ると實に驚くべき程巧なものがあるのである。

『支那人教育も近頃は少し飲みこめました、隨分面白いですよ、私等は當局の反對あるに關はらず、あの寄宿舍に生徒と寢食を共にして居ります、現にあれは支那民の寄附になつたものですよ』と指さるゝ方を見れば運動場の向には幾棟か並むだ支那家屋が見えて居る、

氏は非常に愉快氣に、

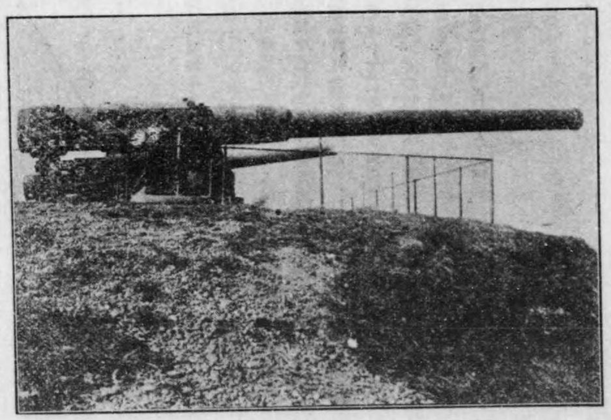
『折角御出でになつたのだから支那人の唱歌を紹介しませふ』

とて唱歌室に入つて先づ第一に「君が代」の國歌を歌はせ、次に新しい譜に合せた支那唱歌を唱はせられた、二十四五にもなる生徒も從順に七八才位の子供と一緒になつて平氣に唱ふ。

殖民地の教育、殊に外國人の教育は非常に趣ある、そして重大な事と感じて、韓地か滿地かの新しい空氣の內に生きたい樣な望が切になつて來た、講堂の正面に揭げられた「化民成俗」の扁額は畏くも威仁親王の御肉筆で、本校の方針、淺井氏の理想の樣に見られた。

それから滿鐵經營の大連中央試驗場を見た。本校卒業生岡田氏もこの內で毎日其專門の學に就て研究を重ねられて居る。此は滿洲物產の利用發達を計る爲めに設けられた研究所である。殊に釀造や機業部は規模の大なものである。

其の直ぐ裏にある工業學校も南滿鐵道會社の經營で設備した學校であつた。



旅順東鷄冠山望臺山上の巨砲

電氣遊園

第四　旅行日誌（其の貳）

大連の夕は凉しい電氣遊園に過した。少し高地に作られた公園で、電氣裝飾は晝のやうに照つて、內には活動寫眞の定設館や、喫茶店や、ビーヤホールや、夜の大連の賑を此に集めて盛である。白い浴衣に下駄音高く此の邊に漫歩して居る同胞を見ると「新日本」と云ふ感が殊に深く刺みこまれた。

七月三十日

旅順へ

大連發一番列車の二等室に乘りこむだのは私等十二名の外に歩兵聯隊の下士十四五名と今日の休日を旅順に遊ぶと云ふ滿鐵社員の四五名であつた。上陸以來寸暇もない疲れをも忘れて幾多同胞の血と骨とを以て購ひ得た遼東の野色を見ようと窓に倚つた。一丈にも及びさうな高粱は線路のすぐ側から生ひ上つて瑞々しい青い穗を風に靡かせて居る。上海邊では既に歐化して皆散髮して居たが此邊ではまだ大切さうに殘して居る、見るからに汚ない支那人が數十匹の黑い豚を長い鞭で、何か物に驚いた時でないと出ないやうな聲で岡に逐ひ上がツて居るのが見える。何かの故事にある

遼東の豚と云ふ事が面白く胸に浮ぶ。

左方の高地は赤禿の山や僅かに草を被つて居る草山が一刻一刻に其の形を變へて旅順の山に續くらしい。

『この次ですよ』

と滿鐵社員に注意されて旅裝を整ふる間もなく旅順の停車場につく。旅順々々如何に深い感興を呼ぶ名であらうか、幾度我同胞はこの名の下に血を流し骨を碎いたであらう。この名の下で私等は幾度涙を搾り幾度湧き立つ樣な歡聲をあげたであらう。

プラットホームに一年以來溫容に接しなかつた杉森先生を見た時には親にでも會つた樣な氣持である、工科學堂の生徒も二人總代として出迎へて呉れた。民政廳から特に派せられた白服の官吏の斡旋に依つて五臺の二頭立の馬車は停車場前に並んで居た。

白玉山

停車場の上に巍然と屹立して居る白玉山に登るには迂餘曲屈した大道が蛇の樣に上つて居る。

『ロシヤ人でなければこんな大きな事は出來ない、日本人の仕事は一時的だからいかない』

と杉森先生は慨嘆せられる。

此の峠道に馬車はかゝつた。何れダイナマイトで破壞されたらしい堅岩は岩丈な露西亞式を示して居る、馭者の物恐ろしい樣な鞭の響につれて牛を使ふ樣に巧に峠道を曲り曲つて登る。白い編輻傘をさした馬車が私等の直ぐ頭上を通ぎる、遂に馬車は四百尺の白玉山頂に止つた。

遼東の野に護國の鬼となつた我同胞の靈を祀つた祠に恭しく禮拜して、すぐ其の前面に聳立して旅順港の標的の樣な花崗石造の一大圓塔表忠塔に登る。一階二階と喘ぎ喘ぎ上る、旋回梯子は十回二百十八尺の高所までも紆り上つた。

最高の臺は海拔六百二十五尺、旅順一帶は指顧の間にある、旅順港は東港、西港に別れて東港は廣くは見ゆるが非常に淺い、東港の沿岸から建てつゞけられたのは旅順舊市街で、その西港に接したのが新市街で、露人が日淸戰役後に經營したもので靑いアカシヤの蔭に大厦高樓が隱見して居る。廣瀨中佐の名と共に忘れられない港口は黃金山と老虎尾半島を吹き破つて參百尺の靑い水が外洋に開けて居る所、其の兩山から鴉翼をなして迎つた赤禿の山は皆血に染つた古戰場で其の最も高い處、雲際に突塔が見えるのはこれ、蜀靈山である、この塔で今朝汽車の内で乘合になつた五十聯隊の將校下士と一緒になつた。彼等は砲臺の戰術的研究のために來たので、私等には無二の幸福であつた。

紀念館

表忠塔より斜道によつて舊市街に入つて永久に其名も朽ちぬ大山町の街道に蔽ひかゝつたアカシヤの下に輕く馬車を驅つて旅順要塞戰紀念館を訪ふた。

正面には三十三瓣の重砲が巍然と横つて、あの烈敵くあつた砲擊の昔を語ツて居る。二〇三高地陷落以來其の頂に引きあげて巨彈を旅順市街及び軍艦に浴せかけて敵の膽を寒からしめた我軍にとつては永久に忘るゝ事の出來ない紀念である。

紀念館はもと露國將校集會所で、我軍の巨彈が破つた天井はすさまじい光景を呈して居る。内には戰爭當時に於ける百般の軍需品砲彈、軍刀から食糧に至るまで丁寧な說明を加へて陳列され、旅順の各砲臺の模型、戰鬪の寫眞、油繪等當時苦戰の狀をまざ〳〵と思はしめる。正面には開城の際に於ける大山元帥、乃木大將へ賜つた畏くも優渥なる、先帝陛下の詔がある。

此處で五十聯隊の一行を待つ間に、工科學堂から仕出された旅順の米の辨當をすます。此から二十四五臺の二頭立の馬車を連ねて旅順背面の山に蛇行した軍道を登る。赤禿山の間からは人の骨の樣な岩がすさまじく現はれ荒蕪の野には小さい糸の樣な淸水が流れて居る、この岩角に幾千の骨が曝され、此流れに幾多の君國に殉した貴い血が流されたのであらうか。

松樹山砲台

馬車は眩する樣な岩角を走つて松樹山の砲臺についた。只見る、砲壘の殘骸は實に身の毛もよだつ許りで、ペトンで堅め、一丈にも過ぎた堅壘は我軍の爆發に遭ふて微塵に碎けて、破片は四邊に散亂して爆發後の櫻島を見る樣である。大地の底から掘り拔かれた樣な外濠は、今も尙鬼啾をきく思があるが、當時我が白襷隊の決死の勇士の强襲に占領はせられたが、機關砲の側面射擊の毒彈の餌となつて薙ぎ倒された同胞の尊き遺骸を以て埋もつた處である。傾斜面に一線二線三線と今も尙我軍の人力を超越した强襲によつて奪い取つて、十字砲火の間に築いた散兵濠が十年の今日も尙新しく殘つて居る。其の寸尺の地も皆血で贖ふたものであるに今は辮髮の支那人が何の感慨もなく年々に高粱の畠と化してゆくのである。三十聯隊から說明のために特別に派遣された中尉は一々地形を指示して感慨深い音吐で當時の戰況を詳かに語られる。五十聯隊長を初として研究に來た將校下士卒は皆起立して肉彈又肉彈の腥風野に充ちた當時の光景を偲ぶ。

老鐵山上に落ちかけた滿洲の赤い夕陽は征衣の袖に昔ながらに照り輝いた。十年前の阿鼻、叫喚、只遼東の天風輕く帽子の日覆をひるがへす。

二龍山砲台

馬車は又山脈の頂五百尺の高地を輕く馳せて、二龍山の砲臺に止まる、永久工事が完成した砲臺だけあつて規模も非常に大である、然し今は我軍の苦心した爆發に遭うて赭石縱横で戰前の面影を偲ぶ事さへ出來ない位である。もとより備砲も盡くとり去られてより砲彈の一片も見當らない。たまにペトンの破片の間に見出されるものは皆赤黑くなつて十年の露霜は血と肉とを凍らしていかにも古戰場と云ふ感が深くなる。我軍が攻めこむだ二條の溝道と、その

爆發した外岸は今も明かに見られる、溝道は淺いだけ如何に我軍が苦心したかゞ偲ばれ、爆破は三丈にもあまる大塊のペトシが壞れとむで居るのでも如何に吾軍の火藥の力が猛烈であつたかが思はれるのである。

今は弔はれざる白骨、消えやらぬ血汐などは、見るに由ないがその幾多の爆發の斷片に對してより以上の凄愴の感にうたれ、思はず祖國のために襟を正し、幾多の英魂に對して感謝の新を捧げざるを得なかつた。

東鷄冠山

の砲臺に汗になつて肅々と登る。此方面に於ける高地での本防禦線の第一で、それと遠くない望臺とか、彼の櫻井中尉の靈筆によつて描き出された肉彈の古戰場である。

望臺は露軍がこの方面の望臺をこゝに置いたからの名稱で今はその山嶺前方開展地に向つて一門の大砲がそのまゝに据えつけてある、多くの要塞の内で現に砲の据えてあるのは此の山ばかりであつたかは知らないが、一層深い印象をえた。此砲臺は如何に攻擊しても、攻擊しても遂に陷ることが出來ず、とても爆發も出來ねば、强襲も出來ず、只肉彈につぐに肉彈を以てした處である、其のきり立つた破岩の散亂した一路に立つて此れならばとても人力で陷す事は出來なかつたらうと思はれた。

私は赤くさびた砲身に登つて中尉の講話をしみ〴〵ときくといつか想はず十年の昔にとぶ。

「見上ぐれば望臺は谷一つを隔てたる彼方に空を摩して峙てり水を啣まんと欲して腰を捜れば水筒は已になく吊革のみが足に纏つた、生兵の聲は次第に靜まりゆき、これに反して憎き敵の光彈の光と機關砲の響とは愈々烈しくなつた。今は靜かに兩脚をなでゝ未だその傷かざるを知つてより再び立つて軍刀の鞘をすてゝ白刃を左手に杖ついて夢中にこの山を下り周壁をとび越えて望臺に攀ぢ上つた」

——肉彈より——

吾が櫻井中尉が左手に白刃を杖いて攀ぢ登る光景がこの背景に對して活人畫の樣に浮き出し爆彈見事に命中して火事場の樣な散兵。濠板がとぶ、土囊が吹き出す、頭がとび足が捩れる、火焔は黑烟と共に煽り上つて物恐ろしい赤き火は中尉の顏を照した物凄い爆裂戰の當時が躍々と現はれる想がする。恰もよし遼東の微雨は亡鬼の涙かあらぬか、音も無くしと〴〵と降りそゝいだが杖いた傘をとりあぐる人さへもない。

望臺から望むと右手に低く御供物を上げた樣な山腹の砲臺、これが幽靈砲臺の其の名も高かつた東鷄冠山の北砲臺である。

此砲臺は開城當時に完成した砲臺で第四十四聯隊の勇士が惡戰苦闘して乘りとつた山で、堅固に出來た砲臺の内部を見る事が出來る。

對岸の一角破壞された所に立つて第五十聯隊の將校は感慨深い調子で語られる。

『此處は鮫島師團に屬した青木旅團の一員として私は攻擊しました第一線には强力な電流を通じた電線工事があるのでしやう、それを夜分になつて、照射する探照燈を避け〴〵して切斷してそして石を帶にくゝつて辛うじて柱にかけて、それを腹這ひながら引き倒すのです。そして一ケ所破れたので四五人宛突進すると皆將棋倒しにやられる。辛うじて外岸に達するも渡る事が出來ずこの胸橋に飛び込むのです、すると此處に備へてあつた速射砲で皆やられて仕舞ふ。それから決死の工兵六名を募つて爆破の坑道を掘らせたのです、處が此方の鎚の音に合する樣にどこかで槌の音が聞えるのです、よく〴〵聞くと私等の下に敵も坑道を作つて居るのです。大膽でしやう今すぐとも爆破されるかもしれないのを平氣で掘つて居るのですもの。後にはどうせ爆破を豫期して死んだら死骸の一片でも止めて置きたいといふので足に綱をつけて入れたのです。すると十二月の下旬でした、寒風の吹きまくる夜でした凄まじい號聲と共に此の一部が破壞されました、敵が先鞭をつけたのでした、もう足の綱はどこにとんだやら遂に一片の肉も見出さなかつたのでした。然しこれが爲めに此部分が露出して初めて永久的工事のあるのに吃驚しました。

旅順二百三高地標識碑

そこで油煙ぜめにしやうものと布に油をつけて此の一部から投げ入れたのです、すると御覽の通りの穴ですから露兵もたへかねて死物狂にこれに乘じて突進して遂にいたましい地中戰が初まりました』地中戰、何と恐ろしい名であらう、地獄の有樣修羅の光景を此世に見ることが出來るのである。私等はその六名の英魂に依つてひらかれた穴から入つて眞暗いそして凹凸の多い道を進むと思ひなしか、腥い氣が胸に迫る。

當時露軍の明星となり軍神と仰がれた勇將コンドラチェンコ將軍は空しく此の砲臺の露と消えて、孤城落日、露兵の膽を沮喪せ

しめたのも此地である。

滿洲の黃昏は新市街の凹地から次第に翼を擴げてもうとつぷりと暮れ果てた、高原の夕風に征衣の袖を吹かせて駒の嘶も勇ましく幾曲りとなく曲り曲つて、滿人の砧の聲が小さい小溝の中から起る田舍道を、白塵を立てて工科學堂の門に引きつけた。

――工科學堂にて稿――

七月三十一日

爾靈山上の懷古

工科學堂の一夜は蚊の多い寢臺の上に明けた。「十時迄に爾靈山上に集まれ」との聯隊からの電話を「九時に集まれ」と誤つたのか、氣を利かせたのかで取りついだので、例の馬車で大急ぎで高粱の間を縫ふた道を走る。朝露繁き郊外の荒野に十數頭の馬に草かふ馭者が見える。此だから旅順のこの小さい町に貳百臺の馬車が動くことが出來るのだと思はれた。馬車賃は非常に安く工科學堂から舊市街まで約一里の道を僅か十五錢で走らせる。それが一人乘つても、四人乘つても不關焉として居るのは何となく大陸的の處が偲ばれる。公園のポプラの下蔭に白馬を勞はりながら客を待つて居る趣や、靜かな停車場の夕闇に仄暗い車燈を點じて呑氣に眠つて居る馬車の趣は內地のどこにも見出すことの出來ない悠長の趣である。爾靈山の中腹で馬車を駐めて徒步で登る。海拔二〇三米の高地は半島の內に巍然と聳つて蛇の樣に迂廻した大道は山の尾を縫ふて通つて居る。

『旅順も今年の樣に暑くては避暑地にもなれない』

と杉森先生が櫻の洋杖を一振り振て語られた。實際海面から吹いて來る涼しい風は皆此山に止められて、燃ゆる樣な反照に脚下の岩も鑠けさうである。その間に紫に咲いた愛らしい花も疲れの色に凋むで居る。先生は一寸蹲踞して其の一枝を摘みとつて、

『これは滿洲で名高い香草だよ』

と例の調子でその名を敎へられる。敎場で「大國民」の講義をきいて居た時と同じである。工科學堂へ來られても矢張り昔の高等師範の杉森先生だとひたすら懇しく思つた。

八合目の茶店から急勾配を一つ上ると山上に達する。一草も生へて居らず、一木も立つて居ない坊主山で涼を入るべき影もない只この山の頂であつて、そして全旅順口の最高地であるこの頂に、雲際に聳えた高塔が立つて居る。その小さい影が私等の集まる宿である。

「爾靈山」との乃木將軍の筆蹟は千古に朽ちせぬ形見で、そしてこの高塔に止つて「萬人齊仰爾靈山」の吟詠はこの三字に對する豫言であつたかもしれない。

遠がに旅順の死命を制するだけあつて、高塔に立つて兩眸を放てば、金城鐵壁の旅順の要塞は指呼の裡に現はれて來る。實に標高二〇三米と註される。

南の方雄大峻峭な山容巍然として一帶の視界を遮斷するのは我軍の幾多決死の勇士の膽をして寒からしめた老鐵山の砲臺で、東に蜿蜒として城頭、饅頭、鷄冠山の砲壘があり、其末は旅順口の西港を裏んで威遠砲臺があつた所である。此れと相對して僅か參百米の水を隔てて嚴然たる砲臺、それは名も高い黃金山である。それより西に連るは白銀山、東鷄冠山、盤龍、二龍、松樹山の故壘、その中を隔つる三里橋川を橫切つて、視線を延長すれば椅子山、案子山となつて遂に我足下に歸り來るのである。又西、洋頭灣水も幾重の山の彼方に輝いて見える。何れを見ても山又山が二重三重に折り重つて恰も鼎鏤の綠をなし、其間殆ど一寸の隙もない。旅順は流石に難攻不落、金城湯池雲梯もよづべからざる天險といふことが今此處に來て初めて首肯することが出來た。それに彼の築城の名將、ヴエルナンデンが知惠を搾り肝膽を碎いて精緻の思慮を以て築きたてたのであるから、ツアルがセバストポールと憑み世界の識者も亦二年三年は大丈夫と思つたのも無理はない。

二〇三高地は此等の內で敵にとつては最も重要な位置で、一度此處を占領されたら何れの砲臺も頭上から見下されるから眞に活動が出ない、此は露將クロパトキンが此の地巡視の際是非とも此地に砲臺が必要であると見て、新たに築き、最も嚴重に守らしめた處である。約束してあつた九時は過ぎたが、案內して呉れる將校の影は見る事が出來ないので、已むなく小さい塔の陰によつて谷合を見下してその馬車の影を待つた。

その暇を利用して私等は持から來た寫眞師に頼むで塔を背景にして紀念撮影をし、小さい支那の子供は持つて來る繪葉書を求めて故山の友に音信をした。

正十時高塔より南方の重砲兵觀測所の前で昨日の中尉殿より二の三高地占領の戰鬪談をきく。前面の海鼠山、高峰山は總督府の造林のために淸い色が見えるが、當時の散兵濠の跡は歷然と殘つて居る。

第五十聯隊の將校の內で二〇三高地占領の當時小隊長として雄々しく働いた三五中尉は聯隊長の命に依つて悲壯な實戰談をされる。

『幾萬同胞の英靈の前に立つて十年前の戰況を諸君の前に語るを得たる光榮をよろこびます』

と立たれた雄々しい面影の間には又耐へ難い懷舊の色が動いた。

『私が小隊は此處に排列しました。岩角を攀ぢ登ツて此處に頭を出すが最後海鼠山や、立峰や、あの今高塔の邊から三面砲擊をされるので皆引き續いて倒れ、八十名の隊は十數名となりました。どうしても登ることは出來ないと云ふ傳令を聯隊長殿に送ると皆狙擊されて倒れて仕舞ふ。早朝から何人出したかしれないが終日先方に達する事が出來なかつたのです。然し其夜は土囊を造つて

積み上げて遂に死骸を踏むで此地に旭日旗を立てました』

其の岩角の上に

立たれた。其處は今の望臺紀念柱の直ぐ側である。『然し翌日拂曉追ひかへされた敵は又逆襲する。三面攻撃が初まる、遂に又無念にも此地を敵に奪ひかへされました。然しその時私も遂に此迄でやられまして後方に運ばれました。私は恰度この向ふの道を運ばれる時に猛烈な威勢と共にあの谷で白兵戦が始つたのを見ましたがこの白兵戦や敵の死力を絶つたのでした』

と語り行かれる内にいつか彈丸雨飛の光景の間に引き入れられるやうに思はれた。

其右方脚下に見えるのが乃木將軍の令息の墓標で嶙然たる「爾靈山」の高地と共に幾千年の後までも旅衣の袖を搾らせて大和魂の氣分を培ふのであらう。

此の峻坂を三條の散兵濠と、二線の鐵條網を引いて防禦したので我軍が最も苦心した處で、我軍隊の苦戦は皆此地に演ぜられたのである。此面許りでも此役許りに、一百の將校と千七百の兵卒は痛ましくも此の山上の土となり、百八十の將校と五千の兵卒は哀れ碧血を此の地に注いで千古の怨をのんで後送されたのであらう。あゝその二千の英靈は今何處にさまようて居るのであらうか設令その肉體の雨露に朽ち去つても、魂魄必ずや此地に止まつて第二祖國を永遠に守護することであろう。

あゝ星霜移つて此處に十年。紛粹されて骨は石となり、流れた血潮は草となつたが、此石此草果して何をか語るのであらう。滿天玲瓏の月下の露は千古の愁思を此石に宿することもあらう。名もしらぬ異國の蟲は萬古の後まで唧々の悲號を此草中に捧げるかも知らぬ。實に爾靈山は永久の戰場である。雲暗く風死して沈默全山を蔽ひつくすときに、亡靈千秋の遺恨は凝つて沈默の内に阿修羅の叫喚は放たれ、寂寥の裡には鬼哭の啾々たるを響かすのであらう。

廳て將校諸子と別れて工科學堂にかへる。

工科學堂

午後工科學堂にて民政廳長官白仁武閣下の校長室で一場の講話をきく事を得た。

『どうです日本の有難味が分つたでせう』

を冒頭として溫顏に微笑を湛へて語られた。

『諸君は自然に接せねばならない。そして各種の偉人に接して感化される所がなければならない。そして專門以外に廣き常識を養はねばならない』

と云ふ樣な意味であつた。

それから我校の前教授であつた長野先生に導かれて校舍、標本室、それから内地で殆ど見る事の出來ない位の實驗工場を見た。先に上海で獨逸の醫工科專門學校の宏壯に驚嘆した身には、今旅順の一角にこの完備した學校を見るに及むで愉快でたまらなかつた。

工科學堂は現今旅順に於ける最大の建築物で、校舍は以前は海兵團のあつた所で宏壯なる煉瓦造の二階建で、それと相對して寄宿舍がある。これは其後日本にて經營したもので、校舍に劣らない宏大善美なもので會堂になつて居る。光風閣や浴場など見た時には我校の小規模であるのが思ひ出された。此校は都督府が過大の力を用ゆるもので機械工科、採鑛冶金、電氣工科の三科となつて二百四五十の生徒が居る。

旅順港内の舟漕

午後は自由行動にして水師營にゆく人もあつたが我等は公園の並木に夏蟬の聲が汗を搾る頃に工科學堂のボートに乘て久し振りに快よくオールを握つた。

昔は西港の岸、今は徒に空屋となつて輪奐の美を盡して居る。海軍病院に患者を送るために設けられた非常に長い突堤に添ふてオールを引けば私等もはや嘗ては廣瀬中佐の肉片を沈め、杉野兵曹長の忠血を染め、幾多の精靈のいたましい墓場となつた旅順港内を小さい内海の樣な波を切つて一漕ぎ毎に辷りゆくのである。

『この邊が露國軍艦の沈没した處です』

旅順白玉山上の表忠塔

と艦に舵を引いて居た工科學堂の生徒が教へて呉れた邊は、今は龍川から押し流す砂の爲めに埋もれて僅かにボートを泛べ得る位に淺くなつて、彼の突堤迄は一通の浚渫をなして辛うじて「ランチ」を通はせて居る。北岸に巨大な石垣のみがローマの廢趾の樣に殘つて居る。これは露西亞が東洋隨一の舊教寺院を作らんとしたもので、戰後我政府はこれを多額の金を以て買ひとつたものである。岸の南北所々に宏壯な建築が多く見受けらるるが何れもまだ何にも用ゐられて居ない。餘り宏大に過ぎて日本人には適當しないとの事である。

『旅順の官衙でも學校でも皆「やどかり」の樣だよ』

と杉森先生が笑はれたやうに殆ど新に建設したものは少ない。官舍宅に室るまで大抵露人の遺物である。

ポートは輕く靜かな波の上を辷つて長い防波堤を右に廻ると西港に出づる。急に水が深くなつて荒い波が舷を洗ふ。軍艦明石が碇泊して甲板には水兵が立ち働いて居るのが見える。浚渫船の重いエンヂンの響が靜かな空氣を振はせて戎克が夢のやうにかゝつて居るのは全く十年前の硝煙彈雨の昔を忘れ果てたやうな趣である。舳が南の方に向ふと急に水か迫つてもはや參百米に過ぎない大きな赤い浮標が怪物のやうに青い水に著しく浮むで居るのは此處が米山丸の沈沒した處、其南が報國丸、福井丸と一々當時の地圖を案じて學堂の生徒に指示される。今一オール引いたら外洋の荒い波は黃金山、老虎尾中島の岩角になれよと泡と散つて居る。

七生報國、一死志堅、再期成功、含笑上船と軍神中佐は黃金、老鐵山から照射する探海燈に曝露して大膽にもかゝる所まで猛進したのである。そして只一片の肉塊を形見に船と共に此水に瀉と血は迸つたのであらう。幾多の壯烈な悲劇は此處に演ぜられたのであらう。私は渤海の口を碧玉のやうな水に嗽いだ。

『閉塞隊のこの勇敢なる行爲は帝國軍人の忠勇義烈を表明したもので、港口閉塞の目的は不幸にして完全に達する事能はなかつたが無形の効力は莫大なるものを信ず』と戰史に記載されたやうに千古尙此處に棹した人は、偉大なそして奇い中佐と嚙くことが出來るであらう。

嬉しき集い

それから公園の廣道を眞直に歩いて「大和ホテル」に杉森、長野兩先生の招待に行つた。大連の大和ホテルのやうに宏大ではないが、設備の美麗完全であるのは道が都督府の經營である。廣島の話や旅順の話が互に交はされて旅順の海がとつぷりと暮れたのにも氣がつかなかつた。

夜は生徒側の歡迎會で會堂「光風閣」は學校としてかゝる宏大なるものがあるのは寧ろ贅澤なやうな感がした。支那や滿洲の內地に乘りこむで一臂大事業をあげねば止まぬと意氣込むだ學堂の生徒の談話は實に若い血をそゝり立てるやうで、これから私は是非支那か朝鮮かの新しい空氣の下で活動したいと云ふ氣が連りにし出した。

學堂の一夜は實に思ひ出多い事であつた、一々案內された寄宿舍は大組織で多人數を容れて喧噪の間に勉强する習慣をつけると云ふ學長の意見だとの事であつた。

——三十日工科學堂の電燈の下にて——

八月一日

旅順出發

感慨湧き出る旅順口の曙色は鏡のやうな海面から次第次第に明けてゆく。私は車窓によつてなつかしげに白玉山の表忠塔を見上げた。

旅順發の一番列車は亞米利加式の大鐘を汽笛の代りに振りならしつつ見送り下さつた杉森先生と、工科學堂の生徒の諸君と、そして高い表忠塔を殘して北へ北へと進む。あゝ旅順港の三日、實に思ひ出多い日日であつた。私は今此の地を大きな力に引かれて去つて居る。鏡のやうな海が隱れる。金黃山の無線電信柱がなくなる。そしてあの仰ぐも高い二〇三高地もとうとう雲に隱れた。

『悅我何顏看父老、凱旋今日幾人還』と二人の愛兒をあの爾靈山の麓なる淋しい墓標の下に殘して此汽車で歸られた乃木將軍の感慨は今此地を去る私等の心に一層濃やかに現はれて來る。あゝ一度去つて何れの日か又此の山川を吊ふことが出來るであらうか。

道中雜觀

臭水子に一時間以上下車した。淋しい滿洲の停車場は面白い氣分を味ふ事が出來る。驛內には常に沸騰して居る熱湯がある。鏹詰を切りさいた柄杓で手をやきつゝ夢中になつて水筒につぎ込む。

三等待合に滿洲人の夫婦があたりに異國人の居るのもどこに風が吹くやらと、平氣で長い煙管で靑臭い煙を吹き初めた。

女は二十近い女であるが、顏には赤々と紅をさして耳朶には金色の耳輪をはめて居るが、それが如何にも虛榮の表徵であるやうに振りむく度に搖いで居る。頭には笄をさして居る。金銀箔で飾り立てゝ其形は支那芝居で見た王冠のやうに光る。輕さうに見ゆる衍肩兒(羽織)套褲等が全く上海では見る事の出來なかつたものである。

『苦力の妻君に違ひない』

とGさんが囁く。或はさうかも知れない。よく見ると非常に色彩の幼稚な綿布である。上流では麻か絹を用ふると聞いて居た。第一足が文明的に出來て居る。あの押したら倒れさうになよなよとした纏足ではなかつたのが如何にも滿洲に來たと云ふ感を深うした。

纏足は關東州迄には尙行はれてゐるが、南方のやうに盛ではない。北へ進めば進む程その影は少くなつて、貴婦人かさなくば花柳の巷にある女に限る。これもGさんの眼鏡は違はず下層社會の女に違ひないと物珍しげに二等室の待合所から覗き出す。異國の天地は腰をおろした一時間でも面白い觀察は出來るのである。

一時間後に來た長春行の五號列車に乘り替へた。

沿線の平原は急に廣まつて豫てきいた滿洲の高粱畠、馬賊が隱れ斥候が苦心した その高粱畑は目も遙かに連つて、粟の穗や玉蜀黍の穗が稀に交つて滿洲の野は只一色の綠である。

「南關嶺」を過ぎて「大房身」につく。右方には大連灣の碧波が光つて其向うに大和尙山の巍然とした姿を見る事が出來る。左方には丘陵が高粱の海から暗礁のやうに膨れ上つて居る。前に座つて居た滿鐵の紋の入つた帽子を被つた社員は、廣く車窓をあげて指してくれる。

『あれが南山ですよ、未だ散兵濠がすぐ下に見えてるでしやう、そしてあれが忠魂碑です』

汽車は何の遠慮もなく時々長い鐘を打ちながら廣野の内を直進するのである。

あゝこの丘陵も今示されなかつたら遼東の一牧場として何の氣なく打ち過ぎる所であつた。金州半島の咽喉として、旅順の第一關門として奥將軍麾下の猛卒が上陸早々十六時間の激戦を交へて日露戦爭の劈頭に名譽の一頁を飾ッたのである。忽ちにして四千の死傷とは如何に烈しかつたのであらう。然しその血も肉も腐れて其の上に生へた高粱は同胞の血肉に生きて瑞々しく夏の日に輝いて居る。線路から放れた彼方には二十里の内に金州の灰色の城壁が、附近に珍らしく繁茂した黒い老木を點綴して車窓に入つて來る。あの金州城外に立ちて「立斜陽」と口すさむだ乃木將軍の面影を偲むで暫し茫然となつた。

不圖けたたましい聲に冥想を破られて驚いて見ると、すぐ車の下で五六人の子供が追つて來る。色は土色にこげて短い褌子を後に引きはえて或はまだ四五才のものは總角結つて何れも素裸で素足で矢のやうに足る汽車を追ひ來る。そして何かしきりに叫んでをる。私は上海のポプラの下で汚ない子供にせがまれた事を思ひ出して乞食だなと氣付いてサイダーの空罐を投げてやると甘きに集る蟻のやうに互に競ふのが面白い。何處を歩いても支那には乞食が多い。乞食根性が漲つて居る。これなら身命も抛つて黄金の爲めにするのも無理はないと肯かれる。

普蘭店を出づると今迄見えた丘とも山とも知れぬものが掃かれたやうに廣くなつて、處々にこんもりした森、それから六七軒の泥屋が汚ない家の割りに間口の廣い、そして壁をめぐらし、門を構へた支那家屋が覗かれる。その邊に長閑さうに馬が草を喰つて居る。何の變化もない。然し青い高粱を渡つて來る滿洲の風を窓に入れて夢ともなく現ともなく揺られゆくのは、山又山縣道に續く斷崖と頭の痛み出す内地の鐵道より何倍乗心持がよいかわからない。

初めて見つけた小高い岡が車窓から少し覗き上げられる。沈默につかれた滿鐵社員はまたあはだたしく車窓を開いた。

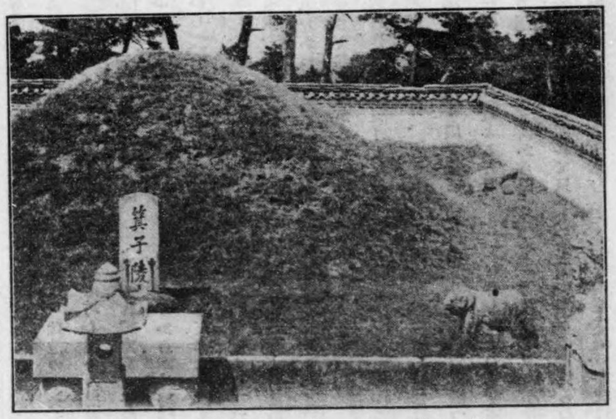
『あれはニョン〳〵シャウ(娘々宮)と云つて内地で云つたら出雲の大社ですね。秋十月の頃になると祭禮があるのですが、其時はあの山が人で眞黒に見えます。十四五里位遠方から妙齢の處女を輿や車にのせて泊りがけで出て來るのですよ。此邊はまだ迷信が盛ですからそれは大變ですよ』

と此地に長らく居る人らしい。非常に詳しい話をしてきかせる。

ニョン〳〵シャウ、如何に趣ある所だらう。あの紅をつけた頰、あの燦然たる笄、そして嚠々たるあの大袗の袖、如何に美しい繪であらうか。

瓦房店に汽車辨當を使ふ。南京行の汽車の内で東亞洋行から吳れた麵麭も、バタの滋味に弱り果てて側に居た乞食見たやうな老婆に捧げ奉りて體よく斷られて、一日バナナで命を繼いだことを思ひ出すと日本と同じ折詰辨當を食ふのは愈〻飯の一粒にも廣まりゆく日本の勢力を思ふてうれしかつた。

此處から車の第一の席に警務員が乗りこむだ。腰に革囊の拳銃を帶び、手には一尺四寸位の鐵棒を握つて腕に、「警務員」と縫ひつけた腕章をつけたカーキー服の上等兵であつた。「此から馬賊が襲來する域に踏みこむのだなあ」と云ふ考へが心の隅から自然と湧き出でゝ來る。すぐ席上には二本の柄がある。一は白い綱に、そして他は赤い繩に結ばつてその綱は乗客の上を長く連つて居る。これが非常綱で馬賊の襲撃に備へたものである。忙しさうに軍事用の書類の傳達のために何か記入して居た警務員はやがて席について凜として答へる。



朝鮮平壤箕子陵

『えゝ居りますとも殊に高粱がある時ですからね、馬賊時季ですよ現に二三日前は得利寺の附近で馬賊の二三十名と衝突して大格闘が始つたのです。近頃は大分横着になつて日本人の家屋になど平氣で押入るのですよ。一週間許り前も湯崗子の附近で七人の馬賊が現はれて家人を驚かしたさうです』

湯崗子ときいて私は吃驚した。湯崗子とは私等の安らかな夢を結ぶ宿りであるのである。

蓋平を過ぎて大石橋に停車した時に今迄乗つて居た滿鐵員や、大きな革鞄を前に置いて居た丸髷の婦人やは一齊に下車したので急に車内が淋しくなつた。

遂に午後五時半に湯崗子の停車場についた。午後の日は暑く背に照つて居る頃である。

停車場から湯崗子の温泉迄は五町には足らなかつた。滿洲には珍らしく

湯崗山の泊

も瑞々しい稻田があつて遙か彼方には夕日に一層赤くなつた山が飛白のやうに黑く小松を點して居るのが見える。

楊や、ポプラの樹陰から土造の支那の部落が見える。これと對して高い煉瓦造と日本造の大きな二棟、これが滿鐵經營の溫泉なのである。

麻の繼子に變な滿洲の網代の被笠をかぶつた「生れは大坂どす」と云ふ人好きのよい宿の亭主は、其の屋の前に立ち止つて、

『此方は東館で別々の室になつてゐますから』

と日本式の別館に案內した。

一日座りつめた汽車の疲勞が一時に來たが、滿洲の野の宿りと思ふと、とてもぢつと寢ころぶ譯にも行かなかつた。氣持のよい青葉がさしかゝつた緣に立つと黃昏れて來る支那部落から靑い煙がたなびいて來る。その土壁の前から我等の足元まで廣げられた荒野には田もなければ畠もない。只雜草が離々たる許り、どこからか秋笛の聲がきこえると。東の方の夕靄の間から湧き出す樣に白い馬が拾數匹元氣餘つたやうに輕く逐はれて來る。近よると愛らしく辮子を後に垂れた幼童が奇妙な聲で逐うて來る。後から黑い豚が鼻息あら〳〵しく駈けて來る。そして皆楊の影に隱れて只咽び入る樣な、搾り出す淚の聲のやうな驢馬の嘶が頭に染み込む樣に野を亙り來る。すぐ脚下には廣野を飛び疲れた天女がやつれし髮をなほすために落した月の鏡ではあるまいかと思はれる美しい池がある。瑞々しく生ひたつた汀の葦が夕風にサラ〳〵と音たてる邊から、壔離れて樂しげに雌雄放れずに泳いでゐる白鳥がある。不思議にも仄かに蒸氣の立ち昇るのが見える。

『エヱ、此池の中央からは湯が出ます此方の方から水が出ますし天然に巧く配合の出來た浴場ですよ。よく此內で水泳をやりますよ。あれ、支那の子供が飛び込むだでしやう。底はセメントで堅めてあるから案外綺麗ですよ』

さなきだに水を見ると泳ぎたくなる水の兒。私等はとう〳〵浴衣をぬいで窓からとび出した。池の中には涼臺を差出してある。

今度の旅行で宮島の水泳に長くゐられなかつた私は鬱憤ばらしに逆飛に飛びこむと、恰度氣持のよい、湯に入つたので思はず拍手した。

それにつり込まれて一行の二三も來た。成程下は堅くかためてあつた。普通の湯壺は花崗石で疊むであるが、少しの飾もない。玉のやうな湯が靑く漲つて居る。そして惜げもなく流れ出て居る處にGさんとどつかり座つてに背中の摩り合ひをして、呑氣な話をする。夏目漱石の小說「二百十日」の中にあるKさんが阿蘇の湯壺で暇つぶしにくだらぬ話をして居るやうな長閑な氣持になる。

夕食後大縞の裕衣に輕く木履を引きかけて本館の前を歩いた。

昔は此湯は軍用に使用されて敵彈に貫かれた脚や、毒刄に刺された肩などを洗つて一日も早く再び敵前に驀進して敵を討たねばと勇ましい話ばかりに充される白服に赤十字をつけた負傷兵の姿のみ見たのであるが、今は日曜などは附近の移住した日本人などが一家擧つて一日を過しに來る客の外非常に稀である。

玄關前の仄暗い木陰に「ソフア」を持ち出した下女が運ぶ茶に輕い涼さを納れて居る客も見受けた。

厚子さんと云ふ今年七つになる禰くらとした髮の豐かな非常に涼しい聲の娘が「ソフア」の側から走り寄つて、

『叔父さん散歩しませう』と云ふ。

涼しい眼、恰度月のない御空に光つて居る星を盜むだやうな輝いた眼で見上げる。言葉の端に九州の訛が雜つて居るのが一層可愛くなつた。

『この字わたししつてるよ』

と縞の間に丸く染めぬいた紋の樣な字を指す。

『「セイリンカン」御母さんから習つたのよ』と云ふ。私は初めて此の一夜の宿は淸林館であつたと知つた。

家號も知らねば宿料などに頭を痛めずに、ポイと入つてポイと夢のやうに出てゆく。團體の旅行は長閑であると つく〳〵思つた。

今十二三夜の月は野末から出て野末に沈む。廣い滿洲の淸みきつた大空に水のやうな光を拋げる。「赤い夕陽の滿洲に、友の塚穴——」と感慨深い「戰友」の歌を厚子さんの鈴のやうな調子に合せて歌ひつゝ手をとつて築山の邊を散步すると、本館の方から低いピアノの曲が響き來る。

『お叔父さん、ピアノを聞きませう。御母さんが彈いてるのですよ』

と無理に導く二重の硝子窓越しに花やかに電氣が照つて新形の背廣を寫氣に着た紳士の協に丸髻の婦人の姿が映つて居た。只白い指が鍵板の上を走つて流れるやうな曲が湧いて來る。實際滿洲の荒野に私はこんな美しい一夜を過さうとは夢にも思はなかつた。

『これはこの邊で一番おいしいと言はれた湯崗子の名物です』

と九州から來た下女がすゝめて呉れた支那燒の皿に乘せた眞紅の西瓜に淸い月影を引き、支那部落から何におびえたのか長い聲に吠える滿洲犬の遠音をきいて筆をとる。蚊帳の代りに白い蚊取線香の煙が風もない部屋の內に緩く輪を描いた。

——八月一日稿——

八月二日

蠅と蚊の世界

夏の滿洲は蠅の滿洲である。手となく、足となく眞黑に群がる、蒼蠅さへ雜つて汁腕の邊に突進して來るには下女の扇に暇もない。

『日本人が來て蠅が少くなつて蚊が多くなつた』

と支那人はこぼして居るさうである。これより多かつた昔を偲ぶ

と頬を擲めずには居られない。湯崗子の一夜も蚊と蝿とに攻められて心忙しく夢を見た。内地では眞冬にきるやうな布團を身に引き占めて寢た。もう滿洲には秋が來て居るのである。

硫黄の香の漂ふ温泉池の邊を朝露を踏むで散歩すると漠々たる廣野は牛や、馬や、眞黒い豚などが穢ならしい小さい牧童に逐はれて數十頭もノロ〳〵と歩いて居るのを見ると大陸の氣分が犇々と胸に迫る。一間四方位の濁つた溜池の内で十四五人の滿洲の娘が洗濯して居る。其邊で男兒が牛を追うて遊むで居る。

滿洲風俗

赤い薔薇の造化をして高い髷（それは私等が牛若丸の髷に見るよりも一層甚だしく高くしたものである）に指したのは既婚の女、長い髪を後に結むで垂げて居るのが未婚の女と、同行の浴客は説明して呉れる。洗濯棒の響に合して低い鄙歌が流れて呉る。

男の兒もまだ幼いものは總角にして、恰度文人畫で見るやうな面白い態である。十三四位になると例の辮子を結むで垂げる。一見した所何の變りもない樣であるが、辮垂の先端が三分して居るものは妻帶の印で二つは無妻を意味して居る。殊に面白いのはその辮垂に小さいのが追加してあるのがある。これは其數だけ小供のある肥號だとは如何にも嚴格に出來て居るとをかしくなつた。

獰猛な滿洲犬に吠えられながら土人の家屋を覗いて見た。多くは泥許りで堅めて日本で見る室のやうな風で木材などは供給も出來ない爲めか非常に少ない。大抵の家は高い土の障壁を設けて其の内から前栽が出て居る。これは吹きまく寒風と屢ゝ攻めよする盜賊にふ備る爲めである。一般に狹長で間數が多く、朝鮮の温突見たやうな坑を儲へてある。又内閨は別で誰人も入ることを許さぬとの事である。

遼陽

九時三十分湯崗子を發して遼陽につく。出迎へ下さつた遼陽小學校長鈴木氏に導かれて廣濶な大道を歩いて一大輪の支那馬車が客を待つて居る木陰を通つて赤煉瓦造の小學校に入つた。「ペチカ」の備へてある防寒用の教場の設備、圖書館の設備、運動場の廣大、這が滿鐵の設備は立派なものである。

小學校と背合せになつて居るのが遼陽の「公學堂」である、大連で見て居た身にはそれまでの趣味を引かなかつた。殊に恰も休暇中で舍内の坑などを修繕して居たから見る暇もなかつた。只其の裏手で滿洲人の常食である高粱飯を食ふ。大きな釜からすくい取つた高粱飯を滿洲の凡てをかみ別けるやうな顔で食つて居るのも一興であつた。

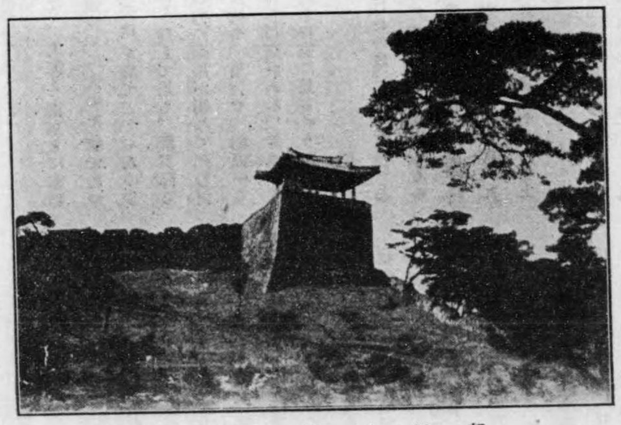
ふと林に出ると白塔公園である。小學校の直ぐ側である。私等が汽車の上から初めて見つけた遼陽はこの白塔である。高い高粱の内に入つた戰場を尋ねる時、いつも方向を案ずる基本になるのは白塔である。

恐らく遼陽を見て白塔を見ないものはあるまい。廣佑寺門にある白塔は白塔の下に廣佑寺がある樣に思はれて、寺名までが白塔寺と化してゆく。

この塔の歴史はもとより明かにする事は出來ないが、定説としては漢時代の建築で、一度唐の尉遲恭が修繕を加へ、二度清の太宗の天聰八年に修理を加へたと云はれて居る。清の聖祖が此寺に詣たときの詩も傳はつて居る。

禪宮多歲月、　瑞塔積風煙、
翡翠苔碑暗、　珠璣寶相傳、
馴蒼來紫館、　湧池出青蓮、
微雨輕埃洗、　玆晨興獨偏、

今も尙青苔生じて居るが、湧池青蓮は何處に出づるのかを見つけ出さなかつた。瑞塔風雲を積むで移りゆく世の有樣を白眼で睨むで、二千年以來この地に立つて遼陽のシンボルとなつて居る白塔、十六階參十間は屹然として天を魔して、眞夏の日光を灰色に照りかへして居る。



此塔の屋蓋には雲に聳ゆる小塔をたてゝ、半腹以下八角の各面には佛緣を彫刻し、屋蓋の右端には小鐘が吊つてある。馴れ來る紫鴿の羽音はきくことを得なかつたが、燕が數百匹と塔の邊を飛むで居る。彼等はこの塔に生れてそしてこの塔で死して幾世か經たのであらう。

現今建築學上この形に作るには是非とも中央を空虛にしなければならないと色々と踏査を加へたが今にその眞を認むることが出來ないとの事である。

下は公園となつてベンチが並むで居る。字が磨滅した碑がある。これがあつたら自然白塔の時代もしれるであらうとの事である。

午後二時頃小學校を出でて遼陽の町に入る。日本町は皆日本式に建てられて居るが理髮屋や、居酒屋位で宏大な會社などは見受ける事が少ない。然しそれにしても滿洲の中央にこんな純然たる日本町を見るのに愉快であつた。

町全體が茶色になる位に日本の兵士が町を歩いて居る。

小さい木橋を渡るとこれから全く支那の領地である。罪人など

も日本街でなしたものも此橋一つ越したら日本の官憲と雖も容易に踏み込むことは出來ないとの事である。然し其の國境の橋は意外にもつまらないものだつた。

支那町に入ると全く其の街が奇妙になる。上海と南京とに支那町の大體の觀念の出來た私は更に全く別世界に入つた樣であつた。路幅はそれ程狹くもないが、其の中央は車道でとても人の歩行に耐へない位に支那の大八車の轍が深く印して居る。雨が降ると泥河になつて人の歩行は無論、街道の內に荷馬が溺れて死むだと云ふ話さへある。その塵や、埃の間に靴や、菓物や、饅頭やを出し何の覆もせずに大聲で客を引いて居る出店がある。其後に眞の家を構へた商家が並んで居るのは夜店を白晝に見るやうな氣がして面白い。

滿洲の街と云ふ特に深い印象を刻みつけたのは、商店の前にある商標であつて、其軒頭に建てた數十尺に達する卒都婆樣のもので、金銀朱碧で飾り立てゝ、龍を彫むだ邊から麗々しく金文字に巧な言を彫みつけて居るのが一見すると大寺院の前にでも立つたやうな氣がする。間口の廣い商舗は如何にも大商店のやうに見上げられて日本町に比すると賑かである。

町の中央に關帝廟がある。

『關羽も金福長命の神になりすまして居ますよ』

と鈴木さんは其の疲れた頭にはクシャ〳〵する樣な唐草を刻んだ門の前に立つて微笑される。

場末に出た象の樣な大きな牛が山のやうに荷を積むで突如として現はれる。然し轍の跡は一層烈しくなつて黃い水がまだその間に深く溜つて居る。

これならば莊子が鰍鰌の例を引いてもわかりがよいと肯ぜられる。淋しい町には嚴重な門が構へてあつて、二抱もあるやうな楊の葉がフワリ〳〵綠の簾をかけて居る處に赤い紙に筆太に『門弟須承三相業、家聲常守四知篋』などと書いてある。きくとこれは正月の贈物として、詳句を選むで書くとの事である。その淋しい門から恐ろしげな滿洲犬が異樣な私等を見て烈しく吠え立てる。上海邊では街を歩いて居た女も見たが此地ではこんなにゴタ〳〵と賑つた處でも見るものは皆汚い男ばかりで、何だか私等は男島に漂着したやうな感がするのであつた。

美しい高粱

遼陽の城壁に衞兵のカーキー服を見て疲れた足を運ぶと、青い高粱の畑が續く。內地で聞いた高粱と、汽車の上から覗いた高粱と、そして今その間に入つた時の高粱とは全く別な感じがした。一日乘りつかれた滿鐵の窓に蘇るやうな氣を吹き送つて昊れた高粱畑には海のやうに廣いのに目ざめ、今立ち入つた高粱には其の高いのに驚いた。一行中一番丈の高いKさんが洋傘をさして大股に歩いてゆく。後から覗くとまだ四五尺上に青白い穗が豐かに開いて居る

斜につけられた畝は長く續いて大抵四五町に達する。それとても其處で止まるとか、區劃が出來て居るとか云ふ譯でもなく、すぐ香瓜（シャンカチ）の畑に續く。其間に內地で見るやうにコセ〳〵した畝や畦などはない。全く大陸的である。此邊は大農制度にやるさうである。只辛うじて洋傘の入ることが出來る位の狹い徑は、農夫が馬を追ふて通ふ所で、一度高粱の內に入るが最後、もはや西も東も見別けはつかない。只青い隧道をくゞり行くやうな氣で涼しい風は頭上を過ぎて汗は推し出す樣に上衣を黑く染める。これならば馬賊が巢窟とするのも無理はあるまい。

突然廣い道に出た。遼陽の東門から眞直に通ふ道で初めて涼しい風が膚物を拂ふ。其側に赤い水が溜つて野草が其間から繁ツて居る。圓形の無數の穴がある。これが遼陽の大戰に露兵が設けた狼穽で此內には尖つた竹や、金の釘等が無數に立ててあつて、一度陷るが最後生きながら針の山に上るのである。見ると身の毛がよだつ許りである。この幾多同胞の最後の血に育つた石竹が血汐の色に無心に咲いて居る。其處から瑞々しく生びた豆畠に連る。廣い畠、此から出來る豆だけの滿鐵が利する運賃は貳百萬圓を下らないとのことである。

綠の畠の內に突然赤い丘が眼前に現はれた。草もよく生えて居ない。然しその四周には深い漆があつて、血のやうな赤い水が死んだ樣に溜ツて、時々水鳥の驚いたやうな泳方に小さい波紋を織る許りである、廻り〳〵て最後に溝を飛び越した所からその岡に上つた。岡と思つたのは露軍の築いた接續砲壘である。角面堡で遼陽戰史に名高い所の「玉皇廟」に立つて居るのであつた。

鈴木氏は踏み平げられた赤土の上に地圖をひらいて當時の戰況を語り初められた。

『南に見えるのが首山堡です、軍神と云はれた橋中佐の戰死の處です、八月三十日（三十七年）我軍に主力を以て此處に攻めよせたが勝敗の別るゝ處なので敵も頑强に抵抗する。我軍の死傷は續發する。其時に東方から廻つた黑木軍が突然に奉天街道に向ふのを發見して、急に首山堡の主力を續々と北方に動員させたために彼方が陷つたのです。遼陽會戰の勝利の緒は首山堡から綻びたのです。南山の戰の時から既に此地の防禦工事をなし、大戰當時などはクロパトキン將軍は城內にて盛に宴會をなして支那の大官連を招いて此度こそ屹度擊退すると揚言して居たさうである』

と私等の水筒から一杯の白湯を汲みながら語りつゞけて、

『この角面堡は遼陽城外から弧形を描いて五ケ所あつたさうである。がこれが最も苦戰の場所で、東方のあの村落から我第二十聯隊は進擊した。然しレールを以て堅固に作つた掩蓋の事であるから、殊に其上に恰度今のやうに大豆を蒔いて置いたから、永久防禦があるとは夢にも見えず、肉薄しては將棋倒しに倒れて行ツて實際に血の川が流れたさうです。殊に恰度今頃ですからあの高粱

を四五尺の所で切つてその尖端を味方の方へ向けて居たので、突撃最進は出來ず、まご〳〵する内に何も掩のない開轄地のことだからたまらない。遂に一千二百の勇士の骨を積むで幸うじて九月一日に占領したものです』

と汗を拭はれた。恰度十年前の本月今日 彈丸硝雨の衢を阿鼻叫喚の況をしのぶ、と思はず彼方に立て居る 招魂碑に 對して 默禮した。

この貴い血を以て 購つた地、今は利に鋭い支那人の鋤にかへされて半ばは豆が蒔いてある。

『此地は當然日本の有です。然し支那人はこの調子の狡い手段で默ッて蠶食せられるので殘念ではないかね』

と慨嘆される。

歸途幾町歩とも 知れないやうに連つた瓜畑に入ると、一隅に高は高粱殼で茸いた家根に番をして 居る五十位の男が居る。公學堂長は流暢な支那語で瓜を求められると、寶の入船と大喜で 大きな笊に入れて來る。誰として初めは 手をつける者もなかつたが、渴に迫られて實にかみつくと案外珍味であつたので 又とりに行かせる。Kさんなんか家に栽培するなど云つて 種子を貰ふ位に感心した。同胞の血に育つた瓜と思へば感慨なきを得ない。

歸途東町を通つて 夫子廟に參つたが南京のように一規模でなく只靜寂な境であつた。

遼陽縣立師範學校、中學校を參觀した。門を入ると 校長室から各科の教員室がある。そして二棟の校舍と 其裏に寄宿舍がある。校内すでに休暇中の事で何物をも見ることは 出來なかつた。舍も「何年何日——日封」と大きな封印をかけて、とても入ることを許されなかつた。然し内部は 例の坑があつて、寺小屋式の机や藥鑵など亂雜にころげて 居るのを見た。殊に愉快に感じたのは博物標品や、理科器械などが 輸入日本品である事であつた。此校にも一時は二三の日本教員を聘して居たさうである。

遼陽を出た時はまだ明るかつたが、前に座つて 居た黑衣の西洋婦人が默々として讀むで居る十字架のついた書物も 見えなくなつたらしい。旅行用靴から白い襟卷を出して身に ひきしめた。實際滿洲の夕べは寒かつた。太子河を越えると 高粱畑は一層廣くなつて眞直に闇を分けて進む。汽車は大海を別くる 汽船のやうでほんのりと殘紅を止めた地平線を見たときに 大海の夕映よりも一層うれしい思がした。

奉天の停車場は想像したよりも十倍も大であつた。そして其驛前の大建物は停車場と相對しての 偉觀である。戰時には一個聯隊の兵營となり 得る事が 出來るとは 嘘だと全く否定も 出來なかつた。

御迎へ下さつた梅森氏の世話で「大星ホテル」に止宿した。

停車場から二町を隔てない此町、まだ十二時を過ぎないのにひつそりとして物音もない。時々長春通の汽車の響をきく 許り淋しい夜であつた。——二日、安奉線列車内にて 捺られながら 稿——

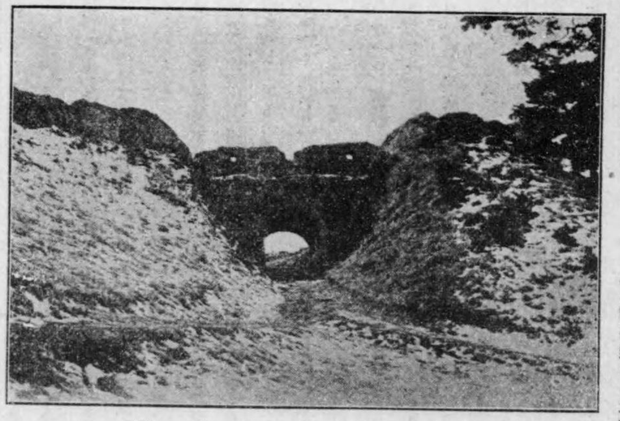
八月二日

奉天

九時に大星ホテルを出でゝ熱い滿洲の日を右頰に受けて 長春線の線路を歩む。北京通の支那經營の汽車が これを交叉して西に走つて 居るのである。今日愈深く滿洲の廣野と高粱の美とを 感じたのであつた。

奉天小學校の梅森先生は 眞先に立て案内される。そして 一行は北方に遙か平野の末にコバルト色に 霞むだ北陵を指してゆく。

見渡せば青い高粱は 地平線をなして其線を隔るものとては 北陵の森と東方に日露戰爭の時 露兵の降伏した『受降岳』ばかりで 只大海を泳ぐやうな氣である。比治山から見た 太田川平野を廣いとした私には海と云ふより別に 言葉はない。その海を押しわけてゆく時の氣持を適切に 示すには矢張り玄海の鳥も通はぬ邊で釣した時の小舟より外にないのを悟るのである。



其の間に點々と土饅頭の見ゆるは支那人の墳墓で 石碑は無論卒都婆一本も見當ることも 出來ないのである。

餘りの元氣にMさんとKさんとは列を放れて一町許りも 先に日射病除けの白い日覆を朝風に飜して歩く。楠原農場の標柱の邊から右に廻るのを二人は平氣で 眞直に進むでゆく。一行は歸せと合圖する。二人は一寸振りかへつたが二町も歸るのは 馬鹿〳〵しい前へ進みはするが 後にひくのを厭がる日本人の氣質が此處にも 明かに現はれてすぐ向ふには北陵の黃い屋根が松林の間に光つて居るので 乘りかけた船だと思ッたのか吾不關焉で進む。下馬碑の 邊に一同待つたが容易に 二人の姿が見えない。困つた事だ此邊は 馬賊の出沒頻繁ときくに迷はねばよいがと一同聲をそろへて呼ぶ。應へがない。二度呼むだ。すると下馬碑よりも 先に「オーイ」と應ふる。「KだK君だ」と足を早めて勢こんで行く。す

朝鮮平壌玄武門

ると下馬碑の間から黒や赤やあめ色の呑氣な顏をした牛が數十頭ニユット、頭を出して來る。後から汚ない淺黃服を肩に煩はしげに掛けて長い鞭を虛空に振り廻し〳〵「オーイ〳〵」と牛を逐うて來るのを見て可笑しさと腹立たしさが一緒になつた。

下馬碑は、回、蒙、漢、滿、土の五國語で書きわけてあるのを見ても如何に清朝の盛時は範圍宏大であつたかを偲ぶに足るのである。

門口で第五十八聯隊の下士卒に對して或る特務の曹長が北陸激戰の實戰談を地圖を按じて語つて居た。此地は奉天戰の激戰地として、聯隊長の戰死の場として悲慘な物語を殘して居るのである。

暫くすると二人が來る。高粱、沼地の厭ひなく歩いた跡は其の靴と其の袴の裾とに知られて居る。

北陵は三陵(永陵、福陵、昭陵=北陵=)の一つで清の太宗文皇帝を祀る。世祖以來天子は必ず三陵へ一代必ず一回の巡幸を例としたが宣宗道光帝から此制が廢せられ、又北京と興京との位置の差が大である爲めに自然亡廢した。

門外には支那流のラムネや玩具などを賣つて居る露店がある、其側の二丈餘もある煉瓦壁の青い苔の生した側門から這入る。陵内は非常に廣濶で此邊で容易に見る事の出來ない老樹が下道も暗い許りに繁茂してチラ〳〵と細い光を落す處は何時刈ッたとも知れない草が深く閉して煉瓦で飾きつめた道さへも草が生えて居る。

前山門に續いて碑樓がある。中には二二石碑がある。獸頭龜身の基石に座して居るのは新しい觀がする。支那よりは寧ろ清朝と云ふ深い謎の樣に異樣に古色を帶ひて居る。表面には滿洲文字が一面に記してある。文皇帝の頌德文であるさうな。

左右には孝陵で見たような古色を帶びた石像が並むで、その正面に彩瓦、朱玉の扉、それに緻密な彫刻を施した柱の巍然たる隆恩門が聳えて居る。此等日光廟で見る樣な幾世の風雨に曝されて丹朱も剝げ、柱楹も蟲喰み、黃金色をした瓦も落ちて、いたましい程に草が生へて居る。彼の太祖に次で滿、蒙の野に清朝の武威を赫然たらしめた太宗皇帝の陵としては何となく慊らない思がする。

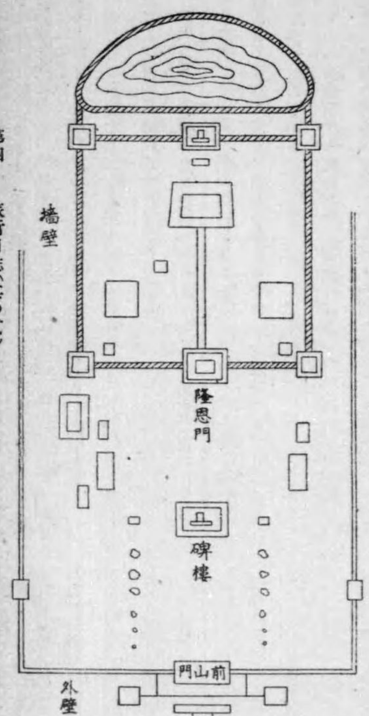
『支那人は擬滅と云ふ間際でないと修繕などは加へませぬ』と支那通の梅森氏の言が今更のやうに思はれる。

隆恩門を入つて甃道を深い感慨を以て歩むと左右の配樓を見て「隆恩殿」に入る。其奥には「明樓」があつて此處には端正な漢字で「大宗文皇帝の陵」と彫つてある。

其の奥にある一基の土饅頭には雜草離々と生ひ出でゝ白晝にも尙唧々たる蟲聲をきくのがこれ千古の英傑太宗の英魂の鎭まる所である。彼の四百歲の昔、粟末凉頭に孤劍を提げて崛起した弩爾哈赤は滿洲の野を風靡して瀋陽の民は嚴然として王宮に拜跪した

が、その一度登遐するや、太宗即ち位につき、更に偉大なる邁男を以て、南は鴨綠江に馬に水かひ、北は鐵騎疾風の如く漠南の地を指して進み、さしもの林丹汗も敵するに由なく千里の沃野盡く清國の有に歸し、清朝の基礎は此に堅固となつたのである。今は葉上の夏草に朽ちせぬ英雄の昔を偲ばせるのである。

四方の墻壁は數丈に達して普通の城廓に見るものと同じやうである。今は一般の人の通行を許さない。前山門外にある榎の木の木蔭に休らつて持つて來た麵麭を喫する。然し眞晝の日光は隙間もる光にも耐へがたい。もう肩から掛けた水筒の水はつき果ててあたりには水の音もしない。時に鼠色の接目の見ゆる汚れ切つた衣



第四　旅行日誌(其の貳)

を挨拶までに着た支那の子供が物見高に集ッて來る。「ケーオーリヤン水」を只一つ教はつた支那語を振り廻して麵麭を投げてやると餓鬼のやうに奪ひ合ふ。それが面白さに我も〳〵と抛げてやるので意外の御馳走と喜悅滿面、一人の子供がどこへか影をかくしたと思ふとどこから汲むで來たのか玉のやうな冷水を鑵詰の空鑵に入れて持つて來る。昔或大王が大激戰の時に冑の鉢に盛つて來た冷水を捨てゝ兵士と苦を一にせられて一軍の意氣大に振ッたときくが、我等は滿洲の水に恐れて鑵の水を捨てゝ一層元氣が衰へた此邊蝎が多いときいて長居は無用と出立したのは恰度正午であつた。

次に遼東修學旅行記から北陵の見取圖をぬき出す。

乘馬で赤い柵をくぐつて奉天城へ眞一文字の昔の天子の御成道をあるく。今は雜草深く徒らに芹摘む男の影を見るのであるが、春は塵一つもおかじと掃き清められた處と云ふ。清朝亡びてからは年と共に荒れてゆく。今にあの高粱が此邊迄も擴がつて來るかもしれない。

十五町の眞平の道をそよとの風も吹かない高粱の間に入つて洋傘の小

きい影を力に進む。西瓜の番小屋には此暑さをも平氣で大の男が眠つて居る、澁紙のやうな日に燒けた膚を憶面もなく晒し出して奇怪な目で私等を見送る子供も居る。放れ放れになつて辛うじて支那人經營の公園に入つた。

奉天公園は南京で見た愚園のやうには支那の色彩が現はれて居なかつた。青い柳や萩の間に茶店がある。奥の方から蓄音器の嬌聲が高く洩れて來る。秦淮の樂しかつた夕を思ひ出さずには居られなかつたのである。

此から黄塵萬丈と吹きたつる黄土に避易しつつ口に手巾を挿しあてゝ馬鐵の來る間を待ち、やつと一席を占めて奉天城内の小西門についた。

小西門は奉天城の外郭、高さ七尺長さは二十二清里の土壁奉天府は皆此内にあるのである。小西門は他の七門と同じやうに下は壁道形に煉瓦で築いて二階の樓門が立て居る。物寶る支那の繕人は此まで馳せつけてホット汗を拭いて居る。此から奉天の城内であるが、遼陽で見たと同じやうな町筋は一層商業が殷盛である、そのかわりあの異臭はいつまで行つても拂ふことは出來なかつた。

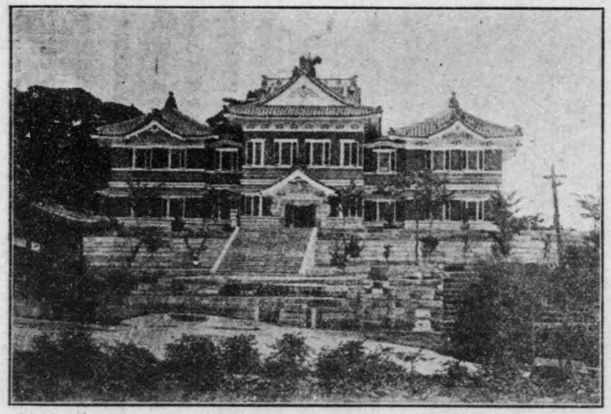
皇城金鸞殿とは私等が久しい憧れの的であつた。今私等はその門である文德門から入つた。守衛の人から案内されて大廟門を入ると内には廣い庭がある。其門を青甃一道、中央を貫いて正面の殿前に達して居る。此處は道がに王宮だけあつてあの黄い壁も見えない全く別世界恰度廣い沙漠の間に「オーシス」でも見出したやうな思がする。殿を挾むで左右に長閣がある、宮殿は黄瓦で葺かれて青鴿一群大きな崇政門の扉をあける音に驚いたのが雲のやうに飛び散る。

壽政殿は執政殿で最も輪煥の美燦然たるものがある。謹むで内殿の内を覗くと曇りかゝつた空に朧に内部が見える。銀泥の篇額や、金鏞の柱梁實に目を驚かす許り、殊に正面の玉座は目を引く。英雄太宗がかの玉座にあつて四百餘州の政を掌上にめぐらした事を思ひしらず〳〵敬虔の念に打たれながら拜した。

其背後にあるのが清寧宮で天子御寢所として、また文皇帝の永眠の席として長く深い印象を與へた。寢所は朝鮮の温突と同じ構造である坑であつて、四百餘州の大王の寢所として餘り宏大とも思はれなかつた。其前面に高さ二丈位の油紙に包むた旗の棒がある。往昔朝政をきくときに高く城壁を越えて見える位にたてたものである。

充分な案内者が無い爲めに四庫全書があると云ふ西方の文溯閣には赴くことが出來なかつたが此の思出多い故都の内に立つて靜かに心にとけ入る或物を感じて居るのが却つて私には幸福であつた。

私等は金鸞殿に更に深い印象を得やうと鳳凰樓の三階に登つた。太宗の崇德二年に改築して以來星霜既に參百歳。破れた甍の間には雜草が生へて楹は朽ち、丹朱ははげて勾欄の金具も其跡ばかり殘つて居るのを見ると、冬枯野に脚下に白骨を踏むで感ずるやうな身顫を感じた廢址、僅か三百年の雨はかくも荒廢に歸せしめたのであらうか。南の方花と咲き出でた明の文化もあはれ今は只殘壘ばかりに其址を止めて、故宮の址空しく不變の月下に心なき露のみ置き、それに北の方天下を風靡して朔北の風さへも枝も鳴らさぬ清朝の都もかくて廢滅に埋りゆく。恐ろしいものは時の流れである。凡人を埋め、英雄を殺してなほあきたらず不滅と言はれる物質さへも刻一刻に埋めゆきて、永久なる廢滅の海へ流しこむのである。其の時の流れの只一粒の泡沫とも思はれる人生、かの榮華や、富貴や、安樂や何であらう。見かへれば只一片の灰も殘らぬ果敢ないのは人の世で、夢より尙淡きは人の世であると沁々考へられた。



京城昌德宮祕苑博物本館

遙か東の方から物恐ろしい灰色の雲がムラ〳〵と頭を持ちあげる。雨が降ると思つたのか、崇政殿の高い偉大な門扉によつて私等の降りて來るのを待つて居る殿守は何か手眞似で降り來れと言ふやうである。

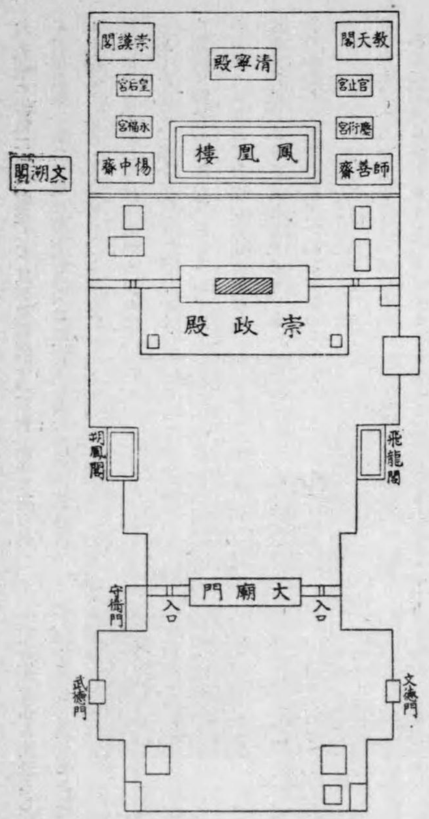
然し感慨湧くやうな此樓をなか〳〵こと下るは出來なかつた。眞暗い殿内には何もない、ガランとした室に水筒などを投げ出して其のはげた欄干によつて眺望した。

清朝發祥の地として人口二十萬を有して現今東三省の首府たる奉天城内の全景は一眸の内に集まつて來る。四顧漠々、實に壯快と叫ばざるを得ない。城の中央にある此の建築を除いては泥の丸屋根、灰色の黄瓦屋、馬車も人も皆蠢々と動いて居た。一里餘を隔てて宏大な煉瓦造りの建物があつて盛に黑煙の上つて居るのは疑もなく奉天停車場で、此を中心とした廣道の通じて居るのは皆日本人の勢力が及むで居る處である。然し圍繞した五里十三町の城壁は如何にも小

さい田舍の市街のやうに見受けられる。

然し、これは奉天が小さい譯でなく四周の平野の廣漠たる爲であらう。何回見ても新しく感ずるのはこの綠の平野の光景である洞然として只大海の眺である其内に鳥の如くに點々たるのが村落であらう。南の方遙かに暗雲の天地に密接する所に銀絲一帶の迂曲するのは此の沃野を養ふ大動脈にも見るべき瀋河であらう。

忽ち眼前に白い筋がさつと流れた。二筋また三筋苔生した瓦に落ちて聲をなす。崇政殿の軒に睦ましげに止まつて居た青鴿は、クックと位いて軒下に隱れる。「雹だ〳〵」とGさんが叫ぶ。然し



今迄湯き切つた瓦の青苔がだん〳〵色增して來る。白雨である。然し滿州の雨は礫のやうに横様に降る。往々にして奉天の激戰を偲ばせるやうな雷聲が平原の一方から轟き出すと、雨は車軸を流して降る。千條萬條もう今迄見入つて居た平野はかき消すやうに隱れて市街の土屋根さへも見えなくなつた。滿洲の夕立、大陸的の豪雨、そして鳳凰樓の雨宿り、如何に興多い事であらうか。

一時間は晴れまいと云ふ見込で汗に冷たくなる上衣を引き合せて扉によりかゝつた。眠り初める人もある。ノートを取り出して即興でも書き留むる優雅な人もある。Gさんはポケットから手帳を取り出した。橘中佐の歌である。彼の首山堡の露となつた軍神の歌である。私は眠るには餘りに歡に過ぎ三十一文字に纏めるには餘りに散文的な私はすぐ勇ましい曲に共鳴した悲壯な音が雨滴のひまを漏れて故宮の裏に反響する。

上に遼東修學旅行記より此の金鸞殿の略圖を示す

時間を待つて樓を下つて待ちあぐんだ門衛に少なからざる氣の毒を感じて街に出た。一時間前まで

は黃塵の都今は化して末世にこそ見ると思つた泥の海で香瓜を賣り歩く小供が支那靴を籠に入れて高く脛を現はして渡つて來るのを見た。

町は只一雨で四五寸位の泥である。今迄餘り多く見なかつた大八車の支那馬車が頗に多くなつて輪は泥に汚れて走つて居る。馬腹などはもう〳〵泥を泳いたやうである。それにも關はらず御者先生平氣で長い鞭を荐りと振り上げてポー〳〵と追うて居る。支那式の馬車を見ると大輪の一輪車に長い轅を結むで上を白い布張りにしてその側にあけてある窓の簾からチラ〳〵と人の影の覗き出されるのは、櫻かざした大宮人はかうしてあの片野にも春を尋ねたのであらうと偲ばれる。小西門にやつとかけつけると雨宿りした觸商人で通行も出來ない。やつと例の馬鐵に飛び乘るときと全く趣を異にした。泥の都は次第〳〵に場末に赴く。東亞煙草會社と常に競爭の地位に立つて先日倉庫火災の折にはかけつけた日本の消防夫に鎭火を賴まずに燃えるがまゝに燃したと云ふ片腹痛い米國の煙草會社が黃昏の空に聳えて居る。馬車に搖られながらGさんは何かノートに書いて居たが笑ひながら見せる。

夕立にはか市たつ小西門

黃塵を靜めて涼しからの門

「何だか月並だな」と興ずる時に馬車は奉天小學校の前について居た。今日一日案内の勞をとつて下さつた梅森氏は其の奉職校である奉天小學校に案内された。遼陽小學校よりも更に規模の大なる此地に渡つて來て見た内で一番堅固に出來て居た。内部なども案内されて黃昏の空に浴衣ではとても耐へられないやうな冷たい風が吹き入る。兒童寄宿舍に入つて態々私等の爲めに立てて下さつた湯に入つて支那的料理の珍味を盡して優待されたのは疲れた身にはこれにました喜はなかつた。

奉天小學校

安奉線午前△時△△分

奉夜驛發の安奉線の夜汽車に乘りこむだ。一日の奉天巡覽に疲れ果てた身にはもう汽車に入ると共に眠りに入る人もある。私は搖めく汽車の内で今日の見聞を認めるのであつた。

八月三日

——八月二日稿——

安奉線の一夜

安奉線で夜は明けた。私は三等車の寢台内地の汽車の物置きに當る所につけてある板の何も敷いてない板の上に横はつて居るのであつた。汽車は一時間二十哩の早さで私を故國の方へ送つて居る。車の外で雨の降りそゝぐやうな音がする。然し昨夜出た時には梨地のやうに星が燦然として居たのでそんな懸念も起らずに、又擡げた頭を空氣枕におろした。そして奉天を出てから夢ともなく現ともなき過去を朧氣にさぐる。何時まで現で何處から夢に入

ッたかはしらない。只私のすぐ向に背廣の若い紳士が七ッ位の非常に愛くるしい娘を連れて、或驛から乘り込むだ。娘は靜かにして時々天使のやうな笑を洩して何か尋ねて居たが、私の側の席にかけて居眠を始めた。花靴を穿いた足が床までつかずにたらりたく〳〵と乘つて汽車の一搖ぎ毎に前に倒れやうとしては頻りなげに私を見あげる。私は見るに見兼ねて私の席を與へて横になした。すると枕につくや否や安らかに夢の國に入つた。私は他に席を求めたがよい處も見付からないから、二等の切符を持ちながら三等に入つた。三等室はガランとして支那人が四五人着のみ着の儘で眠つて居る。私は車掌と議つて二階の寢臺に横つた。二尺と隔つて居ない天井にペンキの香が鼻をつくと思ひながらいつか夢に入ッて居たのであッた。

『起きないか夜が明けたぞ』

と、不意に下から叫むだ。Mさんが今起きたやうに眼をこすりながら立ッて居る。後からきくとMさんも三等の下で一夜を明かしたとの事だッた。

窓硝子を開けると颯と冷たい朝風が襟筋を摩でゝもう内地の仲秋のやうな氣候である。いつか横さまに小粒の雨が降りつけて、窓の外は曇りで見えない。只一夜の間に幾百哩走つたのであらうか是非とも見たいと思ッて居た、本溪湖も鳳凰城も過ぎたらしい。あの海のやうな平野は見るに由なく山と山との間に低い高粱が連つて居るが朝鮮に近まつたせいかと見られた。水田が見える。そして黄色をした稻が短く並むで居る。

安東縣

で此線は終る。此處に四十分の停車の間にそぼふる雨の間に東部滿洲第一の都會となッた安東縣を遠望すると、洋々たる鴨綠江の鏡のやうな光の間に浮き出した二萬の都會は割合に生氣漲つて居る。そして日本人の家屋を多く見てうれしい思がした。此地はもと沙河鎭と稱して荊棘榛莽の一寒村に過ぎなかつたが明治九年以來安東縣と改稱して開港したために發展の機運に向ッて、鴨綠江岸木材貿易の中心となつて今は殊に商業活潑の時期であるとのことであつた。

安東縣から新義州までの切符を賣る。只此間だけは獨立した鐵道と見えて釜山迄の切符を賣らない。非常に可笑しいやうな感がすると共に私等は今日支兩國の境界に立つて居て何れにもつかぬ水の上を走るのだと云ふ深い印象が起る。

十町の鐵橋

歐亞の連絡をなした名にし負ふ鴨綠江の大鐵橋を渡る。此處河口から十數里の上流にありながらなほ十餘町の川巾があつて濁水滔々と流れて、浮むだ小舟も戎克でない黄い筵の帆を張つて走つて居る。

揚子江の海とも川とも知れない眺望に驚いた身には、これを大江とも思はなかつた。然し、十三呎の干滿あるにも關はらずに大船互舶を浮べて小舟の如きは上流百餘里に達すると云へば大河であるに違いない、僅か二週の大陸の空氣はもう私等の目をこんなに大きくしたのが微笑まれる。

新義州

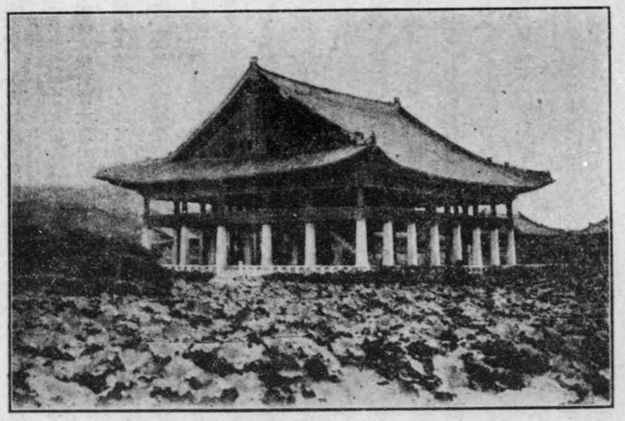
安東縣と相對した新義州で各々故郷までの連絡切符を買ふた。日限十三日間の切符を手に握ッて今更の如く「遙々來つる旅をしぞ思ふ」た。新義州はもう日本國であつた。安東縣に較べると更に活氣ある大都で、日露戰爭前迄は只單に荒蕪の三村落に過ぎなかつたが、我軍の軍用鐵道幹部を置いて以來製材工場も開かれ、初めて市形をなしたので、僅か十年の間に七萬を越えた大都會となつたのである。

朝鮮人

新義州から二人の朝鮮人が乘り込むだ。內地で多くの土方となつた朝鮮人「ハイカラ」パンを賣る朝鮮人は見た、然し朝鮮の地で朝鮮人を見たときにまた特別の好奇心を引き起す。眞白の例の神官の着るやうな衣服をつけ、日本の下駄と西洋の靴と、それに支那の履を掛酌したやうな靴をはいて、麥稈帽のやうな黑色の麻冠を勿體らしく載いて圖拔けて長い煙管を悠長に喫して居る。これは我國の同胞であると思ふとあの豚尾髮よりはずつと親しい氣持になるのであつた。

容貌なども日本民族と酷似して居るが、御役目に生へて居る薄い鬚髯へた顴骨、何となく狹くるしく見ゆる額と、割合に低い鼻そして全體を總括して柔和な相と共に引きしまりのない氣が現れて居るのが好奇心を以てしげ〳〵と見入らせる。

何にも知らない驛がずん〳〵と後になつてふと氣付くと私に注意を促すやうに定州の字が掛ッて居る。高勾麗以來歷代の雄鎭として、日露の役加納中尉戰死の地としてすぐ胸に浮ぶ。只見る荒寥たる城壁山廓を廻り幽草徒らに蓬々として居る、朝鮮を旅する人は恐らく此驛などは注意せずに過ぎゆくのであらう。



京城景福宮慶會樓

午後△時△分平壤停車場に高等普通學校教諭長谷川氏に迎へ

られて平壤の町に入る。

雨は愈横さまに降る、長谷川氏の外に高等普通學校の生徒が三名出迎へて呉れた。私等は今風光明媚全市公園と云はれ然も思出多い史實に富む平壤の地を踏むのである。

平壤の沿革

太古蒙昧の代神人檀君は大白山檀木の下に降り國人に擁せられて君となり國を朝鮮と號して此地に都したと云へば、此地は韓國發祥の地である。後に箕子の徒亦此に都し、高麗大祖王建も此地を西京と稱した。李朝に至ッて歴代關西の重鎭となり、小西行長は征韓の役に破れ、日清の役には我軍此地を包圍して戰史に花を飾つた。實に我々が今踏む地は幾百星霜の昔より吾國民によつて幾多の蹟を殘されたのである。

雨の朝鮮町

私等も輕い足痕を泥深い街道に殘して、米や、明太魚を賣る店が露店のやうに長く連つて白い服の韓人が居る町を歩む。長い旅行中日傘の役目ばかりして居た洋傘が始めて雨防具となる。濕氣がちになつた服が氣持惡く身にひつつく、裏町を通れば煙草の煙が輕く流れて來る。

『朝鮮は恰度雨期ですよ、雨期でも四五年前まではこんなでもなかつたですが、日本人の移住が盛になつて逐りみ降らずみで全く日本式になりました、人天に勝ッたのかもしれませぬ』

と長谷川氏は長靴で泥を渡りながら語られる。

『今日は牡丹臺專門に見ませふ』

とて奉天街道を雨を衝いて北に進む。旅館に着いて荷物を置き、後れながらも午餐もすました元氣でついて進む。

七星門

大通から韓山の光景、浿江の流れ美しく繪となつて現はれる。道標に從つて七星門を訪ふ、兩側に蔽ひかゝッた斷崖の一通路に櫓は破れて甍もなく只棟や梁が北風に吹き拂はれた案山子のやうに殘つて居る。眼前には普通江が流れて右方は遙かに箕子廟の欝林に連つて要害の地である。遠くは敵將左寶貴此地に討死したが今も尙其木標を見ることが出來る、近くは日露の役に此門に初めて彼我の斥候の衝突があつた所で有名である。然しよくきくと日本は斥候でなくて平壤在住の邦人が手に手に銃を持つて此地を守つて敵の斥候を攻撃したので敵は此地まで我兵が來たものと見て退却したと云ふことで現にその指揮をした豫備將校は功何級かであるさうだ。

箕子陵

箕子陵は四邊の草山に比して老松が蔚然として茂ッて居る。同行して呉れた高等普通學校の日本語に流暢な生徒の一人が一足先きに行つて門を開かせて居た。芻山兀として阿房出でたやうに韓王宮なつて韓山兀となつたが遙かに此地は聖域、韓國發祥の地として尊崇せられて仄暗い老松も神々しい彼の國の武王商に勝ちて箕子を朝鮮に封じた。箕子は殷の遺民五千人を率ゐて山海關を越た蠻族を慰撫して稼穡の業を起し平壤に都して後朝鮮を建設したと史に見えて居るが、商の榮華も命革まりては詮方なく、或は殺され、或は逃れたが、箕子は此處に封ぜられて永く此地にその民を扶養して賢中の賢と稱へられて居る。史家は或はそこは遼東にあるに違いないと論ずる人もある、しかし太古草昧の世、もとより其の眞を得がたい、然し此の神韻ただようあたり、矢張り大賢箕子の永遠の靈の鎭まる所として尊敬したい。

前面の老松蔚然たる所に丹壁の神門がある。それの後には拜殿がある、老陵を見北陵を拜した身にはもとより小規模てはあるがその家屋より彫刻まで皆朝鮮の色彩を帶びて居るのはうれしい。

ふと見上げると本殿の前には高く脛を現はして降る雨もいとはずに朝鮮草鞋を穿ッて私等に案内の勞をとるべく待ッて居る六十にも近い陵守の翁を見た。何か日本語を韓語の中に處々に挾んで笑顏で語る。朱檀に深く射こむだ彈丸は日清戰爭の時に支那兵が擊つた彈丸だと說明する。脇門を入ると高地に箕子の陵がある。土饅頭の前には「箕子陵」の石碑が立つて居る。八百年前高勾麗の甫宗の時に創設し、成宗の十三年に碑を立てたと言はれてある。碑は中斷されたのを接續してある、或日本人の代議士が來て箕子陵(SHIBI)と讀むで歸つたと陵守が云ふ。何か手眞似口眞似を入れて說明する後に、例の學生が通譯して呉れると「日露戰爭の時此附近で戰があつた時、水を運ぶやら彈丸を運ぶやらしてこんなに脚に貫通傷を受けたが、其大將は何とも音信もしない或は戰死したのかしらん」と云ふやうな不平だら〳〵の話に聊興醒めて右方の山の尾を登り行くのであつた。

乙密臺

『山色多五色。花木更交加。樵子穿雲去。分明入彩霞』と春によく秋の葛に美しい錦繡山の一角に高く天空に樓臺の見ゆるのは「乙密臺」である樓臺は有名な「四虛亭」で今は修繕されて居るが去年迄は赤く生い上つた葛に染められた百尺の石壘の上に半ば破壞された四虛亭が浮き出して居るのは平壤の第一の見物であつたと云はれる。遠くは文祿の役の古戰場として近くは日清の役に有名な平壤包圍攻撃の際に頑固に守つた雄將馬玉崑に對して朔寧支隊が攻めた古戰場である。

眼前に峙つて居るのは牡丹臺、その後に長く背景を作る大同江の平野は綠に美しう彩られて、幾百里の北咸鏡の地から流れて來た水は折からの雨期に水勢猛に濁流滔々と流れて六十里の奥までも通ふと云ふ川舟も餘りの流れに舫して岸にかゝッて居る。脚下には三角洲である綾羅島が手にとるやうに見える、『芳島燦綾羅』と吟じたやうにこの絶好の山と水にふさはしい島で面白い傳說までが興を呼ぶ。

或時この上流の成川から縣吏か來て稅を募つたさうだ、住民は何の不平もなく租稅を出した。其の口實がいかにも無邪氣である

此島は昔は成川縣にあつたが洪水の爲めにブワ〳〵と流れて來て此の地の杭にかゝつて止まつたと、其證據には土の中から「成川縣」と云ふ石標が出たさうだ。こんな調子でならば「國來〳〵」と引き給ふた國引の段も面白く生きて來ると思つた。今は平壤四十萬の人に供給する上水の吸上所がある。そして長い水管が雲龍のやうに乙密臺の貯水地の方に上つてかすかに光つて居る船橋里は大島混成旅團苦戰の地として今更のやうに新しく見ゆる。

玄武門

は此臺の外門となつゞ居る。日清役に三村中尉が部下十六名と共に喬然門樓に上つて原田重吉が偉勳をたてた所である。これが名高い玄武門かと仰ぐと二尺にも足らない石垣にはもはや樓門の影もない、旅順の尨大な砲臺を見た我々には非常に差ある戰術の進歩を眼前に見るやうな感じがした。

牡丹臺

其前面に三角測量の標の高く立つて居るのは有名な牡丹臺で、旅順に於ける爾靈山とも稱すべき所で日清の役には敵はこの山上に砲を列ねて押し寄する敵を惱ましたのであるが、今は只浿江を渡つて來る涼しい風が旅袖を飄す許りである。

『英恨峰無花、峰名亦自好』

とあるを見て何故牡丹臺とつけたと例の學生に尋ねると、

『山の形が牡丹のやうになつてるさうです我國でも牡丹を好みます、女の名にも牡丹と云ふ名は非常に多いです』

と霜降り小倉の服を翳して今更のやうに見下す。

永明寺

高麗時代の遺物と云はるる永明寺は八百年の鑿の香を今に殘して居る、その近傍に草深い溝の奥に麒麟窟がある、高麗の始祖がこの窟から出て平壤に出でて豫言をしたと傳へられて居る。

浮碧樓

大同江の絶壁の上に建てられた樓は瓦に苔生して柱には丹朱の色も見えず、屋宇など一部は風に破られて空しく降り續く雨に朽ちはてゝ、巨大な柱の彫刻を用ひない所に一層古色を益す、正面には浮碧樓の扁額がある。一千年前高勾麗王容宗の全盛に此地に巡視して浿水の流を望むで盛宴を張り侍臣李頡に命じて撰名させたもので眺下する江流の色は紅恰も霖雨晴れて清澄澄として『雲卷長空水映天』の時には崇高な此樓は碧波に落泛して眞に其名に耻づまい、私は壞れかゝつた土壁を生ひ隱した蔦によつて『浮影碧波中朱欄落鏡裏』の昔を偲ぶ。

巉岩の樂書

此處から大同江の岸傳山に泥濘深い道を辿れば右は千仞の絶壁天に聳えて四處亭は愈々高く曇つた空に臨に一歩一歩に或は峰に現はれ或は尾に隱れて美しい繪となる。その絶壁には樂書がある。然し此地の樂書は少しも美を害しない『清流壁』『清潭』の龍蛇躍るやうな艶な筆を深く石に刻みこむである。此地に遊むだ名士は皆此地の巉岩に刻みつけるらしい。日本の神社佛閣等に汚なく鉛筆や矢立で書きつけた樂書に比すると實に君子の態度がある。希くば月清む仲秋の一夜小舟を大同江の流れに泛べて『清流壁之賦』でも刻みつけたならと思つた。

練光亭

大同門と並むで「練光門」がある今は閉ぢてあるが、浿水の碧流の上に高く聳つた巉岩の上にあつて一寸内部を覗くと、そのかみは此處で宴でも張つて管絃の響が江を渡つたに違ひないと思はれる。長谷川氏の談によれば此亭こそ日本の偉人豐公の壯擧文祿の役に、小人小西行長が姦獰沈惟敬と此亭に會して和睦の約を容れ遂に大事を可惜一簣に缺いだ所だと。此堂此庭には黒革絨の大男や水牛の胄の將武者が旗馬印を錦繡山嵐に靡かせてつめかけたであらうと思へば

『白練横晴漢、煙光淨一川、危亭天上座、彷彿欲登仙』

の氣分は起らずして一層深い懷古の情にうたれたのである。

朝鮮女兒

義烈碑

練光亭光土壁の下巉岩の上に義烈碑がある。碑屋には長い草が生へて居るが何をして居るのか一人の女が額いて居るのが見えた。口碑によれば府妓に論介と云ふ者があつて、我征碑の役に平壤は重圍に陷つた。介は重圍の中にあつて倭將を抱いて巖上より此の碧潭の内に投じた。圍解け普人安く其の論介の風聲烈氣に感じて遊人過客與に相嗟嘆すと言ふやうな意味が碑文にある。敵ながらも然も、府妓の身として一身を普城の爲めに捧げて倭將を誘ふて斷崖に立つたとは實に壯烈義烈の事である、私はあの綾羅の裳輕き妓生と緋威の鎧の倭將と碧潭の上に立つたなやましくも凄艶な繪卷物をその小介の義烈碑に結びつけて心ゆくばかり描いた。

大同門

大同門は浿江岸に巍然として立つた三層樓である、其の前から通じた大道が正道で大同門通と云つてある、建築上參考となるものであると云ふ。實に

『飛棟入雲星可摘。虛窓近水月光來』

の詩人の言も思ひ出される。

動物園

見れば錦繡山一帶夕靄に裹まれ去つた。實に絶好の公園で、四季折々に眺めたえせぬときく、現今總督府に於ては、百萬圓の費を投じて世界的大公園を創立して、箕子廟全體を自然動物園とし噴水の設計許りでも數十萬圓を要するとの事、若し完成の曉には趣深い公園となるであらう殊に日本人に於ては感慨深いものがあるのである。

仄暗い窓に夕風がそよぐアカシアの薫に肌に粟を生ずる、もはや裕衣一枚では耐へられない。白い蚊帳に厚い布團をきてねむる。

――平壤、松岡旅館にて、友のね靜まりたる後――

八月四日

鮮人下駄

横さまに降りそゝぐ朝鮮の雨は烈しかつた。それをも厭はずに私等は宿を出た。朝鮮の雨期は閉口だ。旅に雨、實に辛いものである。泥まみれに歩いて居る私らには、鮮人の靴が羨ましくなる、木靴の下に日本の木履の齒を無細工に八字形に開かせて入れて居るものである。

『あれでは足が痛むでせう』

と尋ねると案内してくださつた小學校長さんは、

『いえ朝鮮人の足は非常に細長いのです、それに厚い足袋を穿くからそんなにもないでしやう、然し日本人の足ではとてもはいらないですよ』

と答へられる。

平常は月に一回それも極めて輕い雨であるから其時だけ蟄居して置けば雨具の必要がない。それで鮮人には雨具が發達して居ない町を歩いて居る人の多くは傘をもたない、或は大きな綿代傘を肩の邊まで泰然と被つて大道を歩いて居る、ぬれながら歩いて居る處など如何にも悠長な國民のやうに見える。然し減多に見ない。女子の高等普通學校などでは雨が降るが最後出席數は半數にも達しないさうである。

水汲

上水はあつても場末では水を汲む。石で作つたやうに見える釣瓶で直徑の狹い井戸から汲み上げると、肩から結むで腰の邊で杓を釣つて『ヨボ』(鮮人の男の結婚した者の稱)がをかしな足取で水桶に溢るるばかり汲み入れて運ぶ上衣と長い裳との間から白い乳房を誇り顔に出した朝鮮婦人が水甕(一斗も入る)を頭へ乘せて手さへかけずにうまく中心をとつて運ぶ。『市井』と云ふ趣が充分に味はれるのである。

朝鮮婦人は非常に姿勢がよい、そして足は外八文字に踏み出すこれはあの頭に乘せる藝當から來たのでないかとKさんは進化論でとき始めた。

學校のかずく

大興部にある平壤高等女學校は其の設備も充分でなく又生徒數も少ないが女學校が出來るやうに日本人は二萬五千を算するのである。

同敷地内にある平壤公立小學校は其設備なども比較的に完全であつた、平壤女子高等普通學校は新設の學校で校舍なども朝鮮家屋を其儘に用ひて技藝科の教室の相間には『明倫堂』の新案朱熹の額がある四千餘人の朝鮮婦人を容れて新式教育を施して居る。殆全部髪を上げて白布で髪を纒ふて居る。これは有夫者の象徴であるとの事である。主として裁縫を教へ、なほ日本語を解せざるものがあるから通譯教授をして居る、私等の行つた時には恰度修身の課業であつた。

本科の生徒はよく日本語を解する能力のある普通學校卒業生である内地の高等女學校に相當するもので私等の參觀したときには裁縫の時間であつたが鮮人の女教師によつて板書したズボンを縫ふて居たが、鮮な日本語で答ふるのは可愛くもあり殘酷でもあるやうな氣がした。今宏大な校舍增築中で基礎は出來て居たが他日竣功の折には更に盛大となるであらう。これを見ても如何に總督府が鮮人教育に腐心せるかわかる。

これと拮抗して耶蘇教の米國の女學校がある赤煉瓦の校舍と完全した寄宿舍とで鮮人をひきつけて居る、其の勢力は侮るべからざるものである。

男子高等普通學校は外觀は内地の中學校と同じで生徒の服裝なども霜降りまがひの小倉服をきて黑革の靴(一般に赤革が流行)を穿つて居る所は全く内地人と差別はない。今增築中で前面にこれと拮抗した米人の中學校を瞰下して居る校長〇〇〇氏は鋭意發展に苦心してゐられる、年々米人の學校から轉校するものが多いとの事である。

卒業生は多く師範科に入つて各地の教員となるとの事である。在學生の四分の三は既婚者であるが、近年は日本化して其の數も減じ行く傾向がある。案内して呉れた生徒などは非常に流暢な内地語で且つ教科書言葉で實に聞く人も氣持がよい。

『あなた方の日本語は少し違ひます』

と言はれた時には冷汗が出た。

此校の應接室で朝鮮學制の講話を校長より聞き生徒が農業の實習に作つたと云ふ水蜜桃を食ひ旅館からもつて來た壹食を此處ですます。

明太魚

降りしきる雨を衝いて平壤停車場へ急ぐ。

鮮人町は支那町よりも遙かに清潔である、積み重ねた明太魚(メンタイ)(すけとうだら)の香のあふれる魚店の前をつきぬけるとこれが朝鮮の香のやうに思はれる。表町となく裏町となく到る處に見る此魚の齒の白いのに衰亡の朝鮮を語るやうであるが

朝鮮五大漁業中の最大特產物として鮮人の第一嗜好で咸鏡沿革三十里の漁獲高は六七千萬圓に上ると云ふ盛況である。

小止みもない雨の中を高等普通學校の昨日案内してくれた參名がまた見送りに來て呉れた。能辯なMさんは、此の暑いのに外套を着て歩いて來る、其中の一人に絕間もなく話す、私は默つて殆自國語を語ると同じやうに流暢に語る生徒に驚異の眼を以て傾聽する。

美人產地——妓生のこと

『平壤第一の名物は何ですか』

と平凡な問に非凡な答が出た。

『美人ですよ、朝鮮の八道の內で一番美人の多いのは平壤です、歷史上でも現今でも京城の宮中に勢力のある官妓、巷の噂に上る美形は皆平壤から出て居ります——えゝ、今は內地の人と欣むで結婚しますよ』

とチョンガですよと言ひながら大人らしい言を吐くと默つて歩いた。

『官妓學校(Keeson school)も此地にあるのですよ』

と附けた。日本には例の新しい女を集めて女優學校をたてた人はある。然し藝妓の學校はいまだにきかない、それを李朝の初めから妓生學校があつたと云へば此方面に朝鮮が如何に發達して居るかゞ偲ばれる。きく所によれば官妓は李朝の初めに貴族が流罪の身となつて地方に配せられた時に土地の賤民の女に通じて出來た女や、又は地方の罪人の妻が地方役所に沒收せられて公婢となつて賤卒などゝ通じて生むだ兒で、誰も娶る者がないと云ふのを多くは官妓にするものである。素より平民の女にして讀、書、舞樂など習つて官妓を志願するものも多いとのことである、もとより昔は宮內府御用と云ふのであつたから位、格式もあり公會の燕席にも出づれば國王の枕席に侍るものもあつて、才色双美と云ふやうな者は政治にさへ口を入れる勢力を振つた時代もあつたとのことである。

平壤停車場で「日本へ」

停車場には『謬文雜りの電報は取扱はず』と電報取扱所に書いてあるのを見て鮮人の日本語に巧なものもこれは必要上のことから起つたのであらうと思つて長谷川氏へ尋ねると、

『そんな事もあるでしやう、しかし鮮人は外國語に習熟する能力は非常に勝れて居るもので、既に普通學校四ヶ年で大抵に完成し高等普通學校などは少しも鮮語は用ゐなくとも不自由はないのです、一つには朝鮮の發音は何國語でも自由に語るに足るだけの音が含むで居るのと一方には歷史的に外國から威服される結果でしやう』

と明快な說明を與へられた。此言を信じたなら我日本國民族のやうに中學五ヶ年修業しても何にも物にならぬ國民は服從の國でないのを證するに足ると思へばうれしい。

『何處まで行くけえ』と印半纏の土方風の男が朝日を意氣に吹いて尋ねると熊公か八公からしい。これも同じ扮裝の三十男が揚然と答へる。

『日本までさあ』

『そんな手輕な風で?』

『大邱へ出張だ、大邱も日本だ——よ』

とこんな會話が三等の待合室で交はされる。側には口鼻も頰髯も延びるが儘にして凡ての物を超越したやうに火口の大きな二尺餘りの烟草管を弄て鮮人が小さくなつて座つて居る。落ちゆく夕陽には深いさみしさと哀れさがある。

多くの人に見送られて私等の汽車は戀しい內地の方へ引かれゆく。

(朝鮮風俗) 新婚の盛裝

山のない朝鮮

刀で削り取つたやうな赤兀の山と、それと同じ色の赤い汎濫した河とが私等を送迎する滿洲の青い色を見た眼に地球の骨のやうな赤色の山を見るのは實に不快で耐へられない。「山は高きが故に尊しとせず」で樹のない兀山は餘り尊くもない、「朝鮮に山なし」と云つたのは穿つた言と思はれた。案內して呉れた高等普通學校の生徒はこれに巧い說明を加へた。

『朝鮮の山には非常に虎が多いのです、昔は山に入つて嚙み殺されるのは非常に多かつたさうです、それ故に止むなく山の樹を刈り平げて悉く虎を打ち殪し虎の害は除かれたのです。然し近頃は又內地の人が殖林をしますから又虎が郊外に屢々出ます、それでも鮮人には鐵砲をもたせないから虎は此後又害をなすでしやう』

と少なからず憤慨したのを思ひ出す。虎と兀山、虎と洪水、何か面白い物語りとより外に眞面目にきかれなかつたが後にきくとそ

れは鮮人の口實で實は毎年冬期にたく溫突の燃料の爲めに刈りとつて其根迄も一本殘らず掘りとるためにあんな赤兀の山になるとの事である。

朝鮮の河

河の語原は「かはる」で常住其の流路を變へて飛鳥川ならねども昨日の淵は今日の瀨となる其の本義かも知れないが朝鮮の川は甚だしい、少しの雨でも、田となく家となく汎濫する。私等が引かれてゆく線路の兩側も赤い水が漲つて居る。三豐一囚と言つて三年目に一回の飢饉位は平氣で我慢して居る、山も育てず堤防も作らずになるが儘にまかせて居る。そして虎を退治する爲めだと云つて居る鮮人は憐れにも又可笑しい。

開城

中和、黑橋、黃州などと私等に何等の興味をも與へない驛が送り迎へるのは恰度外國文を讀むで居るときに隙もなく不知の單語が出て來るやうに厭氣がさしていつた石炭屑が雨のやうに降り込む車窓に眠りに入つた、ふと目覺ますと驛夫はけたゝましく「開城」と呼むでゆく。

開城は昔の松嶽である一千年の昔雞林の野の鼎沸に黎民歸向に迷つた時にこの松嶽山の麓に起つた一布衣「王建」は高麗王朝五百年の基を定め全土に佛教の花を咲かせた其の末年棟梁柱石の臣圃隱鄭影周は一武辨、李成桂に殺された、「善竹橋」は今も尙碧血乾かないと云ふ一千年前の古都。私は下車して古色を帶びた開城の氣分を切に味ひたかつた。今は只開城人參、高麗燒許りに其の名を止めて居るのが物足らない感がした。

京城着

夕暮京城についた。南大門停車場に多くの先輩に迎へられて最後の遊覽地としての京城を深き感興をます。

電車が通る、然も右側を通る。自働車が唸る。昨日の靜かな平壤と比して十九世紀の朝鮮と二十世紀の朝鮮とを見るやうな氣がした。原金旅館に最後の團體宿泊といふ何となく妙な氣持でねむる。

八月六日

京城遊覽

珍らしく見つけた雲間の蒼空が次第〳〵に擴つて行つて今日は美しい氣持で朝鮮第一の都貳拾貳萬の大都を見ることが出來ると思ふとうれしい。私等は本校卒業生正木君、武田君等に導かれて鐘路に出た。

鐘路

とは面白い名である六十尺の大路が眞一文字に東西に通じて居る、鐘樓があるから起つた名ださうである。巨大な鐘が低い鐘樓から掛つて外には格子がしてある。其の鐘の下部は土地と同高となつて居るのが可笑しさに、正木君に尋ねると、

『これには面白い話がある。昔或王樣が此の大鐘を鑄て淸淨無垢な少年少女に曳かせた、全國の少年少女は花のやうに雲のやうに集つたが、何分大きな鐘のことで上らない。其內に一人の怜悧な子供が居て、其鐘を地にふせたまま鐘樓の梁に結むで、其下を掘らせたさうである。で今でもあんなに低い』

とこれが合併以前迄は朝な夕な京城々內に響き渡つて居た市民に忘れられない鐘である。

昌德宮

それから現今李王殿下の宮居である昌德宮を拜觀した、從來東大閣と言うて三王宮の一で大祖李成桂の建造であるが、現在の建物は文祿役に先だつて燒失したのを光海君の元年に再建したものである。

私等か昌德宮の一部昌慶宮の正門弘化門に立つと今日は火曜日と云ふので門は閉ぢてある。切角來たものをと當惑して見て居ると老樹の下に立つて居た鮮人が出て刺を通じた。此人は總督府から我々のために案內の勞をとる爲めに來た人で早くから來て待つて居たらしい。

此處は前面の總督府病院と對して幽邃の地で、成宗の十四年に建造したものらしい。現今李王家の博物館となつて居るが、今日は火曜の事とて見ることが出來なかつた。

動植物園

動物園は大規模と云ふ譯でもないが金銀珠玉を飾りたてた殿樓と、蒼蒼たる庭樹の間にあるので背景と對照して非常に面白い眺である。憐れな犧牲となつた山羊の骨と肉との差別なく嚙み碎いて、口の邊に鮮血を染めて居る。稀に見る鮮產大虎。鷄の羽や脚や散亂した、檻の內て食に飢えた意地惡い眼を瞠つて居る豹や、輕く湯氣のたつ水の中で呑氣に沈沒しては浮き上る河馬の雌雄、堅甲二丈、食を求めて鋸のやうな齒を擡の金棒にかみつけて居るアフリカ產の鰐魚、四足を檻まれても何處に風が吹くやらと石に左に山のやうな體を動かして運動して居る稀に見る大象。駱駝やカンガールや、火喰鳥や、極樂鳥や、長い旅の內にあつてあとげない興があつた。

此等の動物園の間には通明殿、景春殿、明政殿などの恰度龍宮城でも見るやうな宮殿が見える。

植物園には幽草花草色を競ひ香を爭つて、葉洩の光に綠の色が日射病避の日覆に染み込む。夏葛のからみついた亭の柱は、池の漣波に洗はれ、乘りすてた鵝首の遊船には、世を外にして翡翠が眠つて居る。物古りた林道一曲り每に亭がある、一上り每に休憩所がある、何處か涼しい泉の音が洩れる。數年前迄は卑賤の者の入ることの出來なかつた「秘園」の內である。

秘園

有名な秘園は八十疊に餘る宙會樓と四十疊に餘る書香閣との朱殿の北を呼むで、丘陵起伏して、松影婆娑として、園地四方に流れて水は淸洌である。西の方には此の園の出入を司る曜金門がある。橋から北方に向ふと、岩石は淸水を滴らして樹亭、樓閣は喬木稚松の間に隱見する。實に神境の思がある。此邊は百官襟を正して歩を運むだ處であらう。御親蠶

所に女官の姿を見た外に、この廣い園には私等の外には人影なく門は鎖ぢられ甍に苔生ひ只昔ながらに高麗鶯が鳴いて居る許りで、柱毎に題された流麗な妙句は躍るやうな朝鮮流に書かれた風味ある筆跡と共に昔の榮華を語る許りである。

昌德宮の南門敦化門は宏壯な門で鮮人の護衛兵が長閑に立つて居る、其の前面に朱煉瓦の一棟は現李王殿下の宮居で内にはあけ放つた窓に人影も見えた。仁政殿を中心とした宣政、内班、誠正の各殿は老樹の影に陰見して居るが、布衣の私等には拜觀は出來なかつた。西門なる金虎門の邊には槐の白い花が風もないのにほろり〳〵とをちる。

京城高等普通學校

これから武田氏の奉職校たる京城高等普通學校に行つて高地の上に完成せられた基模の比較的大である學校を見た。此處で午餐をすませはら〳〵と降り出してはまた晴れ上る天氣を物ともせずに併合以前までは李王宮であつた景福殿を拜觀した。

景福宮

は來年併合紀念博覽會場として門瓦等は修繕中であつた。南の正門は光化門、その内に興禮門があつて其前面には勤政殿がある。これが景福宮の正殿である。大祖其の文臣鄭道傳に古典を精究させて『君子萬年竹爾景福』よりとつて景福宮と名づけたのであると云ふ。右には日華門、左に月華門で、橋を架してその欄干には怪獸を彫刻して居るこれが錦川橋である。

勤政殿前に一品から九品に至る席次がある、僅か五年の間に草深く生ひ隱して居るが、百官綺星の如く並むで參朝した昔の盛儀を偲ばずには居られない。

殿後に思政門がある、其正殿は思政殿であつて國王萬機を攝した處である、右に千秋殿左に萬春殿がある、其後に用敷門があつて康寧殿があるこれは國王燕寢の所で草深く生ひ障子の破れに亡國の韻を響かせる。右に延生殿左に慶成殿があつて殿後に兩儀門ある、交泰殿があつて皇后の宮居であるが戸締嚴重で何れも三重に鎖鑰せられて居る。交泰殿を出でて大哉門を過ぐれば一條の道がある。左右には高い障壁がある。百五十歩平方位の蓮池がある池の中央に石欄を備へ立方形の基地に建てられて二層樓は有名な慶會樓である。

慶會樓

樓下は一面に磚きつめて柱は外側のものは方形内部のものは皆圓形で直徑三尺、高さ十五尺の四十八本の花崗石の大柱で築きあげてある。涼風紅蓮の花香を送り來て面上の汗も立所に消ゆる想がある。

初め、西樓と唱へたのを太宗の三年に改築したもので宮廷の大宴會は皆此樓で行はれたと云はれて居る。實に宮城中第一の好樓と云はれて居る。紅蓮の彼方には我國史上に有名なる閔妃の宅と

きけばいとど血の湧き立つ思がある。

景福宮は大祖李成桂の創建にかかり文祿の役に我征明軍の入城に先つて全燒した。爾來貳百餘年間蹠礎累々草莽に委したのを、大院君が攝政の折に一世の民力を盡して再建したものである。歴史にはこの建築の費用として大に貢祖を徵し、附近の民衆を驅つて、徭役に服せしめた。食料などは遠く咸鏡の境から海を廻つて輸送したとある。これがために朝鮮の山は兀となつたとある。然も大院君は輪煥の美を以て前代未聞の事と言つて廷臣に誇示し、國王を昌德宮から迎へて、自得したとあるが、今は風雪のために破られて僅かの年月の間にかくも破壞されるものかと疑はれる、前面の街道は七十尺の廣さあつて左右には官衙軒を並べて居る。

（朝鮮風俗）　會食

京城中學

西大門通一丁目高地に京城中學がある、大きな岡一つを敷地内に取り込んであつて、設備も完備して朝鮮に於ける中學校の模範である。

南大門の近くを通て疲れた足をひきずつて南山公園に上る。

南山公園

馬の背のやうな石磴を拾つて上れば、漢江から吹き上げる涼しい風は路傍に建てられた住宅の前の柏楊の葉を搖る。一右方は龍山、左方には京城が只一眸の内に萃まる。南山は終南山とも呼むで景福宮から眺いた北漢山の嵯峨たる奇岩峭兀たるに比すると、青松柔らかく生ひて角のとれた優しい岩がその間を點綴して居るこの山と對すると、誠に穏々たる趣のあるのは面白い對照である。今は總督府所在地である倭將臺にかけて漢陽公園の一部となつて そして山脚になつた谷には清烈な水が流れて危橋を架し、ベンチを据えて京城人士貳十萬の足を引いて居る。

京城全景

私は此處に立つて初めて京城の全景を見る事が出來た。東西三十町、南北二十町

其周圍は圍繞するに延長貳里半の城壁を以てし、脚下にある南大門から等距離に四大門と、四小門とが建てられて、内には鐘路や景德宮前の街道を中心として、幾多の小街が並び立つて居るのは東山に上つて彼の京都の町を見るやうである。只京都の瓦屋根の多いのに比して煉瓦造の家が多くその間に高く生ひ出た柏楊や、槐が、高く生ひ出でゝをる。遙か左方(北方)にあたつて長く通つた大道がある、これは義州街道で、その京城に入る處にかすんで見える二本の柱は、迎賓門の殘骸だと思ふ、何れも一國の首府と云ふ感がする。南方は洋々たる漢江岸に集まつて見ゆるのは龍山で全く日本人の組織した市街で、明治四十三年京城と合併せられた此地は半島に於ける陸軍の根據地として早く自治體を布いた所である。

南山の絶頂には此時は勞れて上ることが出來なかつたが、案内の人にきけば上に小祠があつて、春秋の祭典も廢れて、今は巫女が其傍に居を構へて居る。

國師堂の扁額がある。堂の後にある二坪許りの石壘があるこれこそ南山の烽燧臺である。東から順次五峰を設けられて南所に部將があつて、これを宰した。以前は八道郎郡に燧臺を設けて此等は皆此の南山に應じたと傳へられて居る。これは全く賊警に用ひられて無事な時には一隧火、賊が現はれたときには二炬、賊地境に迫つたときには三炬、賊地域内に侵入したときは四炬以上と定つて毎日黄昏この岡で行はれたのである。連日連戰の時には柴をつみ狼糞を加へて、晝はこれを點し夜は火を擧ぐるを以て法とした。彼の八幡船や倭寇が來たとき、此上に烽火は上つたであらう。京城も圍つて我兵破竹の勢で鬼將軍を先鋒にして攻め込むだ元祿の役には、如何に炬煙天を焦したであらうと思へば此處にも面白い追憶はあるのである。

此から漢陽公園に入つて朝鮮全土を支配する我が總督の在所である總督府の前を通つた。

總督府

黑味勝つた塗の高屋は京城の南方に嚴然と立つて居る、前にはカーキー服の門衛が護衛して、王宮門のやうな感がある。山の尾に立てられた總督官舍も見える。

私等が宿所である原金旅館は總督府の眞下であつた。

私は此に金子先生の許可を受けて一行と放れて吉野町に居る友の家で一週間を過して京城内面裏面を好奇心にかられて研究した。(一行は此夜の夜汽車で釜山に向つた)今それ等の一端を記して見やう。

家屋。

京城の内では隨分大きな家も見當らぬでもないが、官省の門の外減多に二階建の家を見ることが少ない、京城や平壤では、瓦葺の家もある。時には二階屋も見受ける事があるが、然し南山の公園から見下すと山脈に伽匐して居るのは大抵草葺の家で、それが可笑しな丸屋根になつて居るので遠方から見ると土饅頭か海狸のやうに見える。普通の家では大きいのは□形や「形に中を庭園にして其處に色々の干物などして居る。市でも裏町などに入ると狹い路の兩側に建てられて居るのは三四疊敷の部屋が二つか三つかが關の山で、何の造作もない家である。

其造方は高くもない不細工な丸木柱を構へて、此に出入口を除くの外は泥土を主として これに瓦のカラケや石等を交へて塗りつぶして夫れに横に二三尺高き四五尺の小窓をあけて居る。

屋根は草で葺いて、其上に筵見たやうなものをかけてる。こんな風であるから室は低くて、闇くて、只防寒用專門に作つたやうに思はれる。

家の内部も全く防寒的に出來て居て床を二尺位に築き上げて、其の下には川字形になつた幾條かの溝を作つて其一方に火焚口を設けて、反對の方に煙出しをつけて居る。その火の氣が室内を温める仕掛になつて居るのである、普通には、焚口に竈を設けて居るのが多い。この裝置は所謂温突(オンドロ)で上は昌德宮の雲の上から下は其の日稼ぎの土方の家まで是である。

中等以上の家や、料理屋などには、床の上に油紙を張ツて居るそれが塵一本留めずに毎日拭はれるさうであるから、非常に美麗にも見ゆる。現今日本人を通す所などでは、其上に花筵などを敷いて居るのもあるが、場末で見ると莖で作つた荒い莚の上に座つて居る。

室内の模樣は中流以上になると壁となく、柱となく、紙ではりつぶして居る、日本で用ひる紙襖用のものを用ひて居るのがある。

温突に用ひる爲めに、木を刈り草を刈る故に、朝鮮の山は兀山となると云はれて居る。然し農家などではこれよりも一層ひどい住居があるさうである。

朝鮮人の服裝。

朝鮮人は皆冠りを被つてそれに眞白な衣服をつけて居る。日本人のやうに赤脛を出すやうなことは決してなく、白足袋をはき、白靴をはき、又冠帽の紐と、外套の紐とは具合よく意氣に前に垂れて居る。服裝の優雅に出來て居る上に大變な見榮坊だから、如何な下層の者でも鬚を立てる、そして慣例として生來嘗て鬚を剃らないから、產毛の儘で赤い疎な下向の朝鮮鬚が出來るのである一見なか〳〵上品である。

冠帽は日本の帽子のやうであるが併し帽子ではない。一見帽子のやうであるが實は三部に別れて、笠(カサ)宕巾(タンコン)綱巾(マンコン)である。この冠は減多に脫がない、汽車の中などつかれると笠だけを除いて居るのがあるが中々不釣合に見えるものである。

朝鮮人の衣服は西洋服と支那服とを折衷したやうである、上衣（チョーク―リー）は筒袖で、それを其上に着る所の周衣（ツールーマーキー）と云ふて洋服の外衣のやうなものである。下衣（パーチー）と云つて支那服のズボンに膨味のあるのによく似て居る。

『朝鮮服は便利ですよ、周衣一枚あつたらもう禮服ですからね』と云ふ。實際簡便に見える。

女子の上衣は短くて、乳の邊に至る。そして乳房を見える位にして居るのがハイカラ式だときいた。其下に長い裳をつけて居るのは中々美麗なものである。そして中流以上の女子が外出する時には「長衣」を引被つてゆく。恰度維新前の我國の「カッキ」のやうで、是で市中を漫歩して居るのは實に雅なもので、全く櫻かざした大宮人の昔を偲ばせるものである。

色合は多く白色である。幼ない女の兒には青赤などの交つた服をきせて居るのを見受けるが、これは模様をつけたものではない繼ぎはぎのである。朝鮮の女はこの白いものを洗濯するに全力を盡すので、洗濯婆で四五人の朝鮮女が寄つて、小さい川で洗濯して居るのを往々見受けるのである。或西洋婦人は朝鮮婦人は洗濯のために生きて居ると云つたさうである。

朝鮮で往々見るのは梅花形になつた大きな笠であるが、これは喪中にある人で、竹二本に張つた中扇を以て額を隠す風習となつて居る。

朝鮮人の婚姻。

私が友の宅に居た時、町はづれに結婚があると云ふ大賑だつたから、女と一緒に行くと、女には見せるが男には見せないと云ふ。然し結婚して仕舞へば見せる。朝鮮は一般に結婚の事が八釜しいそれもそれの筈で結婚したのは、髪を上げて大人（チンガミ）と云ひ、結婚しない者は六十になつても小童（チョンガー）と云つて人に輕蔑される。それ故に朝鮮ではまだ十二三歳であるのにもう急いで女房をとる。高等普通學校の生徒（十九歳以下）のもので三分の二は既婚者とは恐らしい勢である。女房は大抵二三歳上であるのが普通である。

結婚に關しては全く親の意見が與つて力がある。本人は何にもしらずに結婚するのである。

結婚式は吉日を選むであげる。先づ女が室に入つて、四拜する男が二拜する。ホロホロ〳〵と謂つて杯をとり酒をのむまねをする。これが合歡杯とて夫婦杯である。結婚するには非常に金が入つて女の方に仕度金少くも五十圓は送らねばならぬから、貧民は社會から輕蔑されつゝも小童で暮すのである。

葬祭。

葬祭には僧侶を招かずに新調の麻布をもつて四軀を緊りつけ、そして生前に用ひた調度類はこれを木棺に納めて、納棺後四日にして出棺し。親戚家人はこれに從つて號哭する。其泣聲は哀告（アイゴウ）と發音してなく。又人を雇ひて號哭させることもある。地形をよく選びて埋むるのである。その前になく時は髪をといて泣くとの事である。

親戚の者は大抵一年又は三年間喪に服する。その間は白麻布をきて大きな檜網代傘に顔を隠して外出する。その間は事務をとらない。これ等は儒教の遺風であるが、これがために百般の事務が沮害さることが多い。

朝鮮料理。

私は友達とよく朝鮮料理を食ひに行つた。朝鮮は案外に料理は發達して居るのに驚いた。會席となると支那風と日本風との折衷されたやうである。主食物は矢張り米である。其他麥や粟等を雜へて食ふのである。

副食物には獸肉、魚肉、鶏肉などで野菜なども多く用ひる。私等が食ッたものには豚や、鶏や、牛肉などもあつた様で、飯臺に盛つて、鍋には三人ならば三人分盛つてある所は西洋料理と同じである。

（朝鮮風俗）家庭教育

殊に内地人の困るのは韮や、蒜を用ふるのと、沈菜（漬物）に加味する爲めに多くの胡椒を入れることで、見てさへも困る位に漬物は赤くなつて居る。肉類には屢々犬を食はされる事がある、

明太魚は鮮人は非常に賞讃するが、然し甘いからではなくて先の李王が嗜好されたのと、祭に用ゆるからとの事である。食ッて見ると明太魚は案外不味なものであるのに驚いた。

朝鮮劇。

一日は雨で中止となつた。二日目には曇りで初めなかつた。三日目に初めて正七時から鐘や鼓を矢鱈に打ちならす朝鮮劇場に入つた。

劇場は日本人の所有に屬した丈けにその舞臺面は全く日本と同じだッた。耳を聾するやうな地謠が凡ての言葉を壓倒して、すぐ隣にある拙い腰掛が幾十となく並べられて居る一等席は、二階にあッて、薄鬚の兩班（ヤンバン）が呑氣に長い煙管で、青い煙を吹いては、僕に何か命じて居る。婦人席には白粉をつけて盛裝

した婦人、眞赤な紅を日の丸の樣に染めた乙女などが嬉々として笑ッて居る。

舞臺に大きな綱を張る。面白い事を初めたなと思ふ内に、一としきり騷がしい樂が響くと汚ない幕があく。四十位の大の男が大きな扇を手にして、見物人の頭上で綱渡りを初めた。綱の上で面白い藝當を始めて人の頤をとくやうな事を盛に言ふと、下から喝采する。私は私がまだ幼なかつた折りに祖母の背で見た事を思ひ出して二十年位はたしかに鮮人は遲れて居ると考へた。

それから藝當に揭げられた金光が初まる、藝者は何れも十五六位の妓生であつたが、互に戀々の情を詩によせて歌つて舞ふ。同じやうな手振りを何遍となく操りかへす。詞を解した人には面白いかもしれないが、通譯して貰ふ身には、實際長たらしいものだと考へた。

次に十四五の乙女が僧衣をつけて出て鐘や太鼓に合せて舞ひ出した。僧舞である。舞の手振は優しい所にある。艶な所にある。優し味と艶味とは、却ッて日本の舞姫よりも妙の樣に感じた。

それから金光が一段あると立舞が代る。左右から盛裝した妓生が出て手を振り、足をあげて、婆娑として舞ふ手振は中々面白い。

劍舞は日本ならば少年が好むでやるのであるが矢張り妓生が一尺位の木刀で、矢鱈に頭上に舞はしたり、足元で打ち合せたりする。男舞は離別の悲みを舞ふのであるが、何か愁の面持は現はれない。一つ面白く思つたのは蓮舞で蓮の花の開いた盥に鶴に扮した妓生か出でゝ、花をみると花が開けて其内から美人が出てで舞ふと云ふ趣向で一寸の人の注意を引いた。

要するに私の見たのは劇と云ふ事の出來ないものであつたかしれないが、そんなに進歩した劇はないと思ッた。進歩した西洋劇を見た目には幼ない折に見た野芝居、それも寄席でやる位のものだと思つた。

喧嘩。

或夕暮、灰暗い路地を歩いて居た。内地人の出した果物店の燈の前に、家をもたない憐れな土方風情の者が十人許何か犇めいて居つた。私は好奇心にかられて眺めて居ると、意氣が荒くなつて其内の一人が唐突(いきなり)立ち上ると見る間に拳を擧げてなぐりつけた。なぐられた男はとびついて引き組むと思ひの外、徐に立ち上り腰がまへして毆りかへした。前者は何も抵抗しないで毆られて居る。すると其内に仲裁が入る。仲裁は其相手を侮辱した言でも發したのか仲裁人と又毆り合ふ。喧嘩は二組となる。それに又仲裁が入る。四組となる。かうして喧嘩は傳染して果てしもない、辻は大騷動となる。

内地人が出て來て止めやうとしてもきかない。かうして限りもなく爭ッて居る。その始は僅か十錢の爭であつたさうである。日本人の丁稚が出て側にあつた水桶から遠慮もなく水を撒いた、振りかへつた十人の鮮人は日本人と見て其の儘にした。亡國の民は矢張り悲しい所があるものである、

八月十二日

京城より釜山へ

一行から六日間遲れて私は南大門の停車場に友の家族と別れ、龍山驛に耐へがたい別離の悲に打たれて、友の袂が見える限り汽車の窓に帽を振つた。これから京釜線二百二十四哩、五十三驛に獨り淋しく過ぎぬばならないのである。二百二十四哩とは恰度京都から東京迄の里程、そして其間に東海道宿驛と同じ數の五十三驛あるとは、何だか淺からぬ因緣でもあるやうに思ふ。

鐵道は四呎八吋の廣軌、横になるにも立ち上るにも非常に氣持がよいのである、一昨日友と散歩の折に泳いだ漢江の大鐵橋に暮々の響を起して渡りゆく。五臺山、太白山に源を發して五十里の舟運の便をもつた大河は澄み切つた水が鐵橋の下を流れて、京城中學の水泳所にはまだ時季が早いためか誰も影を見せない。下流殊の外に廣り見えて朝靄の間から夢のやうに小舟が現はれて來る。

水原に達した、華城と云つて沿線の大都である。驛の東方十四五町の彼方に南門に達する。朝鮮半島中に只一つと數へられる人造林は華山の翠も飾り勸業模範場もあつて半島に於ける有望な土地である。

『此處が眞桑瓜の名產地ですよ』

第四　旅行日誌(其の貳)

と名古屋に歸ると云ふ手輕にした商人體の人が敎へて呉れた。私の心は眞桑瓜にはそんなに興をひかなかつたらしい。驛前に掛つた文字を心なく見ると、

成歡と書いてある。眞桑所でない、日清戰爭の勞頭に於て松崎大尉は此地に近い安城渡に斃されたのだ。そうして日清の陳戰は此地に砲火が開かれ遠くはあらぬ西の方には牙山があるのだと思ふと山も河も皆我同胞の苦戰の跡が偲ばれるのである。

平野を走つた汽車は今は朝鮮の脊梁山脈に及むだらしい。面と面と摩するやうに大地を掘り割つた所や、窒息する樣に思ふ幾つも〳〵の隧道を越えたと思ふと、美しい名の秋風嶺驛についた。實に海拔七百十二尺全線中尤も高い所である。

此から下り坂となつて走りに走つて、初めて洛東江の青い流れを目にした。此處にあるのが倭館驛で私の友が居た大邱までは間もなかつた。大邱府は南韓第一の都會であつて、廣い平野の間にあつて人口參萬あるとのことであるが此處から乘りこむ日本人が非常に多くて、日本内地の停車場のやうに思はれた、

何となく疲れきつて我となく眠つて居ると恐ろしい汽笛に覺める汽車は隧道の内を通過して居る。殆息のつまるやうな氣持でやつと出でゝ果を賣りに來た賣子にきく、

『賓覩の隧道で約四千呎です』と答へる。

三浪津邊には内地の人が大分入りこむで居るらしい。

此から洋々たる洛東江に沿ふて舟は進む影を美しう水に落す。泥屋根の支那家屋が其間に隱見する。釜山が近まると思ふうれしさにあたりの景さへ生きて來るのである。

釜山についたと思つて荷物を棚から卸すと、釜山鎭であつた。此處は釜山より二哩地方貨物の集散地である。彼の豐公征韓の際我軍は此地から上陸して二方に別れたので石壁が山上に殘つて居るのは小西行長の築いたものとして傳へられて居る。舳艫啣むで先を爭つて押し寄せた當時の有樣はいかに盛觀であつたらうか。

電燈の明るい光が宏大なプラットホームを照す。午後六時朝鮮の南端釜山に達した幾度か耳にし幾度か吾國人の血を流した釜山の地を踏んだ。

夕風に鏡のやうになつた釜山港の棧橋に私等の一夜の夢を托すべき高麗丸は三千噸の巨體を横たへて明るくあたりを照して居た。

稅關の眼

船室に入る前に稅關吏が出張して荷物を檢査する。私は持つて居た煙草を取り出した。上海で求めた金口が六十本とそして葉卷が四十本。稅關吏は荒々しく取りあげて葉卷を引き割いて、側にあるバケツの內に投げ込むだ。

『何するです?』

と豫想外のことにあきれ果てて怒氣を含むで尋ねると、

『金口なら百本迄よろしい、葉卷なら五十本迄、どちらをすてます』

と案外冷笑的にやられて張り合ひぬけてトボ〳〵と階段を下りて行つた。私が二回目に甲板に上つた時にはもう色々の煙草がバケツに一つ杯になつて居た。

高麗丸の一夜

連絡船高麗丸は實に設備の整つた滊船でした。

廣い備後表の新しいのを敷きつめた三等室の上には、大きな煽風器が回轉して居る。湯もある。呑湯も備へてある。何となく旅館にでもついた時のやうな氣持になつた。

さらば雞林八道

七時半が出帆と聞いて湯上りの氣持よさに釜山の町を歩く。波止場の右側に長く連つた果物屋、土產賣店等は美しう人の目をひく。

港の前面に踞然として梨地のやうな星空の半天を摩するものは絕影島で、港內に立つた五六の岩島は、五六島で赤崎の山袖のやうに北から突出して、灣は恰度一大圓鏡のやうで、薄暗い帆影がユラリ〳〵と動く。實に天然の良港である。

高麗丸の高い滊笛が響いて薄いスクリューの響をきいた。さらば思出多い雞林の野、またいつの日にか相合ふのであらうか。私は天井からそよ〳〵と送り下る風の下で眠りに入つた、波の音さへも耳に入らない。玄海の波、私は樂しい故郷の夢に十時間をすごした。

八月十三日

故郷へ

六連島が明瞭に見える頃目を覺ました。甲板上には何れも〳〵故山に歸るうれしさに會話さへも生々して居る。

八時、二十五日目になつかしい下關の地を踏むだ。龜山の上の建物から赤い朝日を照りかへす。

正午私はもう故郷の人となつて居た。そして歸つた幸を心からよろこんで下さつた父上と弟妹に擁せられて旅行談に日の暮れるのも知らなかつたのである。

——をはり——

第五　教育狀況一般

此の度の海外旅行が我々に莫大なる知識と經驗を與へたのは言を俟たない從來小天地に踢躓して居る我々が初めて浪又浪の大洋の壯觀を眺める、又一面茫々たる大陸の平原を橫ぎる、唯それだけでも無限の感想と深遠なる印象とを得たのである。それのみならず上海に上陸しては白色人種の活動振りを目擊し、南京に遊んで六朝以來の遺跡を訪ひ、滿洲に來ては我が忠烈なる勇士奮戰の跡を吊ひ、朝鮮に於て我新經營を視察した。この間に得たる知識は固より豐富詳密ではないが深く我々の腦裡に刻まれたものであるから教室や書物から得たものと違つて、一生胸臆に往來して我々の心を鼓舞し感化を及ぼすものである。

（朝鮮風俗）街道筋

斯くの如く比較的短い三週間は重に名所舊蹟の見物に費されたので、我々に取りては直接關係の深い此の教育的方面を充分視察するを得なかつたのは遺憾である。加之時恰も暑中休暇で實地の授業を參觀する機會なく、僅かに校舍を巡覽し一覽表の如き形式的の材料を得たに過ぎないから、記述する所も精神を失ひたる形骸で無味乾燥に流るゝを免れない。且つ眼界淺狹なれば臆斷の正確を失

すること多々あるべしと考へ自ら愧づる所である。若し此の漫錄が殖民地教育の現狀の一端を紹介し、緊急にして且つ困難なる殖民地教育の攻究の一助ともならば幸とする所である。

此の稿を草するに當り上海日本小學校長井上潤氏大連公學堂長淺井政次郎氏及び遼陽小學校長鈴木重憲氏の甚大なる援助を忝なうした。こゝに一行にかはりて衷心から謝意を表する次第である。

上海の學校

上海の教育を知るには其の現狀に一瞥を與へる必要があるがこれは旅行記に讓つて省く。民留地は以前は美租界、英租界、法租界の三つに分かれて居つたが今日にては英美は合併して共同租界をなして居る。共同租界は自治機關の下にある自由市で、公民會、參事會、工部局が諸般の事項の議決執行は勿論公安を維持する警察權を行ひ、火災に備ふる爲に消防隊を編成し、又居留地防衛に義勇隊を設け、其他道路の改築延長衞生の設備教育の施設を司り全く支那政府の支配干涉を脱却して居る。其の面積は八平方哩三分の二で、これを我國の坪數に換算すると六百八十一萬百十二坪となる。此の外に法租界と純然たる支那街があるが外國人の集中して居るのは共同租界で、雜居する國民の數は三十餘ケ國、移動頻繁なる爲正確なる人口は不明であるが外國人約二萬うち一萬は日本人である。

かくの如く上海は世界の共同舞臺で各國皆全力を盡して活動して居るから、一度足を此地に入れて觀察すれば已れの國の實力を自覺することが出來る。國内にあつて唯我獨尊を極めて居る徒輩は須らく此の地に遊ぶべきである。吾人は此の方面に就て云ふことを得ないが、白色人種の偉大なる勢力が遠く此の東亞に及んで居るを見るにつけ我々國民は一層の奮開努力を要すると痛切に感じた。

この現象は教育の方面にも著しく顯れて居る。商業上工業上に於て優勝の地位を占めて居る歐米人は遠大なる計劃と周到なる注意を以て自國人は勿論支那人の誘導に努力して居る。上海近海で彼等の手になる學校は年々增加して現在では二十七の多數に上りうち十八校は支那人の教育を目的として居るのを見ると彼等の及ぼす感化は看過すること出來ない。特に從來は宗教の色彩を帶びたものが大部分であるが、近來設立せらるゝものは實業學校で其の規模も大であるから其の影響する所は今より一層大なるものがあらう。是等の學校の功果は一朝一夕には顯れないが、此等の學校に勉强しつゝある支那人が歐米人と握手して日本人を蔑視するに至るは當然である。且つ卒業生は支那の中堅となり自國同胞の指導者開發者となるから近き將來の結果が恐るべきもので、吾人は大に警戒せなければならない。小學校、中學校は勿論專門學校大學迄も經營し種々の便宜特典を與へて支那人を招致して居るから、行く〳〵は日本に留學生を送ることなく此等の學校にて教育するに至るべしと考ふるにつけ、此種の學校の日本人の手になりしものなきを遺憾とするのである。以前には日語學校なるものありて微弱ながらも支那人に日本の文化を授けて居つたが内訌の爲に遂に解散の止むなきに至つたのは返す〳〵も惜むべきである。

是に對して我國の感化は如何。歷史上地理上至親の關係ある我國が支那を開發し誘導するは獨り我國の利益のみならず東亞の爲にも必要なことである。然るに過去に於ては支那人の學校に教鞭をとりしものは上海附近のみにても二百餘名に達し盛に日本の文物を輸入したが一朝革命の爆發と共に全部歸國するに至りしは一大恨事である。かく教育上に於ける日本の勢力は漸次衰頽するに反し、歐米の學校は日に月に增加する。同文同種の支那も將に日本の手を離れて泰西諸國の感化の下に立たんとするが現在の狀態ではないか。されども日本の感化は尙認め得る。袁總督の誕生日を長多くも我國の天長節に擬して祝日となし、革命紀念日を紀元節に準じ、或は小學堂書房を小學校と改稱したのは明かに我れの模倣である。又教科書も日本の國定教科書の燒直で修身書などは特に著しい。(本校參聖館に上海商務印書館刊行の諸教科書一揃すれば參照せられたし)。

以上は概略であるが今、上海市中及び郊外にある學校を經營者に從ッて三分し稍〻詳細に述べる。學校數、生徒數、及び其の内容の一般は上海領事館員内山氏の調査統計書に負ふ所大なれば此處に特筆して置く。

(甲) 支那人の學校

支那の文化が大體に於て泰西諸國及び我國に比して遜色あるは言を要しないが、文明諸國の刺戟を蒙ること多く且つ其の誘導を受くるに便なる上海等の都市にては凡ての方面に於て著しい進歩を見るのである。教育事業も其の影響を受け輓近大に改善せられ普通教育は勿論中等教育、專門教育迄系統的に組織せられ稍〻精神ある主義ある教育が行はれて居る。校舍も以前の如き狹小不潔な支那風の家屋は漸次廢止せられて宏壯優雅な洋館或は漢洋折衷の構造が使用せられて居る。されども これらは一朝一夕に改造せられるものでないから尙塵埃堆高き弊屋に讀書の聲を聞くことなきにしもあらずである。上海工業專門學校の如きは郊外閑靜な所にあつて美的な壯大な煉瓦造りである。内部の設備も漸次改善せられ、掛圖標本器械等も完備して居ると云ふことである。

外形は以上の樣であるが其の内容、主義は如何なるものか。革命後政體と共に教育方針は一變して進歩的民主的主義の色彩を帶ぶに至りしは當然の結果である。民國元年二月南京教育部總長蔡元培が發布した普通教育暫行辨法十四ケ條及標準十一ケ條は新教育の濫觴と見られる。其の制定の要項に(一)從前の各學堂は凡て

學校と改稱し監督堂長は校長と改稱す。(二)初等小學校は男女を同校とすべし。(三)各種の教科書は務めて共和民國の趣旨に合すべく清時代の教科時は一律に禁止す。(四)小學の經科は一律に廢止す。(五)小學の手工科は宜しく注意を拂ふべし。(六)高等小學以上の體操は應に重きを兵式に置くべし。等がある。從來男女不同席の支那がこれを破つて男女共學を許し、小學校に於て倫理教育の根本たりし經書の教課を廢止したるが如きは教育界の大革命で當時盛に保守黨の攻擊を受けた所である。既にして南北統一して北京に教育部が置かるるや五月十三日教育總長蔡元培は參議院に於て其の教育方針に演說して曰く、『普通教育の方針は時勢に應じて共和國民健全の人格を養成し專問教育は學問神聖の風習を養成するにあり』と。民國三年九月二日發布せられた教育主旨は重きを道德教育に置き實利教育軍國民教育を以て此を輔け更に美感教育を以て道德を完成するにありと論じ、次いで自由平等說鼓吹の取締令を發布し極端な自由主義を排斥して居る。以上の法令から見ると其大方針は稍〻我國と似た所あるが其の實質は大に違ツて、教育の根本ともなるべき國民的精神が貫流して居ないので、稍もするとこの新教育の方針も保守黨の爲に動搖され相である。要するに丁度我國明治初年頃の有樣で舊より新に移る過渡期と見たのは余の誤りか。新思想に刺戟されて孔孟の遺教より科學の知識を要求し、讀書習字等の外に理科體操圖畫唱歌手工等を加へ中學にては英語、獨語、佛語を課して居る。今參考に上海工業專門學校附屬中學校の課程表を示すと次の樣である。

科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
國文	五	五	五	四
修身	五	一	一	一
英文	一二	一二	一〇	九
法文或德文				五
數學	六	六	九	三
歷史	二	二	二	
地理		三	二	
博物	三	三		
圖畫		二		
物理			二	五
化學				四
法制			一	
經濟				一
手工			二	
體操	二	二	二	一
樂歌	一	一		
每週鐘點	三六	三六	三四	三三

教科目は我國と大差ないが時間配當上には相違がある。

次に支那教育全般に亘るが彼國の教育系統に就て見るに、民國元年九月三日發布の教育部令に次の樣に規定せられて居る。

一、小學校は四ヶ年としこれを義務教育となす。卒業後高等小學校或は實業學校に入學することを得。

一、高等小學校は三ヶ年とし卒業後中學校或は師範學校、實業學校に入學することを得。

一、小學校及び高等小學校に補習科を設け卒業生の他校に入學せんとするものの爲に學課を補習し兼ねて職業上の豫備とす共に二年を以て卒業とす。

一、中學校は四年卒業とし卒業後大學校或は專門學校、高等師範師範學校に入學することを得。

一、大學校は本科三年或は四年豫科を三年とす。

一、師範學校は本科四年豫科一年とし高等師範學校は本科三年豫科一年とす。

一、實業學校は甲乙二種に分ち各々三年卒業とす。

一、專門學校は本科三年或は四年豫科一年とす。

朝鮮平壤大同門

大學校は文、理、法、商、醫、農、工の七部に分れ、專門學校の主なるものは法政、醫學、農業、商業、美術、音樂、商船、外國語である。其の他視學制度、特別教育施設、教育會等の法令も完備して居るが餘り長くなるから省略する。

以上支那共和民國教育制度の一般を法令上から調査したが、上海に於て尤も整頓完備せる學校は交通部上海工業專門學校である。以前は南洋大學と稱せられたもので本邦の高等工業學校程度である。其の宗旨を摘錄すると

本校隷屬交通部爲國立專門學校教授高等工業專門學科養成工業人才並極意注重道保存國粹啓發民智振作民氣爲宗旨以全校爵成高尙人格

とある。土木、電氣、機械の三科に分れ、それに中學校高等小學校が附設せられて居る。專門部は本科三年豫科一年にて生徒總數五百三十歐米人の教鞭をとつて居るのは言ふ迄もない。九月一日を學年の始めとし十二月三十一日より翌年一月六日迄を年假、四月一日より同八月迄を

春假、七月六日から八月三十一日迄を夏假と規定して居る。師弟間の禮義嚴格で學生規定の中にも「學生無論在校內校外凡遇各教職員時皆須鞠躬致敬稱教職員曰先生自稱曰學生」と記載せられて居る。其の他省立學校として有名なるは江蘇省立第二師範學校である。光緒三十一年の設立で我國師範制度と大差なく、省內の新教育の源泉をなして居る。修業年限は本科三年豫科一年で生徒數二百名である。附屬小學校では完全なる新式の教授が行はれて居ると云ふことである。尙上海縣市鄉私立學校が澤山なるが煩雜を避ける爲に表にすると次の樣になる。

學名	箇數	職員數	學生兒童數	學生一人平均費用
小學校	一九三	六四二	一二、六三一	一三、五六七
中學、女學校	七	一五〇	一、七一四	七一、〇三八
實業學校	六	六一	一、三一九	二四、七三七
女子師範（私立）	二	二〇	七八	四九、八七三
大學校	三	三〇	五一〇	八六、二七四
專門學校	三	三五	三四六	六一、四四五
體操學校	一	九	三九	一〇二、五六四
幼稚園	二	一一	七二	四三、八八九
孤兒院、貧兒院	二	二九	三六〇	九一、六六七
合計	二一八	九八七	一七、〇六九	

一弗は約我國の一圓であるから小學校一人平均額十三圓は我國の約六圓半の平均額に比すると二倍に當つて居る。大學は三つとも私立で神洲大學、中華法制大學、復旦公學と云ひ皆法制經濟を專門として居る。

專門學校は民國法律學校中華法律學校上海女醫學校の私立學校で內容設備共に不完全と云ふことである。中學校では上海民立中學校南洋中學校浦東中學校が有名で、高等女學校には上海女子高等女學校競雄女學校等がある。實業學校と云ふのは片商業學校で農業の學校はない、尤も整頓せるは上海中種商業學校で他は私〃である。女子師範は南洋女子師範學校中國女子師範學校の二校で、あまり活動して居ない。

以上の樣に學校は林立の觀を呈して居るが、中には狹溢な民家の一室で經書の暗記や舊式の習字を專らとする我國往時の寺小屋式のものもある。又徒らに蓄財を主眼とする不規律千萬な私立學校もある。唯表面に顯はれたもので斷定することは出來ないが、少くとも上海に於ては昔の面影を捨てゝ新進潑溂前途に光明を認め得るのである。

次に著しい現象は女子教育の勃興である。七才にして男女不同席と云ふ支那にあつては女子教育は甚だ不完全で僅に家庭で極く初等の教育を受けたに過ぎなかつた。然るに饒近新思想の輸入の結果かこの保守的習慣も破れ、深窓の女子が公々然と男子と席を同じうして勉强する樣になつた。小學校の男女共學は勿論、上海女醫學校、女子師範學校、女子體操學校等內容の如何は暫く措きかかる女子の專門教育を授くる學校が設立せられたのは支那女子の自覺しつゝあるを示すものである。此の新しい女子教育の影響は彼等の日常動作に最も明白に表示せられて居る。上海に滯在せる友人の話に依ると支那女學生の中には纏足せるものは稀で皆街路を濶步し、文學を談じ政治を論ずる新しい女も少くないと云ふことである。感情に動かされ易いのは女子の通性でかかる極端な急變も過渡期には免れ難い現象である。我々が南京から上海へ歸る夜汽車へ一人の妙齡な婦人が侍女を二三人連れて乘込んだ。十二時に垂んとする時であるから車中の者は大概夢現であつたが突然饒舌り出した此の女の高聲に目を覺ました。演說的の口調、口角泡を飛ばす能辯、政治か文學かわからないが其の意氣の壯なることは男子を凌ぐばかりであつた。眠られぬまゝに傍の支那人にノートの端に「彼女何者也哉」と書いて示すと鉛筆をとつて「南京大學之女學生」と返事した。成程支那の婦人も自覺したと點頭かれたが寢就かれないには一同困つた。かくすること約一時間半、彼女も根氣盡き疲れた身體を一行の一人に寄せてすや〳〵と夢路へ這入つた。優美溫和の權化と迄考へて居つた支那婦人の此の脫線的行爲傍若無人の亂暴に一行は呆然とした。かかる現象は僅少のことであると思ふが、この一事が近代支那婦人一般の氣風を顯現したものであらう。

以上大略支那教育の一般を述べたから次に外國人（日本人を除く）經營の學校に移る。

（乙）外國人の學校

前述の如く經濟上一頭地を拔く歐米人の經營する學校は皆輪奐壯美なもので中には日本に見られない樣なものもある。我々が參觀を願つて拒絕せられた獨逸の醫工專門學校の如きは非常に素晴しい大建築で一寸覗いても其の內部の規模大なるに吃驚する。其の他參觀する價値ある學校が澤山あるが時日の都合で見ることが出來なかつたのは殘念である。領事館の調査書より主なるものを摘錄すると

（イ）支那人のみを教育する學校

一、聖約翰大學（St. Johns University）千八百七十九年の設立で外人經營の學校中最も古く且つ尤も設備完全して居る。五分科に分れ修業年限は七ヶ年。

二、上海浸會大學（Shanghai Baptist College and Theological Seminary）米人經營の大學で宗教的色彩を最も多く有して居る。修業年限は前者は五年で後者は六年。

三、震旦大學（Ausora University）佛人經營で理、工、の二科に分る。修業年限は本科五年豫科二年。

四、哈佛醫學校（Hawarl Medical School）米國ハーバード大學の分校で內地の醫學專門學校と同程度。內容整頓し將來注目すべきものである、修業年限は本科五年豫科二年。

五、同濟德文醫工學校(Dentsche Medizin und Ingenieur Schule)　獨乙が野心を以て近頃設立せし大規模の學校である。聞く所に依れば青島陷落後青島の高等學堂の生徒を收容して居る相である。醫科は九年工科は八年。

其の他聖芳濟學校、中西學校等がある。支那婦女子の教育を目的とするもののうちに聖約翰女學堂が最も名高い。

(ロ)　外人の教育を目的とする學校

一、虹口小學校(Pablic School)　共同租界工部局經營の學校で租界内に居留する凡ての外國人に對して普遍的の教育を施さんとする教育機關である。言語を異にし國民性を同じうせざるは外國人を同一主義の許に教育せんとするは不可能のことで此の學校が漸次退歩しつゝある傾向を示して居るも理あることである。千八百八十六年の創設で教育方針は英國に準據し授業に用ゆる言語は英語である。千九百十一年の調査に依ると尋常高等幼稚園を合して生徒數三百十九人、これを二三年前と比較すると減少して居る。

二、虹口女子學堂(Instution for the Holy Family)　外人女子教育を目的とするもので千八百九十三年の設立である。

尙佛國獨乙等多數の居住民を有する國民は自國兒童の教育を目的とする小學校を經營して居る。佛租界西堂公學德口學堂は即ちこれである。

(丙)　邦人經營の學校

一、東亞同文書院　國を接し文字を等しくして居る我國が此の地に支那人を目的とする學校を經營して居ないのは何となく物足りない感が起るが、一度東亞同文書院の卒業生が如何なる使命を帶びて支那大陸に活動して居るかを知らば大に意を强うすることが出來る。

東亞同文書院は明治三十二年五月十二日農商務省直轄の下に僅に十四名の生徒で南京に開校せられた。後三十四年上海に移され爾來十七年幾多の人士を養成し國家の爲に貢献する所莫大なりしが不幸にも大正二年革命の兵火に罹つて燒失の難に遭遇した。幾多の年月と勞力を費して蒐集した研究書類を灰燼にしたのは千世の恨であると案内の勞をお取り下された大村教授が殘念がつて居られたが實際國家にとつても大なる損失であつた。只今は黑獅克路の假校舍に窮屈な生活をして勉强して居るが、燃ゆる希望は彼等の眉間に溢れて居る。我には歐米人の學校のやうに宏壯佳麗な校舍はない、完全な設備はない。しかし我には金錢で購ひ得ない深く根ざした忠君愛國の至情がある。彼等が黃金の力で支那人を懷柔せんとするならば我れには不可拔の誠實の念がある。あの見すぼらしい校舍を巡覽した時室の隅々から光明の輝きを見受け無限の愉快を感じた。定員二百名各府縣の選拔生である。

二、上海日本小學校　土地名物の惡臭が鼻を衝く北四川路の町を北へ進むと右側に日本小學校(Shanghai Japanese Pablic School)と記された石門がある。門を這入つて進むこと約一町で玄關に達する。玄關の兩側には明治四十四年四月二十一日東伏見宮殿下同妃殿下御手植の紀念月桂樹と同年四月二十日乃木東郷兩大將御手植紀念の楓樹とが青々と茂つて居る。校舍は煉瓦造りの立派なもので、裏の方からは增築に忙がはしい石屋の鎚の音が響いて居つた。校長は本校第六回卒業の井上君で懇ろに校内を案内せられた。内部の設備も整頓し外人經營の小學校に對して決して遜色ない。上海を通過せらるゝ諸名士は皆此の學校を參觀せらるゝ相で東郷、川村兩大將の額が應接室に飾られて居つた。

寺小屋

學校の前身は明治十三年東本願寺別院内で開かれた毎月數回の講話會で、それが親睦會となつて讀書算術の初步を授けることになり、更にそれが開導學堂と改名して兒童教育に貢献したが、四十年九月居留民團の設立と共に其の手に移されて現在に至つたのである。學級數尋常科十二高等科二幼稚園二組で兒童總數六百四十七、内高等科六十六、尋常科五百二十六、幼稚園兒五十五と云ふ盛況である。是を三四年以前と比較すると非常な激增である。

明治四十二年	三百十八人	
同　四十三年	三百九十人	
同　四十四年	四百六十五人	
大正　一年	四百七十二人	
大正　二年	五百六十人	
現　在	六百四十七人	

尙增加の傾向あるので現今大校舍の增築中である。これは我民族發展の證據で領事館員に尋ねても近頃は以前の樣に腰掛的に移住し來る者甚だ少ないと云ふことである。大に國家の爲に

賀すべきことである。

保護者の府縣別を見るに長崎縣の二百二十八を筆頭に大阪府の四十四東京の四十岡山の十九佐賀、京都の十五が主なるもので沖繩縣を除いて殆んど全國を網羅して居る。長崎縣が過半を占めて居るのは地理上の關係もあるが海外殖民熱の盛なことを示して居る。父兄の職業は會社員の百十三を始めとし靴製造販賣業四十八無職業三十七雜貨商四十三料理業十八菓子販賣十四等が多い方である。これで上海居留民の活動の大凡を想像することが出來る。

今校長井上君から聞き得た所を記せば此の學校の大體を了解することが出來ると思ふ。

大體の制は文部省令に準據し學齡中は强て就學せしむる方針であるが大部分はみじめな生活を營み居るにかかはらず喜んで就學させて居る。尋常は五十仙、高等、幼稚園は壹弗の月謝を要するが貧民には免除し尙學用品を貸與して居る。出席歩合は明治四十四年度は九三、六七大正元年度は九四、大正二年度は九四、二の割合で漸次良好になりつゝある。內地に比較して稍ゝ不良なる主なる原因は夏季休暇の際歸國するため其の前後缺席多きと、中學校入學の爲學年末に早く歸國して準備をなすものある爲である。

訓育の方針としては專ら御勅語の趣旨を奉體しこれを擴充するに努め、一方土地の狀況に鑒みて兒童の訓練に必要なる德目綱領を定めてこれを勵行して居る。教授に就ては教科書及教程等內地と同一で異なるなしと雖も其の取扱上多少地方的色彩を加味するは勿論である。貨幣、度量衡、作法等はそれで尙尋常五年以上には英語を高等科には商業を課して居るのも周圍の事情に依るのである。教授中には內地で想像のつかない樣な面白い現象が時々起る。先日も山を教えたが知つて居るものは內地から新に來た數名の者で他は知らない。これらは廣漠たる大平原の中に生活して居るものには有勝ちのことである。又休暇に始めて歸國した兒童が長崎邊の山を船から眺めて富士山だ〳〵と云つて大喜びしたと云ふ話もある。

此の學校の著しい缺點は中途入退學の夥しいことでこれは到底內地の比ではない。近頃は良くなつたが猶一年に全數の三分の一位は入れ換る割合である。景氣如何につれて轉々渡り鳥のそれの如く流浪する父兄の犧牲となる兒童こそ實に憐れむべきもので、訓練や教授の統一は甚だ心細いものである。

兒童の家庭は重に下等な支那人に近接し混入して居るので自然支那人と遊び支那語を日語より巧みに話す始末である。其の結果支那人の惡弊に感染し不潔を平氣で見、賭博、買食等惡いことを見倣ひ、甚だしきは竊盜に關しての良心のない者さへある。寒心すべきことである。

職員は十八名で上海總領事有吉明氏が監督の任に當つて居られる。

(三)其の他に基督教青年會の事業になつて居る上海商業學校がある大正二年四月十日の開校で英語、支那語、簿記、地理珠算商業道德等を教授して居る。女子の學校としては西本願寺別院內に上海女學校がある。微々たるものであるが範を內地の高等女學校にとりて英語、漢文國文習字珠算裁縫生花抹茶造花刺繍を授けて居る。

上海の學校記を終るに當りて感ずるは豫想外に學校數の多きことである。歐米人の學校は暫く措いて支那人經營の學校に就て見ても其の數莫大にして而も系統的である。混沌たる狀態は去つて新しい希望の滿ちた光明は既に上海を照らして居る。この光明が關外遼遠の地に其の餘光を送り支那共和國が統一ある教育の實を擧ぐるのは決して遠い將來でないと信ずるのである。

滿洲の學校

滿洲の天富を拓き人文を進めるは我國の天職使命であるとは識者の間に唱へられる所である。實際日に月に發展する國民力は內地だけでは不充分更に朝鮮滿洲に活動の天地を見出す必要がある。沃野茫々天に連る滿洲の大平原は我國民の開拓を待ち、無盡藏と稱せらるゝ寶庫は我同胞の開くを喜ぶのである。距離の近接せる風俗習慣の類似せる皆吾人の殖民するに有利なる特權である。此の意味に於て我々教育家たらんとするものは一度は滿洲の野を跋涉して古戰場を吊ふと共に其の實狀を調査する責任がありはせないかと思ふ。雜誌書籍で間接に知るばかりでなく實際目擊して以て國民の啓發指導に當つたならば非常に効果あることである。

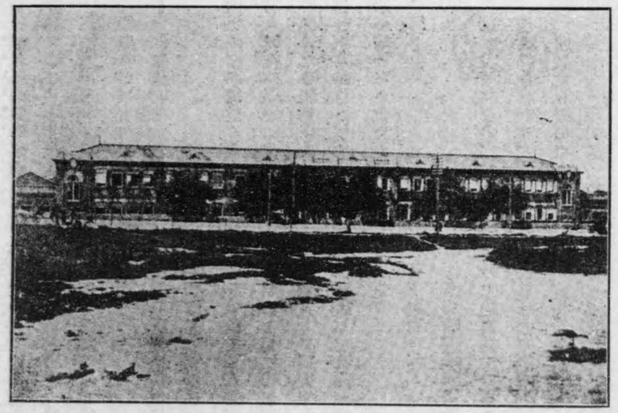
滿洲の經營統轄の任に當つて居るのは旅順の關東都督府大連の南滿鐵道會社である。一は主に政治軍事を司り他は南滿洲全體の經濟的方面を引受けて居る。此の外に領事があつて所轄內の居留民の取締をして居る。所謂三機關鼎立で其の組織等は不明であるが全體として經營宜しきを得、滿洲人の附屬地に移住し來るもの日に增加し、我國の精神を認めて信賴する傾向は到る所に顯はれて居る。

目下在滿の邦人は十數万に達し鐵道沿路は特に著しい。其の過半は南滿鐵道の關係者及び都督府の官吏で、自家經營の下に大規模の工業農業に從事する者も少なくはない。今主要なる都市の邦人數を示すと旅順(一〇、〇五七)大連(三四、〇四五)大石橋(一、八二一)營口(二、四四〇)遼陽(三、五二四)奉天(五、八四八)撫順(四、五七一)鐵嶺(三、七三六)長春(三、五五二)安東(七、一三一)である。職業別を見るに滿鐵會社員を除けば商業第一位で全人口の約一割五分を占め次は工業農業である。是等の方面の活動は他に讓

り教育方面の狀況を一瞥する。

（甲）支那人の經營する學校

滿洲從來の教育機關として今も尙殘つて居るは書房である。滿洲唯一の初等機關で我國の寺小屋に類似して不完全極まると云へば其の大體を云ひ盡して居る。重に私塾で舊曆二月頃より十一月迄を一學年として居るが學期や課程表の井然と定まつたものなく、朝から晩迄時間の長いのを尊んで勉强して居る。兒童の年齡は一樣でなくて六七歲で入塾するものもあれば十二三歲で入學するものもある、退學も勝手で貧困なる者は早く上流になるに從つて遲い、大概十六七歲が最年長者である。教課目は讀書習字作文に初步の算術で教科書として百家姓、千字文、三字經、四經、五經等を使用し習字の手本は教師の肉筆である。教授は專ら暗記で學年別ないから個人教授である。教師は蒙師と云つて村一番の物知りがなるがない時には他の部落から金を出して招聘する。其の知識の程度は甚だ低いもので少し字の讀めるものは金を目的にして盛に出稼すると云ふ有樣である。教室は民家の一室で塵煤屋に滿ち臭氣紛々到底吾人の推了し得べきものでない。教具教材等は全くなく机も各人持參する有樣は寺小屋式である。



大少なくも五六人多きは數十人を教へ謝連禮として年に三圓より五六圓を徵收し第て大節句には家相當の贈物がある相で三ある。

尋常高等小學校

此の種の書房は新教育に壓倒せられて漸次其の數を減じつゝあるが尙五六百存在し、關東州にては都督府これを許して監督して居る。これが稍發達して新教育の制度を取りしものが小學校或は小學堂である。小學校は私立もあれど重に會の（日本の村に當る會長は村長である）公立で公學堂（日本人經營の支那人を教育する學校にて後に說く）に準據して修身、國文、算術、手工、圖畫、唱歌、體操等を授けて居る。內部の設備教授方法等略日本の十年以前の田舍の學校に類似して居る。新教科書を編制し師範學校の卒業生を教師とし盛に新教育の普及を計つて居るが尙舊慣を全く脫して居ない。初等小學校は四年卒業で課程表を見ると修身（二）國文（十）算術（五）手工（一）圖畫（一）唱歌（四）體操（四）

高等小學校は三年教科目は修身（二）國文（十）算術（四）本國歷史（五）地理（三）理科（二）手工（男二女一）圖畫（男二女一）唱歌（二）體操（三）農業（二）英文（三年生のみで二時間）である。これを見ても支那新教育は我國に則りしものと云へる。今遼陽城內にある支那人の小學校と兒童數を羅列すると次の如きものゝなる。

	兒童數
縣立高等小學校	三百五十
縣立初等高等小學校	百八十二
普化私立初等高等小學校	九十三
李氏私立初等高等小學校	八十九
第一私立初等高等小學校	六十二
第二私立初等高等小學校	八十三
國民私立初等小學校	九十三
育英私立初等高等小學校	八十三
育英私立初等小學校	九十二
城立第一初等小學校	百三十五
城立第二初等小學校	百八十九
城立第三初等小學校	二百二十五
城立第四初等小學校	七十六
城立第五初等小學校	二百六十七
城立育才初等小學校	百八十二
私立正蒙初等小學校	七十三
私立第三初等小學校	八十二
縣立女子初等高等小學校	六十二
城立女子初等小學校	九十二
坤元私立女子初等小學校	三十三
貞淑私立女子初等小學校	四十五
光明私立初等小學校	八十六

遼陽縣內の小學校を合計すると五百二十三校の多數に上る。

以上は初等教育の有樣であるが滿洲にある中學校師範學校も新文明の影響を受けて大に改善せられて居る。今參觀した遼陽師範學校及び中學校に就て一言すれば其の大體を捕提することが出來る。學校は遼陽城內の東端にあつて附近は稍閑靜である。麗々しく師範學校中學校と書いてある門を這入つて案內を求めると一事務員が顯はれて盛に會釋するが我々には頓と要領を得ない。御同行下さつた遼陽小學校長鈴木重憲氏から聞くと師範學校長は我々の來校を朝から待つて居られたが餘り遲くなつたので歸宅せられた其のお詫びであつたと。實に好機を失したが止むを得ないから校內の巡覽だけにした。校舍は支那式に西洋式を一寸加味したもので棟低く室內は非常に薄暗い。教室は日本と同じで机が整然と

並べられ壁には數種の掛圖標本がかけてある。入口の時間割を見ると倫理、代數、物理、法制等さへある。中學校と合併で中學の方には英文の八時間幾何代數の四時間などが著しく目に着いた。運動場らしいものはなくて校舍と校舍の間の狹い空地には草茫々と茂つて運動する樣な形跡は少しもない。これから見ると時間割の三時間の體操も唯形式に過ぎないらしい。寄宿舍は校舍の背後にある長大な支那家屋で硝子板の窓はハイカラであるが採光不充分なのは非教育的である。中は純支那式で中間は土間周圍は炕其の上にアンペラを布き壁間に棚があつて書物を載せる樣になつて居る。天井はなくて煤煙は黑く垂れ蜘蛛の巢が纏々として居る。休暇中で唯取殘されたインク壺が二つ三つ塵埃の中に横たはるばかり。入口には赤紙に「七月十日封」と書いて貸家札の樣に斜に張り付けてある——錠の代用をして居る。理科標本室を覗いて見ると幼稚な掛圖や標本が一通り陳列せられて居るが大部分は日本製、內地の小學校を少し大きくした位の程度である。新舊教育思想の未調和の姿は校舍の隅々に現はれて居る。生徒の成績品も見たかつたが汽車の時間都合で早々「多謝」を殘して辭した。

此の學校は遼陽州內新教育の源泉地で卒業生は州內小學校の教師となる。目下生徒數師範學校百三十三中學校百四十附屬小學校三百五十である。明治三十八年の創立で當時は犬飼某氏外一名の本邦人教鞭を取り日本語は主要なる學科であつたが今は本邦人なく日語も廢止せられて英文が課せられて居る。

奉天、鐵嶺海城等主要の都市に中學校がある。奉天には其の他二つの師範學校法制學校及び時殊の學校が十二三あるを聞いたが其の詳細は知らない。

(乙) 本邦人經營の學校

滿洲に於ける教育の濫觴は三十九年に布かれた關東州の學制である。當時は日露の戰後で尙血腥い風が一面に吹き渡つて居つて此の方面に充分力が注がれなかつたが、爾來十年凡ての方面の發達と共に日に月に改良せられ今後の隆盛期して待つべきものがある。便宜の爲に日本人の教育を目的とするものと支那人を目的とするものとの二種に分けて叙述する。

(イ) 日本人を目的とする學校

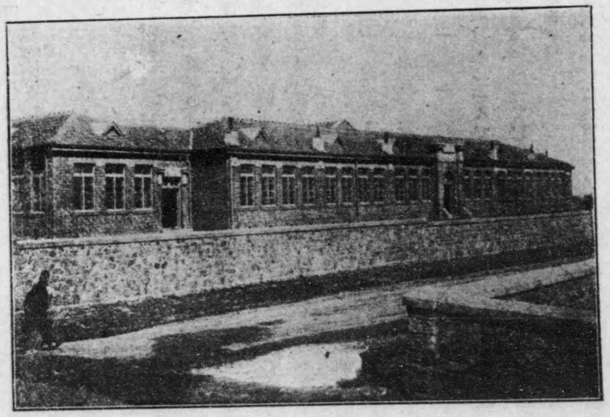
邦人を目的とする學校も其の數多く且つ其管轄を異にするから甚だ復雜になつて居る。之れを表に示せば次の樣である。

- 邦人教育
  - 居留民團設立
    - 專門教育 — 南滿醫學堂
    - 小學校三校
  - 都督府所轄
    - 專門教育 — 旅順工科學堂、關東都督府中學校
    - 中等教育 — 關東都督府高等女學校、大連高等女學校（九月一日より）
    - 初等教育 — 小學校十校（授業開始の由）
  - 南滿會社所轄
    - 中等教育 — 南滿州工業學校、實科高等女學校八校
    - 初等教育 — 實業補習學校二十七校、小學校十七校

此の外に邦人の多い地方には一箇人又は團體で設立して居る學校が二三あるが省略する。

(一) 關東都督府所轄學校

滿洲に澤山ある學校の中で程度に於て規模に於て一頭地を拔いて居るのは旅順工科學堂である。明治四十三年四月二十一日時勢の要求に依つて產れた專門學校で昨年十二月漸く第一回の卒業生を出した。內地の高等工業學校程度で機械、電氣、採鑛、冶金、の三科に分れ修業年限四年である。現在生徒總數三百〇六で九州出身が大部分を占めて居る。其の經費を見るに本年は三三九、六二八圓で內地の高等程度の學校に比較すると多い方である。都督府が斯くの如き莫大なる費用を投じてはるばる海外に經營して居るのは見る所あるので、一度滿洲の土地を踏み又は卒業生が如何なる使命抱負を持つて滿洲支那に活動して居るかを知らば學校存在の理由の一端が判る。一夜彼等と相會して語つたが彼等は人間到る所靑山ありと若き血潮に燃ゆる希望を抱いて故國を去つた血氣の靑年で、其の言葉は宇宙を呑むの概がある。彼等よ邦家の爲支那の爲奮鬪努力せよ!!。



當校はもと露國海兵團の建築物とかで長さ七八十間高さ十五六間もある大厦で新市街に屹然聳えて居る。旅順滯在の一日前本校教授中野先生に案內せられて巡覽したが內部は外見以上の美麗で其の設備の整然たること驚くばかり。三階建で教官室、教室、圖書館は其の中にある。更に我々の目を驚かしたのは附屬の工場である。專門外でよく判らないがなか〳〵の大規模で參觀する外國人等も皆賞讃の聲を殘して行く相だ。

『廣島高師と工科學堂は密接なる關係を有して居る。杉森、中野兩先生の教を共に受ける點に於て、又不條理な廢止論の攻擊を受けた點に於て——』は我々の歡迎席上で述べられた演說の一句であるが其の夜の會合の印象と共に鮮明に吾人の心底に今尙殘つて居る。

第五　教育狀況一般

工科學堂の近くに都督府中學校がある。傳聞すれば設備の點に於て全國中學校の第一位を占むると云ふことであるが時間の都合上參觀出來なかつたのは遺憾である。四十二年五月七日の開校で現在生徒數四百三十一。教科目は內地の中學と同樣。此の外に旅順には都督府高等女學校がある。明治四十三年七月二日の開校で現在生徒數百四十三。

小學校は關東州に十校ある。卽ち旅順二大連三金州普蘭店貔子窩沙河口柳樹屯に各一校宛ある。此の中で尤も古いのは大連第一尋常高等小學校で(三十九年五月)他は大概四十二三年の創立である。尤も大なるは大連第二、第三小學校で各々千人以上の兒童を收容して居るが他は皆小さくて普蘭店の如きは尋常高等通じて十八人である。

	尋一	尋二	尋三	尋四	尋五	尋六	高一	高二
男	一〇	一	一	一	一	〇	〇	
女	二三	一	二	二	一	一	一	

十校の學級總數九七、兒童總數四、五五五教員數一一八で經常費總額一二万、二九八、圓である。(本年度の豫算額)從つて兒童一人の平均額は二十七圓强で內地の約四倍に當る。

教授訓練修業年限教科目は小學令及び文部省令に依つて居る。唯義務教育のないのが內地と著しく異なる點であるが皆學齡に達すると入學させて居る。

爰に參觀した大連第三尋常高等小學校の有樣を畧述する。學校は大連西公園町にあつて明治四十四年四月一日の開校である。新築の校舍は高壯な二階立で露臺などの設備あるのは小學校には珍らしい。學級數二一で生徒總數一、〇七八。父兄の府縣別を見ると福岡の八十七が尤も多くて廣島(七一)大坂(七〇)長崎(六七)山口(六二)東京(六〇)の順序になつて居る。職業別を見ると滿鐵社員の百十八人は當然であるが大工の七十四人無職の二十七人料理店飲食店の四十八人などは殖民地の氣風をよく示して居る。出席歩合は良好で一年通じて平均九六%であるが入退學の非常に頻繁なることは驚くばかりで今日迄の統計によると在籍數と入退學と相匹敵するのみならず入退學の數が在籍數よりも多いことかある。これは殖民地の學校共通の大弊害にて轉々居住を變へて席暖まらない居留民の反省を切望する。

	五月	六月	七月	八月	九月	十月
大正元年度 (入)	一一	二一	一三	三	二八	二〇
(退)	一二	九	一七	一四	二三	一七

かかる有樣では眞の教育の行はれないのも無理ならぬことで殖民地教育を云々するより父兄を改良するが目下の急務である。若し此の氣風が改善せられないならば殖民地の教育は大に悲觀すべきものと云はねばならぬ。

小學令に準據し教育勅語を奉體して居るから大方針は內地と變らないが、周圍の事情境遇を甚だしく異にして居る別天地であるから幾分の斟酌あるは當然である。內地の國定教科書を使用して居るが、滿洲の地理、歷史風俗習慣草木等を比較的詳細に教授して現在の土地に趣味を感じこれを愛せしむる樣にして居るは時宜を得たものである。訓育的方面にても忠君愛國の道念を養ふと共に新時代の要求する殖民を作る爲に博愛仁慈、獨立不拔、勇往進取の德を特に選びこれが涵養に留意して居る。(第三小學校の校歌參照)勞働は支那苦力のするものゝ如く考えてこれを嫌ひ、不潔に無頓着になり、惡戲喧嘩惡口虛言賭事の遊等の比較的多いのは全く環境の影響である。

兒童は子供に似合はず利口で世才に長け常識に富んで居る。惡く云へば內地の兒童より早熟である。其の一例として、第三小學校伊牟田訓導の調査せられた「尋二兒童の思想界」から面白い例を一二抄錄せやう。(大正二年六月二十七日發行の南滿洲教育會會報よりとる)

(一) 一ばん、いやな人は、たれですか

支那人(男二〇女二)　露西亞人(男七)　クロパトキン(男三名)

平清盛、工藤祐經、足利尊氏、外國人、印度人各一。

(一) 內地と大連はどちらがすきですか。

內地がすき。(男五〇女五〇)

第五　教育狀況一般

重なる理由、

暖かくて奇麗な花が咲くから
天子樣がゐらつしやるから
えらい人が澤山居るから
何でも安いから
友達が多いから
大連は寒いからいや
大連は支那の土地だからいや
大連は馬賊が居るからいや(女生徒)
うぐひすがなくから(女生徒)
兄や姉が居るから
大連がすき。(男二三女七)

重なる理由

學校が立派であるから
町や道が立派であるから
にぎやしいから
家が煉瓦造だから
お金が多いから(女)
公園があるから(女)
學校がよいから(女)　(以下省畧)

以上關東州の學校に就て一般を述べたが尤も愉快なのは學校の

改善と共に兒童數の激增することである。これらは國民が國家の意ある所を察し家庭を提げて殖民する樣になつたことを證明するもので大に慶賀すべき現象である。

三十九年	二一二
四十年	一、〇五八
四十一年	一、八一九
四十二年	二、三六一
四十三年	二、九五七
四十四年	三、五三二
大正一年	三、九四一
大正二年	四、二〇八
現在	四、九五五

（六月調査）

學制發布時代と比較すると二十倍强になつて居る。これからも國民の滿洲に於ける發展の一端を推知することが出來る。

(二) 滿鐵經營の學校

滿洲開拓の大立物は滿鐵である。東清鐵道の經營は勿論上海大連間の定期航路、大連の築港、撫順の炭坑試驗所、病院、學校、旅館等附屬地帶の凡てのことを一手で引受けて居る。それに關係するもの職員四千五百、傭人一萬七千以上に達し一年の總支出も莫大であるが尙純益金四五百萬圓あるとは社員の話である。實に滿洲の一大原動力で滿洲の今日あるは此の會社に依ると云ふも過言でない。

關東都督府中學校

滿鐵が鐵道附屬地の教育に盡力することは非常なもので小學校の經營は勿論專門教育補習教育女子教育幼兒教育社會教育及び後に述べる支那人の教育まで手を盡くして居る。

專門教育の機關としては奉天の南滿醫學堂がある。明治四十四年の開校で滿鐵經營の學校中尤も異彩を放つて居る。內地の醫學專門學校と同程度で最新の醫術を滿洲に普及すると共に滿洲人の教育を目的とし、豫科（二年）本科（四年）研究科（一年）から成立して居る。豫科は支那人のみで重に日本語普通學を授ける。現在生徒數邦人五四。支那人五二。

中等程度の學校として大連に南滿洲工業學校が設立せられて居る。南滿の經營に當りて各方面に新たなる人才が必要であるが其の尤も急を要するは實枝に堪能なる工業者で、これが養成を目的として創設せられたのが此の學校である。學科は土木、建築電氣機械採鑛の五科に別かれ各科共に高等小學の卒業生若しくは中學の二年修了者を容收しこれに中等程度の工業教育を教授する點は內地の工業學校と異る所ない。四十四年の開校で生徒總數二百七十うち九名は支那人。卒業生は南滿に活動するのであるから旅順の工科學堂の弟分と見られる。附設補習夜學部あつて有志の者に一般工業の學理を授けて居る。實科高等女學校は瓦房店、大石橋、遼陽、奉天、公主嶺、長春、本溪湖、撫順の八ヶ所にあつて內地の高等女學校程度の教育を授けて居る。主に高等小學校に併置せられ教師も兼任が多い。本科は修業年限二ヶ年撰科は一年、既婚者が多いので裁縫造花割烹等の實用的科目を主として居る。全體の生徒數本科八四撰科六九。

實業補習學校は沿線到る所にあつて其の數合計二七うち六は分教場である。重に夜學校で現に職業に從事する者及び將に從事せんとする者に普通學並に職業の大體の智識を與へるを目的として居る。教課目は土地の情況職業の種類によりて遼ふが國語算術英語支那語は共通である。校舍は小學校、公學堂を利用し講師は小學校教師及び滿鐵社員の專門家がなつて居る。授業料は一切徵收せない。今遼場實業補習學校を見るに教課目は國語（三二人）算術（五三）英語（六七）支那語（七四）露語（一二）代數（二〇）簿記（六）機械（三〇）の諸方面に亘り年齡は十九歲以下九十一人二十歲乃至二十九歲百四十二人三十歲以上六十一人と云ふ樣に老若を問はない。中には內地の高等程度の學校卒業生が居る。社員が其の大部分を占め軍人官吏も澤山入學して居る。成績良好にて缺席者少なく昨年は十一人の精勤者があつたと云ふのは夜學校には珍らしい。

幼兒補育の設備としては幼稚園に類似した幼兒運動場を設けて居る。滿目荒涼たる滿洲には內地の樣な綠樹の影を見ること少なく且つ空氣晴朗なる遊び場所がない。これを補ふと共に不潔に平然たる支那人の風習に同化させない爲に小學校の運動場の一部分又は支那町を離れた土地に運動場を設け遊戲具を備付けて居る。沿線主なる驛にあつて其の數十一、保姆があつて幼兒の世話をする。

尙滿鐵は社會教育の爲に圖書館を主要地に設置し或は鐵道を利用して巡圖書庫を回送し新刊圖書の普及及び讀書趣味の開發に努力して居る。圖書館數十巡回書庫貸付所十。公開して邦人に隨意貸付けて居る。遼陽の圖書館は小學校の一室に設けられ藏書册數八百二十四で內地の重なる新聞雜誌は手に取つて讀むことが出來る。閱覽人員を尋ねると二月から四月迄約千人で一日平均十一册强の貸出しをして居ると事務員は答へられた。內地を遠く離れ容

易に書物を手にすることの出來ない此の地には實に當を得た事業である。

小學校の總數は十七。瓦房店、大石橋、遼陽、奉天、鐵嶺、開原、昌圖、公主嶺、長春、本溪湖、撫順の十一ヶ所に尋常高等小學校、熊岳城、海城、四平街、橋頭、雞冠の五ヶ所に尋常小學校、草河口に分教場がある。學級總數八四、正教員數九四、兒童數三、二七五。

十七校の中で最も規模の大なるは遼陽小學校と奉天小學校である。遼陽小學校は有名な白塔の傍にある奇麗な學校で、氣候風土の關係にもよるがストーブの設備二重窓など我々の目を著しく曳いた。初めは居留民團の設立であつたが四十年十月今の滿鐵の手に移り立派に改築になつた。學級數八兒童總數三六五で兒童一人平均額三十二圓、約内地の五倍である。府縣別を見ると廣島の二十東京十七兵庫十四が重なるもので奈良沖繩臺灣はない。入退學數の多いのは大連第三小學校と大同小異。

奉天小學校は明治四十一年の創立で西四條にある校舎は平造りであるが雅致ある建築である。現在兒童數五〇四、これを創立當時の四十一に比較すると約十二倍である。教育の方針として個人の完成家族の親睦社會の進歩國家の發展人道の平和の大綱を定め良き日本人の骨子を揭げて居る。即ち『教育勅語ノ御趣旨ヲ奉體シ良キ日本人タランニハ一般國民トシテハ時代ノ要求ニ應ジ國家ノ爲ニ有益ナル活動ヲナスニ適スル人物、國民道德ノ基礎タル忠孝ノ德ヲ完フスル人物、殖民地ニ於ケル住民トシテハ其風土ニ適應シ蒼意相誡メ自强息マサル人物、禮度ヲ大ニシ人道ノ平和ヲ重ンスル人物』と。これは滿洲全體の小學校教育の方針と見て差支へないであらう。實科高等女學校、幼童運動場が附設せられて居る。

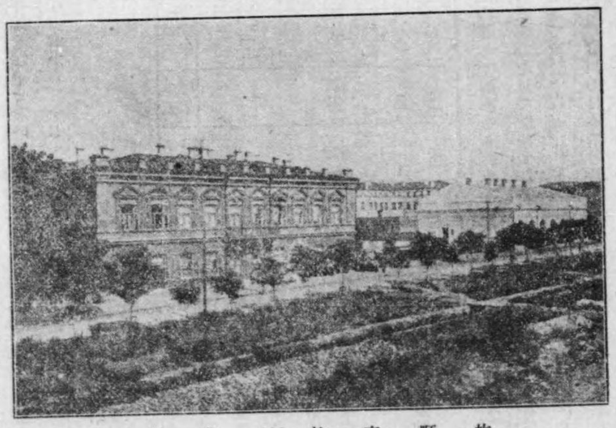
小學校に關係して附設せなければならないのは汽車通學と小學校寄宿舎である。滿鐵は線路にそつて十七校を經營して居るがそれは小數の主要驛で多數の小驛に住して居る邦人は附近の大驛へ通學させなければならぬ。此の便を計る爲に汽車通學の方法が設けられて居る。朝六時七時頃に通過する客車貨車は規定の場所（驛以外）に一分間宛停車して兒童をのせ目的地へ運ぶ。七八歳の幼童が拾哩以上も通學するは珍らしくない。彼等は一團となり長は幼を授け强は弱を救つて通學するのでこれが訓育の一方便となつて居る。會社員の兒童は無賃他は八割引の特典がある。これでも猶不充分を免れないから大驛にある小學校に寄宿舎を附設して遠方から通學する者に便宜を與えて居る。只今は奉天、瓦房店、長春の三ヶ所にある。奉天の寄宿舎は小學校の隣りで室内は純日本式の疊敷、目下寄宿せるものは男十三女八名で先生と付添の老母とが萬事世話を燒いて居る。食費三圓六十錢で他は會社から補助し、種々な玩具が是等親の膝を離れた幼童の寂しい心を慰める。

雨降る夜は親戀しくて泣きはせないかと老母に聞いたが『そうでもありません。皆仲よく面白相に遊んで居ります』と云つて居られた。家庭の空氣を吸はせる爲に日曜日には成可歸省する樣に奬勵して居る。

居留民團設立の學校は營口、奉天、安東の三つである。領事の所管に屬し内容は前述した小學校と變らないから省略する。

（ロ）支那人を目的とする學校

南滿洲が我國の布政教化の下にある以上支那人の教育に努むるは隣邦に對する正義である。又滿洲經營上必要なること多々あれど滿洲人を誘掖指導して其の文化を開發し以て我國利の扶殖を圖るも一要務である。この精神に出でたる公學堂（小學校と區別する爲）に關東州に七つ滿鐵所轄が七つ合計十四ある。此等の學校に收容せられて居る支那人は約三千で年々增加の傾向を示して居る。此の中で最も古く且つ整頓して居るは大連公學堂である。



旅順高等女學校

大連公學堂は滿洲に於ける邦人設立學校の濫觴で實に三十八年六月五日神尾軍政長官の内訓に基いて創設せられたものである。當時これが經營に從事せられたのは現堂長澁井政次郎氏で學堂の今日あるは氏の始終一貫せる奮鬪努力によるのである。氏は外國語學校清語科卒業生で嘗ては臺灣國語學校に久敷教鞭をとり日露の戰となるや大連軍政署に庶務を擔任し遂に軍政長官の命を受けて支那人教育に着手せられた。初めは集まるもの僅に二十數名に過ぎなかつたが年と共に增加し現在にては男三百六十名女六十二名の隆盛に達した。校舎も初めは軍政署保管の民屋に應急修繕を施した粗末なものであつたが明治四十四年八月現在の宏壯な新校舎に移轉し同時に大連宏濟彩票局が職員寄宿舎生徒寄宿舎を寄附・建設したので全部整頓した。敷地總坪數二、五二二、五五〇、棟數四、室數十二、教室の外に職員室標本室廣間等がある。此の外に講堂、寄宿舎、職員住宅がある。

公學堂は支那人の子弟を收容し これが智育德育體育をなすのみならず日本語を授けるを主眼として居る。修業年限六ヶ年で其の上に速成科又は補習科がある。入學の年齡を制限せないで一般の志望者を隨時入學させて居るから八歲頃の者から二十七八歲になる者迄共に勉强して居る。

教科及授業時數は左の通り。

教科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年	第六學年
修身	二	二	二	二	二	二
日本語	一〇	一〇	一〇	一一	一一	一一
漢文	七	七	七	七	七	七
算術	五	五	五	五	五	五
圖畫	—	—	男二	男二	男二	男二
唱歌	一	一	一	一	一	一
體操	三	三	三	二	二	二
裁縫	—	—	女二	女二	女二	女二

教科書參考書は 文部省臺灣總督府及上海等にて編纂せられたものを選擇採用し初年級では日本語の外に支那語を以て教授すれども上級に至るに隨ひ漢文の外は日本語を以て教授する方針である。程度は略內地の小學校に同じ。速成科は實用的日本語を教授し卒業後は日支兩國人間の言語疎通の仲介者たらしめるを目的とし、本科は稍々遠大の目的を以て秩序ある教授をなし善良にして有用なる人物を養成するに努めて居る。

教育の精神として「大連公學堂の教育狀況」の中に記載せられて居る一節を參考の爲に抄錄すれば 奈邊に此の學校の方針が存在するか判る。『サレバ大連公學堂ニ於テモ夙ニ見ル所アリ從來取リ來レル教育ノ精神ハ其ノ基礎ヲ人道ノ平和ニ置キ基督教ノ宣教師ノ如キ同情的愛撫ヲ以テ思想ノ感化ノ敬愛親信ノ情ヲ起シ無法ノ外交官ノ如キ巧妙的應對ヲ以テ意志ノ疎通ト感情ノ融和ヲ圖リテ我ガ善政善教ノ至意ヲ徹底シ猜疑不安ノ念ヲ去リ反目嫉視ノ衝突ヲ除キテ人類共通ノ安寧幸福ヲ受ケシメ以テ我ガ恩ニ感ジ我ガ德ニ服シ大ニ我ヲ便トシテ信賴仰景セシメンコトヲ期セリ。』又學則に曰く。先生施教　弟子是則　溫恭自虛　所受是極　見善從之　聞義則服　溫柔孝弟　母驕恃力　志母虛邪　行必正直　游居有常　必就有德　顏色整齊　中心必式　夙興夜寢　衣帶必飭　朝益暮習　小心翼翼　一此不懈　是謂學則。

管理及訓練に於ては 怠慢放肆に注意し支那人固有の不規則不潔症の弊風を矯正し以て我國の禮儀作法に習はしめんと努めて居る。不潔は彼等の天性で一擧手の勞にて 清掃することの出來る塵煤の中に平然と橫臥し これを注意すれば那兒有工夫と答へて居る。彼等には箍目正しきは禁物である。かゝる者を教育し清潔を勵行せしむる骨折は如何ばかりか察するに餘りありである。

暗記力の强いことは驚くばかりで日本の兒童の到底及ぶ所でない。されば暗記的教科の成績は非常に良好であるが 思考力を要する算術になると又非常に貧弱で 全く別人の感がする。手先きの仕事は巧妙で手工裁縫刺繡習字等の成績品は 立派なもので中には教師も手を加へるに躊躇するものが澤山ある。一般に兒童は從順で先生の命は唯これ從ふ有樣であるが 協同一致の精神乏しく公利公德の念極めて薄弱である。又禮儀も外形の末に走りて 誠意ないから交際應答甚だ巧みであるが 裏面に譎詐陰險が伏在して居る。虛言の多いのも彼等共通の欠點である。

生徒の原籍地は關東州最も多くて 二百六名次で山東の百八十名直隸省五十五名東三省四十三名が 重なるもので殆んど支那各省の出身者が居る。遠く福建省廣東省は勿論 近頃は滿鐵會社の紹介で蒙古人の入學を見るに至つた。父兄の職業別は商三百五名 工八十一名農五十一名其他官吏無職等七十五名ある。

卒業生中優等なる者は 校長の紹介で都督府中學校南滿工業學校等に入學するけれ共過半は他に就職して 糊口の途を求むるのである。今校長の周旋で日本人側に 就職せる最も重なるものを列擧すれば次の通りである。

大連民政署	五名	滿鐵運輸課	三名
郵便電信局	三名	電鐵事務所	十二名
正金銀行	四名	正隆銀行	六名
三井物產會社	三名	三越吳服店	二名

此等の就職者は概して行儀正しく 且上品なる點に於て好評を受けて居る。其の給料は二三の例外あれと 食費自辨で十圓乃至二十五圓である。

寄宿舍は一棟で室內は自修室と寢室とに別かれ日本式である。目下寄宿せるもの五十三名。室內食堂洗面所浴場等 稍清潔で訓育の一端がよく顯はれて居る。寄宿舍規條三十ヶ條の中にも 清潔を特に注意して曰く『室內凡案牀榻每日宜輪班拂拭各人物件各自整理不得任意推放以重清潔』

最後に參考の爲に堂歌を附記して置く。

東望碧波千頃兮　南面群峯而巉峨
雄峻莫與比擬兮　惟我大連之公學
看結構之壯麗兮　深仰規摸之宏闊
喜濟々之多士兮　良材端賴乎琢磨
桃李徧樹門牆兮　頭角嶄然而崢嶸
衆生齊荷栽培兮　熙々恰如坐春風
欣啓迪三有方兮　佇看後進之鬱葱
願教育之日隆兮　化雨普被乎遼東

滿鐵經營の公學堂は瓦房店、熊岳城、大石橋、遼陽、開原、四平街長春の七ヶ所にある。兒童總數千〇〇六で これが教育に當るものは日本人三十名支那人二十名である。教授訓練教科等は 大連公學

堂と同一であるから省略する。

以上大體滿洲の學校を瞥見したがこれは九牛の一毛でこれを以て直に滿洲の教育を是非することは出來ない。又敢て全體を推斷せんとしない。唯參觀した學校の職員から聞き得た所を愛に總合して記述するに留める。

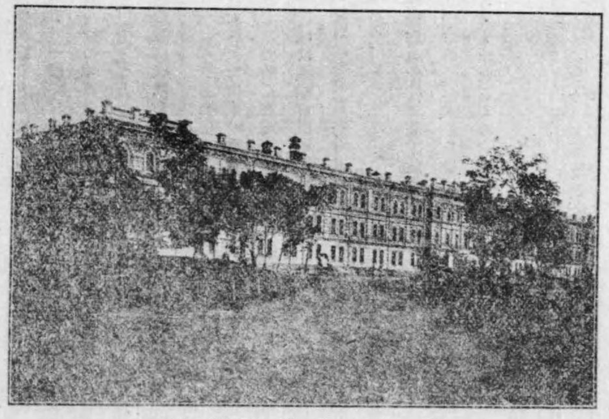
一、義務教育はないが學齢に達したものは保護者から入學を申出でて決して不就學童はない。

一、地理上の關係から學校の設備は內地よりも整頓して居る。

一、日本中から集まれる寄合世帶であるから言語の統一は甚だ困難である。

一、滿洲全體が我同胞の碧血を流した所であるからそれが直に德育訓育の教材となる。

一、天然の色彩美に乏しいが眼界の廣漠は不知不識の間に感化を及ぼして兒童も小事に齷齪せないで悠然たる風がある。



旅順工科學堂本館

一、兒童は一般に世才にたけ小利口である。

一、滿洲人の不潔に同化して日本人固有の淸潔癖が薄らぐ傾向がある。

一、居留民の利己的風習が感化を及ぼして兒童は一般に個人的に傾ひて公共心公德心が內地の兒童より乏しい。

一、家庭の紊亂周圍の墮落（少し語弊があるが）は兒童の道義心を害する。

一、保護者の頻々たる轉居は教育の破壞力である。

一、父兄の收入の多いのは兒童の奢侈怠惰の惡德を助長させて居る。

一、官僚的色彩が學校內に迄認められる。（官宅の區別で兒童は父兄の地位を了解するから）

朝鮮の學校

鴨綠江を渡りて朝鮮に入れば全く內地の氣分となる。滿目兀げて居る滿洲の山、悉く淵れて居る滿洲の川は綠濃い森、激して滿をなす小川となつて日本の景色そのまゝである。これを背景にして活動して居る內地人も年と共に增加し大正二年十二月調査に依れば二六四、一四六の多數に上り。此の外に朝鮮人が一、四八九、八二四と外國人二〇、〇三五が雜居して居る。

在來の教育機關は京城に成均館を置いて最高の學府とし地方には中等教育を施す鄕校各村には初等教育をなす學堂（書堂）があつた。書堂は滿洲の書房に當るもので昨今は新教育の羣熾なると共に次第に衰退し片田舍でなければ見ることが出來ない。陋隘なる溫突の中で生徒は高聲を發して漢文の章句を暗記誦讀し先生は長煙管を喞へてこれを傍觀する有樣、全く教育などは眼中にない。千字文、通鑑、史略、四書、五經等なか〳〵高尙な教科書を使用して居るが素讀だけで解釋をしない。かくの如き書堂は漸次改良を加へられて居るが尙全國に一萬以上ある相である。鄕校は書堂卒業生の入學する學校で稍〻整頓したものであつたが現今は廢校になつて居る。最高學府たりし成均館は神聖不可侵の場所として大に尊敬せられたものであるが今日に於ては實際存在せない。

新教育の起原は日淸戰爭後である。即ち戰後韓國の獨立は世界に宣言せられ各國其の承認を爲す時我れの忠言指導によつて庶政革新の實を擧ると共に教育の制度も一變した。二十八年小學校令の發布あり。次て師範學校中學校外國語學校の官制發布があつた。しかしこれらの法令も徒法空文にて毫も實行を見なかつたのは未だ韓人向學の機運に遇して居なかつたからである。然るに三十八年本校長幣原文學博士が學制參與官として教育行政の衝に當らるるやこれが銳意改善に努力せられ英語學校普通學校等の新設を見舊制は一新して今日の狀態を爲すに至つた。四十三年八月二十九日日韓の合併あり四十四年十月に現今の總督府教育令が發布せられて朝鮮の新教育は大成したのである。

現在の學校數を表にすれば

(甲)內地人の教育を目的とする學校	(一)中等學校	總督府中學校	二
		公立高等女學校	四
	(二)實業學校	公立商業學校	二
		公立簡易商業學校	三
		私立商業學校	一
	(三)私立學校		六
	(四)公立小學校		二七四
	(五)幼稚園		九
(乙)朝鮮人の教育を目的とする學校	(一)高等普通學校		四
	(二)實業學校		一八
	(三)簡易實業學校		二八
	(四)普通學校		一三一七
	(三)私立學校		三六七

(甲)邦人の教育

年々內地人の增加するに從つて是等殖民の子弟を教育する學校が增設せらるゝは大に賀すべきことである。されど共內地人の稀薄な小部會又は田舍には全く影を見ない。彼等は己れの子弟を教養する爲に小學校を設立する資なく又總督府もこれを顧みざれば、內地人の朝鮮內地に入り込みて活動するを避け居るは遺憾である。朝鮮は米國、南洋諸國の如く出稼地でなく永久邦人の支配し開發すべき土地なれば內地人は朝鮮を墳墓の地となす決心で家庭を携へて殖民すべきである。然るに兒童の教育を慮りて單身一時的に金錢を目的として居留する有樣は國家の爲に顧慮すべき問題である。朝鮮人の教化に努力すると共に父母の事業を繼承すべき我々の第二國民の教育も大に注意すべきことである。

中學校は京城釜山にある。京城中學校は明治四十二年四月設立せられた京城民團立京城中學校を總督府に引繼ぎたるもので京城慶熙宮內にある。現在生徒數六百〇九外に補習科七。原藉地は全國に亘り廣島縣十七名は多い方である。修業年限五箇年で學科目及其の程度は中學校令に準據して居るから全く內地の中學と同一である。尙これに附設して教員養成所がある。中學卒業生に一箇年間師範教育及び朝鮮語を授けて朝鮮の小學校訓導にするのですでに三四の卒業生は各地に奉職して活動して居る。釜山中學校は昨年四月一日開校で學級數四生徒總數一八四。訓育の實行手段として左記の四箇條の綱目を定めて居る。(一)全力を擧げて眞率に從事すること(二)强固なる意志を以て義務を全ふし不善に與せざること(三)秩序を重んじ禮儀を正しくすること(四)勤勞を尙び質素を旨とすること。

實業學校としては釜山商業學校が尤も著名で其の外元山、仁川、平壤に商業專修學校がある。內地の商業學校と內容は同一であるから詳細は省く。

高等女學校は京城、仁川、釜山、平壤の四箇所にある。

公立小學校は二百七十餘に達して居るが其の大部分は單級學校で、其の周圍の事情に應じ又時勢の要求に從つて多少內地と異なるは滿洲の邦人教育と同一である。其の學校數の激增を見るに驚くばかりである。

四十一年	九一	四十四年　一八二
四十二年	一一五	大正元年　二一〇
四十三年	一四九	

(乙)朝鮮人の教育

朝鮮人の小學校を普通學校と云ふ。此の名稱は種々考案の結果幣原校長が彼地の學政參與官たりし時分につけられたものでそれが今日迄使用せられて居る。其の目的は四十四年八月に發布せられた朝鮮教育令に明記せられて居る通り『教育勅語の旨趣に基き忠良なる國民を育成するると共に日常必須の智識技能を授くるを本旨とし』尙時勢に應じ國語の普及と實業思想の涵養とに力めて居る。修業年限四箇年で教科目は內地の小學校と同一であるが日本語を重要視し同時に日本の國情國民性を知らしむるを主眼として居る。義務教育なくして任意就學の制なれ共出來得る限り就學希望者を網羅するの方針から入學年齡の範圍を一定して居ない。初めは新教育の意義を解せない頑迷者流の非難攻擊の標的となつたが漸次彼等も覺醒し現在にては其の數三百七十に垂んとし將來の發展期して待つべきである。今過去の發展の經路を遡つて見ると次の樣になる。

年代	官立	公立	私立	生徒數
四十一年	—		四九	四八	一〇、七四四
四十二年	一	八九	四四	一五、四五〇
四十三年	一	一〇〇	七二	二〇、一二一
四十四年	二	二三四	七〇	三二、三八四
大正元年	二	二三六	二三	四五、〇六八
大正二年	—	三至一	—	四九、七三一

今公立善通與校の分布の模樣を見ると(大正元年度調査)

京畿道	四八	全羅南道	二九
忠淸北道	一八	慶尙北道	二八
忠淸南道	二四	慶尙南九	四一
全羅北道	二九	黃海道	一八
平安南道	二五	平安北道	二五
江原道	二五	咸鏡南道	一四

平壤第一普通學校を參觀したが校舍は不潔な朝鮮家屋で室內も不整頓、各室の配當構造等は學校としては不便であるから早晩改築移轉を免れないであらう。採光不充分で薄暗い室內にお粗末な掛圖が寂し相にかかつて居つた。學級數八で生徒數は四百二十五人と案內して呉れた朝鮮人の事務員(或は職員)が流暢な日本語で教えて呉れた。教科書は總督府編纂のもので國定教科書とは全く趣を異にして居る。

普通學校の卒業生を希望によつて收容して居るのが高等普通學校である。內地の中學校に相當する。其の目的は朝鮮教育令施行に關する總督の訓令に於て『高等普通學ハ男(女)ニ高等ノ普通教育ヲ爲ス所ニシテ常識ヲ養ヒ國民タルノ性格ヲ陶冶シ其生活上有用ナル知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス』と述べられてある。修業年限四箇年で其の外に師範科があつて卒業後朝鮮の公立普通の教職に從事する者を養成して居る。教科目と時間數を示せば次の樣である。

教科＼學年	一年	二年	三年	四年	師範科
修身	—	—	—	—	一
教育				(三)	九
國語	八	八	七	七	五
朝鮮語					
漢文	四	四	三	三	二

歷史				
地理	二	二	二	
數學	四	四	四	三
理科	三	四	三	三
法制經濟			六	三
習字	二	一	四	一
圖畫	一	二		二
手工	一	二		二
唱歌	一	一	一	三
體操	二	二	二	二
英語			二	

日本語を國語とし朝鮮語を外國語のやうに取扱つて居る點、體操に兵式體操を置かない點、柔道劍道を禁止して居る點、英語を僅かに三、四年に隨意科にして居る點は內地の中學と異なつて居る。

教授上特に注意して居る點を列擧すると。

一、生徒の常識を養ひ忠良にして勤勉なる國民を主眼とするから各教科共にこれに留意して教授する。

一、秩序を重んじ規律を守る氣風を養成する。

一、國語の使用を正確にし且つ其の應用を自在ならしめる。

一、生活に適切なる事項を選擇して多識多能を求めない。

一、徒らに暗記させずして推理考察せしむる。

以上の樣である。

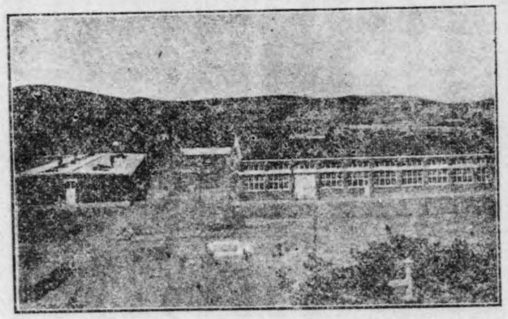
教科書は普通學校と同じく總督府規定のものを使用して居る。平壤高等普通學校では樣正童著。代數、幾何、算術、教科書丘淺次郎著動物教科書及び神田英語讀本の例外はあるが他は皆總督府編纂の教科書である。

生徒一般の氣風は從順なれども虛言の多きは缺點である。早婚の弊風は漸次衰微して居るが生徒の三分の二以上は既婚者なるを見ては習慣の力の大なるに驚く。一般に勞働を嫌ふ傾向ありて雨降りなどは以前は全部缺席の有樣であつたが近頃は大部分出席する樣になつたと云ふことである。暗記力模倣力の大なることは支那人と好一對。語學の力の著しいことは彼等と接した者の皆認むる所である。

猶朝鮮の現狀に鑒みて實業學校を各地に設けて居る。朝鮮に於ける教育の骨子は鮮人開發にあるが今日の急務中の急務は實業教育を奬勵し之を普及せしむるにあるは萬人の一致する所である。官尊民卑實業を社會最下級の專業とする朝鮮に於ては特に此の必要大である。工業傳習所卒業生が私立學校の教員となり或は巡査となるとか商業學校の卒業生が家庭にあつて坐食することなどは頗々と起る現象である。かゝる社會に於て聲を大にして絕叫すべきは實に實業教育の普及である。高等普通學校の二校に對して實業學校の四十六校は當然である。公立實業學校は十八校で二校の商業學校を除けば他は農業學校である。商業學校は三箇年農業學校は二箇年を修業年限とする。內容は內地の乙種商業學校に等しければ略す。この外に一層卑近なる實業教育を施す爲に公立簡易實業學校がある。修業年限一箇年で商業學校五實業學校一工業學校一を除いて他は農業學校である。

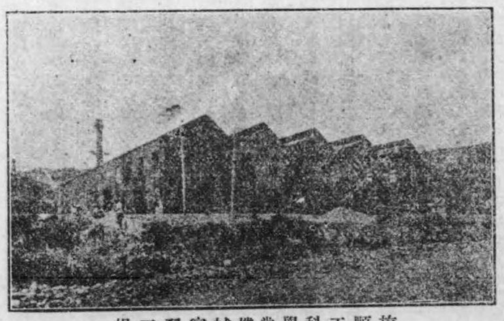
專門教育の機關としては京城に專修學校が唯一つあるのみ。高等普通學校の卒業生を入學させて法制經濟を授けて居るが內容は不明。

東洋各國の通弊たる女子教育の不振は近年漸次改善せられ支那に於ても隨分盛況を呈して來たが朝鮮にては未だ度外視する傾向である。然れども時運の趨勢は長く此狀態に放任せない。當局のこれに對する設備と奬勵は大に彼等を覺醒し現代に於ては其の曙光を認め得るのである。



旅順工科學堂實驗室及實習工場

女子教育の施設として普通學校の上に女子高等普通學校がある內地の高等女學校に匹敵するもので女子に普通の智識技能を授け國民たるの性格を涵養し且つ國語の普及を目的とする。本科は修業年限四箇年なれどもこれに簡易な技藝科を附設して女子の爲に初等普通教育の缺陷を補つて居る。平壤女子高等普通學校は開校日尙淺く支那家屋の假校舍に授業をして居る。



旅順工科學堂機械實習工場

參觀した時は丁度授業最中で鮮人教育の實際を見ることが出來たのは一行の大に愉快に感じた所である。教室へ這入ると白色や薄い綠色の上衣（チョークリー）を着た婦人が二十五六名行儀よくして一心に教壇上の先生を見詰めて居る。空席が比較的多いのは丁度其の日は雨降りであつたので雨具のないものが缺席して居るのだ。（雨具のないのは朝鮮人には珍らしくない。）一見して驚いたの

は年齢の多いことで大部分既婚者、中には小供が廊下から毋の勉強して居るのを見て居る。修身の授業で話は整頓に就てであつた技藝科の教室へ行くとここは裁縫の時間で朝鮮人の先生から袴（チーマー）の裁方を習つて居つた。本科と比較すると年齢も若く人數も多い。机間を巡視して種々と質問したが皆流暢な日本語で答へた。これが朝鮮に於て女子の率先者先覺者となつて彼等同胞婦人を誘掖するかと思へば云ひ知れぬ感情に打たれた。机上の教科書を取つて見るに總督府編纂のもので漢文教科書の中には論語孟子等の拔萃文多く日語教科書は内地の尋常四年位の程度で所々に諺文で書いた文章が挿入せられて居る。本校の生徒數は本科三十三名技藝科四十五名である、京城女子高等普通學校は京城府慶雲洞にあつて本科、師範科技藝科の三科から成つて居る。生徒數百六十九で其の原籍地は京幾道を初め朝鮮十三道を網羅して居る。父兄を見るに華族（二）兩班（日本の士族に當る）を初め商業（五四）官公吏（二三）農業（一八）が重なるものである。朝鮮婦人は案外界の刺戟誘惑にかられ易い相で是等の學校にては成るべく從來の良風美習を保存して貞淑の婦人を養成するに努力して居るから支那に見る樣な嘔吐を催す行爲は全く無い。

此の外に京城に私立淑明女子高等普通學校及び進明女子高等普通學校があるが別にすべきことない。

（丙）私立學校及び外人經營の學校

近年切りに教育の必要を感じ私立學校の設置計畫は殆んど競爭の有樣で何れの學校も皆滿員の盛況を呈して居る。邦人經營の學校は勿論外人鮮人の手になるものも莫大で主なるもののみでも千三百以上に達する。總督府は嚴格に其の内容を調査し學校として不適當なるもの又は朝鮮の現狀に照して危險なるものに對しては容捨なく廢校、變更、訓戒を與へて居る。宗教を基礎とせる宗教學校に對しても毫も排斥せないで鮮人を教育させて居る。これ國民教育機關たる普通學校を補助せしむる爲である。

邦人設立の私立學校中で尤も著名にして整頓せるは京城の善隣商業學校である。大倉喜八郎氏の寄附金によつて設立せられた財團法人で明治四十年開校せられたものである。本科研究科夜學科速成科に區別し鮮人子弟にして實業に從事せんとするものを收容し實際に適當なる教科で教育を施し實業的の人物を養成するを目的として居る。入學資格は十二歳以上の普通學校卒業生で本科生には志望に依つて學費を給與して居る。其の外に私立咸興高等普通學校が有名である。内容は公立高等普通學校と同じ。

外國人が學校を設立して朝鮮人の教良に着手せしは邦人より早く其の限底甚だ深い。されば朝鮮の開發には此の種の學校の力を俟つこと大で總督府に於ても規模の大小を問はず嚴重なる監督指導の許に認可して居る。現在の學校數は四五百に達し京幾道慶尙南北道平安南北道は尤も盛である。京城のみでも三十餘校に及び私立儆新學校私立貞保女學校。培材高等學堂等は稍と見るに足るが他は批評の價値ない。

朝鮮に於ける學校の現狀は大體以上の通りである。鮮人も文明教育の必要を會得して盛に新教育を受くる樣になつたが其の數は全人口の數百分の一にも滿たない。他は依然として固陋無學の徒で甚だしきは今尙外人を排斥し新教育を嫉厭し批難して居る。眞に朝鮮人を覺醒し朝鮮の福利を增進せんとするならばこれらの多數民衆を教化せなければならぬ。されば學校教育は百尺竿頭更に一歩を進めて社會の教化を己れの責任とし學校と社會を融和せしめて初めて教育の目的を完全に遂行したものと思ふ。この要求から自然其の他の事情に通じ其の特長短所嗜好等を究明する必要が生じて來る。然らざれば如何に努力するも事皆齟齬牴觸して寸毫の功なく却て反感を買ふに至る。まれば朝鮮人の教育に從事せんとするものは先づ朝鮮を詳細に研究すべきである。

在鮮邦人の教育に就ても種々の話を聞いたが其の要點は滿洲教育に就て述べた所に一致するから繰返さない。居留民の今日主義腰掛根性（少し隱當でないが）が教育に影響すること大なるは滿洲以上である。一攫千金を夢見て渡來し利を追ふて居を移す彼等には唯黃金あつて道德や義理などは少しもない。かかる思潮の滔々たる社會に成長する兒童に完全なる教育を望むは木に緣つて魚を求むるより尙至難の業である。敢て居留民の反省を促す。

結論

我國の膨脹は殖民移住の必要を促すこと急で列國又これに腐心して居る。されば殖民地政策の主要なる殖民地教育の成否は其の國の盛衰に影響すること大で其の研究一日早ければ百日の益あり十歩遲るれば千歩の損がある。上海に於て各國の在外教育の實狀を目擊するにつけ我々教育に關係するものは國の内外を問はず皆國家の將來を考へて殖民地教育の攻究をなすべき責任あるを痛切に感じここに殖民地教育を如何にすべきかと云ふ重且つ大なる問題を滿天下の教育家に提供する次第である。

第六　大連中央試驗所參觀記

今回の旅行は南支那南滿洲及朝鮮旅行と稱せらるゝも實際は唯其等地方の一部を鐵道線路に沿うて僅々三週日間に奔過したるのみなれば到底十分の觀察と研究とをする事能はず、殊に一行は教育制度方面の觀察を主としたれば未だ其の發展の幼稚なる鑛業其他工業的方面の視察は自ら概して重きを置かず、鑛山又は工場等の參觀に時日を費すこと甚だ少なかりき唯數物化學部に籍を置くものとして今滿洲の工業に關する事項を少しく記載せんとす、且つ事專門に屬す、到底滿足なる觀察を得ず從つて滿足なる叙述を

得ること能はざるは云ふまでもなし。而れども幸ひ旅行中大なる興味を以つて記錄せし日々の見聞錄によりて恩師先輩書籍雜誌等より見聞せし事等を添加して時節柄必要と思ふ事項を簡單に記載せんと思ふ。

上海より二晝夜の航海に險惡なる天候の爲め船暈に苦惱し食を取るべくもなくして大連の波止場に上陸せしは七月廿九日なりき。上陸するや直ちに炎天に曝されて諸市内の學校を參觀し。最後に岡田徹平君（本校數物化學部卒業生しにて目下中央試驗所在勤）の案内にて大連中央試驗所を參觀せり。ここは南滿洲鐵道株式會社の經營にかゝり庶務部分析部應用化學部製絲染色部窯業部釀造部衞生部電氣化學部及豆油製造場の八部一場より組織せられ滿洲に於ける殖産工業並に衞生上の改良發達を企圖する諸般の調査研究及試驗を行ひ併せて汎く一般の依頼に應じて分析試驗及鑑定を施行する目的の爲めに設置せられしものにして本試驗所の研究事業調査は大體滿洲の工業に關する智識を與ふ。實に中央試驗所は滿洲に於ける工業發達の源泉地なれば以下少しく本試驗所に付いて記載せんと思ふ。

大石橋掛外スーケーテンゲの圖

岡田君の案内により先づ分析部實驗所を見る、流石に氏の受持部專門とあつて得意の說明をとる、近頃豆油糟の分析と魚油精製の方面に專ら力を盡され、魚油は餘程研究に苦心したる爲め成功の域に達せられたる樣子にて其製品の一部を示されたるに純白見るからに精良のものと思へり。

從來豆油は滿洲重要物産の一に屬し既に當所内に設置せられたる抽出法による製油工場の作業と共に豆油の各種應用法並に其の硬化法等を研究し併せて從來不明なる豆油成分の學術的研究に着手し、諸油脂類の性質を研究し適當なる應用法を案出せんとするは岡田君の重大任務とする所なりと。

滿洲の製油業は其設備及技術に於て甚だ不完全にして且幼稚の域にあり、收油量甚だ少く僅かに原料大豆中に含有する油分の半額を得るに過ぎずして其他は空しく粕中に委棄して顧みざるの狀態に在り、又粕は窒素肥料に供するものにして粕中に殘留せる油分は其効なきのみならず却つて品質を損するの虞ある等諸種の缺點ありて、之が改善を企圖するは實に本試驗所分析部にありと、任務や重大と謂ふべし。

豆油業の滿洲工業に重要なる位置を占むるは今更喋々する必要なし、而して鐵道開通の結果と中央試驗所調査の發展とは從來の驢馬を動力として楔子を以て壓搾せし作業をして新なる市場の需用に應ずるに全く價値なからしめたり。之が爲めに驢馬に代ふるに蒸氣石油電氣瓦斯等を以てし極子に換ふるに旋を以てせる新式工場勃興し益々大規模となれり。又他方面よりは滿洲鐵道會社が巧みに支那人の氣質を利用して好個の奬勵を爲せる事あり。支那に於て特種の農作を盛ならしむるには官憲の保護奬勵も必要なるが支那農民に對しては其れよりも一層大切なるは商人の態度なり此品は高價にて何程にても販賣する事を得ると知りたらんには彼等は一朝にして他の作物を棄てゝも競うて之を耕す。されば其結果として新なる作物の産額の俄然增加するを常とせり、大豆は其顯著なる一例にして世人の周知せる所なるが露人の經營は此の農民の心理を利用して大に甜菜の耕作を流行せしむる事を得たる事あり、誠に當試驗所はこゝに見る所ありて精良の製油原料を得んと努めつゝありと云ふ。

第六　大連中央試驗所參觀記

次に製絲染織部に導かれて作業並に製品を見たるに、職工は勿論々那人にして比較的年少の者多く皆手織に熟練し工場には數多の支那式手織機日本式手織機を設備す、殊に本年度新しき工場竣成したる爲め支那織機を增設の外洋式力織機を設け生産力の增大に關する試驗を施行しつゝあり。金子先生を始め一行の中數人は柞蠶織數點を購ひて歸國の土産物とせしが勿論内地の輸入稅は省かれ且特に原價を以て賣却せられたる爲意外の安價に驚嘆せり。

次に釀造部に案内せられたるも之に關する造營物は目下建設中にして其試驗法を見る事を得ざりき。而して本部に於て最も重きをなす酒類釀造の件につき大體の說明あり。滿洲に於て消費せらるゝ酒類は燒酒（高粱酒）黃酒紹興酒の三種を普通とし其他燒酒を原料とせる混成酒あり、高粱酒釀造業は固形醱酵法に依る滿洲特有のものにして他の酒類釀造法に見ざる所なりと云ふ。滿洲在來の釀造家は唯古來技術を踏襲し經驗のみに依り醱酵は神明の然らしむる所人事の企て及ばざるものとなすが故に毫も改良進歩の跡なく、其方法頗る經濟的にして學理に適ひたるものもあるに拘はらず品質は勿論原料に對する歩止りの如き常に一定せざるものあるは敢て異とするに足らず。如斯なれば當釀造部に於て先づ高粱酒舊來の醱酵法及蒸餾の方法を詳細に調査し其の釀造中に於ける化學的變化を知らんが爲めに學理を基礎としたる改良釀造法を案出研究をなすものなりと。滿洲人が從來如何に幼稚なる釀造法に

よりて高粱酒の釀造に從事したるか、見聞のまゝ左に記載せん。

高粱酒製造場を燒鍋と呼び先づ挽臼を以て高粱を碎き之を溫水に浸す事二晝夜の後甑に盛りて蒸餾す、又別に麴大麥及小麥又は小豆を粉碎し水を混じて木框に入れ煉瓦型に煉り固め溫室に置く事一ヶ月にして麴化す、更に之を蒸餾して蒸餾せる高粱に加へて地窖に納め表面は泥土及粟殼を以て掩ひ、八日乃至十日の後之を取り出し新なる高粱若干を加へ甑にて蒸餾に附し更に之を冷却し麴を加へて再び窖中に納む。斯くする事五回、四十日乃至五十日を以て一作業を終るものなるが醱酵蒸餾の法不完全なる爲め徒らに長き時日を要するのみならず殘精中尙ほ多く澱粉を殘留すべき筈なれば徒らに有効澱粉を放棄す不經濟と云ふべし。

日本內地の清酒所謂サケは日本獨特のものにして其製法に於ても古くより灘地方に行はるゝものと所謂外國の醱酵性酒精飲料の釀造とは大に異なる所あり。今滿洲の高粱酒釀造法を記載したる序に嘗て化學講義に於て學習せし日本酒製造法を概略記載して以て同原理に基いて起る醱酵を利用して行ふ釀造法の如何に異なる處あるかを知らんとす。

清酒の釀造法は之を大凡そ(一)麴の製造、(二)酛の製造及(三)醪の製造の三段に分つ事を得。

(一)麴の釀造に於けるや其の關係恰も種子の農作物に於けるが如し隨つて麴にして不良ならんか如何に熟練なる釀酒家といへども良酒を釀造し得ざるや勿論なり。先づ良質の白米の外部に附着せる糠塵埃等を除去する爲め洗滌し、後浸桶に移して數回之に灌水して流出水全く清澄となるに及びて洗米の表面上寸餘に水を殘して放置し米粒に充分の水分を吸收せしめ米粒を軟化せしむ、二晝夜ばかり之に數回の更水を施し、次に甑に移して釜の上に置きて、蒸氣の上昇によりて米を蒸す、已に米の蒸熟せらるゝに至れば麴室內に運搬して蓆の上に擴げて攪拌して冷却せしめ、之に少許の種麴を加へて室內の溫度を三〇度內外に在らしむ。然る時は麴菌は米粒に移りて繁殖し、米粒の外面に點々白斑を呈するに至るを以て、成熟せる時之を室外に出して乾燥す。

(二)次に先づ蒸米に麴及び水を加へて、之を時々攪拌しつゝ數日間放置す。其の割合は次に示すが如し。

蒸米二石五斗　麴一石　水三石

然れば右の混液は漸次稀薄となりて甘味を帶ぶるに至る、之麴中に存在するヂアスターゼが澱粉に作用を呈して之を糊精麥芽糖及び葡萄糖に變ぜしむるに依る、即澱粉が加水分解せられたる事にして、此場合の化學的反應は次の如く示さると稱せらる。

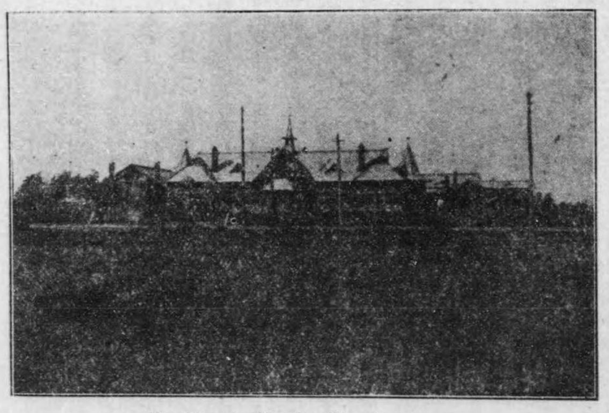
$$3C_6H_{10}O_5+H_2O=C_{12}H_{22}O_{11}+C_6H_{10}O_5$$
（澱粉）　（麥芽糖）（糊精）

此操作中は酛液の溫度を可也低く保ちて他種の醱酵の起るを防ぐものとす。後以上の混液中に熱湯を盛れる小桶を沈め、以て其溫度を二〇度乃至三〇度に高むれば、酵母は漸く液中に生育繁殖し、拾數日にして糖分は酒精に變じて成熟したる酛を生ず、此場合の反應は次の如くなるべしと稱せらる。

$$C_{12}H_{22}O_{11}+H_2O=4C_2H_6O+4CO_2$$
（酒精）

之等の反應或は未だ確定せられしものにあらざるも麥酒釀造の場合に於ける變化と同經路に考へらるゝを以て以上の如く變化を示せば能く了解する事を得。勿論日本酒につきては未だ化學的に充分の研究を遂げられし事少く隨つて複雜なる變化を方程式を以て示すは困難なりと云はる。

(三)次に酛に蒸米、麴及水を加へて澱粉の糖化作用と同時に醱酵作用を行はしむ。此の操作を掛米をなすと云ひ、掛米は添掛、中掛、仕舞掛の三回に分ちて施され、精米一〇石より清酒凡一七石を得るの量に至るを常とす。斯くて醱酵は凡そ一箇月にして終り、遂に成熟せる醪を得るに至らば之を酒袋に汲み込みフネと稱する壓搾器にかけて壓搾濾過せしめ酒粕を除きて所謂チリ味と稱する濁濁液を得。酒袋は麻製にて柿澁にて浸染して乾燥せるものを用ゐ、フネは厚板にて造れる長方形の槽にして底面には酒の流出に適する小溝を設け其の一側に流出口を附したるものを用ふ。流出せしめたる液は之を亞引桶に移し蓋をなして目張りして火入の時節即四五月頃まで放置す。火入の時季に至らば火入釜と稱する鐵釜に酒を移し蓋をなして徐々に焚火をし樺氏一三〇度內外に上りし時一方の蓋を取り攪拌して液面に浮べる蛋白質の凝固物等を篩にて除き焚火を去り、其の上澄液を汲み取り尙ほ其の腐敗を防ぐ爲め少量の防腐劑を混ずる事あり。



天尋常高等小學校

現今は盛にサルチル酸を用ふ。而れども取締法によりて其分量を定め有害の憂なからしむ。清酒は一二乃至一五%の酒精の外に糖分、糊精、醋酸、琥珀酸等の酸類及びフーゼル油の少量等を含有す。

以上述べたる釀造法は長先生が灘地方に目下行はれつゝあるも

のとして講義せられたる大體にして勿論之を以て日本酒釀造法を盡すものにあらず。各釀造家は各その法を秘して語らずとか、而れども大體のプロセスは以上のものゝ外に出でず化學的變化の思考も斯の如くにして正當なるものと思ふ。

次に滿洲の高粱酒に次ぎて重きをなすは黃酒なりとす。黃酒は其原料は粟を用ひ幼稚なる醱酵法により日々三四斗の醪を作り其醱酵終るに從ひ搾汁を行ひ滓引したるものを販賣に供するが如き極めて簡單小規模のものなれば製造業としては見るべき價値なく中央試驗所も之に對して深く研究の歩を進め居らずとの事なり。而し原料に粟を用ふる點より我國沖繩に產する泡盛と甚だ能く類似す、泡盛は一種のブランデーにして先づ粟、米等を原料として酒を釀造し後之を蒸溜して得らるゝものなり。

實に滿洲に於ける工業は滿鐵會社の中央試驗所に於て各種の研究を試み居らるゝが其試驗と滿洲在來の工業狀態によりて最も有望とせらるゝ滿洲の工業は次の如きものなりと云ふ。

柞蠶業　製絲織物を營むもの。
製粕業　土產の小麥を原料とするもの。
豆油再製業　豆油を食料油として優等品を精製するもの。
酒類製造業　原料は土產の高粱を以てするもの。
魚油搾取業　鰮の鰭を取りたる殘肉を原料とするもの。
豆粕利用業　油の再搾或は下等醬油を作り若しくは動物を飼養するもの。
アルカリ工業　關東州鹽を原料として苛性曹達、鹽酸加里等を製出するもの。
硝子製造業　硅石は滿州產を用ゐ板硝子及硝子器具等を製出するもの。
石鹽製造業　豆油若しくは牛臘を以てするもの。
製紙業　高粱稈を以て原料とするもの。
煙草製造業　滿洲產の原料多し。
電氣瓦斯事業　滿洲產の石炭を利用して電燈及瓦斯を供給するもの。

右は所謂有利好望とせられたる事業の大要にして滿鐵の中央試驗所を始め企業家の或は着手し或は未著手のまゝ今日に至れるあり。殊に近來支那國體の變遷と共に新しき思潮漸く加はり來り斷髮も盛に行はるゝに至りたるを以て帽子製造の如きは最も有望の一なりと稱せらる。彼等は斷髮するのみならず官吏學生の洋裝を好むの氣風生じたるを以て洋服製靴の事業も亦將來有望の一たるべしと思はる。

滿洲の工業界が時代の變化に依りて漸次面目を改め新傾向を帶ぶるは言を俟たざる所なるが滿洲經濟界は今尙ほ純然たる農本主義の上に立ち工業としては未だ取り立てゝ見るに足るべきもの多からず。全く滿洲の工業の發達は之を將來に俟たざるべからず。

八月二日の沸曉旅順工科學堂生に送られて、かつてわが同胞が血と肉とを以て購ひたる旅順の山々を後に汽笛一聲奉天に向へり車中臭氣と暑氣とに惱まされ、廣袤千里たゞ渺茫として際涯なき廣野、遙かに連亙起伏せる禿山の數脈、楊樹點々たる村落、單調の野色に飽く。遙か東邊に當つて蜿蜒たる長白の支脈に源を發する大江長河は茫漠たる曠野に河床をあらはし其の砂丘は群家の遊ぶ所となる、又支脈の間には幾多の鑛產埋藏せられ就中石炭は無盡藏の稱ありときく、殊に近來其の廣袤の大なる、其の層の厚き事世界無比なりと稱せらるゝ撫順炭田も此中にあり。然れども奉天附近の鑛物は淸朝發祥の地たると乾隆年來其の採掘を嚴禁し、若し採掘する者たる時は直に逮へて獄に投じ嚴罰に處したる爲め滿洲に於ける地下の富は永く闇黑の裡に葬られあり。最近に至り淸國は大に鑛業に著目し其の政策を一變し採掘志望者には一定の條件の下に之を許可するに至り、又外國人も滿洲鑛產の有望なるに著目し實地踏査をなす者多きを加へ地下の寶庫は漸く世に出でんとするに至れり。而して今や大正の新天地に國運の强と大とを圖らんと努むる我等日本人は大に之等新開地の天然の寶庫を開きて益々國家の富强を增進し日本人の發展活動を企圖する事容易なるに至れり。

日露戰役後南滿洲鐵道會社は南滿各地の鑛床調査に著手するに至りしも秘して發表せざりしもの多しと云ふ。然れども日露戰爭前に於て露國側の調査に依ると石炭鑛、砂金の鑛區百二十餘ケ所發見せられ我關東都督府が露人及び其の他の外國人に許可せし鑛區は十餘ケ所日本人に與へし許可鑛區十餘ケ所に達したりと云ふに徵するも滿洲の鑛山に富むこと多言を要せず。

鴨綠江の兩岸を初め南滿各地には未發見の鑛脈尙ほ多しとなすは斯界の定論なれど。一或は資本の關係あり、又は友邦人の妨害等ありて是等の鑛山採掘も未だ盛に行はれず、空しく地下に唸るあるは遺憾なり。

南滿洲に於ける鑛產物種類甚だ多しと雖も其の主要なるものは石炭、金、銀、鐵、石綿、石灰等にして、近く滿鐵會社の調査報告によるに、金（主に砂金）八十ケ處、鐵十ケ處、銀銅鉛十五ケ處、石炭四十七ケ處、石灰二十二ケ所なりと云ふ。殊に石炭は南滿洲に於ける鑛產物中最も豐富にして、炭種は半無煙炭、有煙炭、亞炭等なりと稱せらる。而るに之等の採掘法は撫順、本溪湖の二坑を除くの外何れも其規模小にして見るべきものなし、即每年、六、七八の三ケ月の雨季に至れば坑水の增加と坑內空氣流通の十分ならざると更に道略は泥濘に化し交通甚だしく不便となり物貨の供給に困難を來す爲め採掘に從事するを得ずと云ふ。

滿洲に遊びて先づ滿鐵會社が殆ど本國政府と獨立して經營せる事業の大規模を見て驚嘆せざる者はなかるべし。滿鐵會社が工業に農業に將た教育に其他一切の事業に企圖する處の方針は飽くま

で進取的にして殖民地經營の實著々其効果を擧げつゝありて決して從前露人が國費を傾けて經營に專念せし大計畫に比して遜色なしと稱せらる。されば毎年滿鐵會社が經營に投ずる費用もとより少しとせず、殆ど國庫の補助によるものと云ふべきも近年著しく產額を增加せし撫順炭田の出產額は直に滿鐵會社の經營費に莫大の補助を與ふるに至れり。如斯滿洲の發展に擧りて大なる力ある撫順炭田も余等一行は時日の許さざる爲め遺憾ながら觀る機を得ず、殊に私等の此方面に多少なりとも關係ある學部生徒に取りては大なる恨なりき然れども本旅行中遼陽に於て又奉天に於て小學校々長より又大連に於て其道の人々より大體の經營と計畫とを承はり更に先輩の著書等によりて幾分撫順炭山に關する智識を得たり。今序に此の莫大なる產額を有する世界的一大炭坑として誇るに足る此の炭田に關する記事を單に見聞せし範圍に於て記載するも全然無用ならずと信ず。

長春小學校兒童寄宿舍前ケーチーンゲンの圖

撫順炭坑

撫順炭坑は南滿洲に於ける最大なる炭坑にして奉天の東方約十里、撫順城の南渾江の隔てたる平坦地と山麓と相接する一帶の地に在り。滿鐵の支線は蘇家屯より分岐して千金寨停車場に至り三分して一は老虎臺、一は楊柏堡、一は撫順城の對岸に至りて止む。由來遼東の地は久しく韓人種の占領する所となり、撫順の舊坑は土人高麗坑と稱する所にして曾て高麗人の此處に來りて之が採掘に從事したりと云ふ。其採掘法は高麗行と云ひ今尙ほ其の遺物を發見せられ、支那人の採掘法と全く趣を異にす、支柱を用ゐず穹廬狀に採炭せられたるものあるを見、當時既に採掘業の興れるを知るべし。元時代に至りて高麗人を放逐し之に代はり後清朝に至り清國皇室の所有に歸し採炭は久しく嚴禁せられたり。然るに光緒帝の時北京政府に奏請する者あり年限を定めて隨時開掘する事を許す、一方に於ては露國の勢力は次第に東洋に及び遂に露國政府は再三調査の結果該炭坑の有望なるを知り事業に著手するに決し、楊柏堡、及老虎臺に事務所及兵營を經營建築し兵三百を駐せしめて以て炭坑の守備に任じたるが如き事實上露國人該炭坑に指を染め遂に露國の官營たるを認め得らるゝに至り以て露國の專用に供せらるゝに至れり。而るに日露戰爭起り露軍連りに敗るるや此炭坑も主人を失ひ支那人の採掘に委ねられなるが明治四十年滿鐵會社が之を我が政府より引き繼ぎ以て今日に至り根本的大擴張をなし新に市街を設定し家屋を新築し水道を敷設し學校病院を設け著々發展に從事し今や支那人合して一萬五千人に達し採炭量一日六千噸以上なりと云ふ。

撫順炭は有煙炭に屬し漆黑色にして光澤に富み脆弱にして輕く揮發分多く灰分少く燃燒力に富む、良質の實に至りては世界に覇を爭ふに足るべしと稱せらる。用途は汽罐燃料、瓦斯製造用、煉瓦製造用等に適するも骸炭製造には適せず、目下採掘せる場處は地下約二百尺乃至四百尺にして炭層の厚さは最厚百七十尺最薄八十尺、平均百三十尺に及び二層中の夾雜物は厚さ二十尺を超えず、誠に世界稀有の厚層なりと云ふ。到底我が內地の諸炭層の及ぶべきにあらず。採掘法は棟柱式にして炭柱は十間角とし坑道は大抵巾十尺高さ七尺とす本坑の坑道は上下左右堅固なるが故に支柱を用ゐず、唯捲立喞筒室其の他僅少なる片盤のみ之を行ふ。通氣は自然法により未だ瓦斯の發生を認めずと云へども何れも安全燈を使用す。

撫順炭坑の外に目下日本大倉組採掘し佳良の粘結性を有する無煙炭を產出する本溪湖炭田は安奉線の攜軌に應じて日々採炭力を增加し年を逐うて規模を擴大し將來甚だ有望なりと稱せられ發展甚だ急速なり。其他の炭坑は運輸の不便なる峯巒重疊の間に介在するを以て日本人にして經營せるものは甚だ尠し。

滿洲に於て產出する其他の鑛產例へば金銀銅鐵鉛鑛は目下極めて少額にして到底之を石炭に比較する事を得ず。近年滿洲の調査は著々進行し其の結果新坑の發見せらるゝもの多きも鑛產地は概して峯巒重疊の間に在りて鑛業必須の要件たる運搬動力水利の便を缺けるのみならず鑛層の厚きもの比較的稀なり。而れども近年地方の開發に進れて匪賊の害減少し鐵道、道路の開かれて多少交通の便加はり、電氣其他の動力事業も亦漸く興りたれば往年の不便は今日に於て其の一半を減じたる筈なり。斯くて南滿洲の鑛床の多くは未だ開掘せられず、滿洲の鑛山界は多望の將來を有せるなり。

外國人にして滿洲鑛山界に活躍するに至りしは實に明治四十三年以後なりとす。最初英人ブッシュが本國の資本を仰ぎて滿洲興業會社なるものを組織せんと企て計畫半ばにして頓挫したれども之より諸外國人の注意を惹き其後、米人、獨人、白耳義人等の採掘權を得んと欲して鑛區を調査し當路に運動する者多くなれり。

而れども支那官憲の利權回收思想は勿論鑛業界にも影響する所となり、外人の鑛山調査に猜疑の眼を注ぎ除に陽に外國人が鑛產地所有者と共に契約を結ばんとするを妨碍し、外人が滿洲に於て新なる鑛業を經營する事は殆ど不可能なる如き有樣となり、前記の諸外國人の經營も多くは成功するに至らず、昨今は外國人の滿洲鑛山熱全く冷却し去りたるが如しと。而るに唯だ東三省の鑛產物に對しては支那の鑛業法は外人が支那人民と共同して鑛物採取に從ふ事を許しあるを以し企業者に充分の資力と熱心とあらば此方面に一新生面を開拓する事必ずしも困難なりと云ふべからず。

抑も工業地として必須の條件は原料の豐富なると賃銀の低廉なるとの二要素を具備するにあり、而るに原料の方面より滿洲を觀察するに木材等は現在缺乏を感じるも其他の各種工業原料は豐富にして而も將來益々之を增殖し得べき事確實なると共に尙ほ新に產出し得べき原料も少からざるべく、又滿洲人の殖產に對する觀念を發展せしめば其品質の改善を期し得べし。次に賃銀の點より見るに滿洲人の大部分は勞動者階級に屬して勞力の供給豐なると共に其の生活程度頗る幼稚なる爲め賃銀甚だ低廉なり、而して滿洲の勞動に際しても機敏と器用とを缺く短所なきにあらざるも悠長に構へ能く長時間の勞動に堪ゆる特徵あり、工業民として決して絕望すべきに非ずと思ふ。誠に滿洲は工業地として希望ある未來を有し母國企業家の活動を待つ事切なり。

今や我日本帝國は滿洲を勢力圈內におさめ之を經營する根本精神として先づ滿洲人の幸福を增進し、從つて日本人口の移植を圖り日本人の發展活動を期し以て日本帝國の國防を强固にし國力增進の企圖に努むるあり。かくて未だ十有餘年にして外內には經營事業頓に發展し日本勢力日々に進轉し、久しく未開の風氣を以て閉ざされし滿洲の地も其の自然に開發せられ、日に新文明の光輝に浴しつゝあり。而るに翻つて其內面を見るに事業は汁滯して最初經營の主旨にそはざる者多く一般に活氣乏しく工業は唯前途有望と云ふに止り目下の發展極めて遲々たるものあるは何ぞ。之れ滿洲經營は從來劃一主義、統一主義の下に行はれ來りしを以て自由を欲する人間は母國よりも猶より多く自由を制限束縛せらるゝ地に生を樂しみ、安んじて事業に從事し經營に從ふを欲せざりしに歸すべし。從つて表面の經營振りは日に發展新面目を加ふるも經營に從事する者に於て缺くる所ありと云ふべし。之が實證は目下の滿洲にある邦人の移住者なり。彼等の大多數は雄大の氣象に乏しく、高尙なる人格的人物に乏しく、誠意の人に乏し、彼等には勞せずして僥倖を得んとする者多し如斯は日本人社會の氣風を險惡ならしめ、日本人間の事業發展を妨ぐるのみならず實に支那人の不信と輕侮とを招くものなり。支那人を啓發し、又指導するは日本帝國の使命にして之を事實に行ふは滿洲に在る日本人の責任たるを知らば大に反省し自重して先進國民優等民族たる人格を養ひ彼等支那人の師友となりて其畏敬と信賴とを受け以て彼等の社會を德化するの心掛なかるべからず、此心掛ありてこゝ現時に於ける滿洲の工業の幼稚と將來の悲觀とを除かると謂ふべけれ更に又思ふに、我日本帝國は何が爲めに多大の犧牲を拂ひ、十萬の骨を曝して滿洲を我勢力圈內に納めしか。且國家は今日尙ほ何の爲めに年々多額の國費を割きて此滿洲の開發に從事せるか。我同胞たる者宜敷く反省して以て大正の新天地に國運の强と大とを圖らざるべからず。

第七　通信部報告

七月二十二日　上海にて

發信一、學校に宛て左の電報を發す。

Hiroshimakotoshihangakko,
Safely arrived.

二、旅行隊に加はらざる英語部三年諸君に夫々繪葉書一枚宛、計十二枚。

備考、日本への電信はデンマーク人の經營に係る"The Great Northern Telegraph Company (limitted)"にたのむ。

電報料は一字三十五錢

七月二十七日　上海にて

發信一、南京の日本領事及び一行の爲案內の勞をとられたる日本領事館附巡査榮仁定氏へ夫々謝禮狀を出す。

二、榊丸より旅順工科學堂杉森此馬先生に宛て左の電報を發す(無線電信)

さかき○にてゆくたのむかねこ

備考、上海に於ても南京に於ても日本郵便局あるにより郵便物取り扱ひ方及び其料金は內地と異る事なし。無線電信は一音信六十錢。

七月二十九日　大連にて

發信一、本校及び旅順の杉森先生に宛て夫々電信により無事着連を報ず。

二、級の友人諸君に葉書を發す、計十二枚。

三、上海の井上氏に宛て御禮狀を出す。

四、遼陽小學校長及び奉天小學校長に宛て